高松市埋蔵文化財調査報告第34集

都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡

平成９年３月

高 松 市 教 育 委 員 会

Ｂ－２地区完掘状況（北から）

C地区完掘状況（東から）

出土土器（弥生土器）

出土土器（須恵器）

高松市埋蔵文化財調査報告第34集

都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡

平成９年３月

高松市教育委員会

はじめに

郊外に古代の土地区画である条里地割の姿を残す高松市は，長年の県民の夢であった瀬戸大橋の開通以後，急速にその景観を変えようとしています。とくに，高松平野のほぼ中央を東西に横断する一般国道11号高松東道路の沿線部は，以前の水田地帯から一変してしまい，さらに変貌を遂げつつあります。

今回報告いたします「日暮・松林遺跡」は，都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴うものであり，平成７年に開校した香川県立高松桜井高等学校の東側に隣接する位置に当たります。調査は平成５年から７年にかけて４次に分けて実施されました。その結果，弥生時代中頃から近世に至る数多くの遺構が検出され，その中からたくさんの土器や石器等が出土しました。主な遺構としては，竪穴住居・掘立柱建物・溝などが挙げられます。高松桜井高校の敷地内の「多肥松林遺跡」は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が実施され，本遺跡と同様に多数の竪穴住居・掘立柱建物・溝や旧河道等が確認されました。これらの多くの遺構は一連のものであり，弥生時代の大規模な集落の全貌が明らかにされ，その後の土地利用の経過もわかってきました。このように県・市という異なる体制の調査によって高松市の歴史の一端が解明されるというのは，協調の時代と言われる現代の象徴の一つであると自負しています。

本報告書が，高松市の歴史の解明に学問的な貢献を果たすとともに，文化財に対する関心と理解のための一助となるように念じるとともに，広く活用されることを願っています。

最後になりましたが，発掘調査から本報告書刊行にあたり格別のご理解とご尽力を賜りました関係者・関係機関に厚くお礼申しあげる次第であります。

平成９年３月

高松市教育委員会

教育長　山口　寮弍

例　　言

1．本書は，都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査地ならびに調査期間は，次のとおりである。

高松市多肥下町1300番地　他　　平成５年11月15日～平成６年３月31日
平成６年７月28日～平成６年９月19日
平成６年10月31日～平成７年１月12日
平成７年７月31日～平成７年９月29日

3．発掘調査および出土遺物について下記の関係諸機関ならびに方々から貴重なご教示，ご指導を得た。記して厚く謝意を表するものである。　（敬称略，順不同）

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
石上英一　（東京大学）　金田章裕　（京都大学）　高橋　学　（立命館大学）
外山秀一　（皇學館大學）　木原溥幸・丹羽佑一　（香川大学）

4．現地調査から遺物整理，本報告書作成に至るまで下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する。　（敬称略，順不同）

末光甲正，中西克也（讃岐文化遺産研究会）
稲木麻紀，井上陽子，王姿人，大江弘美，小佐野薫（以上，香川大学学生）
松田重治（仏教大学学生），曽根俊正，西中一伸

5．発掘調査および本報告書の作成にあたっては，高松市教育委員会が主体となり，文化部文化振興課文化財専門員　山本英之が担当し，中西克也が補佐した。

6．本報告書の執筆は，目次に示したように第１章第１節，第２章を山本，第１章第２，３節，第３章，第５章を中西が行った。

7．本報告書に関わる自然遺物のうち，花粉・プラントオパール分析を㈱パレオ・ラボに，樹種鑑定を㈱吉田生物研究所に依頼し，報告をいただいた（第４章）。

8．本報告書の編集は，山本・中西が行った。

9．出土遺物ならびに図面・写真類は，当教育委員会において保管している。

10．本調査に関連して，以下の業務を業者委託発注により実施した。

発掘調査掘削工事	東讃建設株式会社（平成５年度）
	宮本建設株式会社（平成６年度）
	河西建設株式会社（平成７年度）
航空写真測量	アジア航測株式会社　四国支店（平成５年度）
	アジア航測株式会社　四国支店（平成６年度）
	アジア航測株式会社　四国支店（平成７年度）
花粉等分析	㈱パレオ・ラボ
遺物写真撮影	写房　楠華堂
木製品保存処理	㈱吉田生物研究所

11. 本報告書における表記および記述に関する凡例は以下のとおりである。

⑴図の縮尺は原則として次のとおりである。

遺構―遺構配置図：1/400　住居址：1/80，1/40　掘立柱建物：1/80
墳墓：1/80　土坑：1/40　ピット：1/20　溝：1/40，1/20
井戸：1/100　旧河道：1/200，1/80　附図：1/200
遺物―土器：1/4　瓦：1/4　石器：1/2　土製品：1/2
例外のものも含め，各々についてその縮尺値を明記する。

⑵本報告書で使用する遺構略号は次のとおりである。

ＳＡ　柵列	ＳＢ　掘立柱建物	ＳＤ　溝	ＳＥ　井戸
ＳＨ　竪穴住居	ＳＫ　土坑	ＳＰ　柱穴	ＳＲ　旧河道
ＳＴ　墓	ＳＸ　粘土採掘跡		

⑶遺構番号は調査時に設定した番号を廃棄し，整理段階でＡ地区から新たに通し番号を付けた。

⑷遺物観察表は本文中に実測図とセットで掲載する。

⑸遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

1　土器の法量の中で（　）を付けているのは残存値である。

2　色調が内外面とも同じ場合は外面のみ表記する。

3　土器胎土の粒度表記の基準

微砂：非常に細かい　細砂：0.5㎜以下　粗砂：0.5～1㎜　細礫：1㎜以上

⑹遺物番号は遺構別に付け，図版の遺物の数字は挿図番号と遺物番号を示している。

（例）9－36は第9図の遺物番号36の土器

⑺本報告書で用いる高度値は海抜であり，方位は磁北を示す。

⑻本報告書の第2図「周辺遺跡分布地図」の作成にあたり，国土地理院発行1/25,000地形図「高松南部」を使用した。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… （山本　英之） 1
　第２節　調査の経過 …… （中西　克也） 2
　第３節　調査組織 …… （中西　克也） 6

第２章　地理的・歴史的環境 …… （山本　英之） 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 10

第３章　調査成果 …… （中西　克也） 13
　第１節　調査区の位置 …… 13
　第２節　土層 …… 13
　第３節　遺構・遺物 …… 14
　　１　Ａ地区 …… 14
　　　１）中世 …… 14
　　　　１．溝 …… 14
　　　　２．ピット群 …… 15
　　　　３．包含層出土遺物 …… 15
　　２　Ｂ地区 …… 21
　　⑴　第１面 …… 23
　　　１）弥生時代 …… 23
　　　　１．住居址 …… 23
　　　　２．掘立柱建物 …… 40
　　　　３．墳墓 …… 41
　　　　４．土坑 …… 43
　　　　５．ピット …… 44
　　　　６．溝 …… 45
　　　　７．旧河道 …… 57
　　　２）近世 …… 67
　　　　１．土坑 …… 67
　　　　２．溝 …… 68
　　　３）包含層出土遺物 …… 69
　　⑵　第２面 …… 70
　　　１）弥生時代 …… 70
　　　　１．住居址 …… 70
　　　　２．井戸 …… 77
　　　　３．ピット …… 78

4．　溝 …… 79
(3)　第３面 …… 81
1）弥生時代 …… 81
1．土坑 …… 81
2．溝 …… 83
2）包含層出土遺物 …… 84
3　C地区 …… 88
1）弥生時代 …… 88
1．住居址 …… 88
2．掘立柱建物 …… 93
3．土坑 …… 113
4．溝 …… 115
2）古代 …… 118
1．溝 …… 118
3）中世～近世 …… 120
1．土坑 …… 120
2．溝 …… 120
4　D地区 …… 124
1）弥生時代 …… 124
1．掘立柱建物 …… 124
2）中世 …… 127
1．ピット …… 127
2．溝 …… 128
3．旧河道 …… 137
3）近世 …… 159
1．土坑 …… 159
2．溝 …… 160
3．粘土採掘跡 …… 164

第４章　自然化学的分析 …… 165
第１節　日暮・松林遺跡の花粉，プラント・オパール分析 …… （鈴木　茂） 165
第２節　日暮・松林遺跡出土木製品の樹種 …… （汐見　真・岡田　文男） 175

第５章　調査の成果と問題点 …… （中西　克也） 177
第１節　日暮・松林遺跡の歴史的変遷 …… 177
第２節　弥生時代の集落構造 …… 180
第３節　出土土器について …… 184
第４節　おわりに …… 186

挿図目次

第１図　調査区設定図　3～4
第２図　周辺遺跡分布図　11
第３図　調査区　13
第４図　Ａ地区遺構配置図　14
第５図　ＳＤ01平・断面図　15
第６図　包含層出土遺物(1)　16
第７図　包含層出土遺物(2)　17
第８図　包含層出土遺物(3)　19
第９図　包含層出土遺物(4)　20
第10図　Ｂ地区遺構配置図　21～22
第11図　ＳＨ01平・断面図　23
第12図　ＳＨ01出土遺物　24
第13図　ＳＨ02平・断面図　25
第14図　ＳＨ02 出土遺物平面図　26
第15図　ＳＨ02Ｐ－20平・断面図　26
第16図　ＳＨ02Ｐ－１，Ｐ－５平・断面図　26
第17図　ＳＨ02出土遺物(1)　28
第18図　ＳＨ02出土遺物(2)　29
第19図　ＳＨ02出土遺物(3)　30
第20図　ＳＨ02出土遺物(4)　31
第21図　ＳＨ03平・断面図　32
第22図　ＳＨ03出土遺物平面図　32
第23図　ＳＨ03出土遺物(1)　33
第24図　ＳＨ03出土遺物(2)　34
第25図　ＳＨ03出土遺物(3)　35
第26図　ＳＨ04，05平・断面図　36
第27図　ＳＨ04出土遺物　37
第28図　ＳＨ05出土遺物平面図　38
第29図　ＳＨ05出土遺物　39
第30図　ＳＢ01平・断面図　40
第31図　ＳＢ02平・断面図　40
第32図　ＳＡ01平・断面図　41
第33図　ＳＴ01平・断面図　41
第34図　ＳＴ01出土遺物　42
第35図　ＳＫ01平・断面図　43
第36図　ＳＫ02平・断面図　44
第37図　ＳＫ02出土遺物　44
第38図　ＳＰ01平・断面図　44
第39図　ＳＰ01出土遺物　44
第40図　ＳＰ02平・断面図　45
第41図　ＳＰ02出土遺物　45
第42図　ＳＰ03平・断面図　45
第43図　ＳＤ05平・断面図　47～48
第44図　ＳＤ05出土遺物(1)　49
第45図　ＳＤ05出土遺物(2)　50
第46図　ＳＤ06断面図　51
第47図　ＳＤ07断面図　51
第48図　ＳＤ07出土遺物　51
第49図　ＳＤ08出土遺物平面図　52
第50図　ＳＤ08断面図　52
第51図　ＳＤ08出土遺物　53
第52図　ＳＤ09出土遺物平面図　55
第53図　ＳＤ09断面図　55
第54図　ＳＤ09出土遺物　56
第55図　ＳＲ01平・断面図　59～60
第56図　ＳＲ01出土遺物(1)　61
第57図　ＳＲ01出土遺物(2)　62
第58図　ＳＲ01出土遺物(3)　63
第59図　ＳＲ01出土遺物(4)　64
第60図　ＳＲ01出土遺物(5)　65
第61図　ＳＲ01出土遺物(6)　66
第62図　ＳＫ03平・断面図　67
第63図　ＳＫ03出土遺物　67
第64図　ＳＫ04平・断面図　67
第65図　ＳＫ04出土遺物　67
第66図　ＳＫ06平・断面図　68
第67図　ＳＫ07平・断面図　68
第68図　ＳＫ08平・断面図　68
第69図　ＳＤ10断面図　68
第70図　ＳＤ11断面図　69
第71図　包含層出土遺物(1)　69
第72図　包含層出土遺物(2)　70
第73図　ＳＨ06平・断面図　71
第74図　ＳＨ06Ｐ－16平・断面図　71

第75図　ＳＨ06出土遺物　72
第76図　ＳＨ07平・断面図　73
第77図　ＳＨ07出土遺物　74
第78図　ＳＨ08平・断面図　74
第79図　ＳＨ08出土遺物　75
第80図　ＳＨ09平面図　76
第81図　ＳＨ09出土遺物　76
第82図　ＳＥ01平・断面図　77
第83図　ＳＥ01出土遺物　77
第84図　ＳＰ04平・断面図　78
第85図　ＳＰ04出土遺物　78
第86図　ＳＰ05平・断面図　78
第87図　ＳＤ15断面図　78
第88図　ＳＤ16断面図　79
第89図　ＳＤ17断面図　79
第90図　ＳＤ17出土遺物　79
第91図　ＳＤ18断面図　80
第92図　ＳＤ18出土遺物　80
第93図　ＳＤ19出土遺物　80
第94図　ＳＤ20出土遺物　80
第95図　ＳＫ09平・断面図　81
第96図　ＳＫ09出土遺物　82
第97図　ＳＤ22断面図　83
第98図　ＳＤ23断面図　83
第99図　ＳＤ24断面図　83
第100図　ＳＤ25断面図　84
第101図　包含層出土遺物(1)　85
第102図　包含層出土遺物(2)　86
第103図　包含層出土遺物(3)　87
第104図　Ｃ地区遺構配置図　89～90
第105図　ＳＨ10平・断面図　91
第106図　ＳＨ10Ｐ－23平・断面図　92
第107図　ＳＨ10出土遺物　92
第108図　ＳＢ03平・断面図　93
第109図　ＳＢ04平・断面図　95
第110図　ＳＢ04ピット平・断面図　95
第111図　ＳＢ04出土遺物(1)　96
第112図　ＳＢ04出土遺物(2)　97
第113図　ＳＢ05平・断面図　98
第114図　ＳＢ05出土遺物　98
第115図　ＳＢ06平・断面図　99
第116図　ＳＢ06出土遺物　99
第117図　ＳＢ07平・断面図　100
第118図　ＳＢ07Ｐ－４平・断面図　101
第119図　ＳＢ07出土遺物　102
第120図　ＳＢ08平・断面図　103
第121図　ＳＢ09平・断面図　104
第122図　ＳＢ09出土遺物　104
第123図　ＳＢ10平・断面図　105
第124図　ＳＢ10出土遺物　105
第125図　ＳＢ11平・断面図　106
第126図　ＳＢ11出土遺物　106
第127図　ＳＢ12平・断面図　107
第128図　ＳＢ12出土遺物　107
第129図　ＳＢ13平・断面図　108
第130図　ＳＢ14平・断面図　108
第131図　ＳＢ15平・断面図　109
第132図　ＳＢ16平・断面図　110
第133図　ＳＢ17平・断面図　111
第134図　ＳＢ17出土遺物　111
第135図　ＳＢ18平・断面図　112
第136図　ＳＫ10平・断面図　113
第137図　ＳＫ10出土遺物　113
第138図　ＳＫ11平・断面図　113
第139図　ＳＫ11出土遺物　114
第140図　ＳＤ27断面図　115
第141図　ＳＤ28断面図　115
第142図　ＳＤ28出土遺物　115
第143図　ＳＤ29断面図　115
第144図　ＳＤ29出土遺物　116
第145図　ＳＤ30断面図　117
第146図　ＳＤ30出土遺物　117
第147図　ＳＤ31，32平・断面図　117
第148図　ＳＤ31出土遺物　117
第149図　ＳＤ33断面図　118
第150図　ＳＤ34断面図　118
第151図　ＳＤ34出土遺物　118
第152図　ＳＤ35断面図　119
第153図　ＳＫ15平・断面図　120
第154図　ＳＫ15出土遺物　120

第155図　ＳＤ37平・断面図　121
第156図　ＳＤ37出土遺物(1)　121
第157図　ＳＤ37出土遺物(2)　122
第158図　ＳＤ38出土遺物　122
第159図　ＳＤ39断面図　123
第160図　ＳＤ40，41，42断面図　123
第161図　ＳＢ19平・断面図　124
第162図　ＳＡ02平・断面図　124
第163図　Ｄ地区遺構配置図　125～126
第164図　ＳＡ03平・断面図　127
第165図　ＳＰ06出土遺物　127
第166図　ＳＰ07出土遺物　127
第167図　ＳＰ08出土遺物　127
第168図　ＳＤ43平・断面図　128
第169図　ＳＤ43平・断面図　129
第170図　ＳＤ43出土遺物(1)　130
第171図　ＳＤ43出土遺物(2)　131
第172図　ＳＤ43出土遺物(3)　132
第173図　ＳＤ44断面図　133
第174図　ＳＤ45断面図　133
第175図　ＳＤ46断面図　133
第176図　ＳＤ47断面図　134
第177図　ＳＤ47平・断面図　134
第178図　ＳＤ48断面図　134
第179図　ＳＤ48出土遺物　135
第180図　ＳＤ49出土遺物　135
第181図　ＳＤ51断面図　136
第182図　ＳＤ51出土遺物　136
第183図　ＳＲ02平・断面図　137～138
第184図　ＳＲ02出土遺物(1)　140
第185図　ＳＲ02出土遺物(2)　141
第186図　ＳＲ02出土遺物(3)　142
第187図　ＳＲ02出土遺物(4)　143
第188図　ＳＲ02出土遺物(5)　144
第189図　ＳＲ02出土遺物(6)　145
第190図　ＳＲ02出土遺物(7)　146
第191図　ＳＲ02出土遺物(8)　147
第192図　ＳＲ02出土遺物(9)　148
第193図　ＳＲ02出土遺物(10)　149
第194図　ＳＲ02出土遺物(11)　150
第195図　ＳＲ02出土遺物(12)　151
第196図　ＳＲ02出土遺物(13)　152
第197図　ＳＲ02出土遺物(14)　153
第198図　ＳＲ02出土遺物(15)　154
第199図　ＳＲ02出土遺物(16)　155
第200図　ＳＲ02出土遺物(17)　157
第201図　ＳＲ02出土遺物(18)　158
第202図　ＳＲ02出土遺物(19)　159
第203図　ＳＫ16平・断面図　159
第204図　ＳＤ52出土遺物　160
第205図　ＳＤ53，54断面図　160
第206図　ＳＤ56断面図　160
第207図　ＳＤ59平・断面図　161～162
第208図　ＳＤ59出土遺物　163
第209図　ＳＸ出土遺物　164
第210図　試料採取地点付近の土層断面図　165
第211図　Ａ地点の花粉化石分布図　167
第212図　Ｂ地点の花粉化石分布図　168
第213図　日暮・松林遺跡のプラント・オパール　169

図　版　目　次

巻頭図版１　Ｂ－２地区完掘状況（北から）
巻頭図版２　Ｃ地区完掘状況（東から）
巻頭図版３　出土土器（弥生土器）
巻頭図版４　出土土器（須恵器）
図版１－１　Ａ－１地区（南西から）
－２　Ａ－２地区（南から）
－３　Ｂ－１地区（北から）
－４　ＳＤ01
－５　ＳＨ01
図版２－１　Ｂ－２地区
－２　ＳＨ02遺物出土状況
－３　ＳＨ02
図版３－１　ＳＨ03遺物出土状況
－２　ＳＨ03
－３　ＳＨ04，05
図版４－１　ＳＨ06
－２　ＳＨ06　Ｐ－16
－３　ＳＨ07
図版５－１　ＳＴ01遺物出土状況
－２　ＳＴ01遺物出土状況
－３　ＳＴ01土層断面
－４　ＳＴ01
図版６－１　ＳＢ01
－２　ＳＢ02
－３　ＳＫ01
－４　ＳＫ02
－５　ＳＫ03
－６　ＳＫ06
－７　ＳＫ09遺物出土状況
－８　ＳＫ09
図版７－１　ＳＥ01土層断面
－２　ＳＥ01
－３　ＳＰ04
図版８－１　ＳＤ05遺物出土状況
－２　ＳＤ05
－３　ＳＤ08，09
－４　ＳＤ08遺物出土状況
－５　Ｂ－２地区第2面
－６　ＳＤ15，16，17
－７　ＳＤ18
－８　ＳＤ19
－９　ＳＤ20
図版９－１　ＳＤ21
－２　ＳＤ22
－３　ＳＤ23
－４　ＳＤ24
－５　ＳＤ24
－６　ＳＤ25
－７　Ｂ－２地区中央（西から）
図版10－１　ＳＲ01
－２　ＳＲ01土層断面
－３　ＳＲ01遺物出土状況
－４　ＳＲ01遺物出土状況
－５　ＳＲ01遺物出土状況
図版11－１　Ｃ地区全景
－２　ＳＨ10
－３　ＳＨ10　Ｐ－23
図版12－１　ＳＢ03
－２　ＳＢ05
－３　ＳＢ06
図版13－１　ＳＢ04
－２　ＳＢ04　Ｐ－２
－３　ＳＢ04　Ｐ－５
－４　ＳＢ04　Ｐ－４
図版14－１　ＳＢ07
－２　ＳＢ07　Ｐ－４
－３　ＳＢ08
図版15－１　ＳＢ09
－２　ＳＢ10
－３　ＳＢ11
図版16－１　ＳＢ12
－２　ＳＢ13
－３　ＳＢ15
図版17－１　ＳＢ16

－2　ＳＢ17
－3　Ｃ地区（南から）
図版18－1　ＳＫ10
－2　ＳＫ11
－3　ＳＫ12
－4　ＳＫ15
－5　ＳＤ37遺物出土状況
－6　ＳＤ37
図版19－1　Ｃ地区北部（西から）
－2　Ｃ地区南部（西から）
－3　Ｃ地区（北から）
図版20－1　ＳＢ19
－2　ＳＡ02
－3　ＳＡ03
－4　ＳＫ17
－5　ＳＫ16
図版21－1　ＳＤ43
－2　ＳＤ43集石部
－3　ＳＤ43
－4　ＳＤ43遺物出土状況
－5　ＳＤ43遺物出土状況
図版22－1　ＳＤ47
－2　ＳＤ48
－3　ＳＤ45
－4　ＳＤ57，58
－5　ＳＤ49，50
－6　ＳＤ51東部
－7　ＳＤ51西部
図版23－1　Ｄ地区（南から）
－2　ＳＤ53，54，60
－3　ＳＤ43
－4　ＳＲ02
図版24－1　ＳＲ02土層断面
－2　ＳＲ02遺物出土状況
－3　ＳＲ02遺物出土状況
－4　ＳＲ02遺物出土状況
－5　ＳＲ02遺物出土状況
－6　ＳＲ02遺物出土状況
－7　ＳＲ02遺物出土状況
図版25－1　ＳＤ59（南から）
－2　ＳＤ59（北から）
－3　ＳＤ59木樋　横木
－4　ＳＤ59木樋
－5　Ｄ地区南部（南西から）
図版26　出土遺物
図版27　出土遺物
図版28　出土遺物
図版29　出土遺物
図版30　出土遺物
図版31　出土遺物
図版32　Ｂ地区出土石器
図版33　出土遺物
図版34　出土遺物
図版35　出土遺物
図版36　出土遺物
図版37　出土遺物
図版38　出土遺物

表　目　次

第１表　日暮・松林遺跡の産出花粉化石一覧表　166
第２表　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数　213

挿写真目次

図版１　日暮・松林遺跡の花粉化石　172
図版２　日暮・松林遺跡の花粉化石　173
図版３　日暮・松林遺跡のプラント・オパール　174

附　図　目　次

附図１　日暮・松林遺跡Ｂ－１，２地区北部遺構図
附図２　日暮・松林遺跡Ｂ－２地区第１面・Ｃ地区遺構図
附図３　日暮・松林遺跡Ｂ－２地区第２面遺構図
附図４　日暮・松林遺跡Ｄ地区遺構図

第 1 章

調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

日暮・松林遺跡が所在する高松市多肥地区（多肥上町・多肥下町）は，高松市街南郊約６kmに位置する。古代多配郷（和妙類従抄）以来現代に至る長い開発の歴史の中で水田を中心とした農業地帯として高い生産力を有し，現代に至るまで近郊農業地帯として発展してきた。しかし，昭和31年の高松市合併を経て，昭和40年前後以来新興住宅地として宅地化が進行し，田園地帯としての景観も次第に失われつつある。中でも多肥地区の北半を占める多肥下町は昭和63年度から，隣接する林町，太田地区（太田上町・太田下町・伏石町・松縄町），木太町とともに太田第２土地区画整理事業，高松東道路建設等の都市基盤整備事業の中心地の一つとなっている。

日暮・松林遺跡の調査の契機となった都市計画道路福岡多肥上町線は，これら新興都市圏と市街地を結ぶアクセス道路として，県道太田上町志度線と同室町新田線の区間約2.5kmで太田第２土地区画整理事業に合わせて整備が進められてきた。しかし，平成４年に新設県立高等学校（現香川県立高松桜井高等学校）の建設予定地が多肥上町松林地区に決定したことを受けて，平成７年度の開校に併せて福岡多肥上町線の南への延伸約580ｍの建設が急遽急がれることとなったものである。

当時，当該道路建設予定地については周知の埋蔵文化財は確認されていなかったが，香川県教育委員会が新設高等学校用地についていち早く発掘調査に対応する意思を表明し，併せて隣接する道路部分については市教育委員会で対応するよう打診があった。一方，これまでに高松市教育委員会では道路建設予定地の北隣で，平成２年の同路線建設に伴う事前調査として凹原（ひっこんばら）遺跡の調査を実施しており，この南への広がりも予想されたため，道路建設の主幹課である都市計画課と協議の結果，都市計画課の費用負担によって事前調査を実施することで理解を得た。

日暮・松林遺跡の確認調査は，平成４年末から足掛け２年を費やし，用地買収の完了した箇所から順次実施し，その結果を受けて平成５～７年で道路建設予定地のほぼ全域について工事請負方式によって発掘調査を実施した。引き続いて平成７・８年度で整理作業を実施した。

この調査は，発掘調査によって得られた文化財的な知見の重要性もさることながら，それまで殆ど太田第２土地区画整理事業と高松東道路建設の事前調査に忙殺されていた高松市の埋蔵文化財行政が新たな開発行為に文化財保護の網を広げていく嚆矢となったものである。そしてこの後に建設が始まった室町新田線，木太鬼無線等の都市計画道路を初めとする大規模開発事業でも，埋蔵文化財の事前調査の実施は次第に定着しつつあり，今後，これらの調査ならびに調査成果の公開活用において一層の充実が図られなければならない。

第２節　調査の経過

１．発掘調査の経過

日暮・松林遺跡の試掘調査は，平成５年２月27日～３月12日にかけて第１次試掘調査として実施され，遺構の再確認と遺構の広がりを確認する目的で平成５年12月22日～平成６年１月18日に第２次試掘調査が行われた。調査は道路予定地のほぼ境界に路線に沿った南北方向の試掘溝を設定し，バックホーによって掘削を行い，平面，土層観察によって遺構の有無を判断した。第１次試掘調査は７本の試掘溝を道路予定地のほぼ中央部分に設定し，第２次試掘調査は予定地の北部と南部に７本の試掘溝を設定し，調査を行い，北端東側の試掘溝を除いた全ての試掘溝において，溝，ピット，掘立柱建物等の多数の遺構が検出され，弥生土器，須恵器，土師質土器等が出土した。

以上の試掘調査の成果を検討した結果，北端部の東側に関しては発掘調査の必要性は無いとして調査区域から除外し，それ以外の地域は細かな調査対応が必要であると考えられ，工事請負方式で調査を実施することとなった。

発掘調査は，平成５年11月15日～平成７年９月29日の間で期間を開けて４次にわたって実施された。調査区は，東西に調査対象地を横断する複数の道路や水路を境とするＡ～Ｄ地区の４区を設定した。さらに現地割を考慮して，Ａ，Ｂ地区を１，２区の小区画に分けた（第１，３図参照）。

第１次調査は，平成５年11月15日～平成６年３月31日までＡ地区，北端部を除いたＢ－２地区，Ｃ地区の調査である。第２次調査は，平成６年７月28日～９月19日までＢ－１地区，Ｂ－２地区の北端部の調査である。第３次調査は，平成６年10月31日～平成７年１月12日までＤ地区北側の調査である。第４次調査は，平成７年７月31日～９月29日までＤ地区南部の調査である。

以下に調査日誌抄を揚げて，調査の詳細について報告する。

調　査　日　誌　（抄）

平成５年

11月

仮設道の設置や安全柵の杭を打設し，調査準備を整える。現場事務所を設置する。

12月

16日より第１次調査のＢ－２地区，Ｃ地区において重機による表土掘削を行う。

平成６年

１月

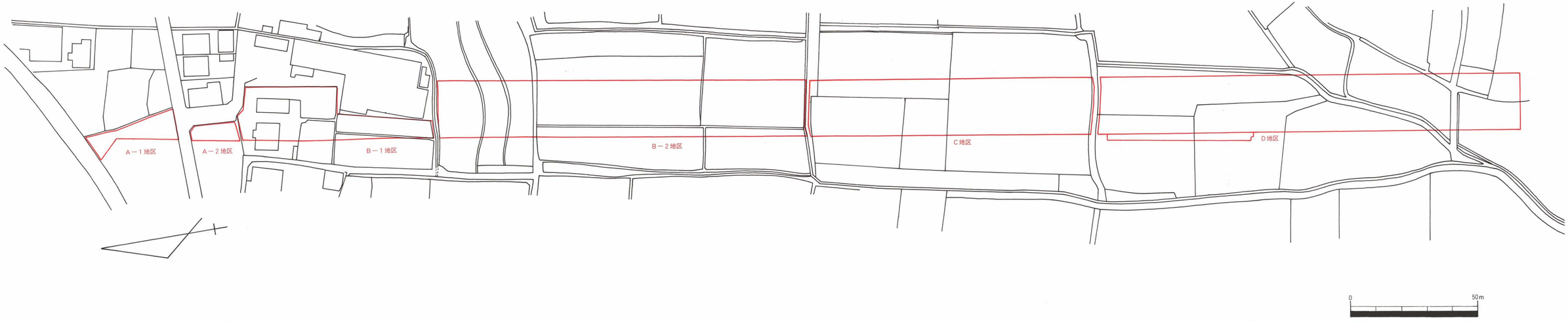
５日～14日までＢ－２地区の遺構検出作業を行い，住居址，溝，方形周溝墓，土坑，ピット等を確認し，検出状況の写真を撮影する。19日より第１面で検出された遺構の調査を開始する。近世の溝，土坑を完掘した後に，弥生時代の遺構を調査する。ＳＴ01の土層図，遺物出土の実測図をとり，完掘する。住居址はＳＨ01から随時掘り下げる。ＳＨ02は多量の遺物が出土した。

２月

上旬頃までにＳＨ02～05，ＳＤ05，08，09を含めた第１面の遺構を完掘し，８日に第１回航空測量を行う。10日から第２面上面までの掘り下げを行い，ＳＨ06～09，ＳＥ01をはじめ多量の溝，ピットを検出する。下旬はこれらの遺構の調査を行う。また，15～18日はＡ地区の表土掘削を行う。

３月

３日までに第２面の遺構を完掘し，４日に第２回航空測量を行う。7～11日まで第３面上面までの



第１図　調査区設定図（Ｓ：１/1000）

掘り下げを行い，５条の溝とＳＫ09を検出し，18日までにすべての遺構を完掘する。22日に第３面の完掘の写真を撮り，遺構の平面図を作成する。

１～11日までＡ地区の調査を行う。Ａ－１地区では溝，ピットを検出し，遺物が出土したが，Ａ－２区は全く遺構，遺物が検出されなかった。

中旬始めからＣ地区の遺構検出作業を行い，住居址，掘立柱建物，溝等を確認する。月末までに全ての遺構を完掘し，第３回航空測量を行う。

７月

28日からＢ－１地区南側とＢ－２地区北端部において重機による表土掘削を行う。

８月

Ｂ－１地区より表土掘削が終わりしだい遺構検出を行う。９日からＳＲ01調査を始め，盆休み後に南側の遺構を検出した。その後にＳＲ01調査を再開し，ほぼ完掘した。

９月

１，２日にＳＲ01の土層図を作成し，15日までにＳＨ04，05，ＳＤ13等の遺構を完掘した。

11月

１～３日までＢ－１地区北側の表土掘削を行い，遺構検出作業を行う。遺構は非常に希薄で小規模な近世のピット２個のみであった。17日にＢ－１地区，Ｂ－２地区で第４回航空測量を行う。

15日からＤ地区北側の重機による表土掘削を行い，随時遺構検出作業を行う。

12月

下旬頃までにＤ地区北側で検出された遺構を完掘する。27日に第５回航空測量を行う。

平成７年

１月

Ｄ地区を切断する現有水路の南側の東側歩道部分の表土掘削を行い，溝，旧河道を検出し調査を行う。ＳＲ02の上層から多量の土師質土器椀，瓦器等が出土した。

８月

１～３日までＤ地区の南側の表土掘削を行い，17日より遺構検出作業を行う。木樋を有するＳＤ59を含む数本の溝とＳＲ02を検出し，農道より南側のＳＲ02を掘り終える。

９月

農道より北側のＳＲ02を掘り下げ，底面直上より多量の須恵器完形が出土した。ＳＤ59の調査を始め，６日までに木樋を掘り終え，11日まで写真，実測を行う。13～18日の間に木樋を取り上げる。26日までにＳＲ02を完掘し，27日に第６回航空測量を行う。29日すべての調査を終了する。

２．整理作業の経過

整理作業は，発掘調査の中断期間に現場事務所で行った作業と調査終了した後に円座整理事務所で行った作業がある。前者は，平成６年４月１日～7月27日，９月20日～10月28日に行われた。作業内容は出土遺物の水洗，注記を行い，一部の復元作業を始めた。また，平成７年７～９月の調査時において水洗いを同時に行う。後者は，山本・中西を中心に14人の整理作業員によって平成８年５月１日～７月31日まで行われた。５月・６月上旬は出土遺物の復元作業，遺物台帳の作成と実測の選定作業を行った。そして，約1400点の遺物を選定した。６月中旬～７月にかけて遺物の実測，トレースを終え，図の作成を行った。平成９年１月中頃に遺物の写真撮影を行った。２月までに山本・中西が図の作成，割り付けを行い，原稿の執筆を終える。

第3節　調査組織

発掘調査および整理作業の関係者は次のとおりです。

(平成5年度)

教育長	山口　寮弍
文化部長	上里　文麿
文化部次長	宮内　秀起
文化振興課長	多田　恒男
文化振興課長補佐	藤田　容三
文化財係長	藤井　雄三
文化振興課主査	納田　敏雄
文化財専門員	山本　英之
	山元　敏裕
文化振興課非常勤嘱託	谷　千鶴
	林　公子
	山下　智美

(平成6年度)

教育長	山口　寮弍
文化部長	宮内　秀起
文化部次長	中村　榮治
文化振興課長	中村　榮治（事務取扱）
文化振興課長補佐	藤田　容三
文化財係長	藤井　雄三
文化振興課主査	納田　敏雄
文化財専門員	山本　英之
	山元　敏裕
文化振興課非常勤嘱託	谷　千鶴（～H7.1.12）
	林　公子
	山下　智美（～H6.7.13）

(平成7年度)

教育長	山口　寮弍
文化部長	宮内　秀起
文化部次長	中村　榮治
文化振興課長	中村　榮治（事務取扱）
文化振興課長補佐	藤田　容三
文化財係長	藤井　雄三
文化振興課主査	納田　敏雄
文化財専門員	山本　英之

	山元　敏裕
	大嶋　和則
文化振興課非常勤嘱託	林　　公子
	竹林　弘子
	井口芙美子
	出石真理子
	上原　洋子

（平成８年度）

教育長	山口　寮弍
文化部長	宮内　秀起
文化部次長	中村　榮治
文化振興課長	中村　榮治（事務取扱）
文化振興課主幹	藤田　容三
文化振興課長補佐	立岩伊左子
文化財係長	岡田　眞介
文化振興課主査	納田　敏雄
文化財専門員	山本　英之
	山元　敏裕
	大嶋　和則
文化振興課非常勤嘱託	林　　公子
	阪口由美子
	池下　和子
	龍満　房子
	山中　規子
	小野沢正子
	岡田　信子
	花田　陽子
	上原　洋子
	竹林　弘子
	吉本みどり
	大川　玲子
	井口夫美子
	出石真理子

第 2 章

地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松平野は，香川県のほぼ中央部で瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野で，西を五色台山塊，南を日山，上佐山，東を立石山，雲附山等に遮られており，南北約20km，東西約16kmを測る。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島，紫雲山等の独立山塊は，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野には，西から本津川，香東川，春日川，新川といった河川が北流しているが，中でも香東川が平野の形成にもっとも大きな影響を及ぼしており，現在の春日川以西の大部分は香東川によって形成された沖積平野といわれている。

現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は，17世紀はじめの河川改修によって人工的に開削されたもので，それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後，石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林町から木太町へかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査によってもその痕跡が確認されている。なお，17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

これらのため池は，年間1000㎜前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが，林，多肥地区周辺では扇状地末端部に当たることから，ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし，昭和50年の香川用水の通水によって，この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ，農業用水確保の不安が払拭された反面，大池，長池等のため池が三郎池の子池となり，地元水源を核とした水利慣行が急激に消滅するとともに，ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

第２節　歴史的環境

高松平野では，石清尾山古墳群，高松市茶臼山古墳などを初めとする丘陵部の古墳の状況については比較的早くから知られていたが，平地部では天満遺跡など二，三が知られるのみで長く遺跡の空白地帯となっていた。しかし，昭和60年代に入って高松東道路建設，太田第２土地区画整理事業，空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い埋蔵文化財の確認調査ならびに事前発掘の件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大しつつある。また新たな遺跡の発見とあわせて，香東川の旧河道が平野の形成に大きな影響を及ぼしていた事実も次第に明らかになってきた。今後，未確認遺跡の把握と保護に加えてこれまでの調査成果を時間的，空間的に結びつけて高松平野の歴史環境の変遷を復原する作業が新たに必要になってきている。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代に遡る。平野縁辺の低丘陵部で久米池南遺跡（東山崎町），雨山南遺跡（三谷町）等の遺跡が知られるが，いずれも表採や混入によると見られる状況を示す。中間西井坪遺跡（中間町）では高松自動車道の事前調査によってＡＴ火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。

縄文時代では，大池遺跡（木太町）で草創期と見られる有舌尖頭器２点の表採が報告されている。また，近年平野部の発掘調査によって縄文晩期を中心とした遺跡出土例の増加が特筆され，林・坊城遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡，居石遺跡，

上天神遺跡等を数えることができる。これらの多くは旧河道等の堆積から遺物の出土が確認されたものであるが，井手東Ⅰ遺跡では遺物の確認はなかったものの，地表下約70cmからアカホヤの堆積層が確認されており縄文中期の高松平野の形成過程をうかがうことができる。

弥生時代前期に移ると，天満・宮西遺跡，松縄下所遺跡，大池遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定地内遺跡等が挙げられる。浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定地内遺跡ではこの時期に10㎡前後の方形に整然と区画された水田面が検出されるが，それ以外では遺物廃棄（埋納）土坑や河川堆積の包含遺物など遺物を中心とした確認例が多く，集落などが明確に把握できている事例は見られない。

中期になると，平野部では浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，多肥松林遺跡で住居跡，周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが，規模・密度は総じて希薄である。
また，中期後半になると久米池南遺跡など平野縁辺部や丘陵上に高地性集落が営まれるようになる。

弥生時代後期になると遺跡は数，規模共に爆発的に増加し，平野部では上天神遺跡，天満・宮西遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下・須川遺跡，蛙股遺跡，キモンドー遺跡，井手東Ⅰ遺跡がある。丘陵部では，香川県の弥生後期の標識遺跡として著名な大空遺跡が平野東部に存在する。

古墳時代では，これら弥生後期の遺跡のうち上天神遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡が古墳時代初頭に至るまで集落が存続することが知られており，太田下・須川遺跡では古墳時代中期の集落を検出している。さらに生産関連の遺跡としては浴・松ノ木遺跡の水田跡，三谷三郎池の須恵器窯跡，中間・西井坪遺跡の土師質陶棺焼成土坑が知られ，古墳時代全般を通じて集落・生産遺跡の遺跡数は希薄である。このことは古墳の造営が全市域的に盛んであるのと対照をなしており，今後古墳の造営母体となるべき集落域の解明が重要な課題となるものと思われる。

古墳の分布状況を概観すると，発生期と考えられる諏訪神社墳丘墓，鶴尾神社４号墳を皮切りに，石清尾山塊では猫塚，石船塚等の積石塚から成る石清尾山古墳群，三谷地区では小日山１・２号墳，前田地区では高松市茶臼山古墳，下笠居地区では横立山経塚古墳等が築造され，その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

石清尾山古墳群では頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上を経た後，南山浦古墳群，浄願寺山古墳群等の盛土の群集墳が爆発的な盛行を見るし，三谷地区では小日山１・２号墳に続いて割竹形石棺をもつ全長88mの前方後円墳である三谷石船古墳，直径42mを測り周濠を巡らせる円墳の高野丸山古墳が中期に，そして後期には平石上２号墳，矢野面古墳，犬の馬場古墳，石船池古墳群といった古墳につながって行く。前田地区でも同様に高松市茶臼山古墳に続いて，前期から中期にかけての茶臼山古墳群，諏訪神社古墳，後期の久本古墳，小山古墳，山下古墳，瀧本神社古墳，岡山小古墳群，平尾古墳群といった古墳が引き続いて築かれている。

また，鬼無地区では前期末から中期初頭と見られるかしが谷２号墳をはじめとして組合式の土師質陶棺を出土した中期前方後円墳の今岡古墳，巨石積みの横穴式石室を主体部にもつ古宮古墳，平木１号墳等からなる神高池古墳群へと続いている。なお，先述の土師質陶棺の焼成坑を検出した中間・西井坪遺跡は本津川沿いに鬼無地区の上流にあたり，西山崎町の本堯寺北古墳でも埴輪円筒棺の出土が伝えられていることから本津川を介した物資や情報の流通が想像できる。

屋島地区でも，瀬戸内海を見渡す丘陵上に位置する長崎鼻古墳をはじめ浜北古墳群，中筋古墳群，金比羅神社古墳群，東山地古墳群などが知られている。未調査で時期の確定を見ないものも含まれるが，平野周辺部の地域単位よりもなお閉鎖性の強いであろう島嶼部の古墳群という点で，また生産基

1	日暮・松林遺跡	20	浴・松ノ木遺跡	39	平石上２号墳
2	北大塚古墳	21	林・坊城遺跡	40	矢野面古墳
3	鏡塚古墳	22	凹原遺跡	41	三谷三郎池西岸窯跡
4	石船塚古墳	23	多肥松林遺跡	42	三谷石船古墳
5	猫塚古墳	24	松林遺跡	43	石船池古墳群
6	鶴尾神社４号墳	25	多肥廃寺	44	川南西遺跡
7	天満・宮西遺跡	26	宮尻上遺跡	45	川南東遺跡
8	松縄下所遺跡	27	弘福寺領関係遺跡	46	新田・本村遺跡
9	キモンドー遺跡	28	一角遺跡	47	小山・南谷遺跡
10	大池遺跡	29	宮西・一角遺跡	48	小山古墳
11	弘福寺領関係遺跡	30	空港跡地遺跡（亀の町Ⅰ地区）	49	山下廃寺
12	上天神遺跡	31	空港跡地遺跡（亀の町Ⅱ地区）	50	山下古墳
13	太田下・須川遺跡	32	空港跡地遺跡	51	久本古墳
14	蛙股遺跡	33	拝師廃寺	52	諏訪神社墳丘墓
15	居石遺跡	34	三谷町南海道推定地	53	久米山遺跡群
16	井手東Ⅱ遺跡	35	高野丸山古墳	54	久米池南遺跡
17	井手東Ⅰ遺跡	36	高野廃寺跡	55	高松市茶臼山古墳
18	浴・長池Ⅱ遺跡	37	雨山南遺	56	東山崎・水田遺跡
19	浴・長池遺跡	38	小日山１号墳		

第２図　周辺遺跡分布図（Ｓ：１/50,000）

盤としての耕作地をもたないという点においても注目される地域である。

古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，蛙股遺跡，上天神遺跡，凹原遺跡，松縄下所遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡等で条里界線にあたるとおもわれる遺構を検出している。遺構の多くは古いものでも平安時代から鎌倉時代，多くは近世以降の遺物を含み一般に条里の施工期とされる奈良時代とは時期的に隔たっているが，溝の存続期間と遺構としての埋没時期の関係など，検討すべき多くの問題をはらんでいる。

中でも，松縄下所遺跡は現地表面の条里とは10数メートルずれた位置にありながら地表条里と同方向の道路側溝状の遺構を検出し，時期も７世紀代にまで遡り得るなど高松平野の条里施工に関わる可能性がある重要な遺跡である。また，浴・長池Ⅱ遺跡の条里界線も旧郡界線にあたる部分に幅６ｍの間隔で道路側溝状の溝が並行し，空港跡地遺跡亀の町地区においても現在の畦道の延長として幅３～４ｍの道路側溝状の並行溝が検出されており，12世紀代の遺物が出土している。その他道路に関しては三谷町の南海道推定線上で河岸段丘の崖をおよそ６ｍ幅で開削して切通し状に斜面を形成したと思われる痕跡が確認されており，南海道に関連する遺構の可能性が考えられる。

古代寺院跡では宝寿寺跡，山下廃寺，下司廃寺，高野廃寺，拝師廃寺，坂田廃寺，多肥廃寺，勝賀廃寺などが知られている。正式の発掘調査を経たものがなく，伽藍配置などの具体的な様子の判るものはないが一様に瓦の散布が見られる。宝寿寺跡，下司廃寺では塔礎石が現存し，坂田廃寺，高野廃寺では建物礎石が転用材として散布している。また，坂田廃寺では過去に金銅釈迦誕生仏の出土を見たほか最近の調査で背後谷斜面から坂田廃寺に瓦を供給したと見られる片山池１号窯跡が確認された。

これら寺院跡の中のいくつかは地域単位の後期古墳群の分布と一致する傾向が強いことから，古墳時代後期から古代への転換期に地域単位の造墓集団が寺院建築への転向を図ったものと考えられる。坂田廃寺が所在する香川郡坂田郷には，日本霊異記にも在地の綾氏の話としての説話が伝えられており早くから仏教の受容が進んでいたことを示している。

中近世以降では，東道路関連の浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地等で，旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が検出されており，その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから，この時期までに現在の地形環境がほぼ形作られていたことが推測される。また，東山崎・水田遺跡，川南遺跡では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた近世集落跡や耕土層が発掘され，豊富な木製品が発見されているほか，現高松市美術館の紺屋町遺跡でも近世の陶磁器や木簡が出土し，玉藻町の高松城東ノ丸跡でも寛永年間の東の丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し，往時の城下町の一端を窺うことができる。

第 3 章

発掘調査の成果

第１節　調査区の位置

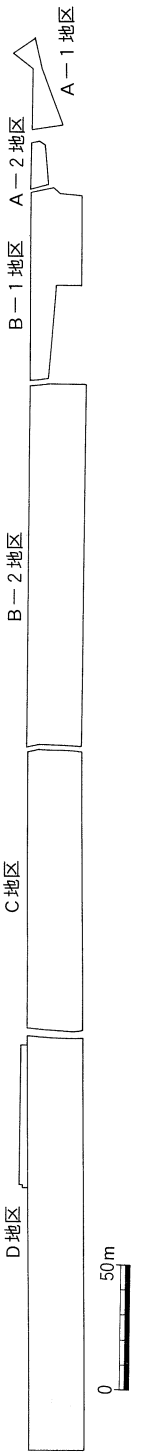
調査区は，道路建設に伴う発掘調査であるため南北方向に細長く設定され，全長は約580m，幅20mを測る。調査対象地の総面積は約11600㎡であるが，東西方向に走る道路や農道，さらに工場，住宅等があるため未調査部分がある。特に，北端のＡ地区においてその傾向が顕著である。

調査区は，北側から南側にむかってＡ～Ｄ地区の４工区に区分されている。さらにＡ，Ｂ地区はそれぞれ２分割され，Ａ－１，Ａ－２，Ｂ－１，Ｂ－２地区に細分されている。地区の区分けの基準としたのは，東西方向の道路，農道に基づいたものであり，確固たる根拠を有するものではない。第２章第２節調査の経過で前述したように，調査はこの工区ごとに実施されていない場合がある。例えば，Ｂ－２地区は北寄りにある農道を境にして南側を先に調査を実施して，北側は後に調査を行った。しかし，同一の竪穴住居や溝が分割されるという不都合が生じたため，整理の時点でＢ－２地区としてまとめた。調査期間が異なるため，附図１はＢ－１地区とＢ－２地区北側の実測図となり，附図２はＢ－２地区南側，Ｃ地区の実測図となっている。本章第３節遺構，遺物では同一の竪穴住居，溝として記述し，図化している。Ｄ地区では南西～北東に流れる水路の北側と南側において調査期間が異なるが，遺構が分断されるので同一の地区とする。

Ａ地区は調査区の北端に位置し，試掘調査の結果により西側のみ調査を実施した。道路をはさんで北側をＡ－１地区，南側をＡ－２地区とした。Ａ－２地区の東側は住宅があるため調査はできなかった。

Ｂ地区は水路をはさんで北側をＢ－１地区，南側をＢ－２地区とした。Ｂ－１地区の東側は工場があるため調査は実施されなかった。両地区の境付近は，現地形においても微低地が帯状に確認されており，旧河道の存在が予想できたその南側は微高地となっている。

Ｃ地区はＢ－２地区に南接し，微高地上にあり，平坦である。Ｄ地区は，Ｃ地区に南接しており同様に微高地上にあるが，近代の粘土採掘や水田整備により一部に地表が低くなっている水田がある。南東側に一段高い微高地があり，帯状の水田区画が南西～北東方向に存在しており，旧河道が予想された。



第３図　設定図

第２節　基本土層

調査区が南北に長く，微高地や微低地と変化のある地形に立地しており，土層の堆積状態も複雑である。各調査区の土層に関しては第３節で個別に記載する。南側の微高地では平行な堆積を示し，基本土層としては，上位より現水田層・近世の条里型水田層（２，３層に細分できる）・数層のシルト質極細砂である。Ｂ－２地区では地山と近世の水田の間に土層の堆積が見られ，２面の遺構面が存在し，さらに数層の土壌層も確認された。微低地には旧河道があり，深く複雑な土層堆積をなしている。

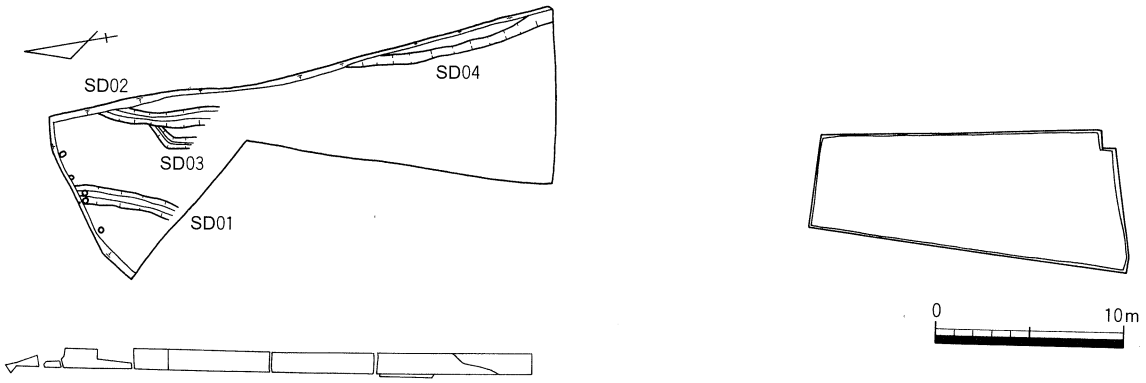
第３節　遺構と遺物

１．Ａ地区

Ａ地区は本遺跡の北端に位置し，東西方向に走る道路によって二つの小調査区に分けられる。北側はＡ－１地区，南側はＡ－２地区と称呼する。

第１章第２節で概述したように，平成５年度の試掘調査の結果に基づいて，調査対象地の北端においては，東側を調査の必要なしと断定し，遺構が確認された西側のみに調査区を設定した。Ａ－１地区の平面形は不整方形をなし，ほぼ直線的な東壁は長さ27ｍを測り，西壁は「く」字状に屈曲している。北・南両壁の長さは約９ｍである。北隅の地山は黄白色シルトであるが，その他では砂礫層である。そのレベルは西から東へ緩やかに下がっている。遺構面は２面あり，上面では５個のピットが検出された。下面の地山では4本の溝が検出された。土層はほぼ水平堆積をなし，上層から現水田・灰黄褐色シルト質極細砂・鈍い黄橙色シルト質極細砂・灰黄褐色シルト質極細砂・暗褐色シルト質極細砂・黒色シルト質極細砂・オリーブ黒色細砂の７層である。Ａ－１地区東側において，道路工事中に遺物が表採されたので，調査区外遺物として報告する。

Ａ－２地区は約14ｍ南側に当たり，平面形は台形を呈す。東側には市道・個人住宅があるため調査はできなかった。南北辺は15～17ｍ，東西辺は５～7.5ｍを測る。現水田の下は非常に薄い灰白色シルト質極細砂があるが，その直下は砂礫層の地山である。地山のレベルはほぼ平坦である。包含層中に若干の陶磁器が出土したが，遺構は全く検出されなかった。



第４図　Ａ地区遺構配置図（Ｓ：１/400）

１）中世

１　溝

ＳＤ01（第５図）

Ａ－１地区北端をほぼ直線的に南北方向に延びる溝である。北端でピット群と重複し，本溝はピット群に切られている。幅は0.80ｍ，深さ0.24ｍを測り，断面は逆台形を呈する。確認面のレベルは標高18.40ｍ前後である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　埋土からの遺物は数点の土師質土器片・瓦質土器片のみであり，図化できるものはなかった。

SD02

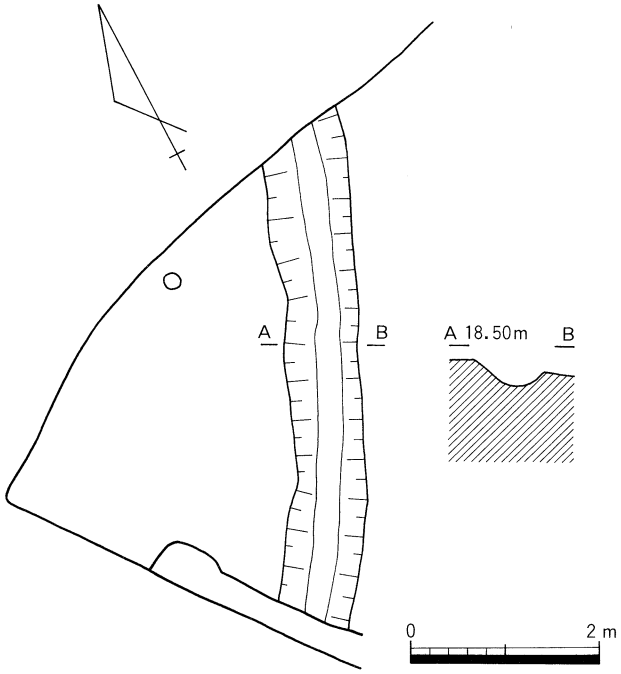
A－1地区北部をほぼ直線的に南北に延びる溝である。幅は0.90m，深さは0.10mを測る。確認面のレベルは標高18.30mである。断面形は皿状を呈する。埋土は灰色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物　数点の土師質土器片が出土した。

SD03

A－1地区北部を「く」の字状に南北方向へ延びる溝であり，北端はSD02に切られる。幅は0.3m，深さ0.05mを測る浅い溝である。確認面のレベルは標高18.40mである。断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は灰白色シルト質細砂単一層である。

出土遺物　出土は数点の土師質土器片である。



第5図　SD01平・断面図（S：1/80）

SD04

A－1地区南東際を南北にやや弧を描きながら延びる溝である。幅は0.50m，深さ0.05mを測る浅い溝である。確認面のレベルは標高18.20m前後である。断面形は概ね皿状を呈し，埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物　埋土からの出土は数点の土師質土器片のみである。

2　ピット

ピット群

A－1地区北端においてSD01と重複して検出されたピット群である。新旧関係はピット群が新しい。確認面のレベルは標高18.45mである。ピットは5個検出された。径は0.30m，深さは0.10mを測り，平面形は円形を呈す。ピットはほぼ直線的に並んでいるが，北側が調査区外となっているため遺構の広がりは不明である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物　ピット内からの遺物の出土はなかった。

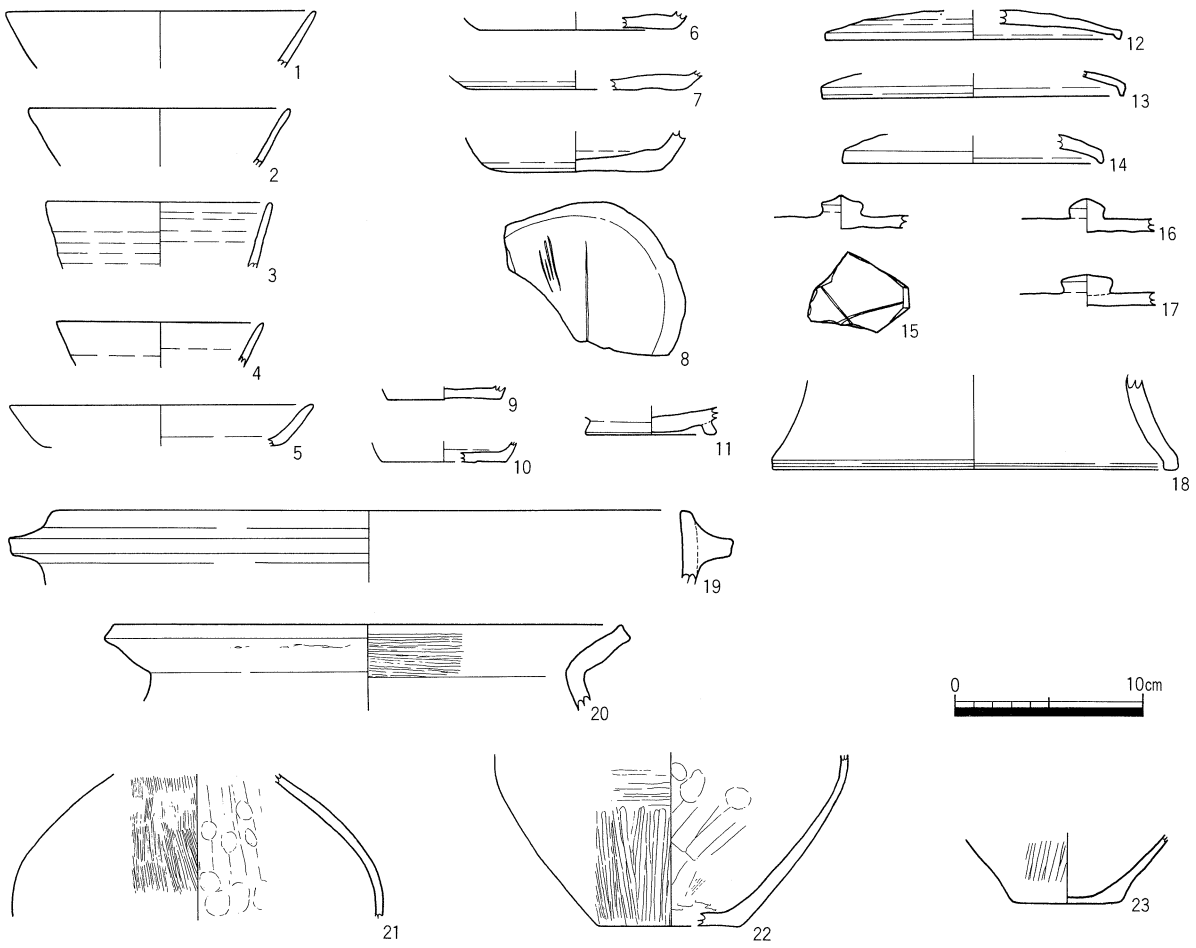
2）包含層出土遺物

ここで報告する遺物は，A－1地区において実施した1994年の試掘調査で出土した遺物（第6図）と本調査の包含層から出土した遺物（第7図），道路予定地の内で試掘調査の結果調査区外とした部分において道路建設工事の際に表採した遺物（第8，9図）である。

第6図の遺物は，須恵器杯（1～10），同椀（11），同蓋（12～17），土師質土器羽釜（19），同土鍋（20），弥生土器壺（21，22），同甕（23）である。5，7，10以外はトレンチの下位より出土した。

1，5は直線的な体部で規模・手法とも同じである。2～4はやや小形の杯であり，2の口唇部には重ね焼きの痕が見られる。6～8は底径9cmを測り，8の底部外面にはヘラ記号がある。

12～14は口縁端部がわずかに直立し，宝珠を持つ15の内面にはヘラ記号がある。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器　杯	16.4		(3.1)	回転ナデ。ほぼ直線的な体部	灰N5/	灰白N8/	微砂若干
2	〃	13.8		(3.1)	回転ナデ。ほぼ直線的な体部。口唇部に重ね焼き痕	灰白N7/		〃
3	〃	12.0		(4.3)	回転ナデ	〃		微～細砂
4	〃	11.0		(2.4)	回転ナデ。口唇部が若干細くなる	灰N6/	灰白N7/	微砂
5	〃	16.2	12.8	2.2	回転ナデ。器高は浅く、直線的な体部	灰白N8/		粗砂若干
6	〃		10.4	(1.0)	底面回転ヘラ切り後にナデ	青灰10BG6/1		微砂
7	〃		12.0	(1.0)	底面回転ヘラ切り後にヘラナデ	灰白N7/		〃
8	〃		9.4	(2.1)	底面切り離し後に周辺を回転ヘラ削り。ヘラ記号	灰N6/		微砂、粗砂若干
9	〃		6.0	(1.1)	底面回転ヘラ切り後にナデ	〃		微砂若干
10	〃		6.6	(1.1)	〃	灰白N8/		〃
11	須恵器　椀		7.0	(1.5)	高台は高く平坦	灰白7.5Y7/1	灰白N8/	微砂
12	須恵器　蓋	15.6		(1.5)	回転ナデ。端部は下方に屈曲	灰白N7/		微～細砂
13	〃	16.0		(1.3)	回転ナデ。端部外面に若干の凹線	灰N6/	灰白N8/	細砂
14	〃	13.8		(1.5)	回転ナデ。端部は下方に屈曲	〃	灰白N7/	細～粗砂
15	〃			(1.7)	直径2.2cmの宝珠。内面にヘラ記号を有す	青灰5B6/1		微砂若干
16	〃			(1.8)	直径1.9cmの宝珠	〃		微砂
17	〃			(1.7)	直径2.7cmの宝珠	灰白N7/		微砂若干
18	須恵器　高杯		20.8	(4.9)	回転ナデ	灰白N8/		微砂、細礫
19	土師質土器　羽釜	34.2		(3.9)	ヨコナデ。外面に煤付着	鈍褐7.5YR6/3		粗砂、細礫
20	土師質土器　土鍋	27.0		(4.0)	外面ヨコナデ。内面刷毛目	鈍黄橙10YR7/4		細～粗砂多量
21	弥生土器　壺			(7.5)	外面刷毛目。内面指頭圧痕後にヘラナデ	橙7.5YR6/6		石英、長石
22	〃		7.4	(9.1)	外面ヘラミガキ。内面指頭圧痕後にヘラ削り	黄褐10YR5/6	暗灰黄2.5Y5/2	石英、長石、角閃石
23	弥生土器　甕		5.8	(3.4)	外面ヘラミガキ、ヘラナデ。底面1方向のヘラミガキ	灰褐5YR5/2	黒褐5YR2/1	〃

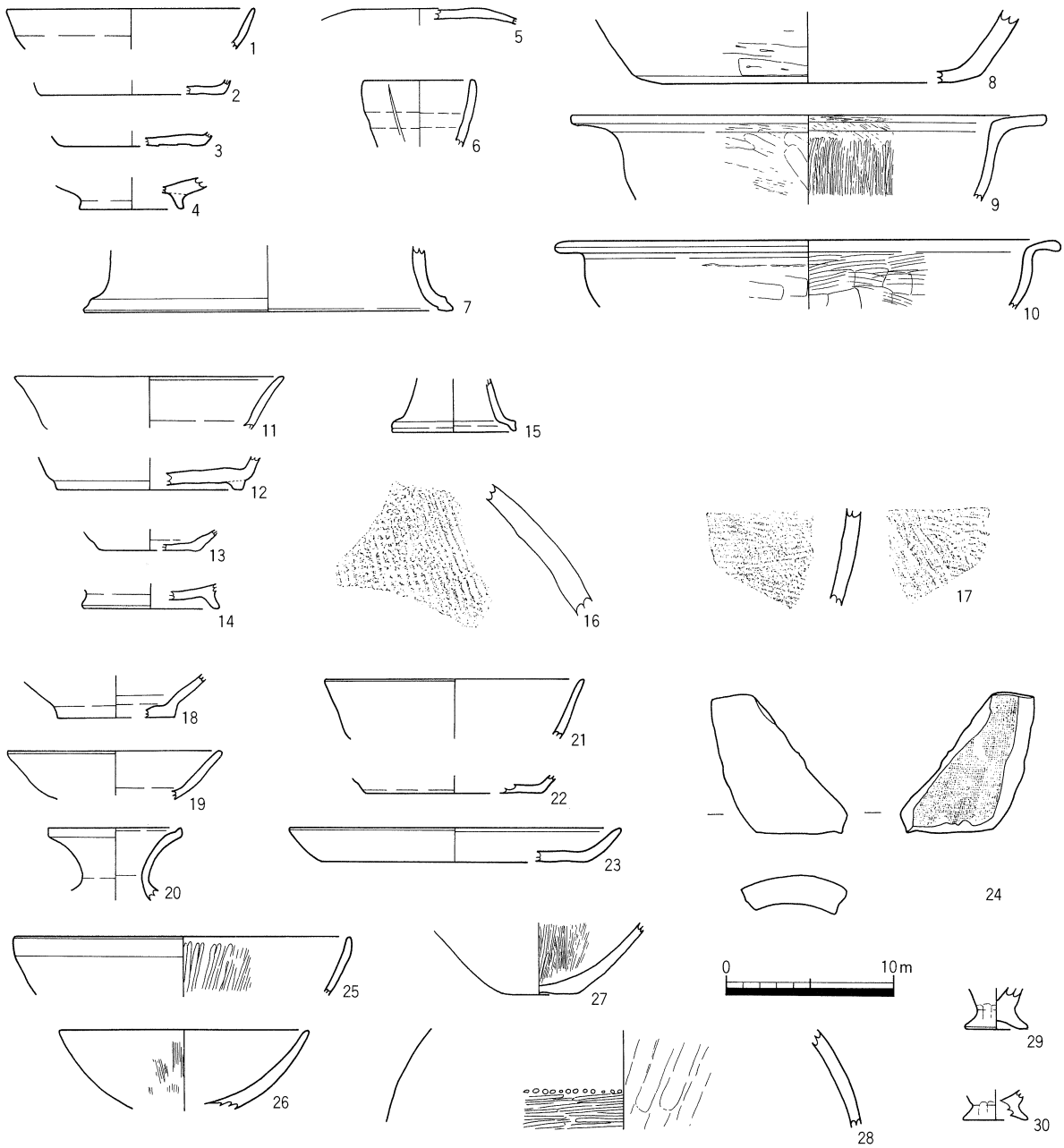
第6図　包含層出土遺物(1)（S：1/4）

19はヨコナデが施され，外面に煤が付着する。20の口縁部外面に輪積み痕が残る。

21は球形の胴部で，外面は縦方向の刷毛目が施され，22，23の外面はヘラミガキが施される。

第７図の１～10は中位の褐灰色シルト質細砂から出土し，須恵器杯（１～３），同椀（４），同蓋（５），同瓶（６），同高杯（７），同甕（８），土師質土器（９，10）である。11～17は下位の灰褐色砂層の出土で，須恵器杯（11～13），同高杯（15），同甕（16，17），土師質土器椀（14）である。18～30は最下位の黒色シルト質極細砂から出土し，土師器甕（18），同杯（19），須恵器壺（20），同杯（21，22），同皿（23），土師質土器椀（25，26），弥生土器壺（27，28），同製塩土器（29，30），平瓦（24）である。

６の外面にはヘラ記号が見られる。９の口縁部は水平に広がり，体部外面の調整はヘラケズリの後に刷毛目，内面はヘラミガキが施される。10の内面は刷毛目の後にヘラナデが施され，輪積み痕を残す。11は若干外反気味である。19は緩やかな傾斜で直線的に立ち上がる。21は器高が深い。23は口径18.8cm，底径16.0cmを測る皿である。29，30はヘラケズリが施される脚台である。



第７図　包含層出土遺物(2)（Ｓ：１/４）

（第７図）

番号	器　種	法量cm			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器　杯	14.8		(2.2)	回転ナデ。内外面に若干の凹凸	灰白N7/		微砂
2	〃		11.0	(0.9)	回転ナデ	灰白N8/		〃
3	〃		8.8	(0.8)	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	灰白N7/		微砂若干
4	須恵器　椀		6.0	(1.9)	回転ナデ	灰白10YR8/1		微～細砂
5	須恵器　蓋			(1.0)	ヘラナデ	灰N6/		細礫若干
6	須恵器　瓶	6.6		(4.0)	回転ナデ。外面にヘラ記号有り	〃	灰白N7/	微～粗砂
7	須恵器　高杯		22.0	(3.8)	回転ナデ	灰白N7/		微砂多量
8	須恵器　甕		20.6	(4.4)	外面ヘラ削り。内面ナデ	灰白N8/	灰白2.5GY7/1	粗砂
9	土師質土器　土鍋	28.2		(5.0)	外面ヘラ削り後に刷毛目。口縁内面刷毛目。体部ヘラミガキ	鈍黄橙10RY7/3		粗砂、細礫
10	〃	30.2		(4.1)	口縁ヨコナデ。体部外面ヘラナデ、内面刷毛目後にヘラナデ	暗灰黄7.5Y5/2	灰褐10YR5/2	細～粗砂
11	須恵器　杯	16.0		(4.0)	回転ナデ。若干外弯気味の体部	灰白N7/		微砂
12	〃		11.0	(2.0)	回転ナデ。断面逆台形の貼付高台	〃		微砂若干
13	〃		6.0	(1.2)	回転ナデ	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/1	〃
14	土師質土器　椀		8.0	(1.4)	内面ナデ	灰白10YR8/2	黒５Y2/1	微～細砂
15	須恵器　高杯		7.4	(3.1)	回転ナデ	灰白N7/	灰N5/	〃
16	須恵器　甕				外面格子状タタキ目。内面ナデ	暗緑灰10GY3/1		細～粗砂少量
17	〃				外面格子状タタキ目。内面青海波状タタキ目	灰白7.5Y7/1	灰白N7/	微砂
18	土師器　甕		7.0	(2.2)	平底	橙7.5YR6/6	灰白2.5Y8/2	微砂若干
19	土師器　杯	12.6		(2.8)	回転ナデ。内面に黒斑	淡黄2.5Y8/3		〃
20	須恵器　壺	8.0		(4.3)	回転ナデ。口唇部は上方に拡張	暗灰N3/	灰5Y4/1	微砂
21	須恵器　杯	15.4		(3.5)	回転ナデ。直線的な体部	灰白2.5Y8/1		〃
22	〃		10.6	(1.1)	底面は回転ヘラ切り後にナデ	灰白N7/		〃
23	須恵器　皿	18.8	16.0	2.0	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にヘラナデ	灰10Y6/1	灰N5/	微砂多量
24	平瓦				外面ナデ。内面布目痕	灰黄2.5Y7/2		微～細砂
25	土師質土器　椀	20.0		(3.5)	回転ナデ。体部内面ナデ後にヘラミガキ	黄灰2.5Y5/1		粗砂少量
26	〃	15.0		(4.7)	回転ナデ。外面刷毛目後にナデ。内面ナデ	灰白10YR8/1	灰白7.5YR8/2	微砂
27	弥生土器　壺		4.6	(4.2)	底部中央が円形に凹む。外面一部黒斑。内面ヘラミガキ	灰黄2.5Y7/2	鈍黄橙10YR7/2	細砂若干
28	〃			(5.8)	外面列点文、ヘラミガキ。内面ヘラナデ	灰白2.5Y8/2		石英、長石
29	弥生土器　製塩土器		4.0	(2.5)	外面ヘラ削り、ナデ、黒斑。内面ナデ	黒5YR1.7/1		〃
30	〃		3.9	(1.8)	外面ヘラ削り	赤褐2.5YR4/6	赤褐5YR4/3	〃

第８，９図はＢ地区北側で検出されたＳＲ01が西方向に湾曲した後北流する部分から出土した遺物である。遺物の出土したレベルは，工事中の表採であるため正確でないがＳＲ01の最深部より西側の傾斜部の底面近くであると思われる。

遺物は須恵器壺（１，２），弥生土器壺（３～７，36），同甕（８～33），同高杯（34，35），同手づくね土器（37），同製塩土器（38～41），その他の弥生土器片が出土した。

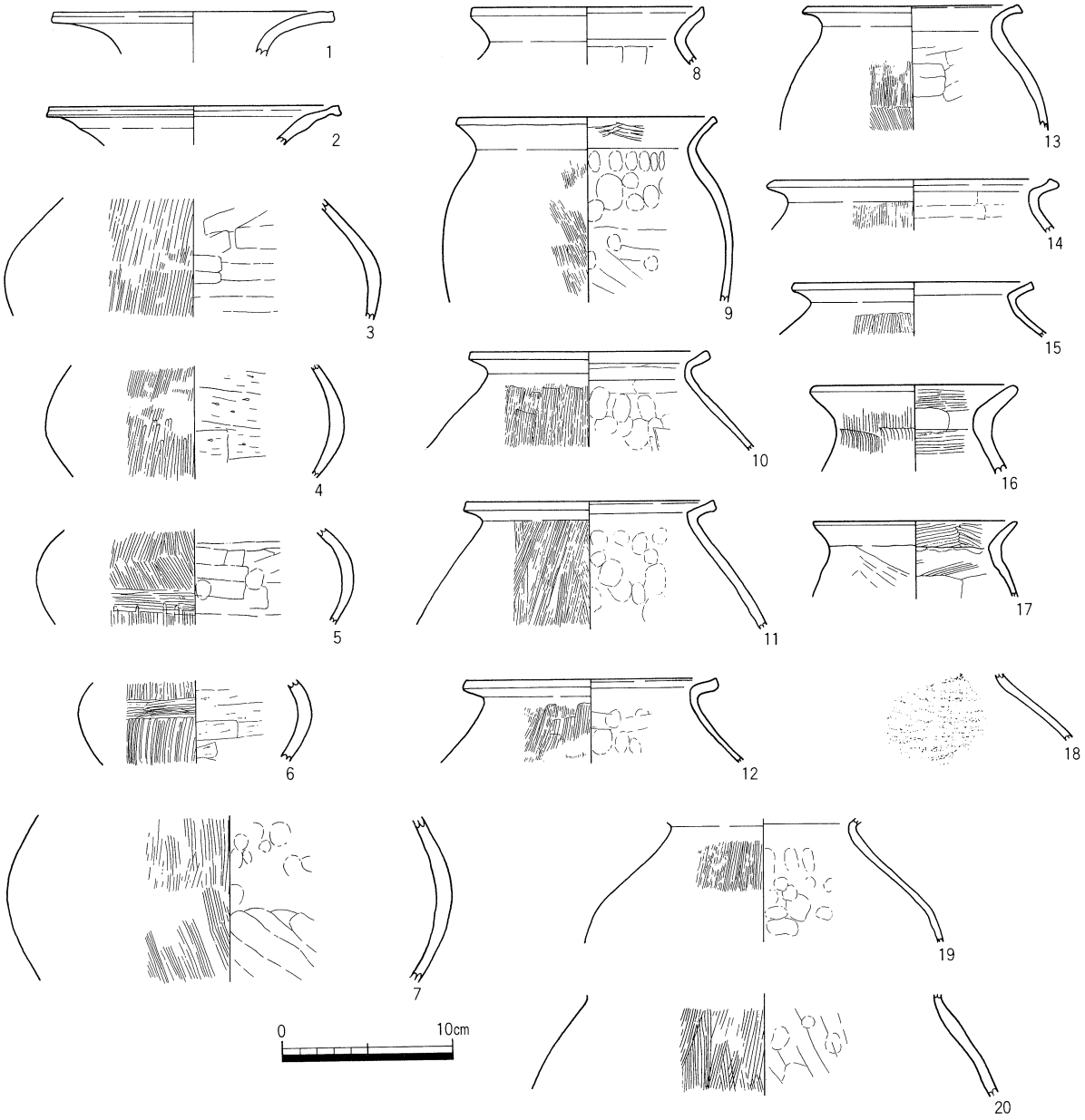
３～７は胴部中央のみ残存する。外面の調整は，全面ヘラミガキのもの（３，６），全面刷毛目のもの（７），上半が刷毛目で下半がヘラミガキのもの（４，５）にわかれる。内面の調整はヘラケズリで一部に指頭圧痕が見られる。36は完形の小形壺で，内外面に輪済み痕を残す。

８～15，19，20は「く」字状口縁の甕で，10～12，14，15は特に強く屈曲する。口縁部の調整はヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面は指頭圧痕・ヘラケズリが施される。16，17は頸部が閉まり，やや厚い器壁である。16の外面と口縁部内面は刷毛目，胴部内面は細かいヘラナデが施される。17の口縁部内面はヘラミガキが施される。21～33は平底の底部である。21，27の胴部外面の調整はタタキ目と刷毛目が施され，22，23，32は刷毛目，26，31はヘラケズリが施される。内面はヘラケズリあるいはヘラナデが施される。

34，35は杯部のみであり，口縁部と体部の境に明瞭な稜を持ち，口縁部は外反気味に広がり数状の擬凹線を巡らす。口縁部はヨコナデ，体部外面はヘラケズリ，内面は丁寧なヘラミガキが施される。

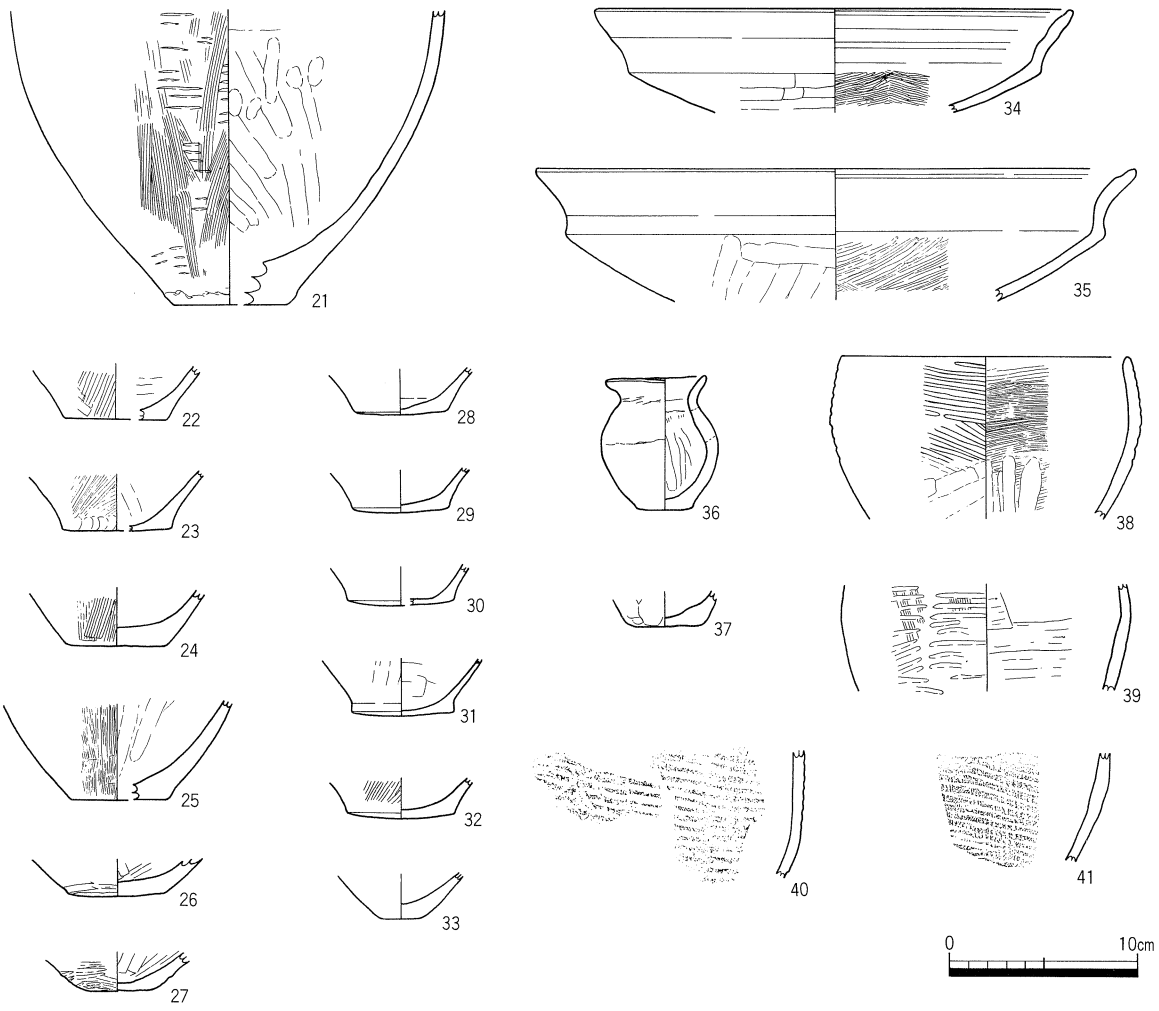
37は外面に指頭圧痕を明瞭に残す。

38～41は胴部外面に深い平行タタキ目を施す製塩土器である。38はブランデーグラスのように内湾する胴部で，口縁部はヨコナデ，胴部上半はタタキ目，下半はヘラケズリ，内面には刷毛目が施される。39は刷毛目の後にタタキ目，40，41はタタキ目が施され，内面はヘラケズリである。



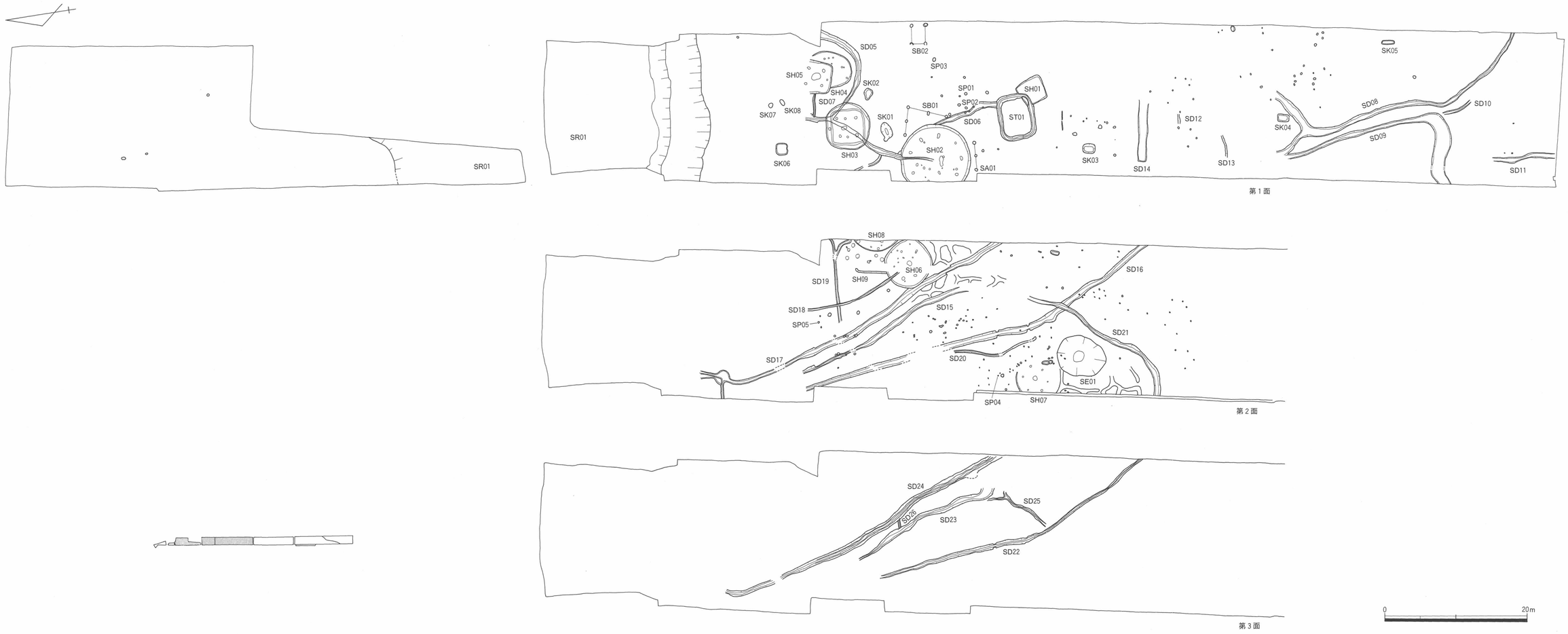
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器　壺	16.4		(2.6)	回転ナデ。口縁端部に若干の凹線	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y6/2	微砂
2	〃	17.0		(2.3)	回転ナデ。口縁端部若干拡張	灰白N7/		微～細砂
3	弥生土器　壺			(7.0)	外面上半ヘラミガキ後に刷毛目、下半ヘラミガキ。内外面黒斑	灰黄2.5Y7/2	黒褐2.5Y3/1	石英、長石、角閃石
4	〃			(6.0)	外面上半刷毛目後にナデ、下半ヘラミガキ。内面ヘラ削り	黄橙10YR6/4	褐灰10YR4/1	〃
5	〃			(5.6)	外面上半刷毛目、下半ヘラミガキ。内面ヘラ削り。外面黒斑	鈍褐7.5YR6/3		〃
6	〃			(4.8)	外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り	赤褐5YR4/3	黄褐5YR5/3	石英、長石
7	〃			(9.7)	外面刷毛目後にナデ。内面指頭圧痕、ヘラ削り	黄褐10YR6/3	赤褐10YR5/4	〃
8	弥生土器　甕	13.6		(3.4)	口唇部若干つまみ上げ。ヨコナデ。外面黒斑	浅黄橙10YR8/3	灰白10YR8/2	〃
9	〃	15.0		(10.8)	外面細かい刷毛目。内面指頭圧痕後にヘラナデ	鈍橙5YR7/4	明褐7.5YR7/1	石英、長石、角閃石
10	〃	14.0		(5.8)	口縁ヨコナデ。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕後にヘラ削り	鈍黄褐10YR5/3		〃
11	〃	14.6		(7.5)	口縁ヨコナデ。外面刷毛目。内面指頭圧痕。外面黒斑	鈍褐7.5YR5/4	橙7.5YR6/6	〃
12	〃	14.8		(4.9)	口唇部上方に拡張。外面刷毛目。内面指頭圧痕	鈍橙7.5YR6/4		長石、細砂少量
13	〃	12.4		(7.3)	口唇部若干拡張。外面刷毛目。内面ヘラ削り	明赤褐5YR5/6		石英、長石、角閃石
14	〃	16.2		(3.1)	口唇部若干拡張。ヨコナデ。外面刷毛目	鈍黄褐10YR5/3		〃
15	〃	14.2		(3.0)	口縁部ヨコナデ。外面刷毛目	明褐7.5YR5/6		微～細砂
16	〃	12.2		(5.0)	口縁外面ヨコナデ。胴部外面刷毛目。内面刷毛目、ヘラナデ	灰白2.5Y8/2		微砂
17	〃	12.0		(4.5)	胴部外面ヘラ削り。内面ヘラミガキ、ヘラ削り	鈍橙7.5YR7/3	褐灰7.5YR4/1	石英、長石
18	〃			(4.0)	外面ラセン状タタキ	灰白2.5Y8/2	灰黄2.5Y7/2	〃
19	〃			(7.2)	外面刷毛目、ナデ。内面指頭圧痕後にナデ	鈍黄褐10YR5/3		石英、長石、角閃石
20	〃			(6.0)	外面粗い刷毛目。内面指頭圧痕後にナデ	〃		

第8図　出土遺物(3)（S：1/4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
21	弥生土器　甕		6.0	(15.6)	外面平行タタキ目後に刷毛目。内面指頭圧痕後にヘラナデ	灰白10YR8/1	鈍黄橙10YR7/2	石英、長石
22	〃		5.4	(2.9)	外面ヘラミガキ、ヘラナデ。底面１方向からのヘラミガキ	黒5Y2/1	灰5Y4/1	〃
23	〃		5.9	(2.9)	外面ヘラミガキ。底面１方向からのヘラミガキ	黒褐7.5YR3/2	灰褐7.5YR4/2	〃
24	〃		5.4	(3.1)	外面刷毛目。底面ナデ	灰黄2.5Y7/2		〃
25	〃		5.0	(5.0)	外面刷毛目。内面ヘラ削り。外面黒斑	灰褐7.5YR4/2	灰黄褐10YR4/2	〃
26	〃		5.4	(1.5)	外面ナデ、ヘラ削り。底面、内面ヘラナデ	灰白10YR7/1		石英、長石、角閃石
27	〃		3.2	(2.1)	外面ラセン状タタキ目。内面ヘラ削り	黒2.5Y2/1	灰白2.5Y8/2	石英、長石
28	〃		5.0	(2.4)	外面ヘラナデ。黒斑	黒N1.5/	灰黄褐10YR4/2	〃
29	〃		5.2	(2.3)	外面横方向のヘラナデ。底面１方向からのヘラミガキ	暗灰黄2.5Y4/2	黄褐2.5Y5/3	〃
30	〃		5.6	(2.2)	内外面ヘラナデ	灰黄褐10YR4/2		〃
31	〃		5.5	(2.9)	外面ヘラ削り後にナデ。底面１方向からのヘラ削り後にナデ	黒褐10YR3/2	灰黄褐10YR4/2	〃
32	〃		5.6	(2.2)	外面ヘラミガキ後にナデ。底面１方向からのヘラミガキ	鈍黄褐10YR5/3		〃
33	〃		1.1	(2.4)	内外面ナデ	灰白5Y8/2	灰5Y6/1	石英、長石、角閃石
34	弥生土器　高杯	25.4		(5.5)	口縁ヨコナデ。外面ヘラ削り。内面４方向のヘラミガキ	鈍黄褐10YR5/4	鈍黄橙10YR6/3	〃
35	〃	32.0		(7.0)	口縁ヨコナデ。外面ヘラ削り。内面ヘラミガキ	鈍褐7.5YR5/4	鈍黄橙10YR6/4	〃
36	弥生土器　壺	5.5	3.0	7.1	口縁ヨコナデ。胴部外面ヘラ削り後にナデ。内面指ナデ	鈍黄褐10YR5/3		石英、長石
37	弥生土器　手づくね		4.0	(1.9)	外面指頭圧痕	灰黄2.5Y7/2	灰白2.5Y8/2	〃
38	弥生土器　製塩土器	15.0		(8.6)	外面上半明瞭なタタキ目、下半ヘラ削り。内面刷毛目	灰白10YR8/2		〃
39	〃			(5.7)	外面刷毛目後に平行タタキ目。内面ヘラ削り	褐灰10YR6/1	灰白10YR7/1	〃
40	〃			(6.7)	外面明瞭な平行タタキ目。内面ヘラ削り	暗灰黄2.5Y5/2	鈍黄橙10YR7/2	〃
41	〃			(5.8)	外面平行タタキ目。内面ヘラ削り	灰白10YR8/2	灰白2.5Y7/1	〃

第９図　出土遺物(4)（Ｓ：１／４）



第10図 B地区遺構配置図 （S：1/400）

2．B地区

A－2地区の南側に位置する調査区である。南北の全長は約215m，幅は20mを測る。南端は現有のコンクリート水路と接し，調査区北端より約73m南側には東西方向に流れる水路がある。この水路を境に北側をB－1地区，南側をB－2地区と称呼する。B－1地区の東側には工場や事務所が建ち，現地表からかなり深い所まで建物の基礎が入っているため工場の解体時に立ち会い調査のみを行った。第1章第2節で前述するが，道路工事の都合や調査区内に個人住宅があったため，B地区の調査は3回に分かれて実施された。まず，B－2地区南端から北へ103mの範囲，次にその北側78m部分，最後に北端34m部分の調査が行われた。2つの小調査区は報告書作成時に新たに設定されたものである。

B－1地区の地山は砂礫層であり，3基の小規模なピットと南端にSR01の北岸が検出された以外に遺構の検出はなく，遺物の出土も非常に希薄であった。土層の堆積は少なく，現水田と数層の薄い灰白色シルト質極細砂のみである。

B－2地区は，調査前の地形が変化に富んで，北端では水田が2段階に低くなっており，南側は平坦な水田であるが，南端近くの水田は一段高くなっている。調査の結果，北端部は旧河道で，その南側は極微地形の若干の変化を有する微高地であることが判明した。つまり，黄白色シルトの地山は南から北に緩やかに下がっており，中央部東側には帯状の凹地がある。微高地上に3面の遺構面を検出した。第1面の遺構はB地区全域に検出され，第2，3面はB－2地区中央部のみである。検出された遺構は，弥生時代の竪穴住居・墓・井戸・溝・土坑・ピット・旧河道と近世の土坑・溝である。

全体の土層は上層から現水田・灰白色シルト質極細砂・褐灰色シルト質細砂・黒灰褐色シルト質細砂であり，凹地ではさらに黒褐色シルト質細砂・黒～黒褐色シルト質粘土2層・砂層が堆積する。

(1) 第1面

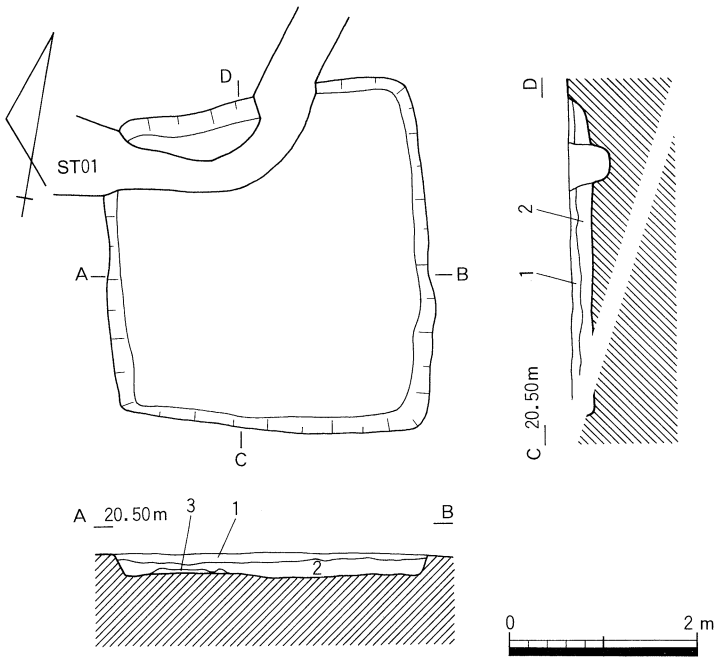
1）弥生時代

1．住居址

SH01（第11，12図）

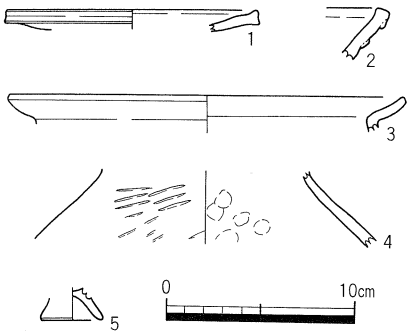
B－2地区のほぼ中央においてST01と重複して出された竪穴住居である。本住居の北西隅はST01により切られている。

平面形は東西辺3.40m，南北辺3.20～3.80mを測る不整な方形を呈する。確認面のレベルは標高20.20mである。壁の掘り込みは緩やかで，特に北壁の傾斜は緩やかである。確認面からの深さは0.20mである。床面は直床で，全体的に軟弱である。床面のレベルは東側がやや低くなっているがほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。住居址の埋土は3層に分けられるが，褐灰色シルト質細砂・明褐灰色シルト質細砂の2層が厚く堆積している。堆積状態はレンズ状の自然堆積を呈している。本遺構は規模が小さく，柱穴や炉址が検出されず，床面も軟弱であり，住居址としての確たる根拠はなく，性格不明である。しかし，一応住居址として報告しておく。



1　褐灰色シルト質細砂（7.5YR 6/1）
2　明褐灰色シルト質細砂（7.5YR 1/7 炭化材を若干含む）
3　黒褐色シルト質極細砂（7.5YR 2/3　2層を含む）

第11図　SH01平・断面図（S：1/80）



出土遺物　遺物は数点の弥生土器片のみであり，図化することができたのは５点である。全ての遺物は埋土中からの出土である。１，２は壺であり，１は口縁端部にわずかな凹線を有し，２は外面に２条の突帯文が巡る。３，４は甕である。４は外面にタタキ目が施され，内面には指頭圧痕が見られる。５は脚台のみ残存する製塩土器である。

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	13.4		(1.1)	口縁部水平に広がり、端部拡張。ヨコナデ	鈍黄橙10YR6/4		石英、長石、角閃石
2	〃			(2.7)	外面に貼付突帯２条。ヨコナデ	鈍赤褐2.5YR5/4		〃
3	弥生土器　甕	21.0		(1.6)	若干内弯する口縁部。ヨコナデ	橙2.5YR6/6		石英、長石
4	〃			(4.0)	外面タタキ目。内面指頭圧痕、刷毛目後にナデ	鈍褐7.5YR5/4	鈍赤褐5YR5/4	石英、長石、角閃石
5	弥生土器　製塩土器		3.4	(1.5)	摩滅	鈍橙7.5YR6/4	赤黒2.5YR2/1	〃

第12図　SH01出土遺物（S：1/4）

ＳＨ02（第13～20図）

Ｂ－２地区中央で検出された円形の竪穴住居である。本住居址の西端は，調査区域外にまで広がっているが，平成5年に㈶香川県埋蔵文化財調査センターが実施した多肥松林遺跡の調査区域となっており，本調査で未検出の部分は調査されている。

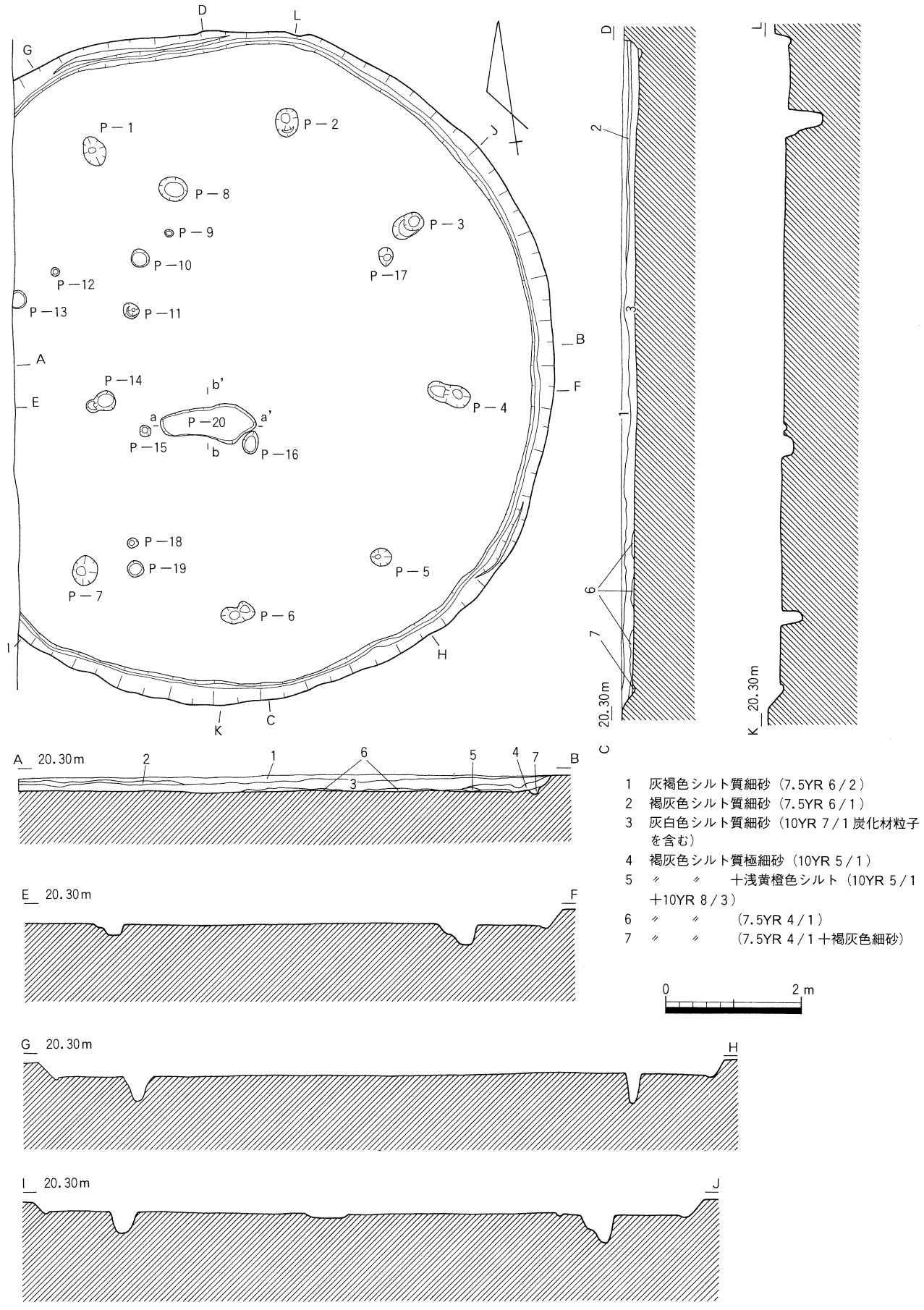
住居の平面図は直径9.90ｍを測る円形を呈し，確認面のレベルは標高20.20ｍ前後である。ＳＢ01とＳＤ05と重複し，本住居址がＳＢ01を切っている。確認面からの掘り込みはゆるやかであり，北側と南東側の一部にわずかな段を有する。床面までの深さは0.20ｍを測る。床面は直床で，ほぼ平坦である。床面の状態は，中央部が堅徴であるが，周辺部はやや軟弱である。ピットは19個検出されるが，Ｐ－１～７の７個が，主柱穴であると考えられる。その深さは0.30～0.55ｍの範囲であり，Ｐ－２～４は内側にやや浅い段を持ち，柱の横部を止める詰石が残存している。Ｐ－６は東側に浅いピットを有する。Ｐ－２～４，Ｐ－６は少なくとも１回の立て直しがあったと考えられる。

床面周縁には壁溝が全周しており，幅は0.10～0.15ｍ，深さは0.05ｍを測る浅い溝である。住居址の中央には，長楕円形のピット（Ｐ－20）が検出された。掘り込みは非常に浅いが，埋土の黒褐色シルト質極細砂は焼土粒を若干含み，炉址と考えられる。住居址の埋土は７層に細別されるが，灰褐色シルト質細砂，褐灰色シルト質細砂，灰白色シルト質細砂，褐灰色シルト質極細砂の４層に大別される。埋土は自然堆積を示すレンズ状堆積をなしている。

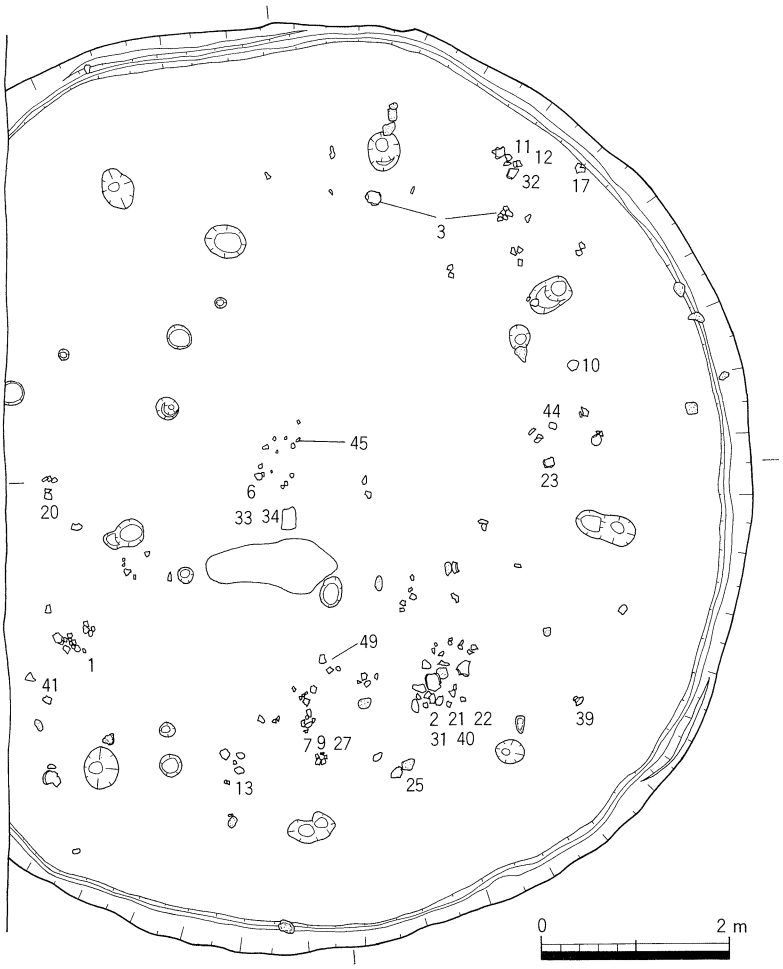
ＳＤ05は本住居址のほぼ中央より掘り込みが始まり，ゆるやかに蛇行しながら北流し，ＳＨ04，05の南側を巡る溝とＹ字形に合流し，そのまま北流する。本住居址とＳＤ05は同時期のものであり，本住居の排水溝としての性格を持つと考えられる。

出土遺物　本住居址からは多量の遺物が出土した。その出土状態は，主柱穴内側（すなわち，生活空間）の床面直上からの出土であり，特に炉址の南側の床面に多く集中している。また，Ｐ－1の中から高杯，Ｐ－5から小形甕（16）が出土した。甕（25）は住居中央より北流するＳＤ05出土の土器と接合した。石槍（45）は炉址の北側より出土した。

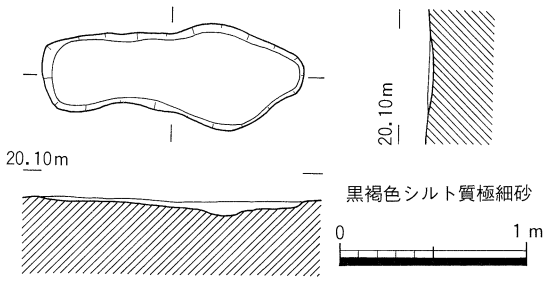
遺物は，弥生土器壺（１～12），同小形丸底壺（13～15），同甕（16～27），同鉢（28～35），同高杯（36～41），同蓋（42，43），柱状片刃石斧（44），石槍（45），石鏃（46），砥石（47），敲石（48），土錘（49），鉄鎌（50），その他の弥生土器片である。



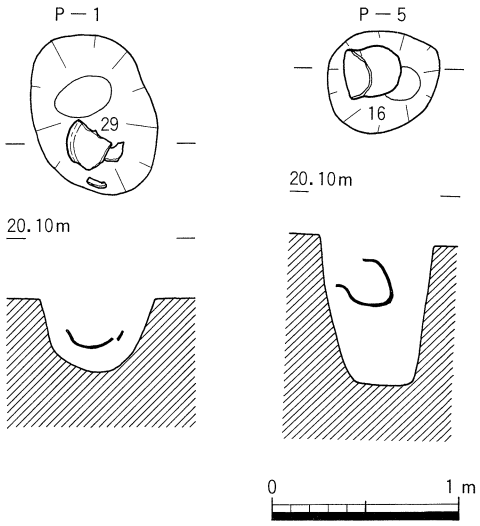
第13図　SH02平・断面図（S：1/80）



第14図　SH02出土遺物平面図（S：1/80）



第15図　SH02 P－20平・断面図（S：1/40）



第16図　SH02 P－1・P－5平・断面図（S：1/40）

1，4は複合口縁を持つ壺である。1の形態は，肩の張った胴部と「ハ」字状に内傾する頸部，複合口縁である。口縁端部は面取りされ平らである。口縁部の調整はヨコナデで内面の一部に指頭圧痕が見られる。頸部外面はヨコナデの後にナデ，内面は絞り目と指頭圧痕の後にナデが施される。胴部外面は横方向のヘラミガキと平行タタキ目が施され，タタキ目の後に一部ヘラミガキが行われる。内面はヘラケズリである。4は複合口縁部のみであり，屈曲部分の器壁が非常に厚い。土器の断面に接合痕が明瞭に観察される。内外面とも磨滅しており，調整は不明である。2，3は，やや内傾気味の頸部から口縁部が水平方向に強く屈曲する。2の口縁部は若干内湾し，頸部外面に平行線と鋸歯様の沈線による模様が描かれている。沈線の施文順は鋸歯状にジグザグに描いた後に3本の平行した線を描く。口縁部の調整はヨコナデ，頸部内面は横方向の板ナデが施される。胴部外面は粗い刷毛目と細かい刷毛目が施され，内面には指頭圧痕が見られる。3の口縁部内面に数条の凹線が巡り，ヨコナデが施される。胴部外面上半は刷毛目の後にナデ，下半はナデとヘラミガキ，内面上半は指頭圧痕，下半は横方向のヘラケズリが施される。5は直線的に広がる口縁部で，外面に刻目突帯文を2条巡らす。6，7は，内傾する頸部から口縁部が水平方向に強く屈曲する。口縁内面に数条の凹線が巡る。口縁部はヨコナデ，頸部外面は刷毛目，内面はナデが施される。8は直立する頸部から口縁部が大きく広がる。内外面とも磨滅しており調整は不明である。9は大形の壺で，外面は刷毛目，内面は指頭圧痕の後にヘラナデが施される。10は口縁部を欠損する小形の壺である。頸部はやや内傾し，胴部は肩が強く張っている。外面の調整は刷毛目で一部にナデが見られ，内面上位は指頭圧痕，それ以下は板ナデが施される。内面に2ヶ所の輪積み痕が残る。11，12は頸部以上を欠損する細頸壺で，胴部中位が強く張った算盤玉形を呈する。胴部外面上半は横方向のヘラミガキ，下半は縦方向のヘラミガキが施される。11の内面はヘラケズリが施され，輪積み痕を残す。12の内面上半はヘラオサエ，下半は指頭圧痕が施され，輪積み痕を残す。13～15は小形丸底壺であり，13の外面と口縁部内面は刷毛目，14の内面はヘラケズリが施される。

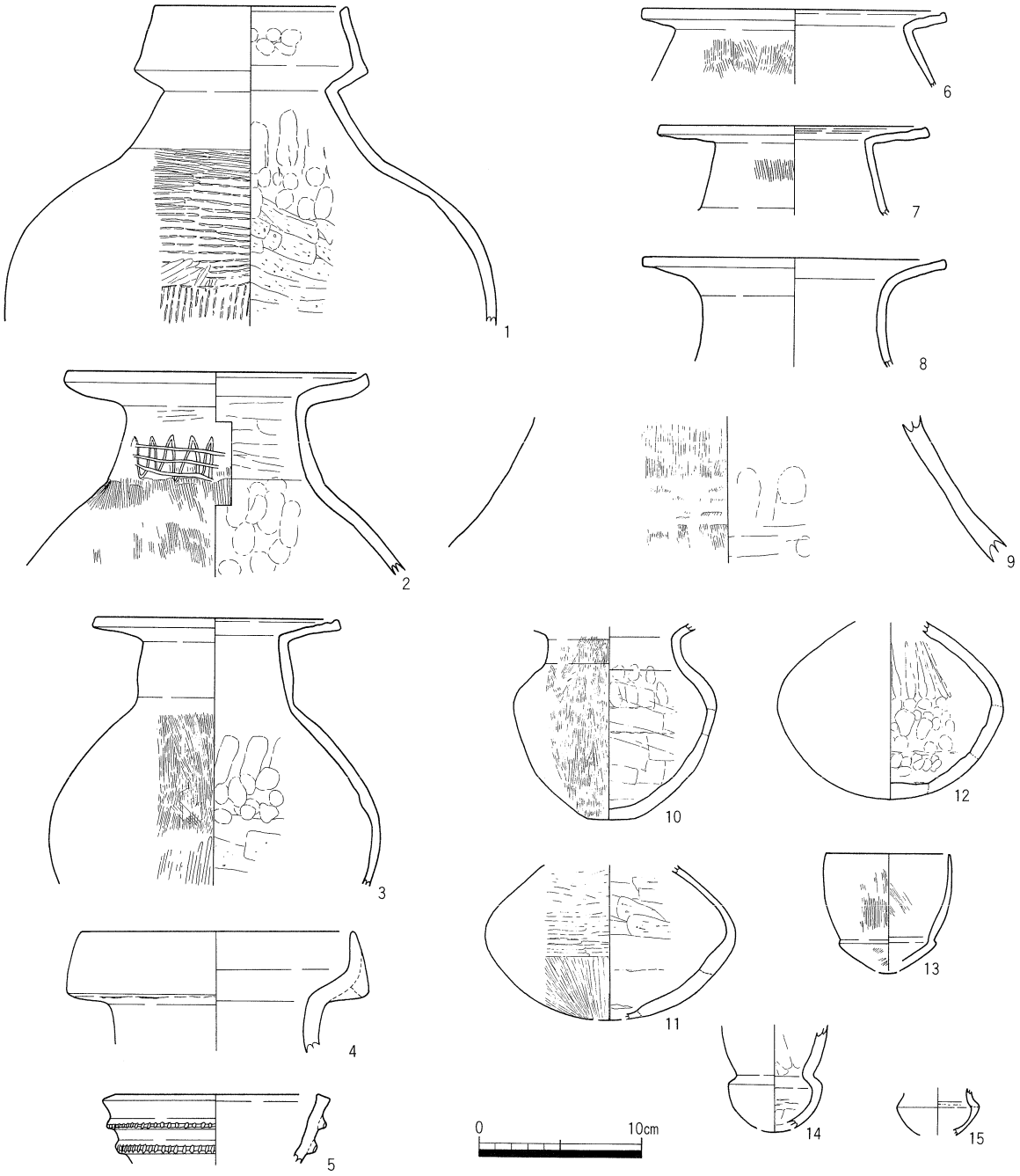
甕には，肩の張らない胴部から口縁部が短く外反するもの（16，17），胴部中位に最大径をもち口縁部が「く」字状に強く外反するもの（18～22）がある。16，17の調整は，口縁部がヨコナデ，胴部外面はナデと刷毛目，内面は指頭圧痕とヘラケズリが施される。18～22の調整は，口縁部がヨコナデ，胴部外面上半は刷毛目，下半はヘラミガキが施され，内面上半は指頭圧痕，下半はヘラケズリが施される。23，24の外面は連続ラセンタタキ目が施され，内面は指頭圧痕とヘラナデが見られる。25～27は底部で，25の外面は一部に刷毛目とヘラケズリが残存し，内面は刷毛目が施される。

28，29は，口縁部が稜を境に直線的に立ち上がる大鉢である。口縁部に数条の擬凹線が巡る。口縁部の調整はヨコナデ，体部外面はヘラケズリが施される。体部内面は28が刷毛目，29がナデである。30～35は半球形の体部から口縁部にいたる鉢であり，30，31は中形の鉢で，外面の稜を境に口縁部が若干外反気味に立ち上がる。31の底部中央は凹んでおり，体部外面は平行タタキ目が部分的に残存する。32～35は小形の鉢であり，32，33の内面は刷毛目が施される。

36～38は稜を境に外反気味に口縁部が立ち上がる高杯の杯部である。口唇部内面にわずかな段を有し，ヨコナデ調整である。39～41は高杯の脚部であり，39は小形で，外面の調整は刷毛目の後に丁寧なナデとヘラミガキ，内面は刷毛目が施される。40，41は1ないし2個の円孔を残存する。

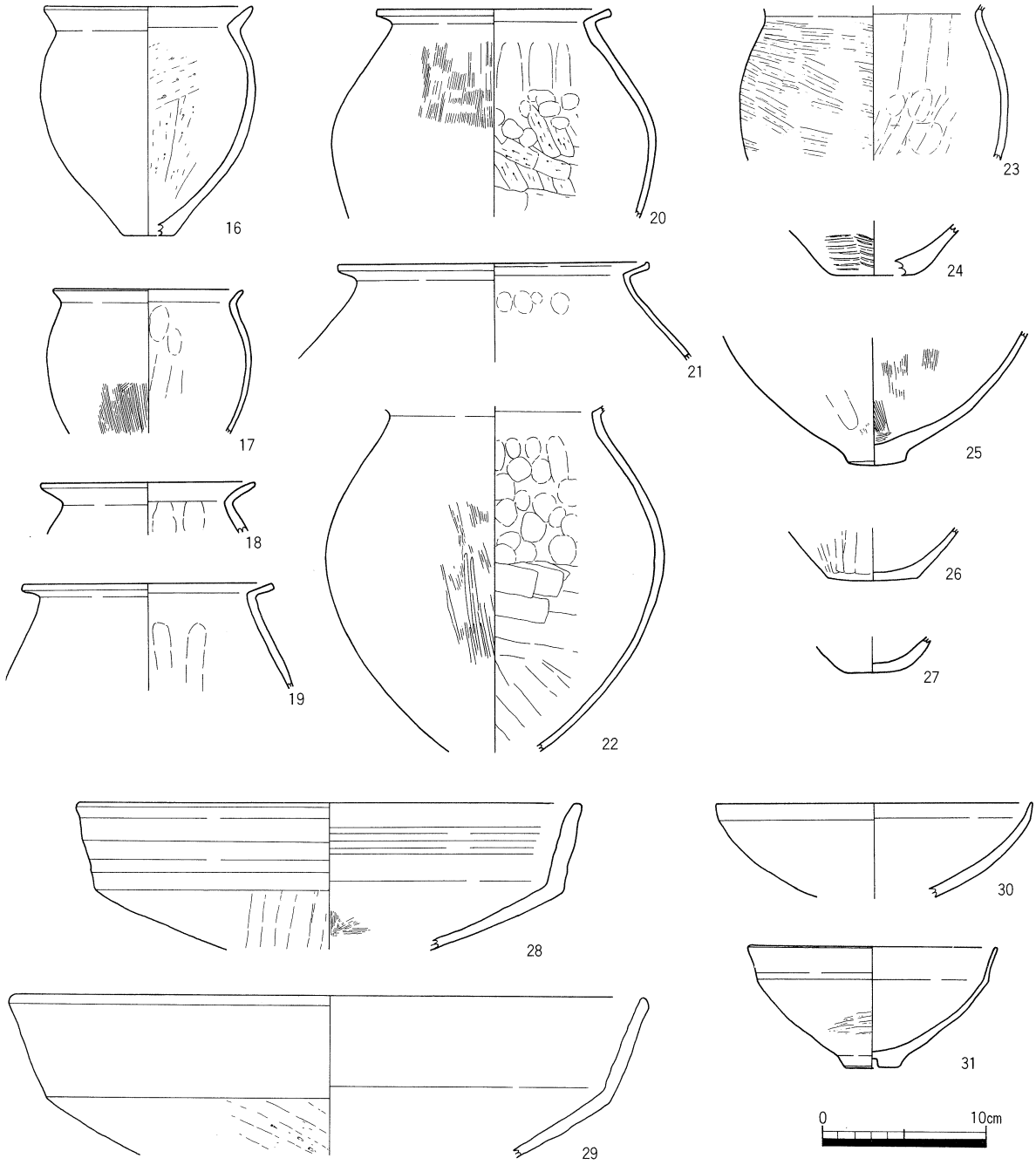
43の口縁部は水平に広がり，外面に指頭圧痕が残る。

44は基部を欠損する柱状片刃石斧で，4面を丁寧に研磨し，刃部先端には使用による磨耗が見られる。45は側縁部を両面から細かく調整し鋭利な刃部としている。46は凹基式石鏃。47は3面を使用した砥石である。49は円柱形の土錘で，中央に両面から開けられた孔がある。



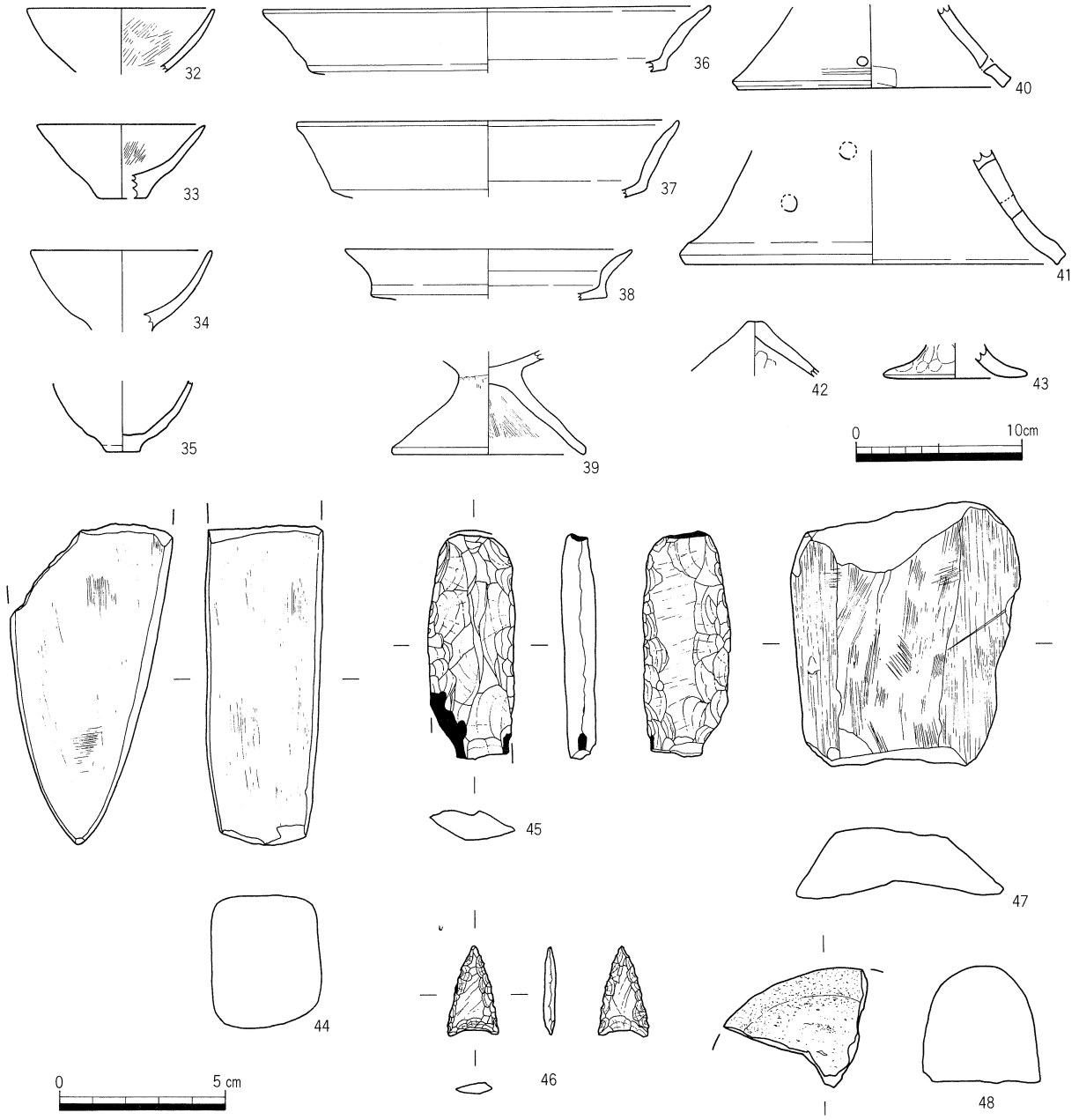
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	11.8		(19.0)	複合口縁。胴部外面タタキ目後にヘラミガキ。内面ヘラ削り	鈍橙7.5YR6/4	鈍黄橙10YR7/3	石英、長石
2	〃	18.4		(12.1)	直立する頸部外面に線刻。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕	鈍黄橙10YR7/4	鈍黄橙10YR7/2	石英、長石、角閃石
3	〃	15.0		(16.0)	頸部直立。胴部外面刷毛目、ヘラミガキ。内面指頭圧痕、ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/3	鈍橙7.5YR6/4	〃
4	〃	16.8		(7.3)	複合口縁。口縁部ヨコナデ。頸部外面ナデ、ヘラミガキ	鈍橙7.5YR7/3		〃
5	〃	12.4		(4.2)	口縁部外面に刻目突帯２条。外面ヨコナデ。内面ナデ	鈍黄褐5YR5/3	鈍黄褐5YR5/4	〃
6	〃	12.6		(4.6)	口縁部強く外反し、内面に凹線。胴部外面刷毛目、内面ナデ	鈍橙7.5YR6/4		〃
7	〃	16.2		(5.4)	口縁部水平。口縁部内面凹線。頸部外面刷毛目。内面ナデ	鈍黄橙10YR6/4	鈍褐7.5YR5/4	〃
8	〃	18.4		(6.4)	頸部からラッパ状にひろがる。摩滅	灰白2.5Y8/1	灰白5Y7/1	石英、長石多量
9	〃			(7.8)	外面刷毛目。内面指頭圧痕後にヘラナデ	明褐7.5YR5/6		微～細砂
10	〃		2.3	(11.5)	肩部張る。外面刷毛目。頸部内面ヨコナデ。胴部内面板ナデ	鈍黄橙10YR7/3	黒10YR2/1	石英、長石
11	弥生土器　細頸壺			(9.3)	外面上半横ヘラミガキ、下半縦ヘラミガキ。内面上半ヘラ削り	鈍黄橙10YR6/4	灰黄2.5Y7/2	〃　多量
12	〃			(11.6)	外面ヘラナデ。内面上半ヘラ押え、下半指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/3	灰5Y6/1	〃
13	弥生土器　小形丸底壺	7.6		7.2	口縁部内弯。胴部矮少。外面刷毛目、ナデ。口縁内面刷毛目	鈍橙7.5YR7/4	橙5YR6/6	石英、長石、角閃石
14	〃			(6.2)	口縁部内弯。外面ヘラ削り後にナデ。内面ヘラ削り、ナデ	鈍黄橙10YR6/4	鈍褐7.5YR5/4	〃
15	〃			(2.9)	外面ナデ	鈍黄橙10YR6/4		〃

第17図　SH02出土遺物(1)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
16	弥生土器　甕	12.6	3×3.5	14.0	く字口縁。口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ。内面ヘラ削り	褐7.5YR4/4	鈍黄褐10YR5/3	石英、長石
17	〃	11.4		(8.8)	く字口縁。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕、ナデ、ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/4	鈍橙7.5Y6/4	〃
18	〃	13.2		(3.1)	く字口縁。口縁部ヨコナデ。胴部内面指頭圧痕	鈍黄橙10YR6/4	橙7.5YR6/6	石英、長石、角閃石
19	〃	15.2		(6.4)	口縁部強く外反。外面摩滅。内面指頭圧痕、ナデ	黄褐10YR5/6	灰黄褐10YR5/2	微砂
20	〃	14.4		(12.7)	口縁部外反。胴部外面刷毛目、ナデ。内面指頭圧痕、ヘラ削り	鈍黄橙10YR6/4	明褐7.5YR5/6	石英、角閃石
21	〃	18.8		(6.0)	口縁部強く外反、端部上方に拡張。胴部内面指頭圧痕	明赤褐5YR5/6		〃
22	〃			(21.0)	外面上半刷毛目ナデ、下半ヘラミガキ。内面上半指頭圧痕、下半ヘラ削り	鈍橙7.5YR6/4	暗灰黄2.5Y5/2	石英、長石、角閃石
23	〃			(9.4)	外面連続ラセンタタキ目。内面ヘラナデ、指頭圧痕	鈍黄橙10YR6/3		〃
24	〃		(5.0)	(3.1)	外面連続ラセンタタキ目	鈍橙7.5YR7/4		〃
25	〃		3.5	(7.6)	厚い底部。外面ヘラ削り、刷毛目。内面刷毛目	浅黄橙7.5YR8/4	橙7.5YR7/6	微～粗砂若干
26	〃		5.5	(3.2)	平底。外面、底面ヘラナデ	灰2.5YR4/2	赤灰2.5YR5/1	石英、角閃石
27	〃		2.5	(2.2)	摩滅	灰白5Y8/1		石英、長石、角閃石
28	弥生土器　大鉢	31.0		(8.9)	口縁部擬凹線、ヨコナデ。体部外面ヘラ削り、内面刷毛目	鈍黄橙10YR6/4	鈍黄褐10YR5/4	〃
29	〃	38.6		(9.8)	口縁部擬凹線、ヨコナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	鈍黄橙10YR6/4		〃
30	弥生土器　鉢	19.4		(6.3)	外面に若干の稜。内外面摩滅、内面一部に刷毛目	橙7.5YR6/6	明褐7.5YR5/6	角閃石
31	〃	15.0	3.5	7.3	外面に稜。底面中央凹み。体部外面ヘラナデ、一部タタキ目	鈍褐7.5YR5/4	明褐灰7.5YR7/2	石英、長石、角閃石

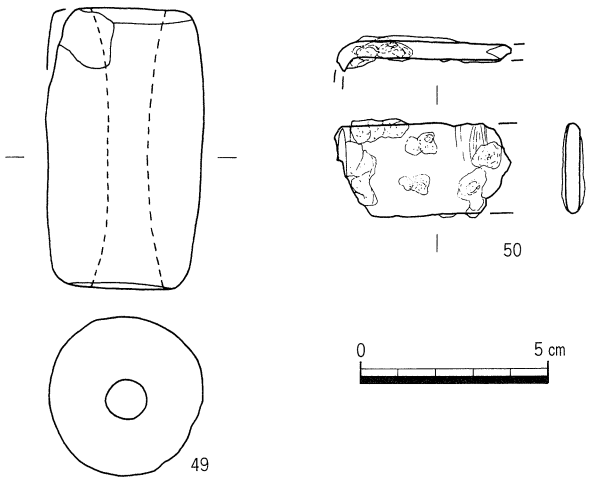
第18図　SH02出土遺物(2)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
32	弥生土器　鉢	11.4		(3.9)	半球形。外面摩滅。内面刷毛目	鈍褐7.5Y5/4	鈍黄橙10YR6/3	石英、長石、角閃石
33	〃	10.2	3.0	4.5	平底。外面ナデ。内面刷毛目	灰白2.5Y8/2	鈍黄橙10YR7/4	〃
34	〃	10.8		(4.9)	半球形。内外面ナデ	灰白10YR8/2	灰白2.5YR8/2	石英、長石
35	〃		2.0	(4.4)	平底。摩滅	浅黄橙7.5YR8/3	灰白7.5YR8/2	〃
36	弥生土器　高杯	27.2		(3.9)	外面に稜。口縁部に擬凹線。ヨコナデ	灰黄2.5Y7/2		石英、長石、角閃石
37	〃	23.2		(4.6)	〃	鈍褐7.5YR6/3		〃
38	〃	17.4		(3.0)	外面に稜。口縁部外反、ヨコナデ。体部外面ナデ	鈍黄褐10YR5/3		〃
39	〃		11.9	(6.2)	外面刷毛目後にナデ、ヘラミガキ。脚内面刷毛目	明赤褐5YR5/6		〃
40	〃		16.0	(5.5)	外面ヘラナデ、刷毛目。内面ヘラ削り。円孔１個	暗褐10YR3/3	明褐7.5YR5/6	石英、長石
41	〃		22.4	(6.9)	摩滅。円孔２段にあり２個のみ残存	鈍橙7.5YR6/4		石英、長石、角閃石
42	弥生土器　蓋		0.9	(3.3)	外面摩滅。内面ヘラナデ	暗オリーブ灰	2.5GY4/1	石英、長石
43	〃		8.8	(2.1)	外面指頭圧痕。内面ナデ	浅黄橙	7.5YR8/3	〃

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
44	柱状片刃石斧	9.6	3.4	4.0		結晶片岩	丁寧な研磨。刃部先端部は使用による摩耗
45	石槍	6.7	2.6	0.8	22.6	サヌカイト	側縁部は両面から調整し、刃部とする
46	石鏃	2.6	1.2	0.3	1.1	サヌカイト	凹基式。断面六角形。縁辺部は両面から調整
47	砥石	7.3	5.3	1.7		結晶片岩	両端、１側面を欠損。３面に多数の擦痕
48	敲石	4.0	3.5	3.5		砂岩	１／４のみ残存

第19図　SH02出土遺物(3)（S：1／4・1／2）



番号	器　種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材　質	特　徴
49	土錘	7.4	4.1		137.80	土	色調灰白7.5Y8/1、両方向からの穿孔
50	鎌	4.6	2.5	0.5		鉄	

第20図　SH02出土遺物(4)（S：1/2）

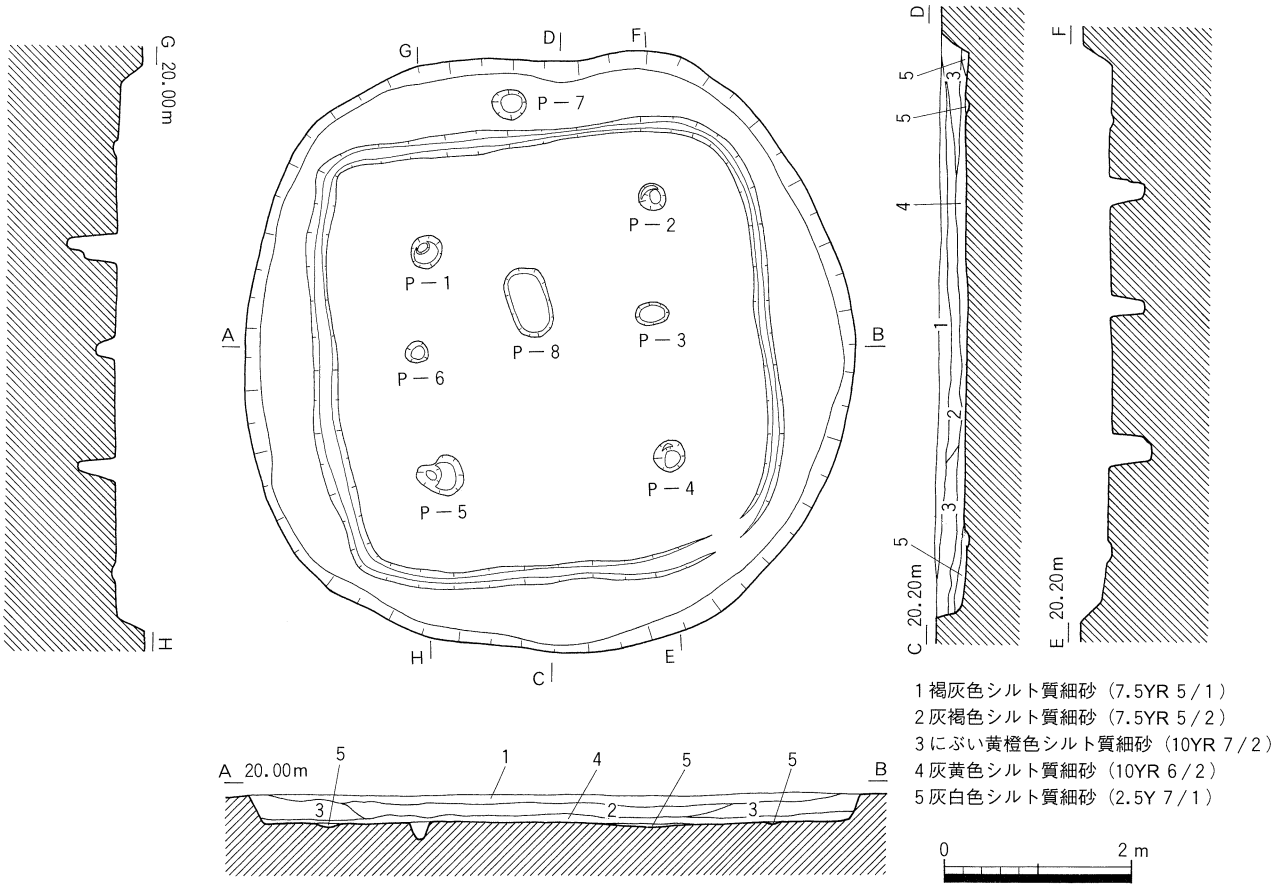
SH03（第21～25図）

B－2地区中央やや北寄りの位置においてSD05と重複して検出された竪穴住居である。SD05との新旧関係は，本遺構がSD05を切っている。

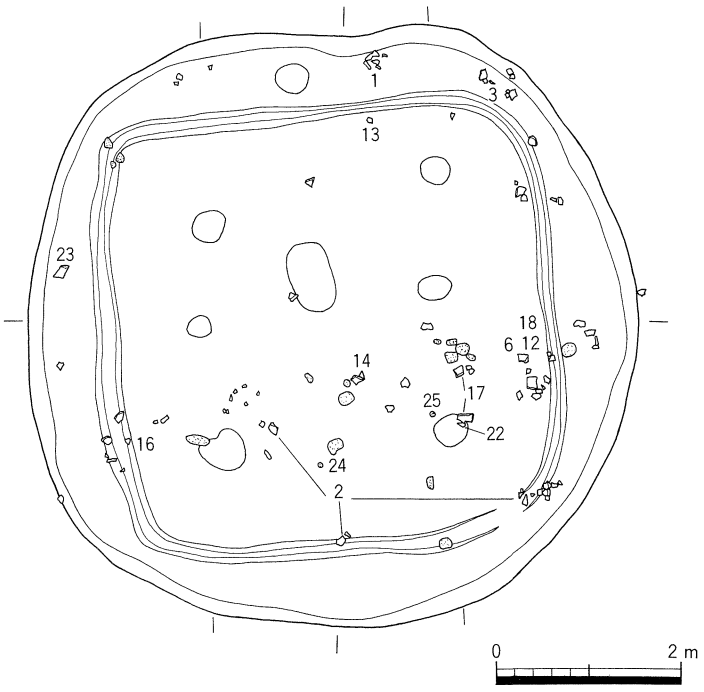
住居の平面形はやや不整な円形を呈し，その直径は東西6.45m，南北6.30mを測る。確認面のレベルは標高20.05m前後である。確認面からの掘り込みはゆるやかな傾斜であり，深さは0.30m前後である。床面は直床であり，中央部がわずかに凹んでいるが全体としてはほぼ平坦である。床面の状態は中央部においてやや固くなっているが，全体的に軟弱である。床面にはP－1～7の柱穴が検出されたが，P－1～6が3個づつで2列に並んでおり，その位置や規模から考えて主柱穴である。P－7は支柱穴である。柱穴は不整な円形を呈し，直径は0.20～0.35mを測る。床面からの深さは，P－1，2，4，5が0.30～0.50m，P－3，6が0.20～0.35mであり，やや浅くなっている。P－1，2，4，5は掘り込みに段を有し，1回の建て直しがあったと考えられる。P－7は径0.35m，深さ0.25mを測る。

主柱穴と壁のほぼ中間に壁溝が全周している。住居の平面形が円形に対して，壁溝は隅丸正方形に巡っている。幅は0.20m，深さ0.05mを測る。P－3と6の中間にあたる床面中央やや北寄りの位置に0.75×0.45mを測る楕円形の落ち込みが検出された。深さは0.10mであり，埋土に若干の焼土粒子と炭化材粒を含み，炉址と考えられる。住居址の埋土は，褐灰色シルト質細砂，灰褐色シルト質細砂，にぶい黄橙色シルト質細砂，灰黄色シルト質細砂，灰白色シルト質細砂の5層に細別されるが，レンズ状堆積を呈し自然堆積である。

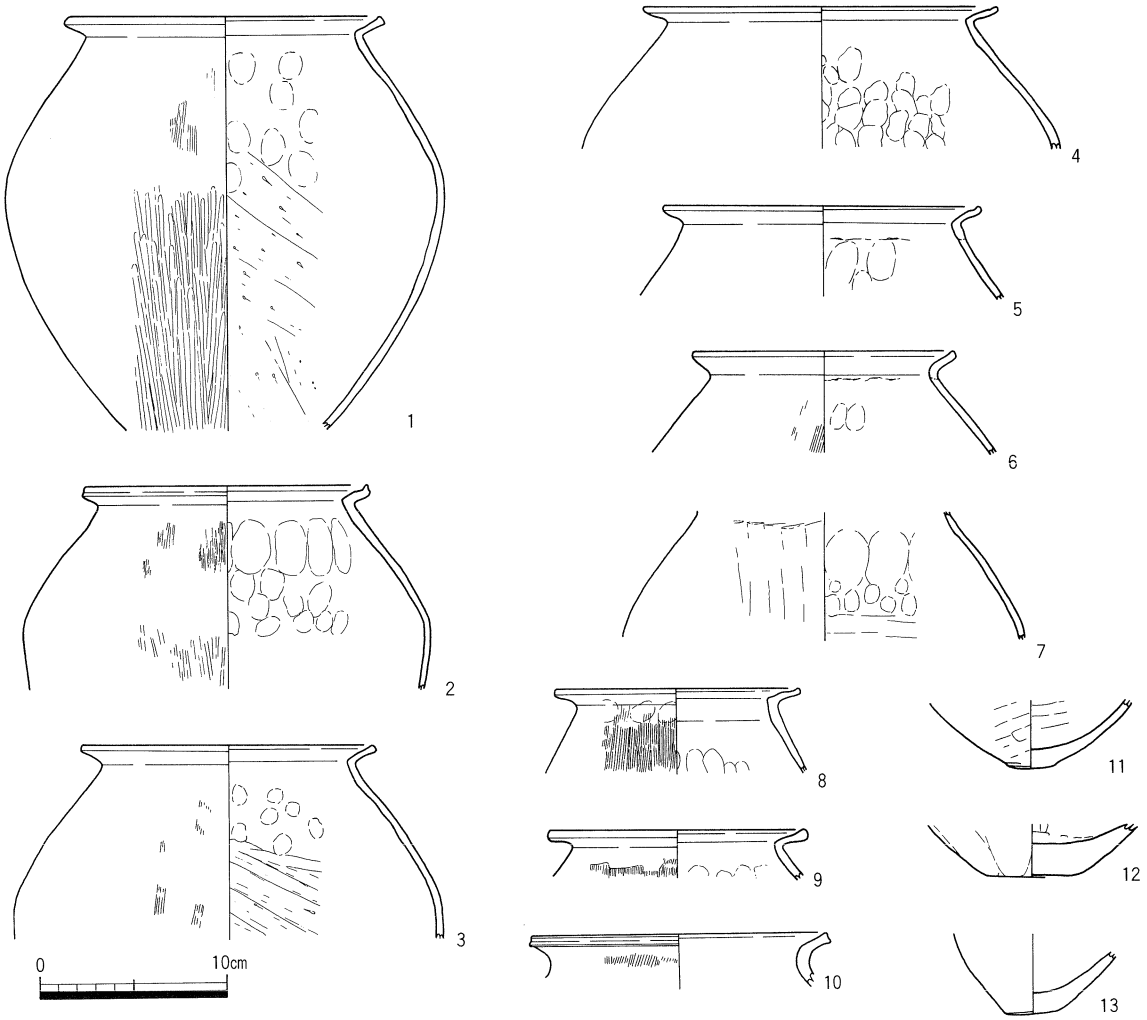
出土遺物　遺物の出土は住居全体に見られるが，住居の南半部において遺物の出土が多い。出土のレベルは，ほとんどの遺物が床面より約0.10m浮いた位置であり，住居址廃棄後の自然堆積する途中に捨てられたものと考えられる。



第21図　SH03平・断面図（S：1/80）



第22図　SH03出土遺物平面図（S：1/80）

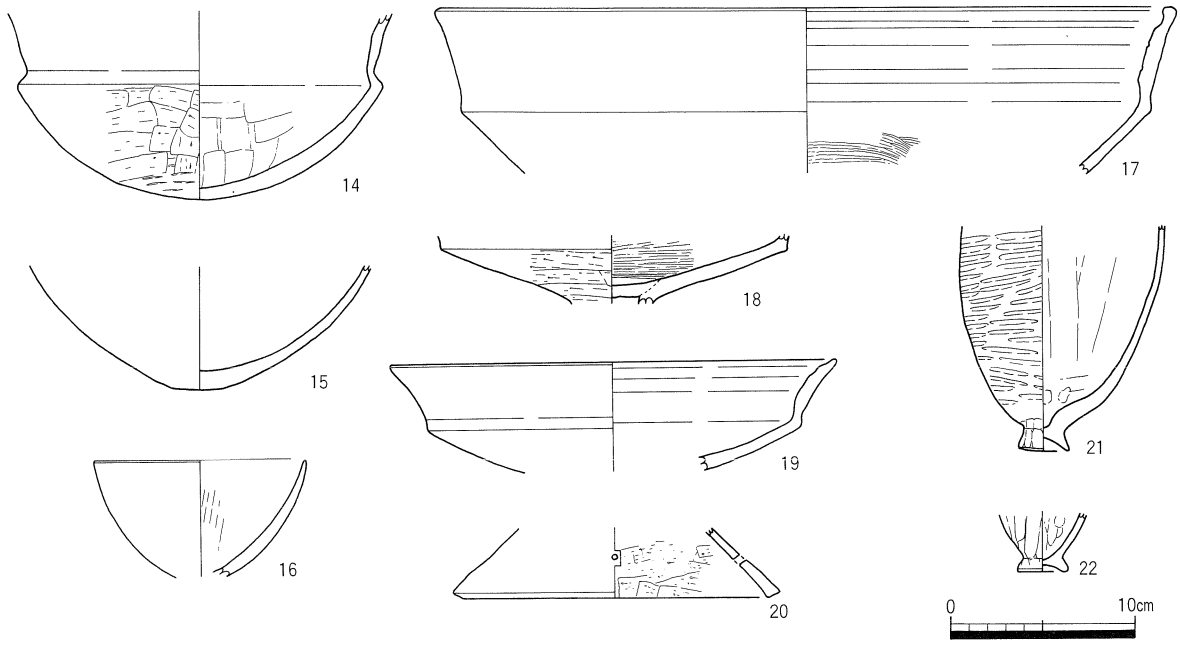


番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　甕	16.8		(21.8)	胴部外面上半刷毛目、ナデ、下半ヘラミガキ。内面指頭圧痕、ヘラ削り	鈍黄褐10YR5/4		石英、長石、角閃石
2	〃	15.6		(10.8)	口唇部若干拡張。胴部外面刷毛目、ヘラミガキ。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR6/4	鈍黄橙7.5YR6/3	〃
3	〃	16.0		(10.3)	胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕、ヘラ削り	鈍赤褐5YR4/4		〃
4	〃	19.0		(7.6)	胴部外面摩滅。内面指頭圧痕。口縁内面に擬凹線	鈍黄橙10YR6/3	鈍黄橙10YR6/4	〃
5	〃	17.0		(4.9)	口縁内面に擬凹線。胴部外面摩滅。内面指頭圧痕	橙5YR6/6	橙7.5YR6/6	〃
6	〃	14.0		(5.5)	胴部外面刷毛目後にナデ。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4	褐7.5YR4/4	〃
7	〃			(6.7)	胴部外面ヘラナデ。内面指頭圧痕、ヘラ削り	褐7.5YR4/3	鈍褐7.5YR6/3	〃
8	〃	13.0		(4.5)	胴部外面指頭圧痕、刷毛目、ナデ。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4	鈍褐7.5YR5/2	〃
9	〃	14.0		(2.5)	口唇部若干拡張。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4	鈍黄褐10YR5/4	〃
10	〃	15.8		(2.9)	口縁端部に擬凹線。胴部外面刷毛目。内面ナデ	褐灰10YR4/1	明赤褐5YR5/8	石英、長石
11	弥生土器　鉢		2.4	(3.6)	内外面ヘラナデ	灰白7.5Y8/1		〃
12	弥生土器　甕		4.7	(2.8)	平底。外面ヘラ削り後にナデ。底面未調整	灰白2.5Y8/2		石英、長石、角閃石
13	弥生土器　鉢		3.1	(4.3)	摩滅。不整形	鈍橙5YR7/4		石英、長石

第23図　SH03出土遺物(1)（S：1／4）

遺物は，弥生土器甕（1～10，12），同鉢（11，13～17），同高杯（18～20），同製塩土器（21，22），石錘（23，24），砥石（25），その他の弥生土器片が出土した。

1～9は，胴部中位に最大径を持ち口縁部が「く」字状に強く屈曲した甕である。1はほぼ均一の器壁で口唇部内面にわずかな凹線を有する。口縁部，頸部の調整はヨコナデである。胴部外面上半は刷毛目の後にナデ，下半は縦方向のヘラミガキが施され，内面上半は指頭圧痕，下半はヘラケズリが施される。胴部外面の下位には黒斑が見られる。2は頸部以上の器壁がやや厚くなり，口唇部の凹線



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
14	弥生土器　鉢			(9.9)	外面に稜。体部外面ヘラ削り、タタキ目。内面ヘラナデ	鈍黄橙10YR6/4	鈍褐7.5YR5/4	石英、長石、角閃石
15	〃		2.4	(6.5)	摩滅	浅黄橙10YR8/3	灰白2.5Y8/2	〃
16	〃	11.4		(6.2)	半球状。外面摩滅。内面ナデ、ヘラナデ	灰白10YR7/1		微～細砂
17	弥生土器　大鉢	40.0		(8.8)	口縁部内面凹線。口縁部ヨコナデ。体部内面刷毛目	鈍褐7.5YR5/4	鈍黄橙10YR6/2	石英、長石、角閃石
18	弥生土器　高杯			(3.6)	円盤充填。体部外面ヘラ削り。内面ヘラミガキ	褐7.5YR4/4	暗赤褐5YR3/3	〃
19	〃	24.0		(5.8)	外面に稜。口縁部内面に擬凹線。摩滅	明褐7.5YR5/6	明褐7.5YR5/8	〃
20	〃		17.6	(3.7)	内面ヘラ削り。孔１個	鈍褐7.5YR5/4	鈍赤褐10YR5/3	〃
21	弥生土器　製塩土器		2.7	(12.0)	胴部外面タタキ目。内面ヘラナデ、指頭圧痕。脚部ヘラ削り	橙５YR6/6	鈍褐7.5YR6/3	石英、長石
22	〃		2.6	(3.1)	外面ヘラ削り。内面指ナデ	灰褐５YR5/2	灰黄褐10YR4/2	石英、長石、角閃石

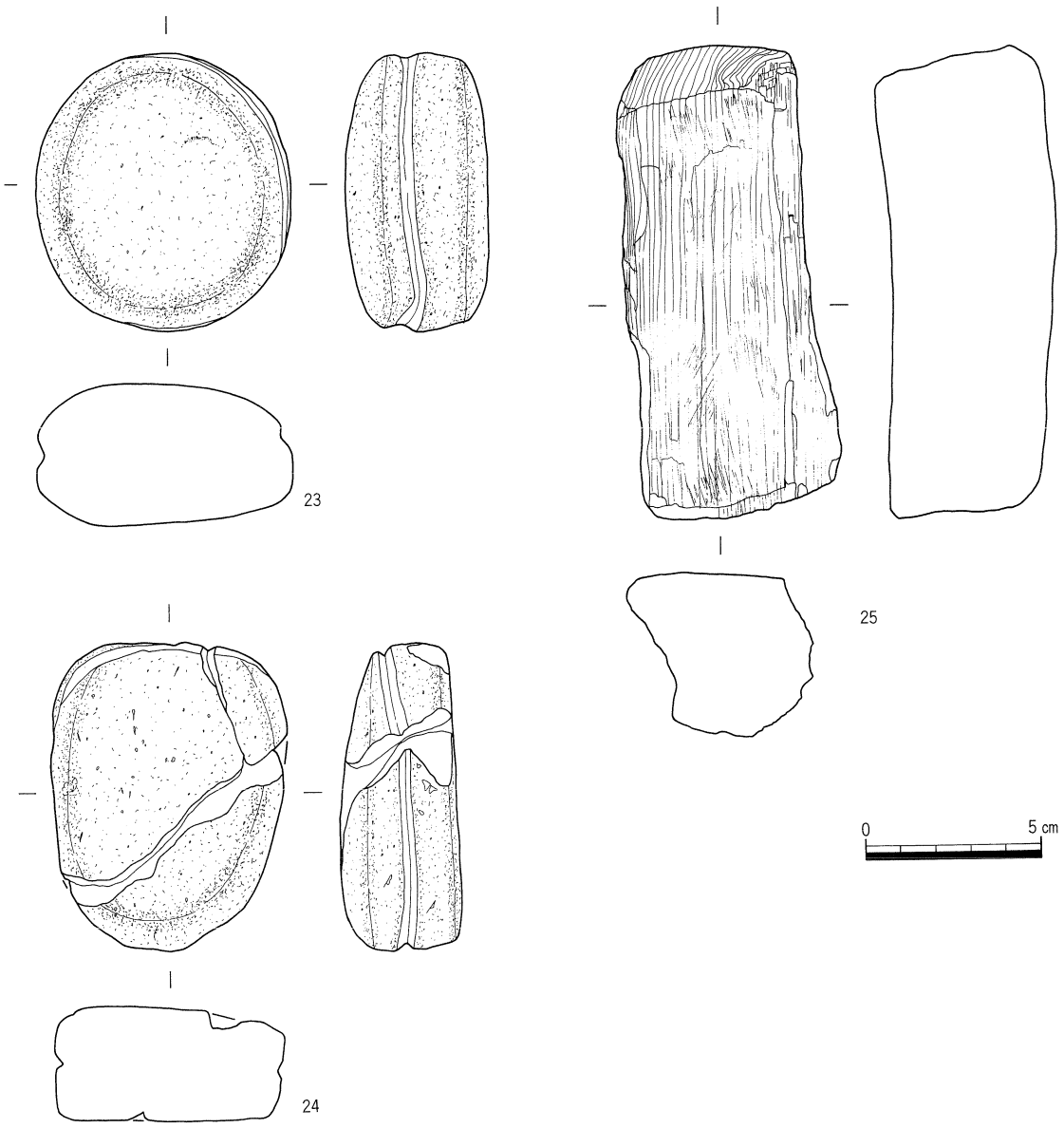
第24図　SH03出土遺物(2)（S：1／4）

が明瞭である。口縁部，頸部の調整はヨコナデ，胴部外面は磨滅しているが一部に細かい刷毛目の後にナデが残存する。胴部内面には指頭圧痕が見られる。３は頸部の器壁が厚く，胴部内面に凹凸がある。口縁部，頸部の調整はヨコナデ，胴部外面は磨滅しているが一部に刷毛目が残存する。胴部内面上位に指頭圧痕，中位以下には斜め方向のヘラケズリが施される。４の胴部内面は指頭圧痕が多量に見られる。５，６は形態，手法ともに前述の甕と同様であり，胴部内面に輪積み痕が残る。７は口縁部を欠損する。胴部外面の調整は，上端に明瞭な痕跡を残すヘラナデが縦方向に施され，内面上位には指頭圧痕，中位はヘラケズリが施される。８，９の胴部外面には施文単位のはっきりした刷毛目が施される。10は口縁端部がやや拡張し外面に擬凹線が巡る。胴部外面は明瞭な刷毛目である。

鉢には，半球形の体部と直立する口縁部のもの（14），口径40cmを測る大鉢（17），半球形の体部から口縁部に至るもの（16）がある。14の調整は，口縁部がヨコナデ，体部外面は横方向のヘラケズリと下位にタタキ目，内面はヘラナデが施される。16の内面はナデ，ヘラナデが施される。19の口縁部はヨコナデ，体部内面はヘラナデが施される。11，13，15は内外面とも磨滅している。

18は体部のみであり，外面に稜を持つ。外面の調整は横方向のヘラケズリ，内面には丁寧なヘラミガキが全面に施される。19は外反する口縁部に擬凹線が３条巡り，調整はヨコナデが施される。20は裾部にヨコナデ，内面にヘラケズリが施され，１個の円孔を残存する。

製塩土器（21，22）は小さな脚台を持つ。21の形態は胴部・脚台とも不整形を呈し，胴部外面には



番号	器　種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材　質	特　徴
23	石鐘	7.8	7.2	4.0	312.0	砂岩	ほぼ円形
24	〃	8.6	6.5	3.3	255.5	〃	不整台形
25	砥石	13.2	5.2	4.4	440.5	珪化木	1面のみ使用

第25図　SH03出土遺物(3)（S：1／2）

タタキ目が施され，内面には縦方向のナデと下位に指頭圧痕が見られる。脚台外面はヘラケズリである。22は外面ヘラケズリ，内面はナデが施される。

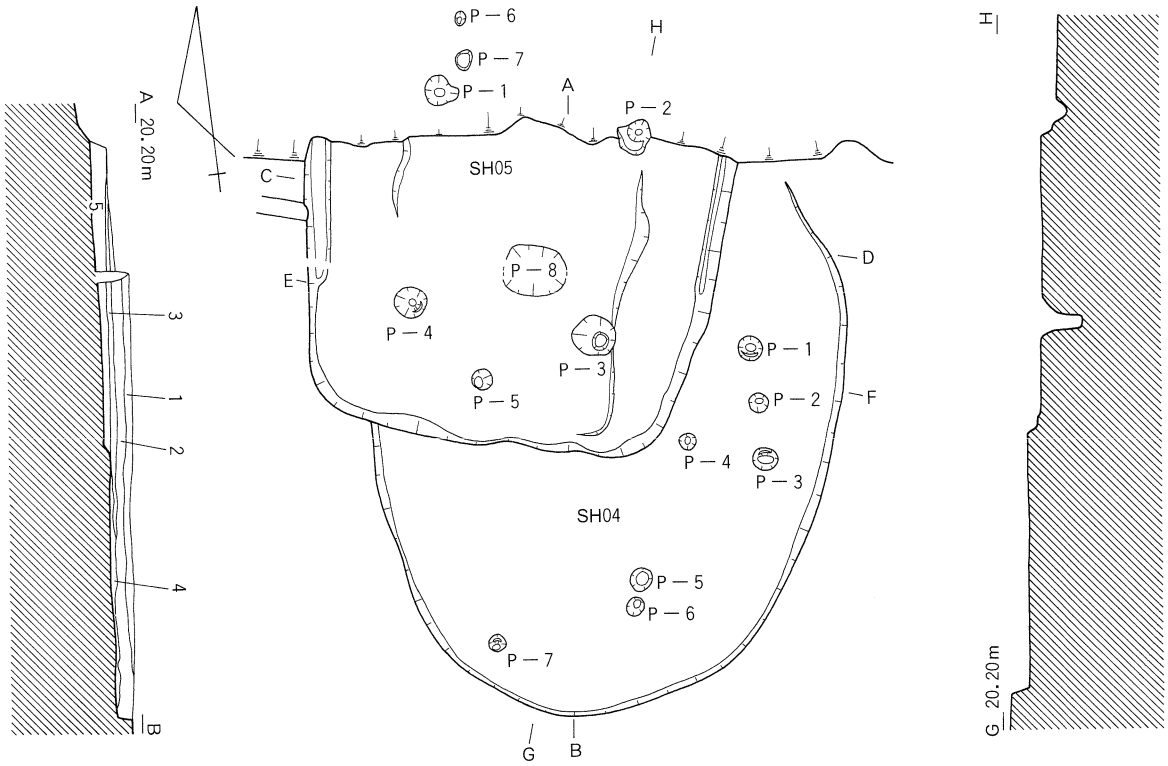
23，24は石錘である。23は円柱形を呈し，直径7.2×7.7cm，厚さ4.0cmを測る。全面を研磨しており，側面に幅0.4cm，深さ0.2cmの溝が巡る。24は割れてバラバラの状態で出土した。平面形は片隅がなだらかな不整隅丸方形をなし，7.5×6.5cmを測る。片面は平らであるが，もう一面は上端が傾斜している。全面を研磨し，側面に幅0.4cm，深さ0.25cmの溝が巡る。26は珪化木を利用した砥石であり，1面のみ使用している。

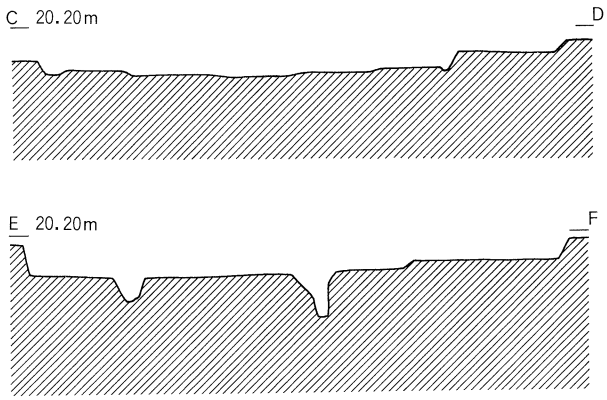
ＳＨ04（第26・27図）

Ｂ－２地区中央やや北寄りの位置でＳＨ03の東側において検出された楕円形の竪穴住居である。北側にＳＨ05と重複しており，埋土堆積の観察によればＳＨ05上部にもＳＨ04と同じ土層が見られる。ＳＨ05との新旧関係は，ＳＨ04の方が後出のものと考えられる。しかし，平面的には住居址のプランが不明瞭であったため，ＳＨ05と同時に調査を行った。

住居址の平面形は，ＳＨ05と後世の削平により北側は不明であるが，残存する部分では東西4.90ｍ×南北5.80ｍ以上を測る楕円形を呈する。確認面のレベルは標高20.10ｍである。確認面からの掘り込みはやや急傾斜であり，その深さは0.25ｍを測る。床面は直床であり，全体的に軟弱である。ＳＨ05にかかる部分は貼り床であると考えられるが，調査時では不明瞭であった。

ピットはＰ－１～７の７個検出された。平面形は直径0.20～0.30ｍを測る円形で，深さは0.20

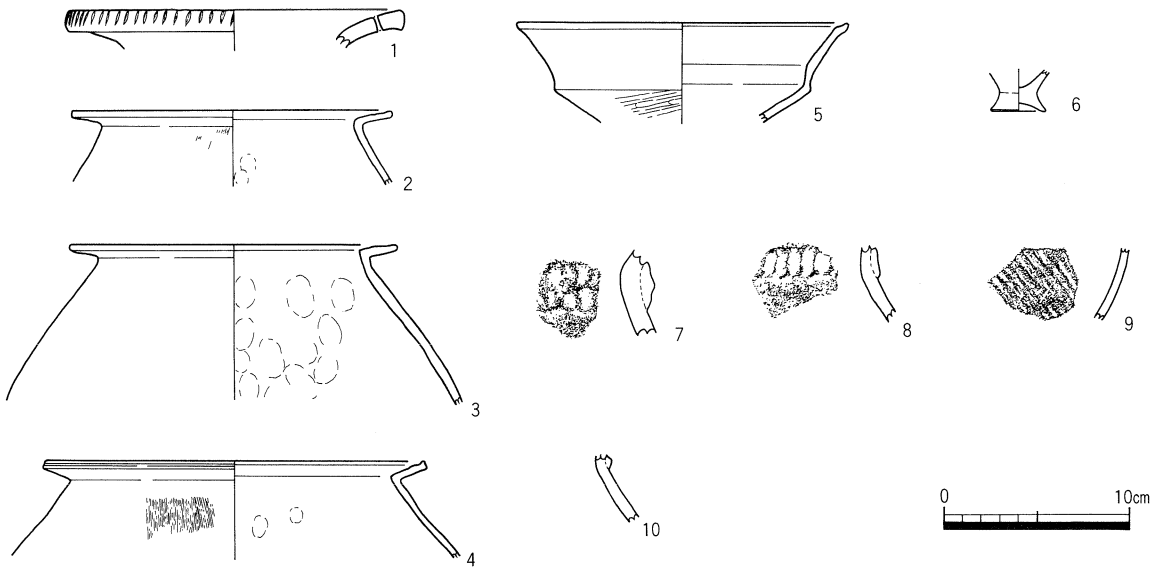




1 褐灰色シルト質細砂（10YR 6／1）
2 〃 （ 〃 1層よりやや明るい）
3 黄灰色シルト質細砂（2.5Y 6／1）
4 黒褐色シルト質極細砂（10YR 3／1）
5 褐灰色シルト質細砂（10YR 5／1）

0 2ｍ

第26図　SH04・05平・断面図（Ｓ：１/80）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	17.8		(2.0)	内外面ヨコナデ。口縁端部刻目文。孔１個	灰白10YR8/2		石英、長石
2	弥生土器　甕	17.4		(3.8)	口縁部内面凹線。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕	明褐7.5YR5/6	橙7.5YR6/6	〃
3	〃	17.8		(8.4)	口縁部内面凹線。胴部外面摩滅。内面指頭圧痕	明赤褐５YR5/6		石英、長石、角閃石
4	〃	20.8		(5.2)	口縁内面端部凹線。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4	鈍褐7.5YR5/3	〃
5	弥生土器　高杯	18.0		(2.9)	外面に稜。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ	褐10YR4/6	鈍赤褐10YR5/3	微砂
6	弥生土器　製塩土器		3.0	(2.2)	内外面摩滅	灰褐7.5YR5/2		微～細砂
7	弥生土器　壺			(4.6)	頸部外面に押圧突帯文	明赤褐５YR5/6	暗褐10YR3/3	石英、長石
8	〃			(4.0)	〃	鈍黄橙10YR6/4	鈍黄橙10YR6/3	石英、長石多量
9	弥生土器　製塩土器			(3.7)	外面タタキ目。内面ヘラ削り	褐7.5YR4/3	暗褐10YR3/3	石英、長石、角閃石
10	弥生土器　壺			(3.5)	頸部外面に貼付突帯	鈍黄橙10YR7/3	明黄褐10YR7/6	石英、長石

第27図　SH04出土遺物（S：1/4）

～0.30mである。これらのピットは不規則な位置関係を示し柱穴であるかどうかは不明である。埋土は褐灰色シルト質細砂（色調の違いにより２層に分けられる），黄灰色シルト質細砂，黒褐色シルト質極細砂の４層に細別されるが，自然堆積を示すレンズ状堆積をなしている。

出土遺物　遺物の出土は少なく，すべてが土器の小片である。出土したレベルは，すべて床面より上の埋土中である。遺物は，弥生土器壺（１，７，８，10），同甕（２～４），同高杯（５），同製塩土器（６，９），その他の弥生土器片である。

１は広口壺の口縁部であり，大きく広がる。口縁端部の外面に刻目文が1条巡り，１個の円孔が残存する。内外面ともヨコナデが施される。７，８は頸部の小片であり，外面に押圧突帯文を巡らす。内外面の調整はナデである。

２～４は，口縁部が胴部から「く」字状に強く外反する甕である。３の口縁部はほぼ水平方向に広がる。口縁部内面に１条の凹線が巡る。口縁部の調整はヨコナデ，胴部外面は磨滅しているが部分的に刷毛目が残る。内面は指頭圧痕の後にナデが施される。

５は杯部のみ残存する。体部と口縁部の境に稜を持ち，口縁部は外反して立ち上がる。口唇部内面にわずかな段がある。調整は，口縁部にヨコナデ，体部外面にヘラミガキ，内面にナデが施される。

６は脚台を有する製塩土器で，内外面とも磨滅している。９は外面に平行タタキ目を施した製塩土器のであり，内面はナデが施される。

ＳＨ05（第26・28・29図）

Ｂ－２地区中央やや北寄りの位置で，ＳＨ04と重複して検出された方形の竪穴住居である。住居の北側は後世の削平によって不明である。ＳＨ04との新旧関係は，本住居の方が古いと考えられる。

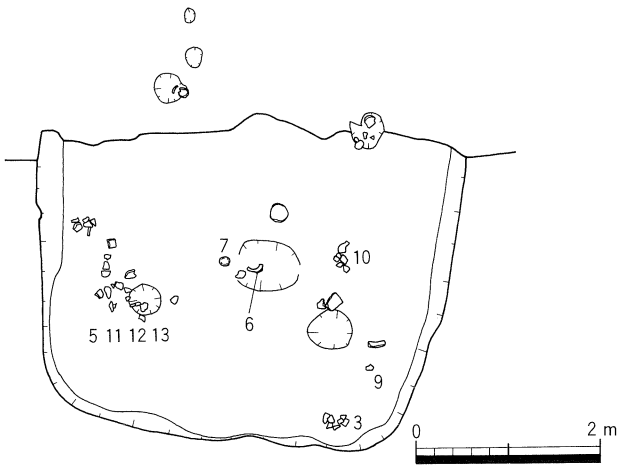
住居の平面形は長方形を呈すると考えられ，東西辺は4.55m，残存する南北辺は3.40mであるが，柱穴の位置から推定すると5.00m前後であろう。つまり，南北方向に長辺をもつ長方形の平面プランある。確認面のレベルは標高20.10mである。確認面からの掘り込みはゆるやかであり，深さは0.30m前後である。床面は直床であり，全体的に堅緻である。東壁沿いと一部の西壁沿いに幅0.70mほどのベッド状遺構が検出された。比高差は約３cmである。ピットはＰ－１～７の７個検出されるが，その位置，規模よりＰ－１～４が主柱穴，Ｐ－５は支柱穴であると考えられる。主柱穴の直径は0.30～0.50mを測り，深さは0.25mであり，段を有する。Ｐ－５は直径0.20m，深さ0.30mで，段を有する。１回の建て直しがあったと考えられる。

住居の中央部に0.90×0.70mを測る不整方形の落ち込みが検出された。深さは４cmであり，埋土中に炭化材粒を若干含んでおり，炉址である。東壁と西壁の北半に幅0.15m，深さ３cmを測る壁溝がある。住居址の埋土は黒褐色シルト質極細砂の単一層である。

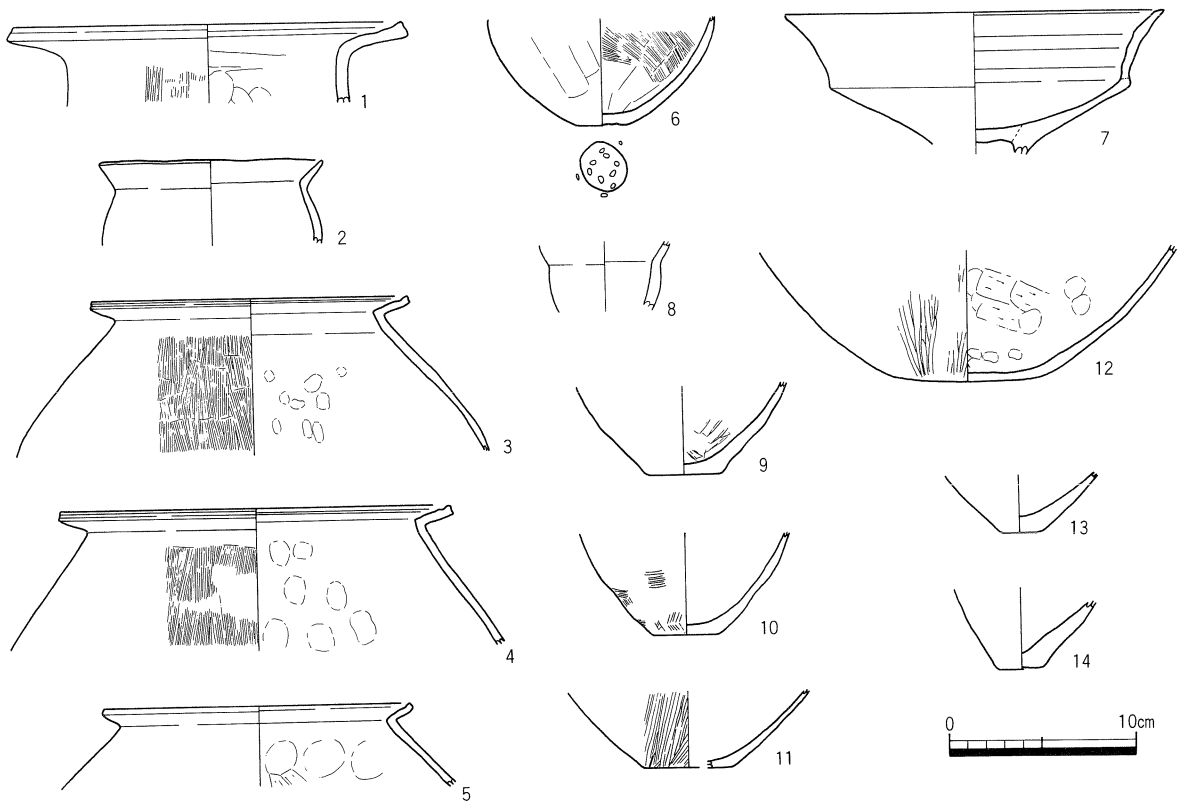
出土遺物　遺物の出土はほとんど床面直上であり，特に炉址の周囲に集中している。さらに柱穴の上面及び埋土中に土器の出土が見られる。遺物は，弥生土器壺（１），同甕（２～５，９～12），同鉢（６，13，14），同高杯（７），同小形丸底壺（８），その他の弥生土器片である。

１は直立する頸部から口縁部がほぼ水平方向に広がる壺である。口縁端部は上下に若干肥厚し，外面にわずかな凹線が巡る。口縁部の調整はヨコナデ，頸部外面は縦方向の刷毛目の後にナデが施され，内面は指頭圧痕の後にナデが施される。

２は小形の甕で，口縁部は直線的に短く外反し，やや不整形である。３，４は胴部から口縁部が「く」字状に強く屈曲する。口縁端部の外面と内面に１条づつの凹線が巡る。調整は，口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦方向の細かい刷毛目が施され，内面には指頭圧痕が見られる。５は「く」字状口縁が強く屈曲する。口縁端部の内面にわずかな凹線が１条巡る。口縁部の調整はヨコナデ，胴部内面は指頭圧痕の後にヘラケズリが施される。９～12は底部のみ残存し，全て平底である。９は底部からやや急傾斜で立ち上がり，外面の調整はナデ，内面はヘラケズリ様の鋭いヘラナデが放射状に施され



第28図　SH05出土遺物平面図（Ｓ：１/80）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	20.8		(4.2)	頸部直立。口縁部ほぼ水平。頸部外面刷毛目。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4		石英、長石、角閃石
2	弥生土器　甕	12.0		(4.5)	く字口縁。外面ナデ、内面指ナデ	鈍黄橙10YR7/4	淡黄2.5Y8/3	〃
3	〃	17.2		(8.2)	口縁部ヨコナデ。胴部外面細かい刷毛目。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4		〃
4	〃	21.0		(7.5)	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、一部ナデ。内面指頭圧痕	褐7.5YR4/4		石英、長石
5	〃	16.4		(4.3)	口縁部ヨコナデ。胴部内面指頭圧痕	鈍黄褐10YR6/4	明褐7.5YR5/6	石英、長石、角閃石
6	弥生土器　鉢		2.6	(5.7)	底面に円形の凹み11個。外面ナデ。内面刷毛目、板ナデ	鈍橙５YR6/4	灰白10YR8/1	〃
7	弥生土器　高杯	20.4		(7.6)	円盤充塡。外面に稜。口縁部擬凹線。摩滅	橙５YR6/6		〃
8	弥生土器　小形丸底壺			(3.7)	内外面ナデ	鈍黄橙10YR7/4	淡黄2.5Y8/3	微砂若干
9	弥生土器　甕		4.2	(4.8)	平底。外面ナデ。内面鋭いヘラナデ	鈍褐7.5YR5/4	鈍黄橙10YR7/3	石英、長石
10	〃		3.4	(5.4)	平底。外面ナデ、刷毛目。内面ナデ。外面黒斑	橙５YR6/6	褐灰10YR4/1	細砂多量
11	〃		4.8	(4.1)	平底。外面、底面ヘラミガキ。内面ナデ	暗褐7.5YR3/3	鈍赤褐５YR5/4	石英、長石、角閃石
12	〃		8.0	(7.0)	平底。外面ヘラミガキ。内面指頭圧痕、ヘラ削り	褐10YR4/6	鈍黄橙10YR6/3	〃
13	弥生土器　鉢		2.2	(3.1)	内外面ナデ	淡黄2.5Y8/3	灰白10YR8/2	石英、長石
14	〃		2.4	(4.4)	外面摩滅。内面ナデ	淡黄2.5Y8/3	灰白2.5YR8/2	〃

第29図　SH05出土遺物（S：1/4）

る。10も平底から急傾斜で立ち上がり，胴部には部分的に凹凸がある。外面の調整はナデと部分的の刷毛目，内面はナデが施される。底部を含めた外面に黒斑が認められる。11は平底から緩やかな傾斜で立ち上がる。胴部外面と底部外面はヘラミガキが施され，胴部内面はナデである。12は大形であり，緩やかに立ち上がる。胴部外面の調整はヘラミガキ，内面は指頭圧痕の後にヘラケズリが施され，底部内面には指頭圧痕が残存する。

鉢には，胴部が内湾するもの（6）と直線的なもの（13，14）がある。6の調整は，外面ナデ，内面に細かい刷毛目と板ナデが施される。底部外面に籾痕大の小さな凹みが11個見られる。13，14はナデが施される。

7は高杯の杯部のみであり，外面の稜を境に口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部に数条の擬凹線が巡る。体部の内外面は磨滅が著しいが外面の一部にヘラケズリが残存する。

8は小形丸底壺であり，底部と口縁部を欠損する。内外面ともナデが施される。

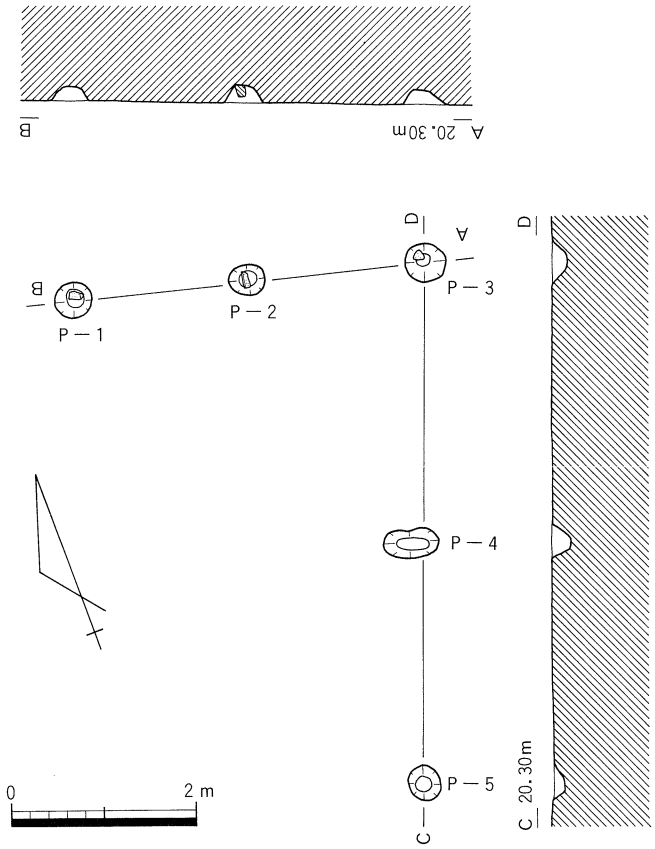
２．掘立柱建物

ＳＢ01（第30図）

Ｂ－２地区のＳＨ02の東側において検出された２間以上×２間以上の掘立柱建物である。ＳＨ02と重複するために北側と東側の柱穴のみ検出され，全体の規模は不明である。

現存する規模は，北側で4.20ｍを測り，芯芯間の距離は1.80ｍである。東側は5.90ｍを測り，芯芯距離は2.50～3.00ｍである。Ｐ－４を除いた柱穴の平面形は円形を呈し，直径0.30～0.40ｍを測る。Ｐ－４は0.30×0.60ｍの楕円形である。深さはすべて0.20ｍである。確認面のレベルは標高20.10ｍである。掘り込みは非常にゆるやかであり，底面の径は非常に小さい。Ｐ－１～３には柱の横部を止める詰石が１個づつ残存している。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　弥生土器片が数点である。



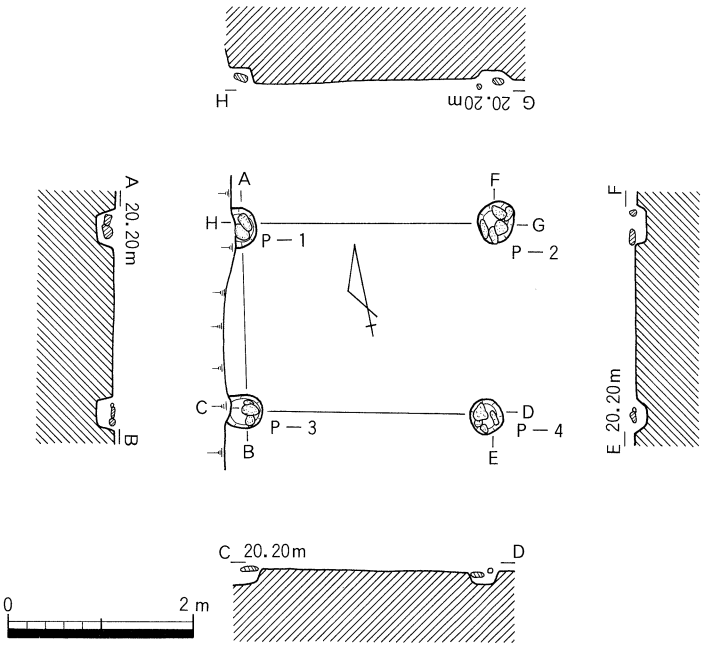
第30図　SB01平・断面図（Ｓ：１/80）

ＳＢ02（第31図）

Ｂ－２地区中央やや北寄り位置で単独に検出された掘立柱建物である。西側には試掘調査時のトレンチがあり，Ｐ－１，４の西半は消失している。一方，東側は調査区域外となっている。このためにＰ－１～４の柱穴が検出されたにすぎない。

掘立柱建物は東西方向に建てられており，桁方向は１間以上，梁行は１間である。柱芯芯間の距離は，桁行2.75ｍ，梁行2.00ｍを測る。確認面のレベルは標高20.10ｍであるが，本来はもっと上方から掘り込まれていたと思われる。柱穴の平面形は円形を呈し，その直径は0.30～0.40ｍを測り，深さは0.20ｍである。掘り込みの傾斜は急である。すべての柱穴に柱の横部を止める詰石が残存している。その数はＰ－１が２個，Ｐ－２が５個，Ｐ－３が５個，Ｐ－４が３個であり，確認面と同レベルの位置である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

遺物の出土はなかった。

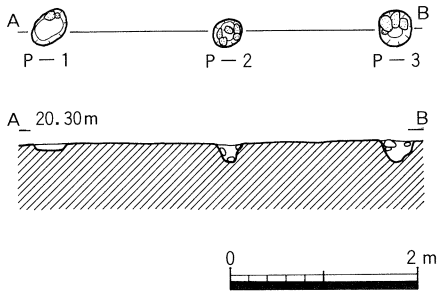


第31図　SB02平・断面図（Ｓ：１/80）

ＳＡ01（第32図）

Ｂ－２地区のＳＨ02の南側において検出されたピット列である。Ｐ－１～３の柱穴が東西方向に並んでいる。検出された部分は2間で，長さは4.07ｍであり，芯芯間の距離はＰ－１，２間が1.95ｍ，Ｐ－２，３間が1.80ｍを測る。柱穴の平面形は直径0.35ｍを測る円形であり，深さはＰ－１が６㎝，Ｐ－２，３は0.20ｍである。すべての柱穴に横の横部を止める詰石が２～６個残存する。埋土は褐灰色シルト質極細砂のみである。

遺物の出土はなかった。

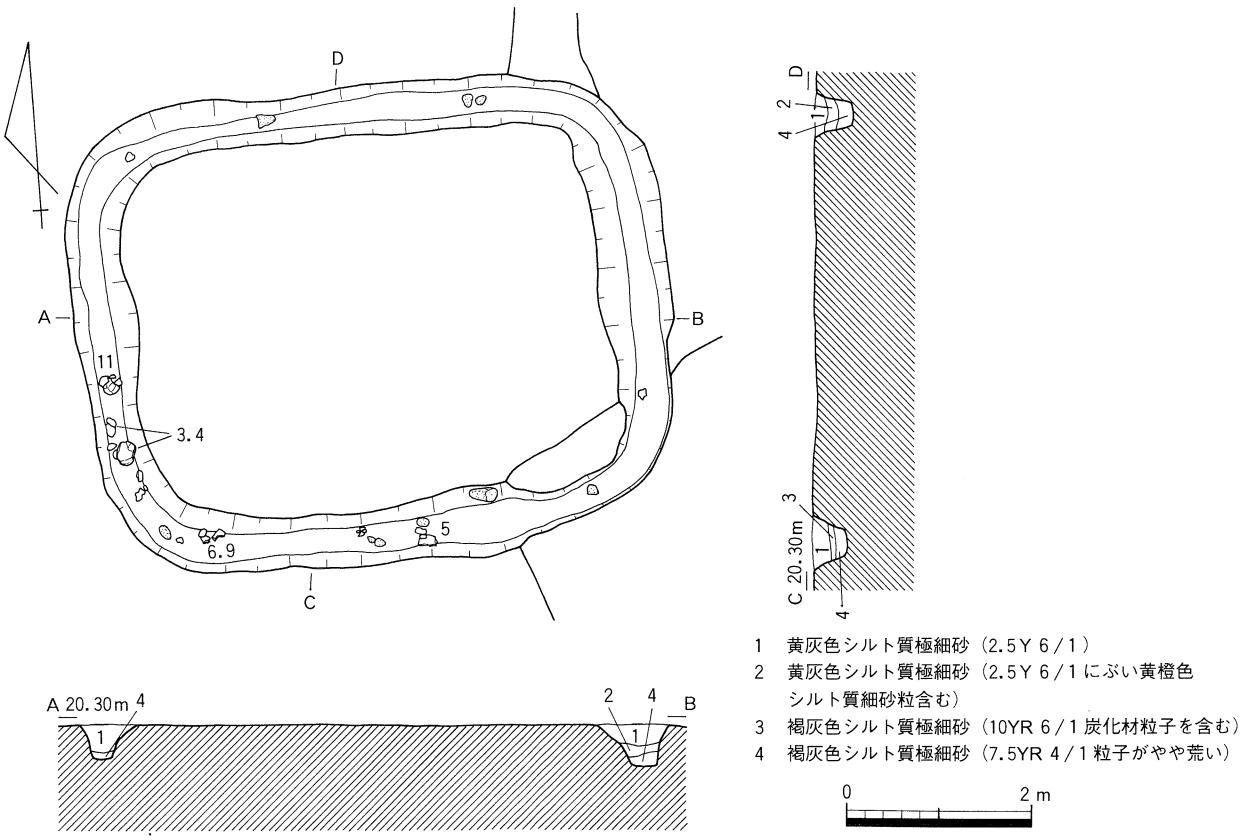


第32図　SA01平・断面図（Ｓ：１/80）

３．墓

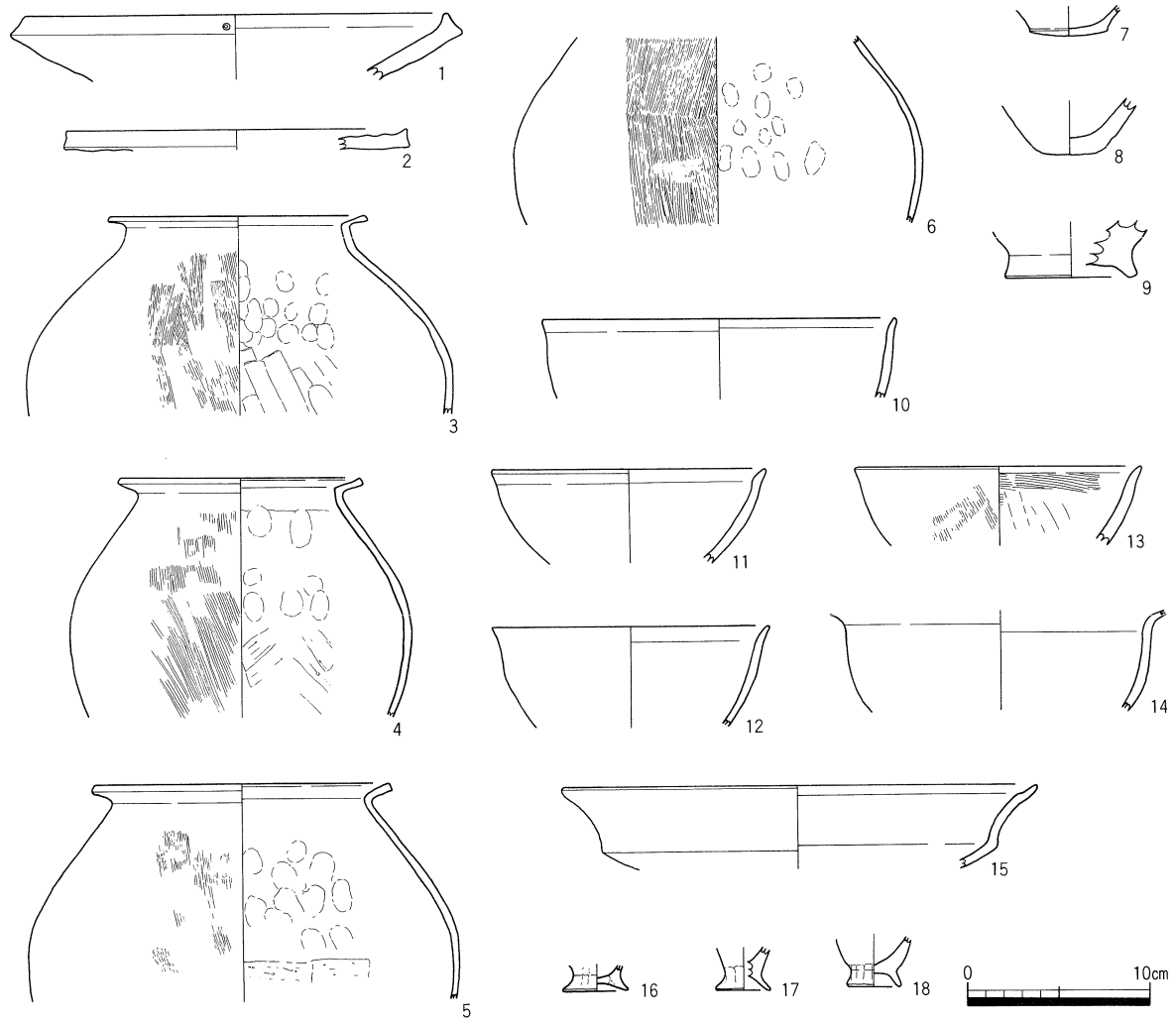
ＳＴ01（第33・34図）

Ｂ－２地区ほぼ中央においてＳＨ01，ＳＤ06と重複して検出された方形周溝墓である。新旧関係は，本遺構がＳＨ01，ＳＨ06を切っている。確認面のレベルは標高20.20ｍである。方形周溝墓の規模は東西6.40ｍ，南北5.10ｍの隅丸長方形に溝を巡らしている。溝の幅は0.50～0.70ｍ，深さは0.36ｍ前後である。溝上位の掘り込みは緩やかであるが，中位からはほぼ垂直に落ち込む。溝の底面の幅は0.25ｍを測り，溝の四隅において若干広くなっている。底面は平坦であるが，レベルは西から東に向



第33図　ST01平・断面図（Ｓ：１/80）

かってわずかに低くなっている。西側の底面のレベルは標高19.85m，東側は19.80mである。溝に囲まれた内部は，東西5.00×南北4.00m規模であり，そのレベルは確認面とほぼ同一であり，平坦な面である。内部のほぼ中央部において，わずかに異なる色の土が観察されたが，明確な平面形は検出することはできなかった。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	24.6		(3.5)	口唇部上方に拡張し、竹管文１個。外面ヨコナデ。内面ナデ	褐7.5YR4/4	黄褐10YR5/6	石英、長石、角閃石
2	〃	18.4		(1.1)	口縁部水平に広がり、擬凹線、ヨコナデ	鈍橙7.5YR6/4		〃
3	弥生土器　甕	14.0		(10.6)	口縁部強く外反。胴部外面刷毛目、内面指頭圧痕、ヘラ削り	鈍黄褐10YR5/3		〃
4	〃	13.2		(12.7)	〃	鈍褐7.5YR5/4		〃
5	〃	16.4		(11.5)	〃	鈍黄褐10YR5/4		〃
6	〃			(10.0)	外面刷毛目。内面指頭圧痕、ナデ	褐7.5YR4/4	鈍黄褐10YR5/3	〃
7	〃		4.4	(1.7)	胴部外面ナデ。底面ヘラミガキ	鈍褐7.5YR5/4	鈍黄橙10YR6/4	〃
8	〃		3.0	(2.9)	内外面ナデ	灰白7.5YR8/2		〃
9	〃		7.0	(3.0)	シャープな脚。摩滅	灰白N7/		石英、長石
10	弥生土器　鉢	19.0		(4.3)	口縁部若干外反。摩滅	浅黄2.5YR7/3	浅黄橙10YR3/4	〃　少量
11	〃	15.0		(5.2)	口縁部若干外反。内面に稜。摩滅	橙7.5YR7/6	浅黄橙7.5YR8/4	石英、長石
12	〃	15.0		(5.4)	口縁部若干外反。摩滅	橙7.5YR7/6	浅黄橙7.5YR8/4	〃　少量
13	〃	15.6		(4.2)	口縁部若干外反。外面刷毛目。内面刷毛目、ヘラナデ	浅黄橙7.5YR8/3	橙5YR7/6	〃
14	〃			(5.4)	口縁部外反。摩滅	浅黄橙10YR8/3	灰5Y6/1	〃　少量
15	弥生土器　高杯	26.0		(4.4)	外面に稜。口縁部内面に若干凹み。体部外面ヘラミガキ	橙7.5YR6/6		粗砂～細礫
16	弥生土器　製塩土器		3.6	(1.4)	外面ヘラ削り。内面ナデ	鈍赤褐5YR5/4	黒褐5YR2/1	石英、長石、角閃石
17	〃		3.0	(2.3)	〃	鈍赤褐2.5YR4/3		〃
18	〃		2.8	(2.7)	外面ヘラ削り後にナデ。内面ナデ	鈍黄褐10YR5/4		〃

第34図　ST01出土遺物（S：1/4）

溝の埋土は4層に分層され，上位より黄灰色シルト質極細砂，にぶい黄橙色シルト質極細砂を含む黄灰色シルト質極細砂，炭化材粒をわずかに含む褐灰色シルト質極細砂，そして底面に褐灰色シルト質極細砂である。埋土の堆積はほぼレンズ状をなし，自然堆積である。

周溝内からの遺物の出土状態は，ほぼ全域から出土しているが，特に南西隅から南側中央にかけての範囲で多くの土器が出土した。また，長さ0.10～0.30mの自然石が，北側と南側の溝を中心に出土した。すべての遺物は底面より約0.10m浮いた状態で出土しており，溝の底面に第4層が堆積した後に遺物が落ち込んだと考えられる。

出土遺物　遺物は弥生土器壺（1，2），同甕（3～9），同鉢（10～14），同高杯（15），同製塩土器（16～18），その他の弥生土器片が出土した。

1は口縁部が直線的に広がり，口縁端部は上方に拡張し外面に竹管文を1個有す。外面の調整はヨコナデ，内面はナデが施される。2の口縁部は水平に広がり，端部は上方に拡張する。擬凹線が数条巡り，ヨコナデが施される。

3～6は，胴部中央に最大径を持ち口縁部が「く」字状に強く外反する甕である。但し，6は口縁部を欠損する。調整は，口縁部がヨコナデ，胴部外面が刷毛目を施す。胴部内面上半は指頭圧痕，下半はヘラケズリが施される。7～9は底部である。

10～14の鉢は口縁部が短く外反し，10，12，14は体部の傾斜がきつく若干器高の深い鉢である。13の調整は口縁部にヨコナデ，体部外面に刷毛目を施し，体部内面上半に横方向の刷毛目，下半はヘラナデが施される。その他の鉢は内外面とも磨滅しており調整不明である。

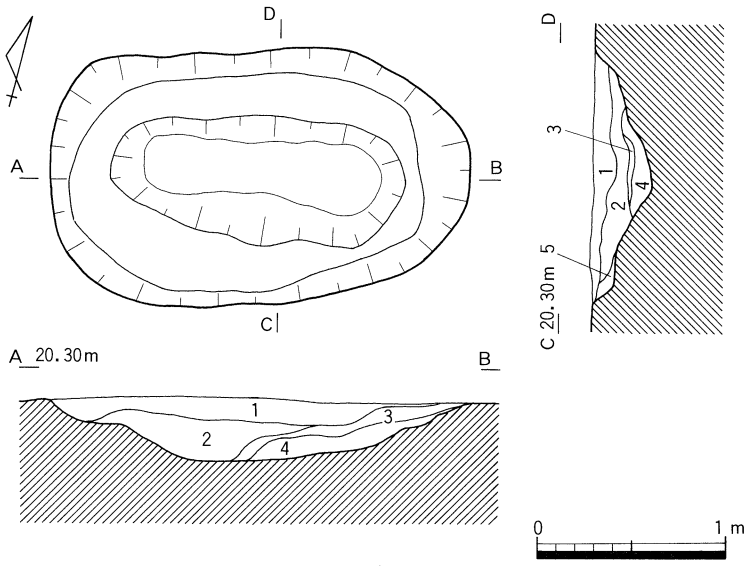
15は体部と口縁部の境に稜を持ち，口縁部は外反する。口唇部内面に若干の段を持つ。

16～18は細い脚台を持つ製塩土器である。外面の調整はヘラケズリ，内面はナデが施される。

4．土坑

SK01（第35図）

B－2地区のSH02とSH03の中間において検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し，西側がやや広くなり，東側は少し尖り気味となっている。規模は東西2.20m，南北1.35mを測る。確認面のレベルは標高20.15mである。掘り込みは非常にゆるやかな傾斜であり，ほぼ中間の位置で一段平らになり，底面に至る。確認面から深さは，段部分で0.15m，底面では0.35mである。底面はわずかな傾斜がある。埋土は5層に細別され，堆積状態は，まず東側から3，4層の堆積が始まり，その後に1，2層が埋まったと考えられる。



1　褐灰色シルト質細砂（10YR 6/1）
2　褐灰色シルト質細砂（7.5YR 6/1）
3　褐灰色シルト質細砂＋浅黄橙色シルト（7.5YR 6/1＋10YR 8/4）
4　褐灰色＋灰褐色シルト質極細砂（7.5YR 4/1＋7.5YR 5/2）
5　褐灰色シルト質細砂（2.5YR 7/1）

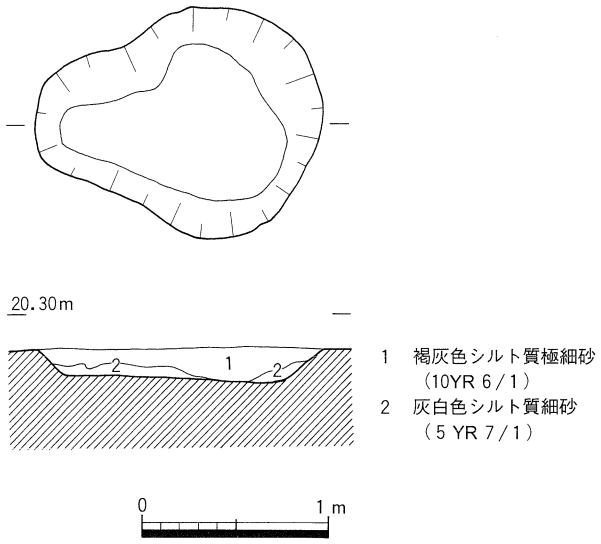
第35図　SK01平・断面図（S：1/40）

出土遺物　1，2層に弥生土器片が含まれていたが，小片のみであり，図化できるものはなかった。

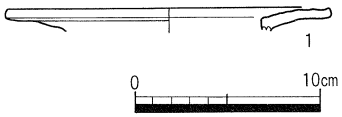
ＳＫ02（第36・37図）

Ｂ－２地区のＳＨ03・ＳＫ01の東側に単独で検出された土坑である。平面形は西端部が尖っており，ダルマのような形をしている。確認面のレベルは標高20.12ｍである。土坑の規模は東西1.55ｍ，南北1.22ｍを測る。掘り込みの傾斜はゆるやかであり，深さは0.17ｍである。底面の平面形も上場と同じ形である。底面は東側にわずかに低くなっているが，ほぼ平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂，灰白色シルト質細砂の２層であり，自然堆積である。

出土遺物　埋土中より少数の弥生土器片が出土した。



第36図　SK02平・断面図（Ｓ：1/40）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	17.6		(1.3)	口縁部は水平に広がり、擬凹線	鈍褐7.5YR5/3		石英、長石、角閃石

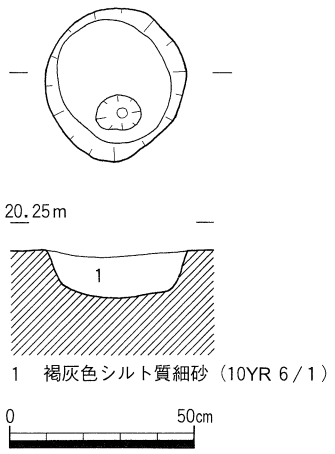
第37図　SK02出土遺物（Ｓ：1/4）

５．ピット

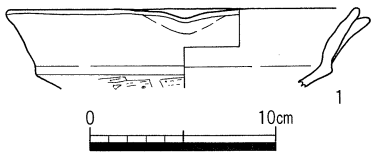
ＳＰ01（第38・39図）

Ｂ－２地区のほぼ中央で検出されたピットである。平面形は直径0.40ｍを測る円形を呈する。確認面のレベルは標高20.12ｍである。掘り込みは急傾斜であり，深さは0.10ｍである。底面の平面形も円形であり，直径12×８㎝の小穴がある。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　埋土中より弥生土器鉢（１）が出土した。１は形態・手法を高杯に類した鉢であり，片口を有する。



第38図　SP01平・断面図（Ｓ：1/20）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　鉢	19.0		(4.2)	片口。外面に稜を有す。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/4		石英、長石、角閃石

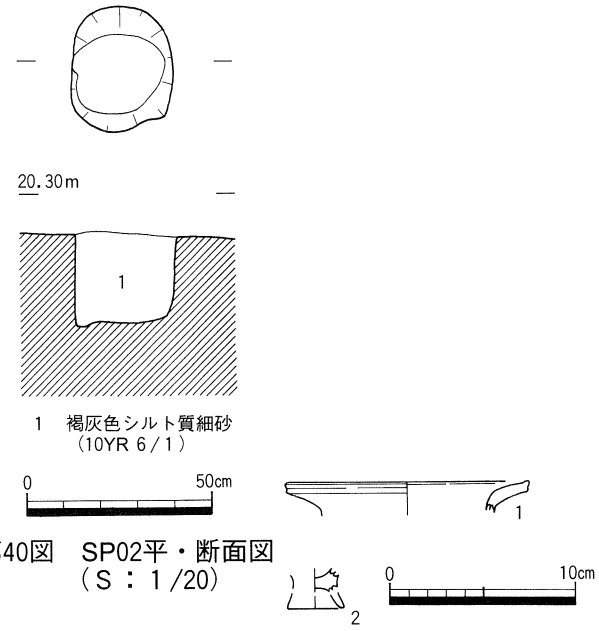
第39図　SP01出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＰ02（第40・41図）

Ｂ－２地区ほぼ中央で検出されたピット群の1個である。

平面形は0.25×0.35ｍを測る楕円形を呈し，一部が広がっている。確認面のレベルは標高20.20ｍである。底面の平面形は直径0.20ｍであるため，掘り込みが短径部ではほぼ垂直，長径部はゆるやかな傾斜となっている。底面までの深さは0.25ｍを測り，平坦な底面である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　埋土中より弥生土器壺（１），同製塩土器（２）が出土した。



第40図　SP02平・断面図
（Ｓ：１/20）

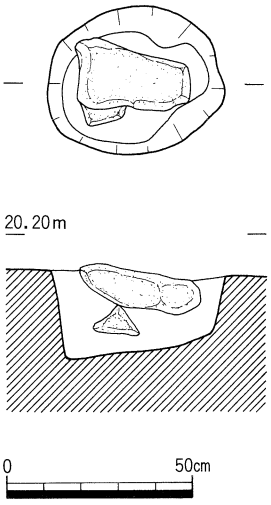
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	13.2		(1.7)	口縁端部凹線。ヨコナデ	鈍橙7.5YR7/3	鈍橙7.5YR7/4	石英、長石、角閃石
2	弥生土器　製塩土器			(1.2)	摩滅	黒褐7.5YR3/1	灰赤2.5YR5/3	〃

第41図　SP02出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＰ03（第42図）

Ｂ－２地区のほぼ中央において検出されたピット群のひとつであり，ＳＢ02より約2.20ｍ西側に離れた位置にあたる。平面形は，0.40×0.48ｍを測り，不整な楕円形を呈する。確認面のレベルは標高20.10ｍである。掘り込みは急傾斜であり，底面までの深さは，最深部で0.25ｍ，浅い部分は0.15ｍを測る。底面より約５㎝上に小さな石が，さらにその上に長さ0.30ｍ，厚さ0.10ｍの台形をなす石が重なっている。石は共に自然石であり，加工痕は見られない。上方の石の上面は確認面と同レベルである。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物はなかった。



第42図　SP03平・断面図
（Ｓ：１/20）

６．溝

ＳＤ05（第43～45図）

Ｂ－２地区中央やや北寄りにおいて検出された溝である。ＳＨ02のほぼ中央から掘り込みが確認され，わずかに蛇行しながら約15ｍ北流する。その位置においてＳＨ04より約0.80ｍ離れて南側に弧を描いて流れる溝と合流し，約3.50ｍ北流している。北端は後世の削平によって削り取られている。北端近くではＳＨ05から西流するＳＤ07と合流する。東端は調査区外となっている。合流点付近はＳＨ03によって上面を切られている。

溝の確認面のレベルは標高20.10ｍ前後である。上場の幅は0.60～1.20ｍを測るが，0.80ｍが平均的な幅である。溝の断面はＶ字状をなし，深さは0.50ｍを測る。ＳＨ04の南側では底面の幅が0.15ｍと細くなっているが，ＳＨ02の北側では0.30ｍを測り，断面は逆台形を呈している。東端では底面中央が高くなって分流している。高まりの比高差は３㎝である。底面のレベルは，北端部が最も低く

なっているが，ほとんど高低差はない。埋土は３層に分層されるが，灰黄色シルト質細砂が厚く堆積しており，底面近くに灰白色シルトブロックと褐灰色シルト質細砂が0.10～0.15m堆積している。短期間に埋没が終了したと考えられる。

出土遺物　ＳＨ04の南側とＳＨ02の北側に集中しており，第1層下位からの出土が大部分である。底面がわずかに埋まった後に土器が廃棄されたと考えられる。後述するように，ＳＤ05出土の土器片の1点がＳＨ02出土の土器と接合した。ＳＨ02のほぼ中央からＳＤ05の掘り込みが始まっていることから，ＳＤ05はＳＨ02の排水溝であると考えられる。

遺物は，弥生土器壺（１～３），同甕（４～12），同鉢（13～18），同製塩土器（19～22），同高杯（23～28），刀子（29），珪化木（30，31），その他の弥生土器片である。

１は球形の胴部から「く」字状に外反する口縁部を持ち，口縁端部は平坦面をなす。調整は，口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦と斜め方向の刷毛目，内面は指頭圧痕の後にヘラナデが施される。２は頸部のみ残存する。頸部は「ハ」字状に内傾する。内外面とも磨滅しており，調整は不明である。内面に輪積み痕を残す。細頸壺（３）は胴部のみ残存する。胴部中央が大きく張った算盤玉形を呈する。外面上半は縦方向の刷毛目の後にヘラミガキ，下半は磨滅しているが一部に横方向のヘラミガキが残存している。内面には絞り目と指頭圧痕が見られる。

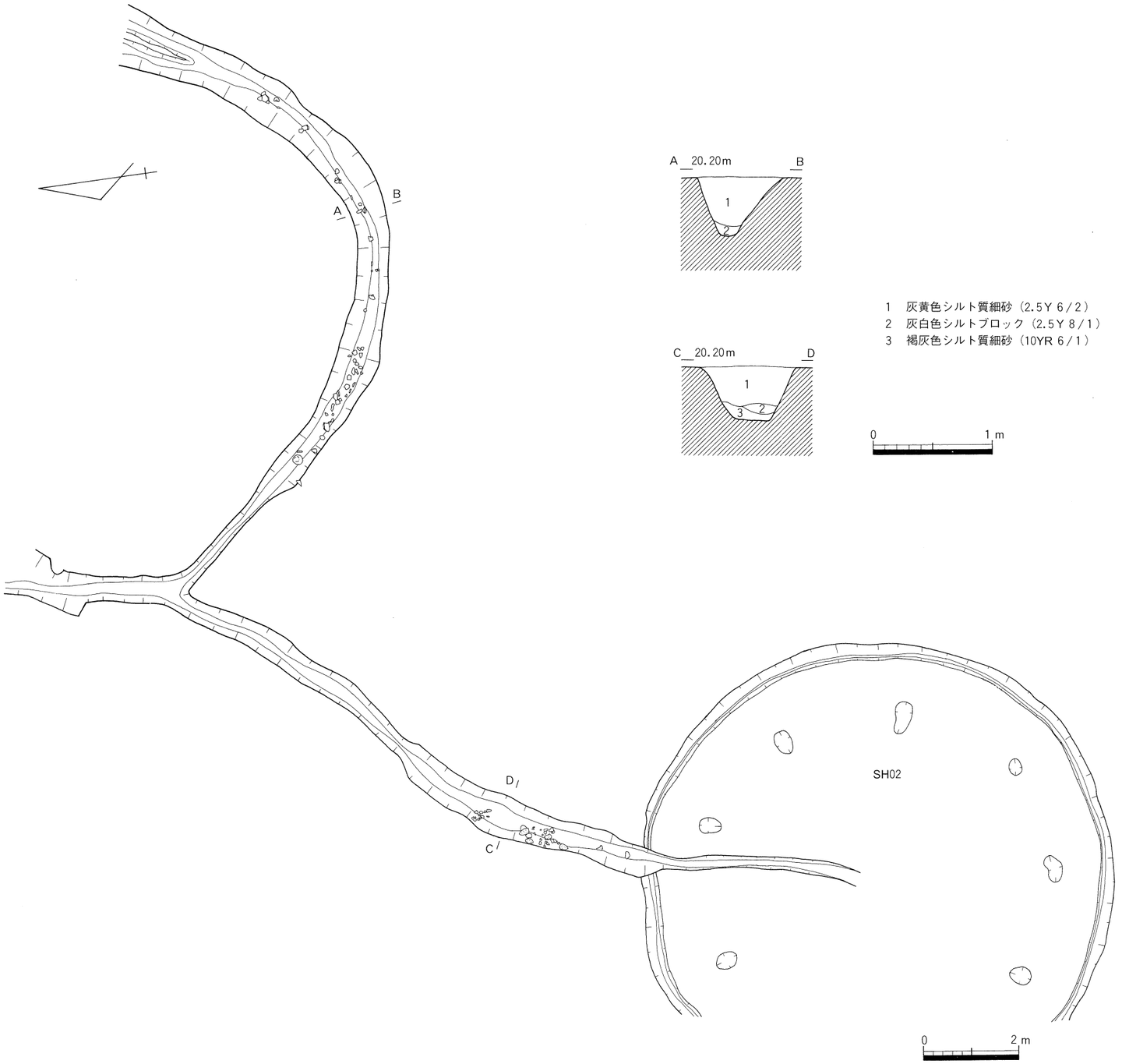
４，５は胴部から「く」字状に強く外反する口縁部の甕であり，４の口縁部内面には凹線２条巡る。口縁部はヨコナデ，胴部外面は縦方向の刷毛目，内面は指頭圧痕，ヘラケズリが施される。６は逆Ｌ字口縁をなし，口縁部の調整はヨコナデ，胴部内面はヘラナデが施され，外面は磨滅している。７は小形の甕で，口縁部は「く」字状に外反する。胴部中央以上は内外面とも磨滅のため調整不明であるが，下半外面と底部外面は刷毛目，内面はヘラケズリが施される。８～12は底部である。８は均一な器壁で，胴部外面は縦方向のヘラミガキとヘラナデ，内面は縦方向のヘラケズリが施される。底部外面は1方向からのヘラミガキである。11の胴部，底部外面はヘラミガキが施される。12の底部外面は未調整である。

13～15は口径40cm前後を測る大形の鉢である。口縁部が直立するタイプ（13）とやや傾斜するタイプ（14，15）に分かれ，内面に擬凹線が巡る。口縁部はヨコナデ，体部外面はヘラケズリが施され，内面は部分的に刷毛目が残存する。16は小形の鉢で，口縁部は短く外反する。内面と外面上半はナデ，ヘラナデ，下半は縦方向のヘラケズリが施される。17は半球形の体部で，口縁部は短く直立する。18の外面は磨滅が著しく調整不明であるが，内面は細かい刷毛目が施される。

19～22は脚台を有する製塩土器である。19，22の脚台は不整円形を呈す。外面の調整はヘラケズリ，脚台内面はナデが施される。

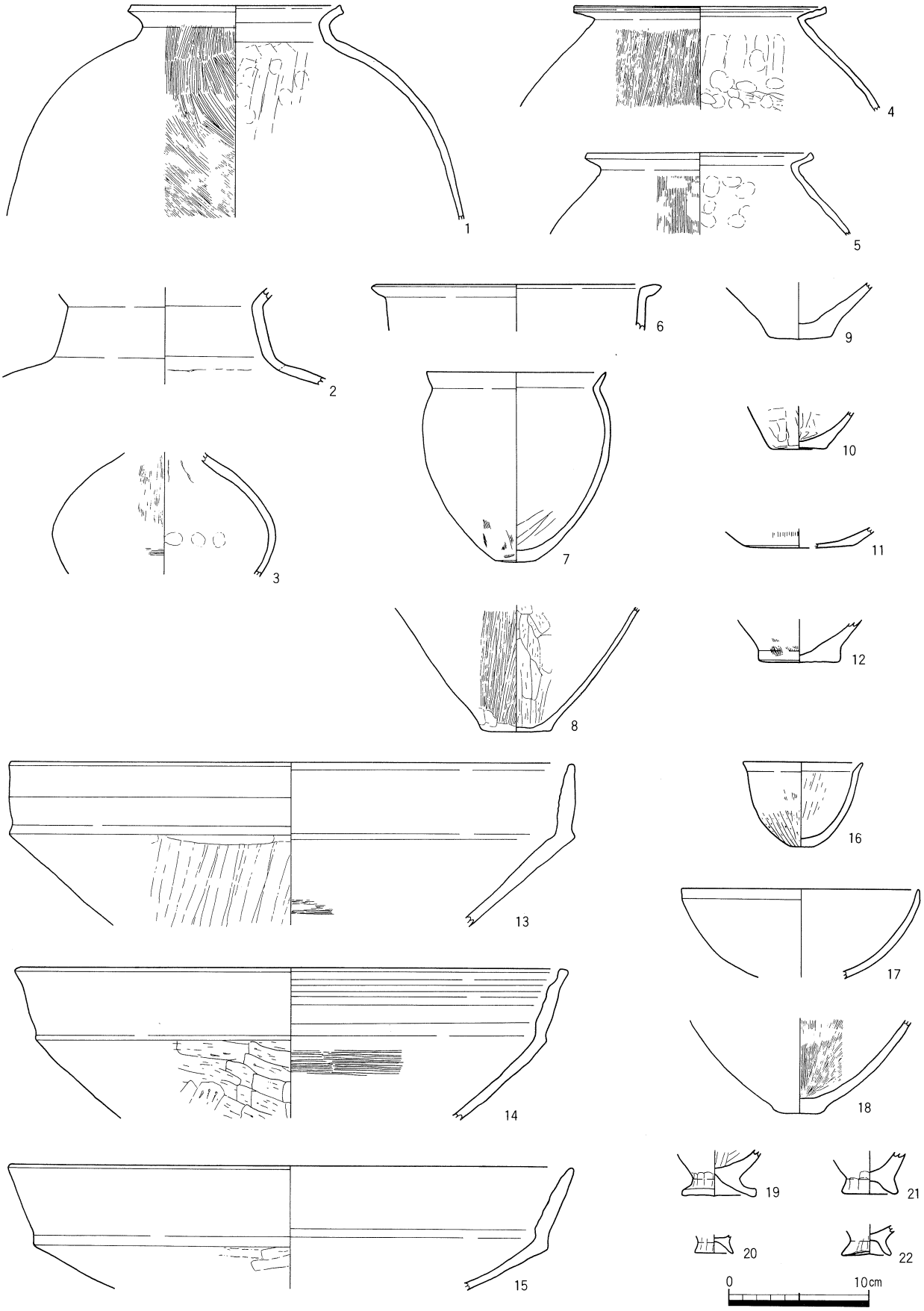
23～25は高杯の杯部，26～28は脚部である。23，24はやや小形であり，体部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち，口縁部は外反しながら立ち上がる。23の口縁部の調整はヨコナデ，体部外面は横方向のヘラミガキ，内面は４方向からのヘラミガキが施され，脚部外面には縦方向のヘラミガキが施される。24は円盤を欠損し，調整は23と同様であるが脚部内面にヘラケズリが見られる。25は円盤を欠損し，杯部外面に稜を持つ。体部の内外面は斜め方向の丁寧なヘラミガキが施され，脚部外面はヘラナデ，内面はヘラケズリが施される。26～28はしっかり大きく広がる。26は１個の円孔，27は２個の円孔を有する。外面の調整はヘラミガキとナデ，内面はヘラケズリが施されるが，27には部分的にタタキ目が施される。28の裾外面には刻目文が巡る。

29は刀子，30，31は珪化木の破片である。



1　灰黄色シルト質細砂（2.5Y 6/2）
2　灰白色シルトブロック（2.5Y 8/1）
3　褐灰色シルト質細砂（10YR 6/1）

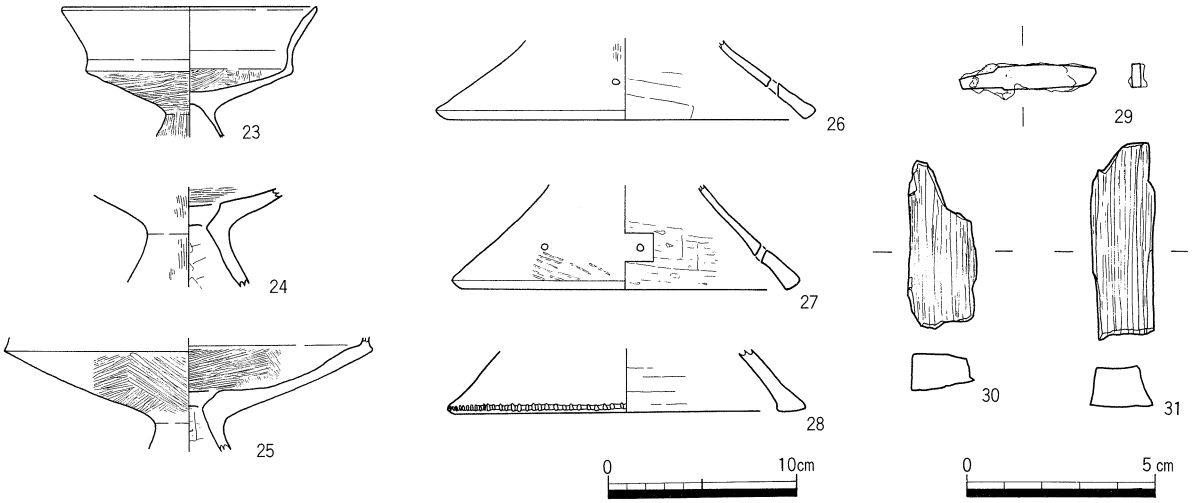
第43図　SD05平・断面図（S：1/100、1/40）



第44図　SD05出土遺物(1)（S：1／4）

（第44図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	15.0		(15.0)	球形の胴部。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕後にナデ	明赤褐5YR5/8	黄灰2.5Y5/1	石英、長石
2	〃			(6.9)	頸部やや内傾。摩滅	灰黄褐10YR4/2	褐灰10Y4/1	石英、長石、角閃石
3	〃			(8.7)	外面上半刷毛目後にヘラミガキ、下半ヘラミガキ。内面指頭圧痕	鈍橙7.5YR6/4	黒10Y1.7/1	石英、雲母多量
4	弥生土器　甕	18.0		(7.3)	口縁内面凹線２条。外面刷毛目。内面指頭圧痕、ヘラ削り	褐7.5YR4/3	鈍褐7.5YR5/3	石英、長石、角閃石
5	〃	16.0		(5.7)	L字口縁。外面刷毛目。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4	灰黄2.5Y7/2	〃
6	〃	20.6		(3.3)	逆L字口縁。口縁部ヨコナデ。内面ヘラナデ	鈍黄橙10YR6/3	鈍褐7.5Y6/4	石英、長石
7	〃	12.8	2.8	13.5	上半摩滅。胴部外面、底部刷毛目。内面ヘラ削り	灰白7.5YR8/3	灰白7.5YR8/2	〃
8	〃		5.0	(8.9)	平底。外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り	灰黄褐10YR4/2	鈍赤褐5YR4/3	石英、金雲母多量
9	〃		4.6	(4.0)	平底。摩滅	浅黄橙7.5YR8/4		石英、長石
10	〃		4.0	(3.0)	やや上げ底。内外面ヘラ削り後にヘラナデ	鈍黄褐10YR5/3		石英、長石多量
11	〃		8.0	(1.4)	平底。胴部外面、底面ヘラミガキ	黒10YR2/1	鈍黄橙10YR6/4	微砂若干
12	〃		5.9	(3.0)	平底。胴部外面刷毛目、ヘラナデ	褐灰5YR5/1	淡橙5YR8/4	微～細砂若干
13	弥生土器　大鉢	40.4		(11.5)	口縁部直立。体部外面ヘラ削り、内面ヨコナデ、刷毛目	明褐7.5YR5/6	鈍褐7.5YR5/4	石英、長石、角閃石
14	〃	39.6		(10.6)	口縁内面に擬凹線。体部外面ヘラ削り、内面刷毛目	橙7.5YR6/6		〃
15	〃	40.2		(8.7)	口縁内面に擬凹線。体部外面ヘラ削り、内面摩滅	鈍橙7.5YR6/4	明褐7.5YR5/6	〃
16	弥生土器　鉢	8.5	1.5	6.0	胴部外面上半、内面ナデ。胴部外面下半ヘラ削り	鈍黄橙10YR6/4		微～細砂
17	〃	17.0		(6.3)	半球形。口縁部外面ヨコナデ以外摩滅	褐灰5YR4/1	褐灰5YR5/1	石英、長石多量
18	〃		3.4	(6.7)	外面摩滅。内面細かい刷毛目	浅黄橙7.5YR8/4	橙5YR6/8	石英、長石少量
19	弥生土器　製塩土器		5×5.5	(3.3)	脚部不整円形。外面ヘラ削り、ナデ。内面ヘラナデ	黒褐10YR3/1	明黄褐10YR6/6	石英、長石
20	〃		2.7	(1.3)	外面ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/4		石英、長石、微砂
21	〃		4.0	(2.6)	外面ヘラ削り。内面ナデ	明赤褐5YR5/6	鈍橙5YR6/4	石英、長石、粗砂
22	〃		3.5×3.2	(2.2)	脚部不整円形。外面ヘラ削り	鈍赤褐5YR5/4		〃



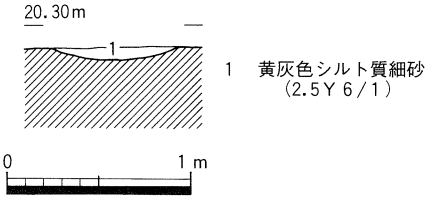
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
23	弥生土器　高杯	15.6		(6.9)	口縁部ヨコナデ。外面４方向のヘラミガキ。内面２方向のヘラミガキ	鈍赤褐5YR5/4		石英、長石、角閃石
24	〃			(4.9)	円盤欠損。外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。脚内面ヘラ削り	橙5YR6/6		〃
25	〃			(6.0)	円盤欠損。杯部内外面ヘラミガキ。脚部内面ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/4	灰褐7.5YR4/2	〃
26	〃		19.0	(4.2)	孔１個。外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/3	鈍褐7.5YR6/4	〃
27	〃		18.6	(5.5)	孔２個。外面平行タタキ目、ナデ。内面ヘラ削り	灰黄褐10YR5/2	褐7.5YR4/3	〃
28	〃		19.0	(3.3)	脚裾部に刻目文。外面ナデ。内面ヘラ削り	浅黄2.5YR8/4	浅黄2.5Y8/4	石英、長石多量

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
29	刀子	3.6	0.6	0.4		鉄	
30	珪化木	4.3	1.8	0.9			
31	〃	4.9	1.7	0.9			

第45図　SD05出土遺物(2)（S：1/4、1/2）

ＳＤ06（第46図）

Ｂ－２地区ほぼ中央においてＳＨ02，ＳＴ01，ＳＤ05と重複して検出された溝である。ＳＤ06は重複するすべての遺構に切られている。ＳＤ06は，ＳＴ01の北東隅より掘り込みが始まり，直線的に北流し，ＳＰ02近くで流れをやや西側に変え，そのまま北流する。ＳＨ02とＳＤ05に切られ，その北側で再び検出され，調査区域外へ延びている。確認面のレベルは標高20.10m前後である。溝上場の幅は0.65mを測り，断面は船底形をなし，深さは0.15mである。埋土は黄灰色シルト質細砂の単一層である。



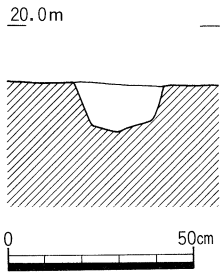
第46図　SD06断面図
（Ｓ：１/40）

出土遺物　数点の弥生土器片のみであり，図化できるものはなかった。

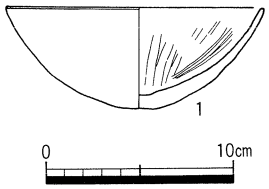
ＳＤ07（第47・48図）

Ｂ－２地区中央北寄りで検出された溝である。ＳＨ05の西壁の中央から西流し，ＳＤ05に合流する。ほぼ直線的に流れている。確認面のレベルは標高19.58mである。溝上場の幅は0.25m，深さ0.13mを測る。掘り込みはほぼ垂直である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。ＳＨ05の排水溝と考えられる。

出土遺物　埋土中より弥生土器鉢（１）が出土した。半球形の体部で，底部付近は肥厚し，内面はナデの後にヘラミガキが施される。



第47図　SD07断面図
（Ｓ：１/20）



番号	器　種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色　調		胎　土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　鉢	13.8	2.1	5.3	半球形の体部。外面摩滅。内面ナデ後にヘラミガキ	鈍橙7.5YR7/3	明赤褐5YR5/6	石英、長石、角閃石

第48図　SD07出土遺物（Ｓ：１/４）

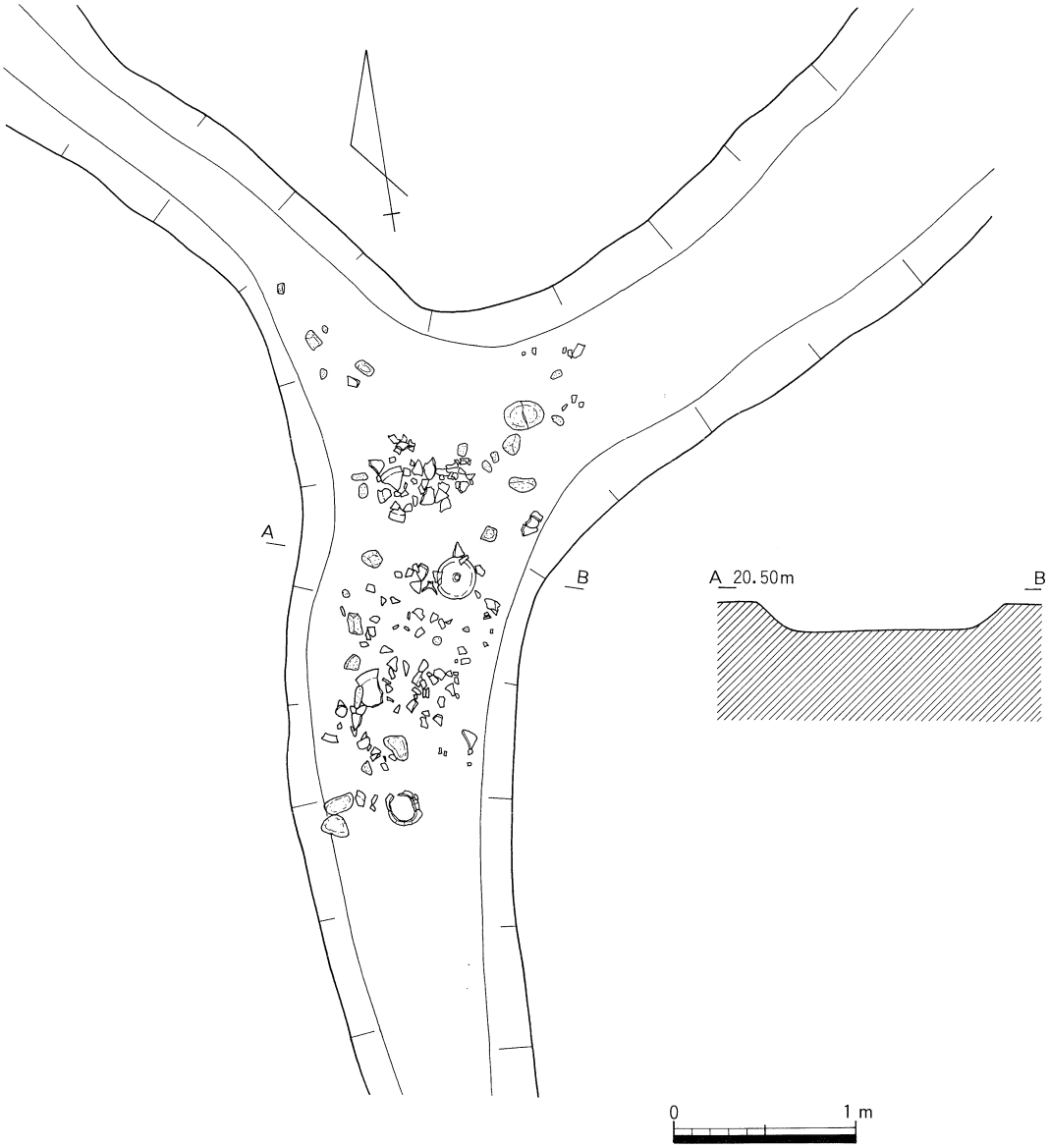
ＳＤ08（第49～51図）

Ｂ－２区南部において南東－北西方向に流れる溝である。南東端は調査区外に延びており，北西端は後世の削平により削滅している。

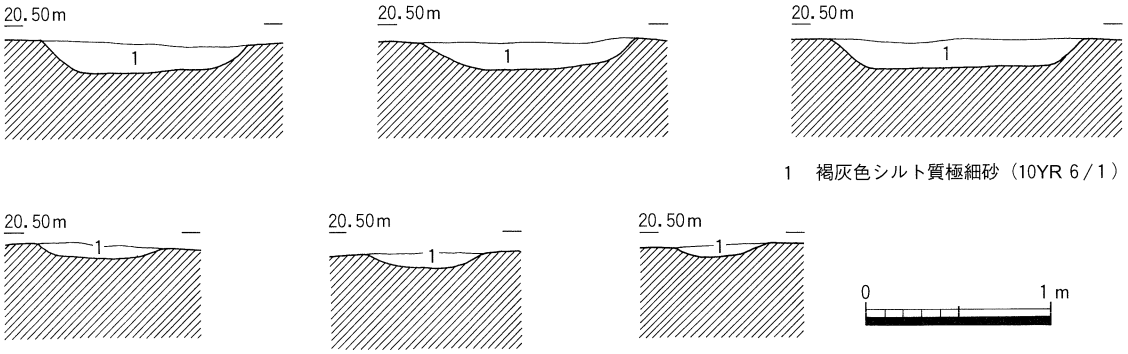
南東からわずかに蛇行しながら北西方向に流れ，ＳＤ09が大きく湾曲する所の東側において流れを北方向に少し変える。北へ約19mの間，ＳＤ09とほぼ平行に走り，北端において北東方向と北西方向に分流している。確認面のレベルは標高20.40m前後である。溝上場の幅は，分岐点において最も広く1.36mを測る。南側になるにしたがい幅は狭くなり，南東端では0.30mである。溝の断面は逆台形をなし，北端での深さは0.15mであるが，南になるにしたがい浅くなっている。底面はほぼ平坦でありレベルは南から北にゆるやかに低くなっている。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層であり，一時期に溝が埋没したと考えられる。

出土遺物　遺物は溝の全域において底面直上及び若干浮いた状態で出土があったが，特に，分岐点からＳＤ09と平行している範囲において土器が密集していた。遺物は，弥生土器壺（１～５），同甕（６～14），同高杯（15～18，20～25），同鉢（19），同製塩土器（26），その他の弥生土器片である。

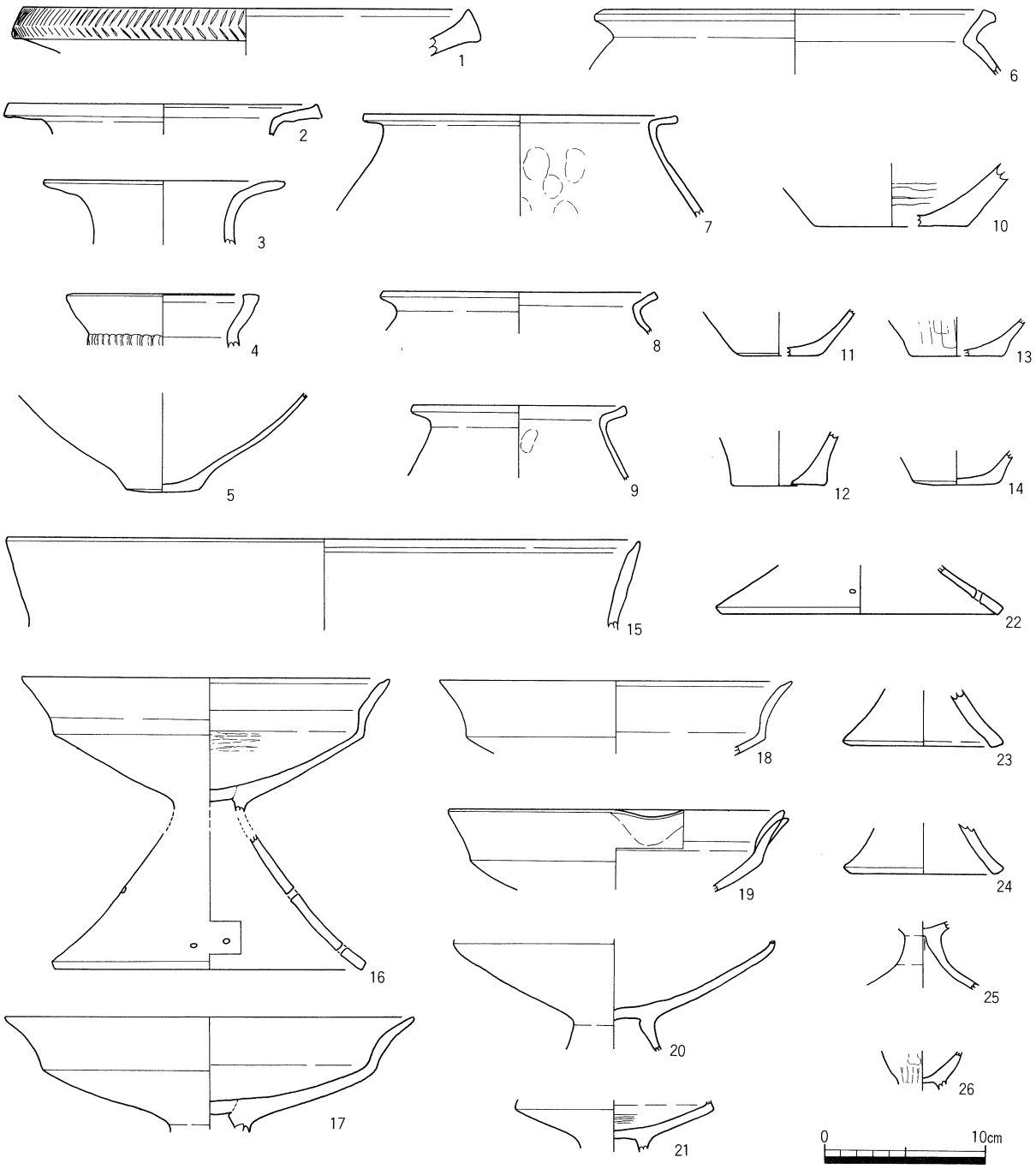
１は口縁部に綾杉文が巡り口径37.8cmを測る大形の広口壺である。２はほぼ直立する頸部から口縁



第49図　SD08出土遺物平面図（S：1/40）



第50図　SD08断面図（S：1/40）



第51図　SD08出土遺物（S：1/4）

部が水平方向に強く屈曲する。口縁端部は上下に若干拡張し，平坦な外面をなす。3はほぼ垂直な頸部から外反しながら広がる。内外面とも磨滅しているため調整は不明である。4は受口状の口縁部で，口縁端部は若干拡張する。頸部外面に押圧突帯文が巡る。内外面とも磨滅が著しい。

6～9は「く」字状口縁であり，6は胴部から強く屈曲し，口縁端部が肥厚する。7の口縁部は水平に広がる。口縁部の調整はヨコナデ，内面には指頭圧痕が見られる。10～14の底部は若干上げ底の12を除いて平底である。内外面とも磨滅して調整が不明瞭であるが，胴部外面にヘラケズリ（13），ヘラナデ（11，12，14）が一部残存し，内面はナデ，ヘラナデが施される。13，14の底部外面は1方向からのヘラミガキが施される。

15は大形の高杯で，口唇部内面に段を持つ。内外面とも磨滅が著しい。16は一部を欠損するが原形

（第51図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	37.8		(2.9)	口縁端部は上下に拡張、綾杉文。摩滅	灰白Y8/2		粗砂、細礫
2	〃	19.2		(1.9)	口縁部は水平に外反、端部やや拡張。摩滅	鈍褐7.5YR5/4		微～細砂
3	〃	15.0		(4.0)	垂直な頸部。摩滅	鈍橙7.5YR7/3		〃
4	〃	12.0		(3.3)	受口状の口縁部。頸部外面に押圧突帯文。摩滅	灰赤2.5YR5/2	灰褐7.5YR7/2	石英、長石、角閃石
5	〃		4.6	(6.1)	平底。摩滅	灰黄2.5YR7/2		微～細砂多量
6	弥生土器　甕	23.6		(4.1)	く字状口縁。ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3		石英、長石
7	〃	19.6		(6.3)	口縁部は水平に外反し、端部つまみ上げ。胴部内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4	鈍黄橙10YR6/3	〃
8	〃	16.8		(2.5)	く字状口縁。摩滅	橙7.5YR6/6		〃
9	〃	13.6		(4.5)	く字状口縁。口縁部ヨコナデ。胴部内面指頭圧痕	明褐7.5YR5/6		長石、角閃石
10	〃		9.4	(3.9)	平底。摩滅。内面一部ヘラナデ	鈍褐7.5YR5/3	鈍黄褐10YR4/3	石英、長石
11	〃		5.6	(2.9)	平底。外面ナデ	淡黄2.5YR8/3	鈍黄橙10YR7/3	石英、角閃石
12	〃		6.0	(3.4)	やや上げ底から胴部は急傾斜で立ち上がる	鈍黄橙10YR6/3		石英、長石
13	〃		6.0	(3.4)	平底。外面ヘラ削り。底部1方向からのヘラミガキ	黒褐10YR3/1	鈍黄褐10YR5/3	〃
14	〃		5.4	(2.2)	内外面ナデ。底部1方向からのヘラミガキ	黒7.5YR2/1	鈍黄褐10YR6/3	〃
15	弥生土器　高杯	39.6		(5.5)	口唇部が急激に細くなる	褐10YR4/6	明褐7.5YR5/6	〃
16	〃	22.8	19.0	18.0	円盤充填。脚部に孔2個一対2組、1個2組。摩滅	鈍黄橙10YR6/4		石英、長石、角閃石
17	〃	25.4		(7.2)	円盤充填。外面に稜を有し、外反。摩滅	橙7.5YR6/8	鈍橙7.5YR7/4	石英、長石
18	〃	22.0		(4.6)	外面に稜を有す。口唇部内面がくぼむ	明赤褐5YR5/8	鈍黄橙10YR6/4	石英、長石、角閃石
19	弥生土器　鉢	21.0		(5.0)	片口。外面に稜を有す。摩滅	褐10YR4/6		石英、長石
20	弥生土器　高杯			(6.8)	杯部外面に稜を有す。摩滅	橙5YR6/6	明赤褐5YR5/6	石英、長石、角閃石
21	〃			(3.2)	杯部外面に稜を有す。外面摩滅。内面ヘラミガキ	褐10YR4/6	鈍黄橙10YR6/3	石英、長石
22	〃		18.0	(3.0)	摩滅。孔2個	橙7.5YR6/6	明褐7.5YR5/6	石英、角閃石
23	〃		10.0	(3.5)	摩滅。	鈍橙7.5YR7/4		石英、長石多量
24	〃		10.0	(3.1)	摩滅。	浅黄橙10YR8/3	淡赤橙2.5YR7/4	〃
25	〃			(4.2)	摩滅。内面しぼり目	赤褐5YR4/6		石英、長石、角閃石
26	弥生土器　製塩土器			(2.4)	外面ヘラ削り	橙5YR6/8	明赤褐2.5YR5/6	石英、長石

を保つ唯一の高杯である。杯部外面に明瞭な稜を持ち，口縁部は外反して立ち上がる。脚部はしっかり広がり，脚中位に2個の円孔と裾付近に2個一対の円孔を2組残存する。内外面とも磨滅しているが，杯部内面の一部にヘラミガキが見られる。17，18は同形の高杯である。21は小形の高杯であり，杯部外面に明瞭な稜を持つ。22～24は脚裾部である。22は2個の円孔を有し，大きく広がっている。23，24は小形の高杯であり，内外面とも磨滅している。25は小形の高杯で，脚内面に絞り目が見られるが，磨滅が著しい。19は片口を有する鉢で，形態や手法は高杯に類する。

26の製塩土器は，底部の器壁が薄く，外面はヘラケズリが施される。

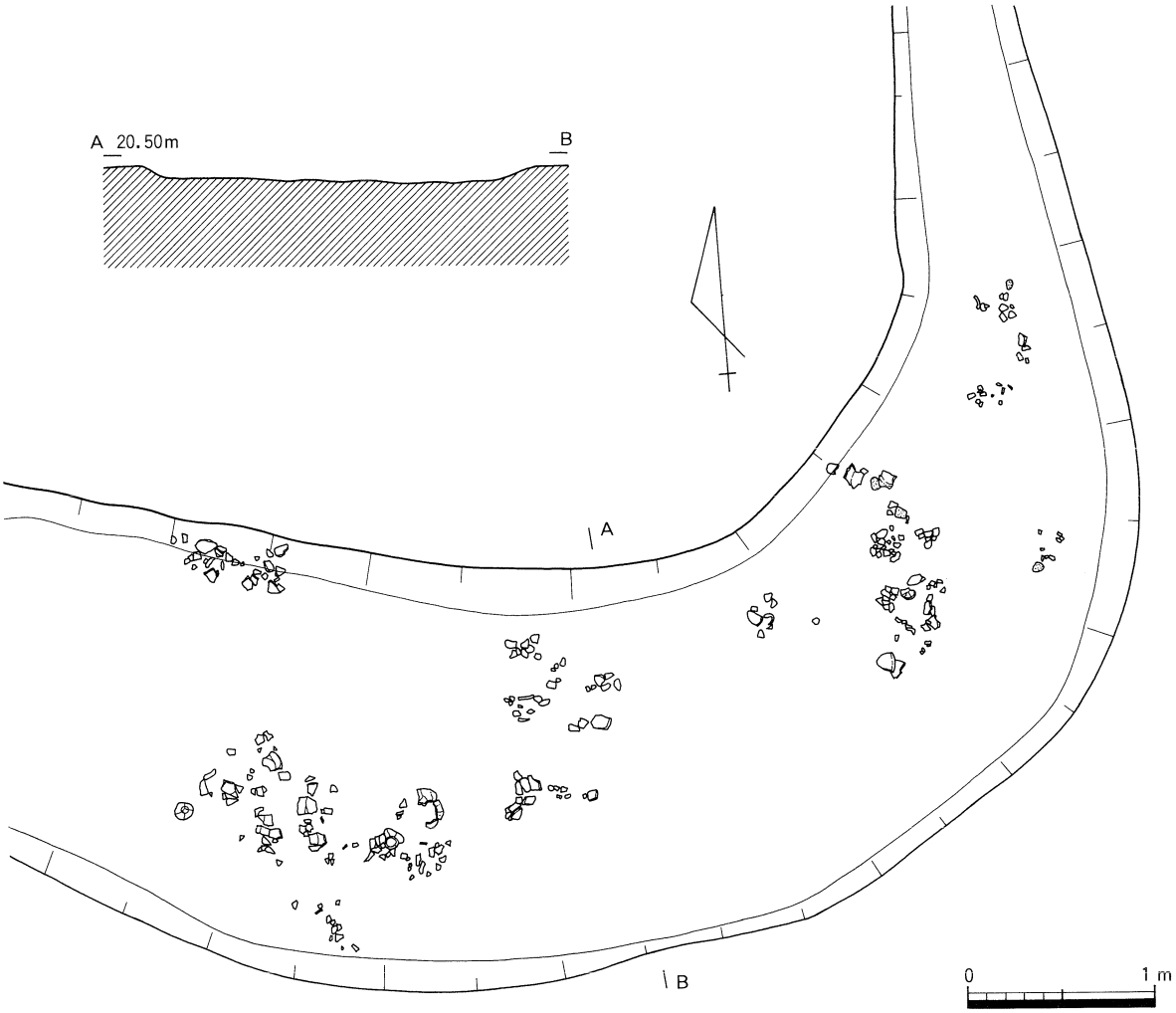
ＳＤ09（第52～54図）

Ｂ－2地区の南部において，ほぼＳＤ08と平行して流れている溝である。南端において，南北走する溝がほぼ直角に曲がっており，平面形は逆「し」の字形をなしている。西端は調査区域外に延び，北端は後世の削平により消滅している。なお，西側は多肥松林遺跡の調査区域である。

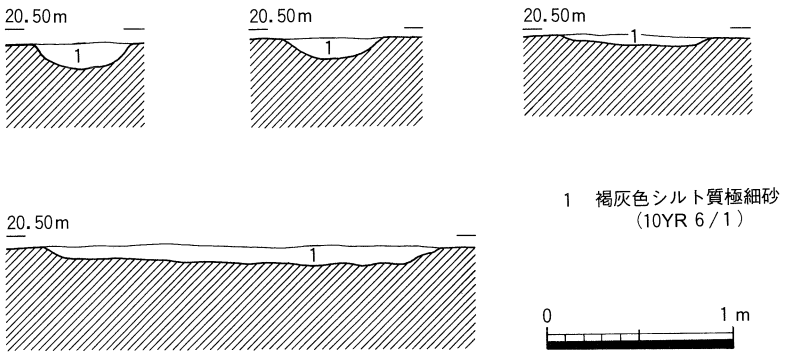
西端からわずかに蛇行しながら約8ｍ東流し，流れを90度変え北流し，ＳＤ08と平行に走っている。北端は分岐して北西方向に走るＳＤ08と合流する。確認面のレベルは標高20.40ｍ前後である。溝上場の幅は，南側で2.20ｍを測り広くなっているが，北側は0.50ｍと細くなる。溝の断面は逆台形ないし船底形を呈し，深さは0.10～0.15ｍを測る。底面は平坦であり，そのレベルは南から北方向に少しづつ低くなっている。埋土はＳＤ08と同様に褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

ＳＤ08とＳＤ09はほぼ平行して北流しており，埋土も同一であり，さらに出土した土器も同時期であることから，同時に溝として機能し，埋没したのも同時であったと考えられる。

出土遺物　溝の全域から遺物は出土するが，特に溝がほぼ直角に曲がっている部分において土器が密集していた。これらの遺物は，底面直上ないしわずかに浮いた状態で出土した。



第52図　SD09出土遺物平面図（S：1/40）

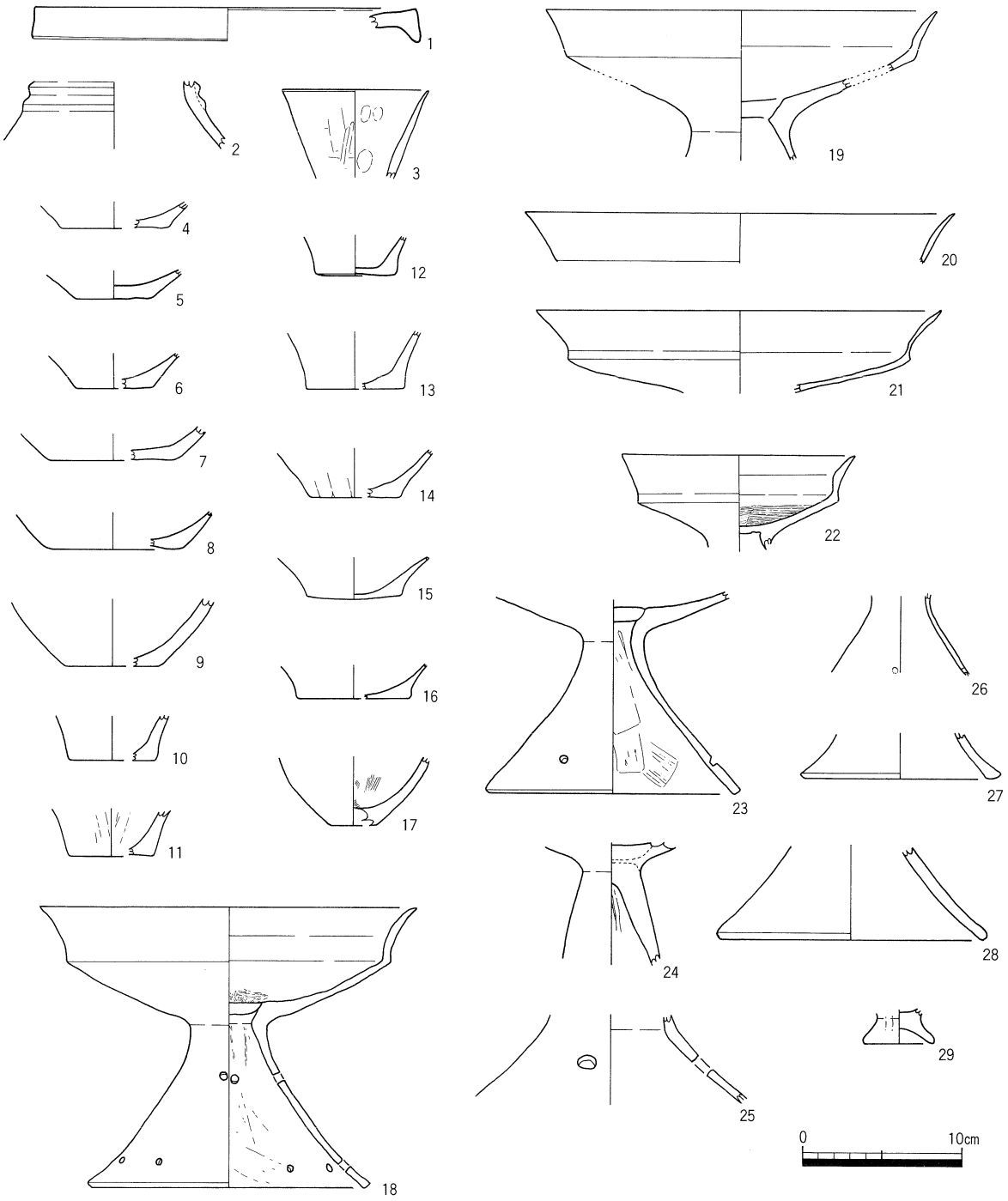


第53図　SD09断面図（S：1/40）

遺物は，弥生土器壺（１～３），同底部（４～16），同鉢（17），同高杯（18～28），同製塩土器(29)とその他の弥生土器片が出土した。

１は口縁端部を下方に大きく拡張する広口壺であり，内外面とも磨滅しており調整は不明である。２は頸部のみ残存し，外面に貼り付け突帯文が２条巡る。内外面とも磨滅しており調整は不明である。３は頸部から口縁部が残存する細頸壺である。器壁は口縁部になるにしたがい薄くなる。口縁部の調整はヨコナデ，頸部外面はヘラナデの後にヘラミガキを施し，内面には指頭圧痕とナデが見られる。

４～16の底部は，胴部の傾斜により３タイプに分けられる。４～９は底部から緩やかな傾斜で立ち



第54図　SD09出土遺物（S：1/4）

（第54図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	24.0		(2.0)	口縁端部は下方に拡張。摩滅	褐10YR4/6	鈍黄褐10YR5/4	石英、長石、角閃石
2	〃			(4.2)	外面に貼付突帯２条。摩滅	浅黄橙10YR8/3		石英、長石
3	弥生土器　細頸壷	9.2		(5.4)	外面ヘラナデ後にヘラミガキ。内面指頭圧痕、ナデ	鈍黄橙10YR7/2	明褐7.5YR5/6	長石、角閃石
4	弥生土器		6.6	(1.6)	やや上げ底。摩滅	黒5Y2/1	褐7.5YR4/4	〃
5	〃		4.5	(1.8)	平底。内外面ナデ	灰5Y4/1		〃
6	〃		4.8	(1.7)	平底。摩滅	浅黄2.5Y7/3	黄灰2.5Y6/1	石英、長石
7	〃		7.6	(2.0)	平底。摩滅	黒褐10YR3/1		長石、角閃石多量
8	〃		8.6	(2.4)	上げ底。摩滅	赤褐2.5YR4/8		〃
9	〃		3.0	(4.2)	平底。外面ナデ。内面摩滅	鈍褐7.5YR5/4	黄灰2.5Y5/1	細～粗砂
10	〃		5.1	(2.8)	平底。急傾斜で立ち上がる。摩滅	赤橙10YR6/6	赤10YR5/6	石英、長石多量
11	〃		5.4	(2.9)	やや上げ底。急傾斜で立ち上がる。内外面ヘラナデ	褐10YR4/4	褐7.5YR4/6	石英、長石、角閃石
12	〃		5.0	(2.4)	やや上げ底。内外面ナデ	鈍黄橙10YR7/3	暗灰黄2.5YR5/2	石英、長石
13	〃		6.2	(3.6)	平底。急傾斜で立ち上がる。摩滅	褐7.5YR4/4	鈍黄褐10YR5/3	粗砂、細礫
14	〃		5.6	(3.1)	平底。外面ヘラ削り、ナデ。内面摩滅	灰黄褐10YR4/2	鈍黄橙10YR4/6	石英、長石、角閃石
15	〃		5.8	(2.6)	摩滅。器厚が薄い	鈍褐7.5YR5/3		石英、角閃石
16	〃		7.0	(2.1)	平底。摩滅	灰黄褐10YR5/2		石英、長石
17	弥生土器　鉢		3.0	(4.3)	外面摩滅。内面刷毛目後にヘラミガキ、ナデ	浅黄橙10YR8/4	灰白10YR8/2	微砂
18	弥生土器　高杯	23.8	17.0	17.3	円盤充塡。脚部孔２個一対３組、１個２組。内面ヘラ削り	鈍黄橙10YR6/4		石英、長石、角閃石
19	〃	24.6		(9.2)	円盤欠損。杯外面に稜。摩滅	明褐5YR5/6	鈍橙5YR6/4	石英、長石
20	〃	27.0		(3.1)	器厚が薄い。摩滅	明赤褐5YR6/8		石英、長石、角閃石
21	〃	25.4		(5.1)	器厚が薄い。外面に稜。摩滅	褐10YR4/6	明褐7.5YR5/6	石英、長石
22	〃	14.8		(6.0)	外面に稜。杯部内面４方向からのヘラミガキ	橙7.5YR6/6		石英、長石、角閃石
23	〃		15.6	(12.0)	円盤充塡。穿孔途中の孔３個。内面ヘラ削り、しぼり目	〃		石英、長石
24	〃			(7.0)	円盤充塡。内面しぼり目	鈍橙7.5YR7/4		〃
25	〃			(5.3)	脚部に孔１個。摩滅	〃		〃
26	〃			(4.8)	孔１個。外面摩滅。内面ヘラ削り	橙7.5YR7/6	鈍橙7.5YR7/4	〃
27	〃		12.6	(3.0)	摩滅	赤橙10YR6/6	浅黄橙10YR8/4	石英、長石、角閃石
28	〃		17.0	(5.7)	摩滅	橙7.5YR6/6	鈍橙7.5YR6/4	石英、長石
29	弥生土器　製塩土器		4.2	(2.2)	外面ヘラ削り	鈍橙7.5YR7/4		〃

上がり，10～13は急傾斜で立ち上がる。14～16は胴部が若干外反気味になり器壁が薄い。全ての底部は内外面とも磨滅をして調整は不明だが，内外面の一部にヘラナデが残存するもの（５，９，11，12），外面に部分的にヘラケズリが残存するもの（14）がある。

鉢（17）は半球形の体部で，外面は磨滅し内面は細かい刷毛目の後にナデ，ヘラミガキが施される。

高杯は多数出土したが，完形は18のみである。18は口縁部と体部の境に明瞭な稜を持ち，口縁部が外反しながら立ち上がる。口縁端部の器壁は非常に薄くなる。脚部はしっかり広がり，上位に対峙する２個の円孔があり，裾部には２個一対の円孔が３組ある。杯部下方は刷毛目とヘラミガキが施される。脚部内面には絞り目が見られ，ヘラケズリが施される。19，20，21は18と同じ形態である。22はやや小形の高杯である。23～28は高杯の脚部で，23は下方に未貫通の円孔が３個存在する。

29は小さい脚台を持つ製塩土器で，外面はヘラケズリ，内面はナデが施される。

７．旧河道

ＳＲ01（第55～61図）

Ｂ－１地区の南端とＢ－２地区の北端において検出された自然旧河道である。調査以前の水田区画を見ると，標高の低い水田が帯状に蛇行しているのが確認でき，旧河道の存在が予測された。旧河道は県立高松桜井高等学校の敷地内を北流し，本調査区付近で東方向に湾曲し，Ｂ－１地区東において再び湾曲し西方向に流れを変えＡ－１地区の東に達し，北東方向に流れる。

本調査区で検出されたＳＲ01は，流れを東方向に変えた部分であり，調査区を東西に横断している。

検出されたＳＲ01は，幅約43.50ｍを測り，確認面から最深部までの深さは約2.40ｍである。北岸は非常に緩やかな傾斜で低くなっており，明確な北岸の確認線は検出されなかった。ここでは包含層を取り除いた段階で確認された旧河道の埋土と地山の境を北岸の上場として報告する。一方の南岸では，上面は緩やかな傾斜であるが，中央からは急激にほぼ垂直に落ち込んでいる。最深部は南岸寄りにある。南岸は黄色シルト層であるが，川底と北岸は砂礫層である。

土層図は調査の都合によりＢ－２地区のみ作成し，ＳＲ01の中央より南側だけを表している。現水田から川底までの堆積は12層に分層することができ，さらに各層は土壌層と非土壌層に細分され，結果的には全部で16層を数える。これらの埋土は堆積状態から４期に分けられる。１期は現水田耕作土の第１層，２期は近世の条里型水田の第２，３，４層であり，土層図では示していないが各層の下面には褐鉄鉱を多量に含む非土壌層が存在する。３期は古代の遺物（第56図）を出土する第５～７層，４期は弥生時代の遺物（第57～61図）を含む第８～12層である。第５層以下は科学的な分析を行っていないが畦畔も確認されず水田ではないと考えられる。最下層の第９～11層は植物遺体を多量に含み泥炭化している。

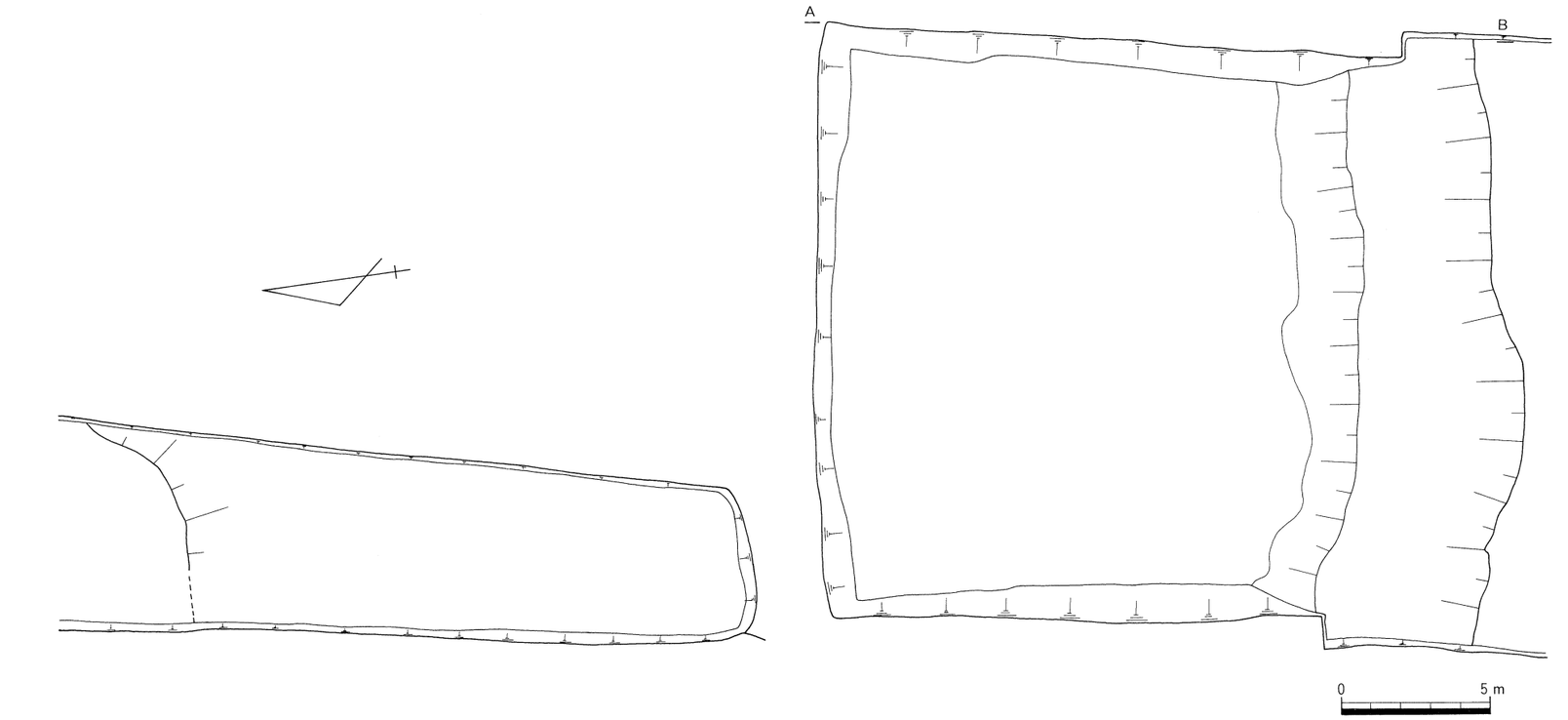
出土遺物・堆積状態から考えると，ＳＲ01は弥生時代中期以前に形成され，中期中頃から埋没が始まり，ＳＲ01のほぼ半分まで埋めてしまった。この時に多量の弥生土器と植物遺体も埋まった。次に埋没したのは古代であり，ＳＲ01はほぼ完全に埋まってしまった。その後も土の堆積は続き，近世以降は水田として利用されていた。

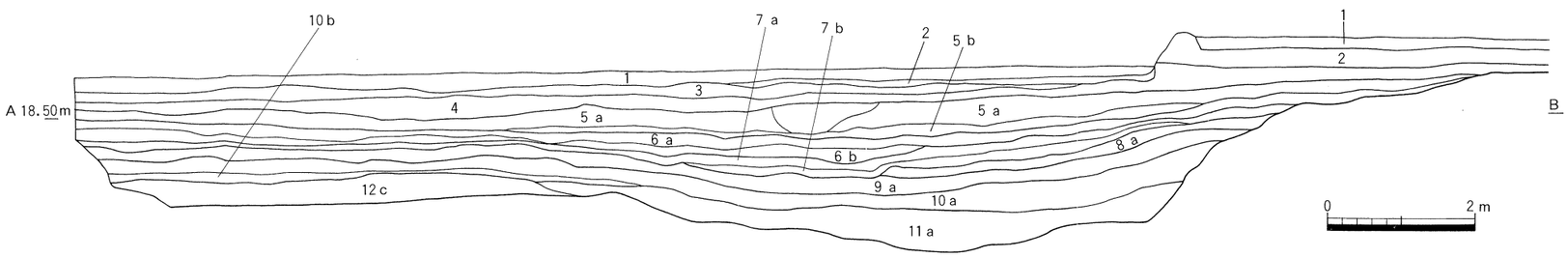
出土遺物　前述したように，遺物は，上層から出土した古代の遺物（第56図）と下層の弥生時代の遺物（第57～61図）に分かれる。

古代の遺物は，須恵器杯（１～３），同椀（５，６），同甕（７～９），同蓋（10～15），須恵質土器椀（４），ワッパの底板が出土した。これらの遺物は南岸上面からの出土である。また，南岸の南側に杭列が検出された。杭列は８本の杭をほぼ直線上に打ち込んでいた。１～３は直線的な体部とやや外反気味の口縁部である。５の高台は角張っており，６の高台は低く扁平である。10～12の蓋は，口縁部がわずかに直立する。14，15は宝珠のみである。

弥生時代の遺物は，弥生土器壺（１～23），同甕（24～５７），同鉢（58～60），同高杯（61～64），同蓋（65），同製塩土器（66～68），その他の弥生土器片，加工木，植物の種が出土した。

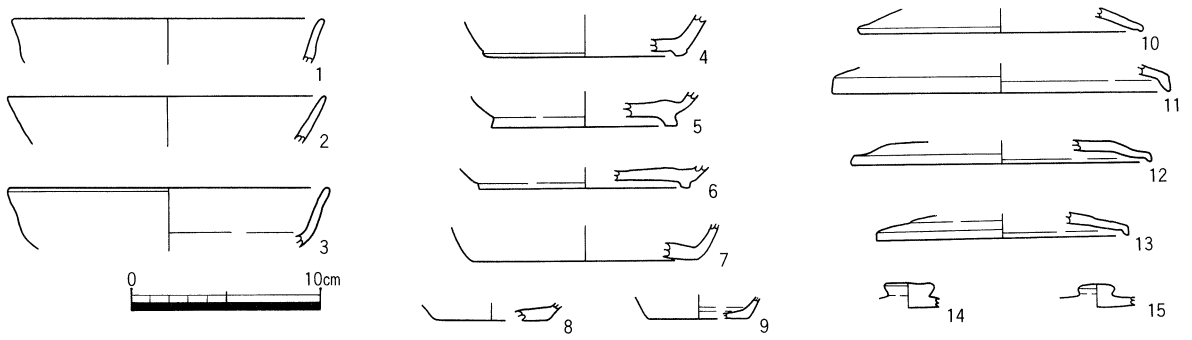
１は完形の壺である。胴部中央やや上に最大径を持ち，頸部はほぼ直立し，口縁部は大きく広がり端部が上下に拡張する。底部は平底である。口縁部の調整はヨコナデ，頸部外面は粗い刷毛目，内面はナデが施される。胴部外面上半は粗い刷毛目，中位は横方向のヘラミガキ，下位は縦方向のヘラミガキ，内面は刷毛目が施される。頸部に櫛原体による押圧文，胴部に列点文が巡る。２は外反気味に直立する頸部である。３，４は大形の壺で，口縁端部が大きく拡張し，外面に斜格子文がある。頸部外面には押圧突帯文が巡る。５～８は口縁部が大きく水平方向に広がる広口壺であり，５，６の口縁端部は下方に大きく拡張する。５の口縁内面には斜格子文，３条の列点文が施され，口縁端部は３条の凹線文が巡り，刻目文と２個一対の棒状浮文が施される。６は口縁内面に斜格子文と列点文，口縁端部に刻目文と斜格子文が描かれ，口縁部の調整はヨコナデ，頸部外面は細かいヘラミガキ，内面ヘラナデが施される。７の内面には斜格子文，口縁端部には２条の刻目文が施され，円形浮文２個が残存する。８の内面には櫛描波状文，口縁端部に刻目文が施され，内面に貼り付け突帯を有する。９は刻目文が施され，２個一対の孔を１組残存する。10は直線的に広がり口縁端部が大きく外側に拡張し平坦面に２個一対の列点文を２条，内外面に刻目文を施す。11，12は頸部外面に貼り付け突帯文を２条巡らし，外面の調整は刷毛目が施される。13は細頸壺である。14，15は内湾する口縁部で，外面に





1　現水田
2　灰白色シルト質極細砂（7.5YR 8/2　一部Feを含む）
3　淡橙色　〃　（5 YR 8/3）
4　灰褐色　〃　（5 YR 6/2）Soil
5 a 黒褐色シルト質極細砂　（5 YR 3/1）Soil
　b　〃　〃　（5 YR 3/1　粒子が粗く砂を若干含む）
6 a 褐灰色　〃　（7.5YR 4/1）Soil
　b　〃　〃　（　〃　砂を若干含む）
7 a 黒褐色　〃　（7.5YR 3/1）Soil
　b 灰褐色　〃　（7.5YR 4/2　砂を若干含み粒子が粗い）
8 a 黒褐色シルト質極細砂　（7.5YR 3/1）Soil
9 a　〃　〃　（5 YR 2/1 植物遺体を多く含む）
10 a 赤黒色　〃　（2.5YR 2/1）
　b　〃　〃　（　〃　砂を多く含む）
11 a　〃　〃　（　〃　植物遺体を含む）
12 c 砂礫層

第55図　SR01平・断面図（S：1/200、1/80）



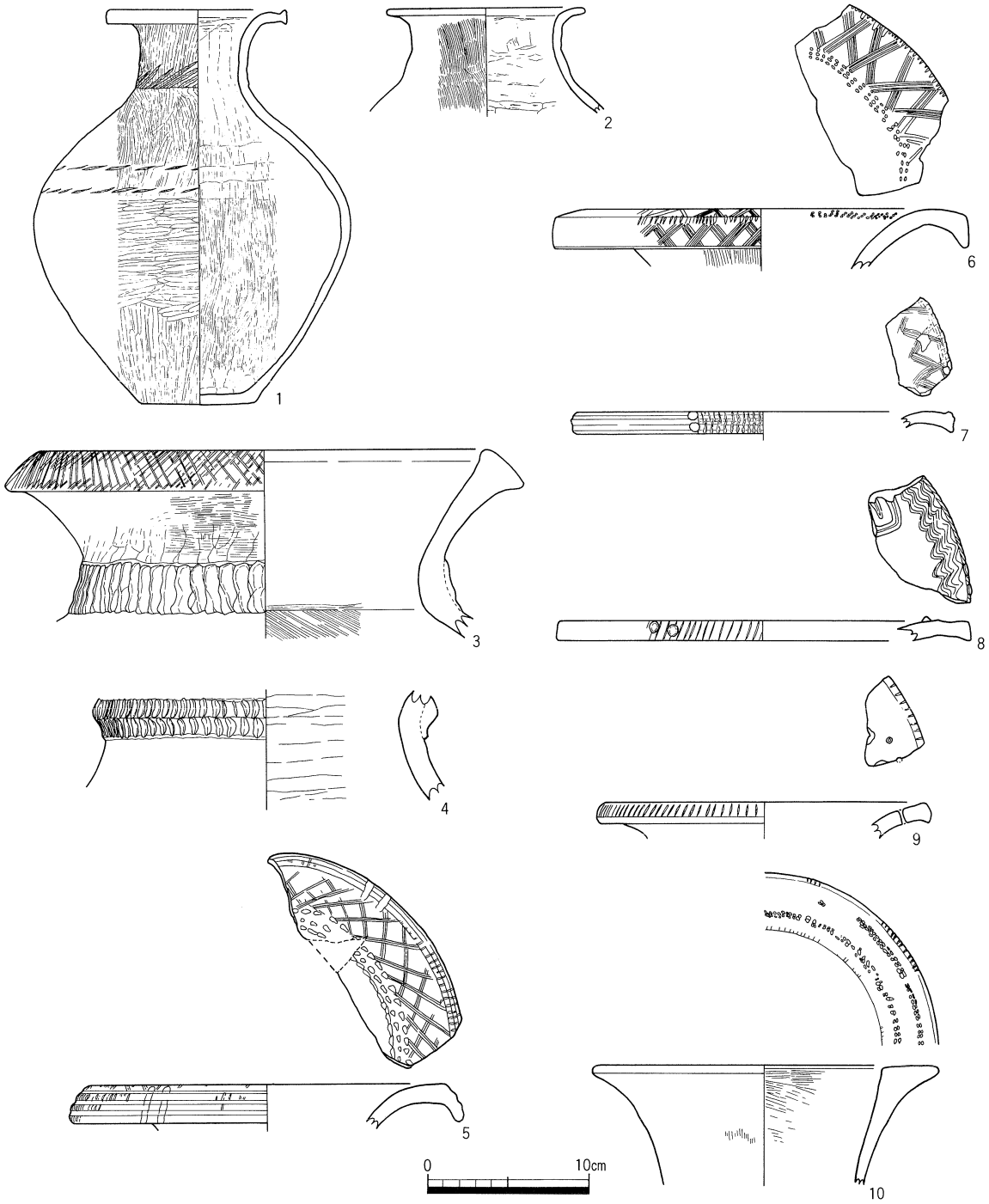
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器　杯	16.6		(2.3)	回転ナデ。口縁部若干外反	青灰5B6/1	灰白N7/	微砂
2	〃	16.8		(2.5)	回転ナデ。直線的な体部	青灰5PB6/2	明青灰5PB7/2	〃
3	〃	17.2		(3.2)	回転ナデ	灰白N7/		〃
4	須恵質　椀		10.6	(2.2)	回転ナデ。低い高台	灰白N7/		微砂多量
5	〃		9.8	(1.8)	回転ナデ。厚い底部	灰N6/		微～細砂
6	〃		11.2	(1.1)	回転ナデ。低い高台	灰N6/		微砂若干
7	須恵器　甕		12.0	(1.9)	回転ナデ。やや上げ底気味の底部	灰N5/	灰N6/	〃
8	〃		6.0	(0.9)	回転ナデ。平底	灰白N8/		〃
9	〃		5.2	(1.2)	回転ナデ。平底	灰白N7/		〃
10	須恵器　蓋	15.0		(1.3)	回転ナデ。端部が下方に屈曲する	灰白2.5Y7/1		〃
11	〃	18.0		(1.5)	回転ナデ。端部が下方に強く屈曲する	灰白2.5Y8/1		〃
12	〃	16.0		(1.2)	回転ナデ。端部が下方に屈曲する	灰白Y7/		微砂
13	〃	13.4		(1.2)	回転ナデ。	灰5Y6/1	青灰7.5Y6/1	微砂多量
14	〃			(1.3)	回転ナデ。宝珠直径2.7cm	青灰5B6/1		細砂若干
15	〃			(1.3)	回転ナデ。宝珠直径2.0cm	灰N5/		〃

第56図　SR01出土遺物(1)（S：1/4）

刻目突帯文を有する。15は口縁端部に斜格子文が描かれ，棒状浮文がある。16～18は外面に櫛描沈線，波状文が巡り，19は押圧突帯文が巡る。20～23の外面には列点文が巡る。

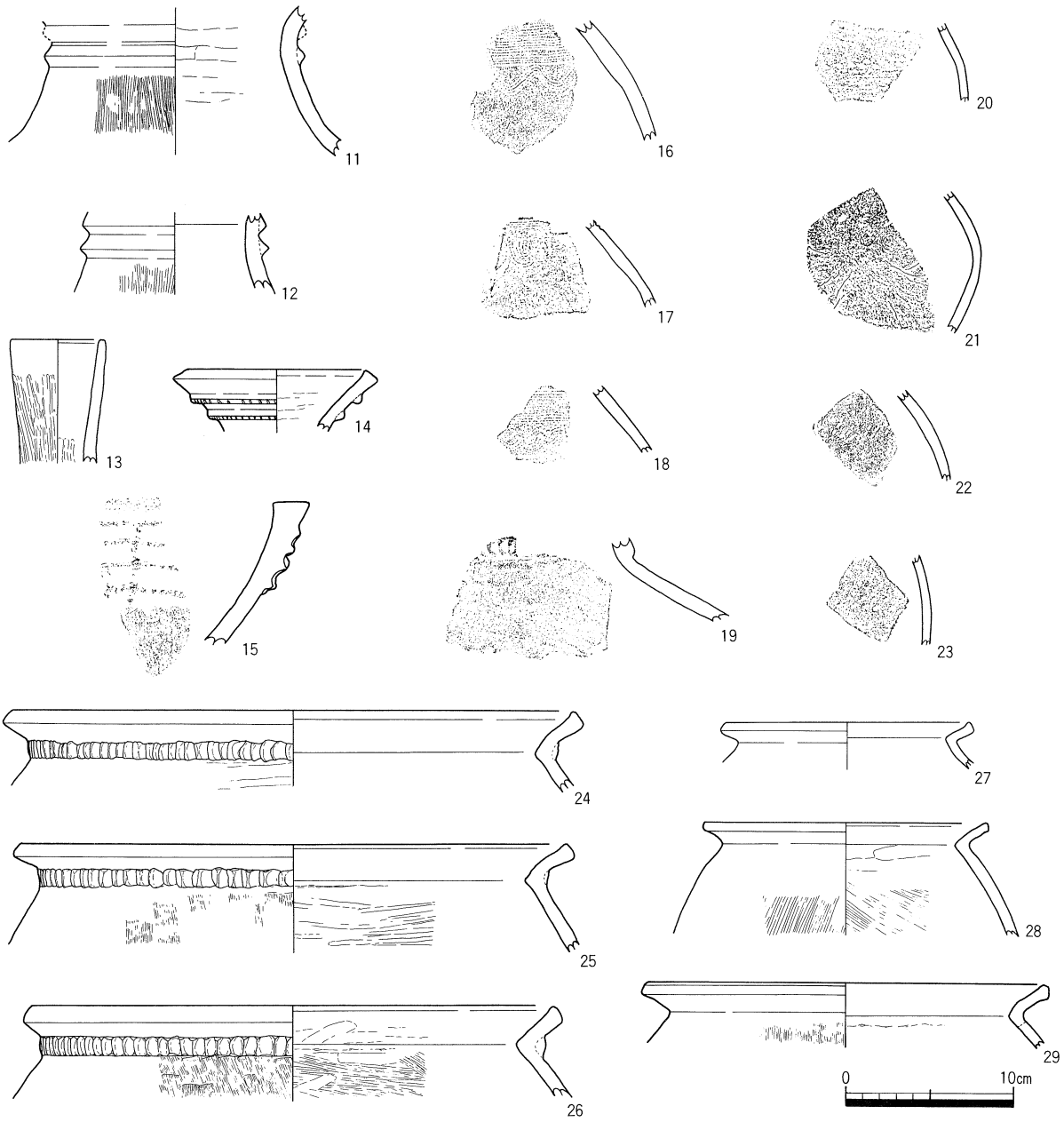
24～26は大形の甕で，外面に押圧突帯文が巡り，口縁部の調整はヨコナデが施される。24の胴部はナデ調整，25，26の外面は刷毛目，内面は板ナデが施され，輪積み痕を残す。27～29は「く」字状に外反する口縁で，口縁部はヨコナデ，胴部外面は刷毛目が施される。30，31は完形の甕で，最大径を胴部中央やや上に持つ長胴を呈し，外面に煤が付着している。30の口縁部は強く外反し，端部が若干拡張する。口縁部の調整はヨコナデ，胴部外面上半は刷毛目，下半はヘラミガキ，内面ヘラミガキとナデが施される。31は口縁端部が上下に拡張し，３条の凹線が巡る。胴部外面上半は細かい刷毛目，下半はヘラミガキ，内面は板ナデが施される。33は口縁端部が上方に屈曲しており，胴部外面に刷毛目が施され，列点文が巡る。34は「く」字状口縁で，端部が上方に拡張し外面に２条の凹線が巡る。口縁端部に刻目文，胴部外面には櫛描波状文，直線文が巡る。35は小形の甕で，口縁部内面はヘラミガキが施される。36の外面はタタキ目の後にヘラナデが施される。37の外面の調整は，上位が横方向のヘラミガキ，うすい刷毛目，中位は斜め方向のヘラミガキが施され，列点文が巡る。

38～57は底部である。38～40は平底から急傾斜で立ち上がり，胴部外面は縦方向のヘラミガキ，底部近くはヘラ削りが施され，底部外面と胴部内面はヘラ削り後にナデが施される。41～53はゆるやかな傾斜で立ち上がり，43，45，46は底径10cm未満，41，42，44，47～49は底径10～12cm，50～53は底径17～18cmを測り，大中小の３タイプの甕がある。41，42の外面はヘラ削り後にナデが施され，43，44の外面はヘラミガキ，内面は板ナデが施される。45の内外面はヘラミガキが施される。46の外面は斜め方向のヘラミガキ後に縦方向のヘラミガキ，内面はヘラナデが施される。47～49の外面は縦方向のヘラミガキ，48，49の底部近くは横方向のヘラナデ，内面はヘラ削り後にヘラナデが施される。50の内外面はヘラ削りの後に刷毛目，ナデが施される。51の外面はヘラミガキ，内面は刷毛目が施される。52の外面はヘラナデ，内面は刷毛目である。53の外面は横方向のヘラミガキが施され，内面は一部に



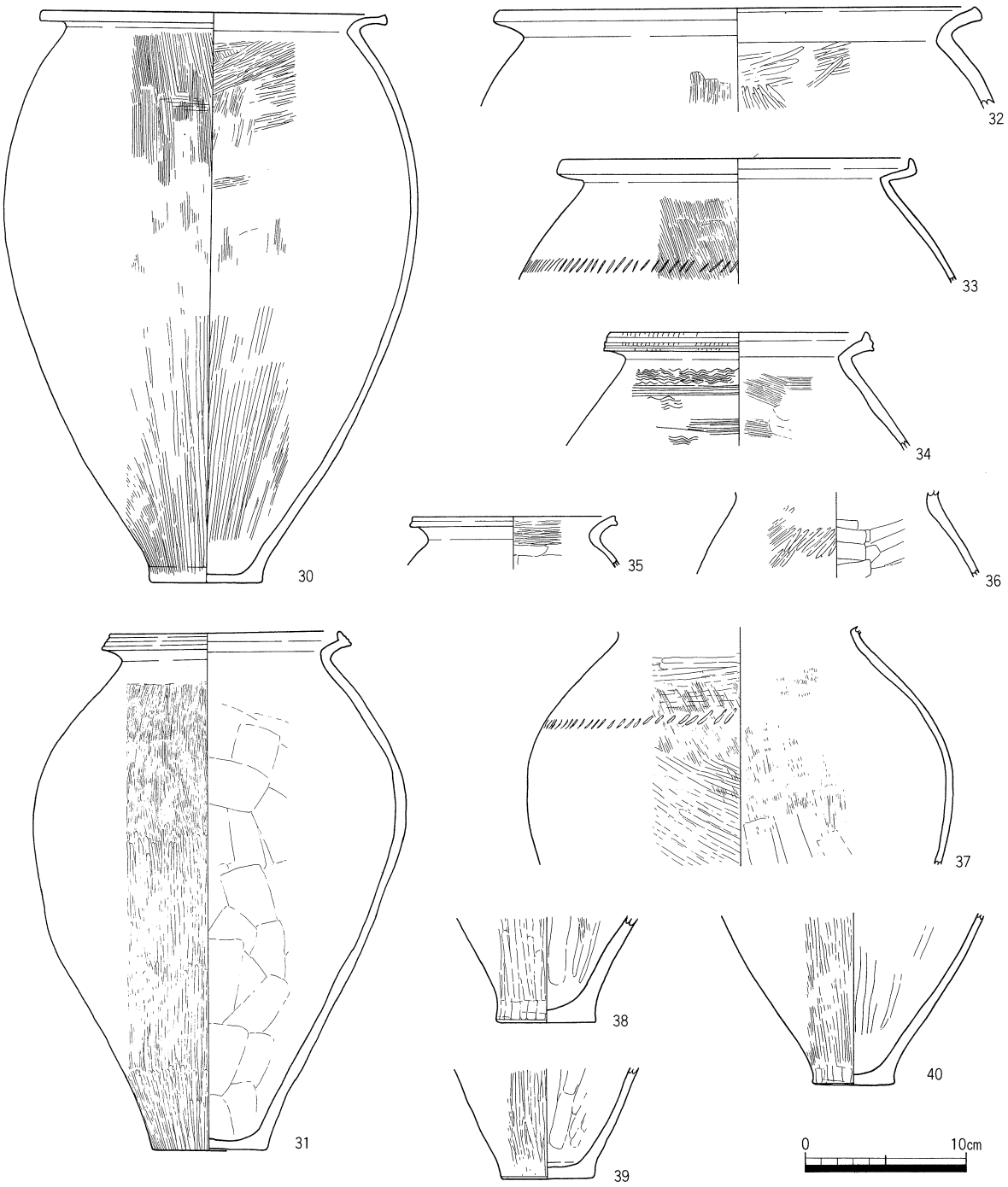
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	11.4	7.2	24.3	頸部外面刷毛目、押圧文。胴部刷毛目、ヘラミガキ、刻目文。内面刷毛目	灰黄褐10YR6/2		石英、長石、角閃石
2	〃	12.4		(6.6)	外面刷毛目。内面ナデ、ヘラ削り	灰黄褐10YR5/2		石英、長石
3	〃	28.4		(11.6)	口縁端部斜格子文。頸部外面押圧突帯文、内面刷毛目	鈍黄褐10YR5/3		石英、長石、角閃石
4	〃			(6.8)	頸部外面に押圧突帯文2条。内面ヘラナデ	明赤褐2.5YR5/6	黒褐5YR2/1	〃
5	〃	24.8		(2.7)	口縁内面列点文、斜格子文。端部凹線3条、刻目文、棒状浮文	灰褐10YR5/2		〃
6	〃	26.0		(3.8)	口縁内面列点文、斜格子文。端部刻目文、斜格子文	黄灰2.5Y4/1		石英、長石
7	〃	24.0		(1.4)	口縁内面斜格子文。端部刻目文2条、円形浮文	黒5Y2/1	オリーブ黒5Y3/1	石英、長石、角閃石
8	〃	26.0		(1.5)	口縁内面櫛描波状文9条。貼付突帯。端部刻目文、円形浮文	黒褐10YR3/1	褐灰10YR4/1	〃
9	〃	21.0		(2.2)	口縁端部刻目文。2個一対の円孔	灰白2.5Y8/1	灰黄2.5Y6/2	〃
10	〃	21.8		(7.4)	口縁端部列点文、刻目文。外面刷毛目、内面板ナデ	灰黄2.5Y7/2		〃

第57図　SR01出土遺物(2)（S：1／4）



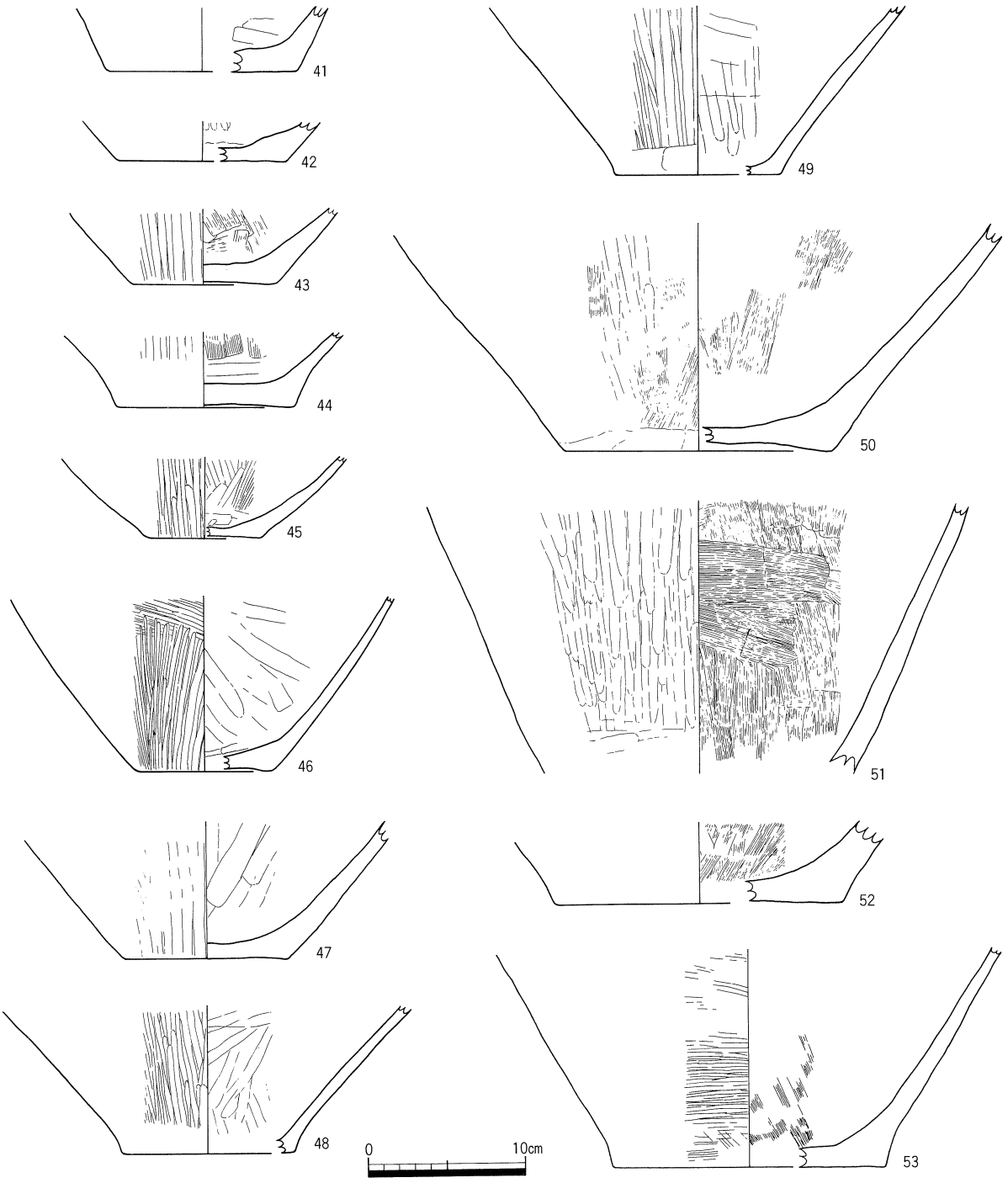
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
11	弥生土器　壷			(9.0)	頸部外面貼付突帯文２条、刷毛目。内面ヘラミガキ	鈍黄橙10YR6/3		石英、長石、角閃石
12	〃			(4.8)	頸部外面貼付突帯文２条、刷毛目	灰白2.5Y8/2	黄灰2.5Y6/1	〃
13	〃	5.6		(7.4)	口縁部ヨコナデ。頸部外面ていねいなヘラミガキ	黒10YR2/1	灰黄褐10YR6/2	微砂若干
14	〃	12.2		(3.7)	口縁部外面刻目突帯文２条	暗灰黄2.5Y5/2		石英、長石、粗砂
15	〃			(8.5)	内面ヘラミガキ、外面刻目突帯文３条。棒状浮文。端部斜格子文	灰黄褐10YR5/2	褐灰10YR5/1	〃
16	〃			(7.2)	外面櫛描沈線、波状文	褐灰10YR5/1	褐灰10YR6/1	〃
17	〃			(5.5)	外面沈線２条、ヘラナデ、ヘラミガキ。内面指頭圧痕	黒10YR2/1	〃	微砂
18	〃			(3.9)	外面櫛描沈線、波状文	オリーブ黒5Y3/1	灰黄褐10YR5/2	石英、長石、角閃石
19	〃			(5.0)	外面に押圧突帯文、刷毛目後にヘラミガキ、内面指頭圧痕	灰黄2.5Y6/2		〃
20	〃			(4.5)	外面列点文、ナデ、ヘラミガキ	黒褐10YR2/3	黒10YR7/1	〃
21	〃			(8.5)	外面列点文、刷毛目後にナデ、ヘラミガキ	鈍黄橙10YR6/4	灰黄褐10YR4/2	〃
22	〃			(6.0)	外面列点文、刷毛目、ヘラミガキ。内面指頭圧痕	黒褐10YR3/1	灰黄褐10YR4/3	〃
23	〃			(5.2)	外面列点文、ナデ、ヘラミガキ	黒10YR2/1	褐灰10YR5/1	〃
24	弥生土器　甕	33.8		(4.8)	口縁端ヨコナデ、頸部外面押圧突帯文	暗灰黄2.5YR4/2		〃
25	〃	32.8		(6.4)	頸部押圧突帯文。胴部外面刷毛目。内面板ナデ	灰黄褐10YR5/2		石英、長石
26	〃	33.4		(5.5)	〃	暗灰黄2.5YR5/2		石英、長石、角閃石
27	〃	14.6		(2.8)	外面ヨコナデ。内面ヘラナデ	オリーブ黒5Y3/1	暗灰黄2.5YR5/2	微砂
28	〃	16.8		(6.7)	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。内面ヘラナデ、刷毛目	黄灰2.5Y6/1	黒褐2.5YR3/1	石英、長石
29	〃	24.0		(3.8)	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。輪積み痕	灰黄褐10YR4/2		石英、長石少量

第58図　SR01出土遺物(3)（S：1／4）



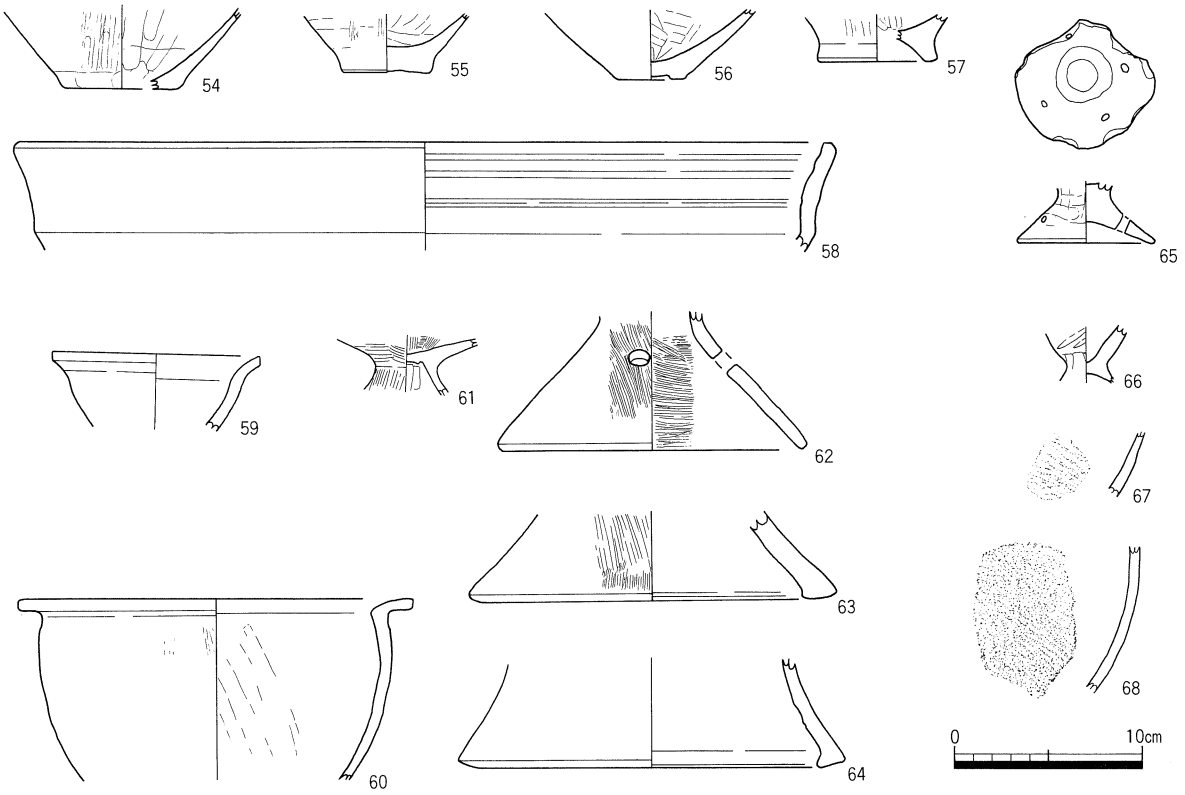
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
30	弥生土器 甕	21.2	6.8	35.8	平底。胴部外面刷毛目、ヘラミガキ。内面ヘラミガキ	黒褐10YR3/1	灰黄褐10YR5/2	石英、長石
31	〃	14.3	7.2	32.4	口縁端部凹線３条。胴部外面刷毛目、ヘラミガキ。内面板ナデ	灰黄褐10YR6/2		〃
32	〃	29.8		(6.4)	胴部外面板ナデ、ナデ。内面ヘラナデ後にヘラミガキ	暗灰黄2.5Y5/2	灰黄褐10YR6/2	〃
33	〃	21.4		(7.7)	口唇部上方に屈曲。胴部外面刷毛目、列点文。内面ナデ	オリーブ黒5Y3/1	黄褐2.5Y5/3	細～粗砂
34	〃	16.0		(7.3)	口縁端部凹線２条、刻目文。胴部櫛描波状文、直線文	鈍黄褐10YR5/3		石英、長石、角閃石
35	〃	12.6		(3.2)	口縁端部凹線１条。口縁内面ヘラミガキ。胴部内面ヘラ削り	黄褐2.5Y5/3		微砂、細礫
36	〃			(5.3)	胴部外面タタキ目後にヘラミガキ、ナデ。内面ヘラ削り	灰白5Y8/2		微砂若干
37	〃			(14.6)	胴部外面ヘラミガキ、刷毛目、列点文。内面刷毛目、ヘラミガキ	灰黄褐10YR5/2		石英、長石、角閃石
38	〃		6.0	(7.1)	平底。外面ヘラミガキ、ヘラ削り後にナデ。内面ヘラ削り後にナデ	黒褐10YR3/1		粗砂、細礫
39	〃		5.6	(6.8)	平底。外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り後にナデ	オリーブ黒5Y3/2		細砂
40	〃		5.0	(10.8)	平底。外面ヘラミガキ後にナデ。内面ヘラ削り後にナデ	鈍黄褐10YR5/3		細～粗砂多量

第59図　SR01出土遺物(4)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
41	弥生土器 甕		12.0	(4.3)	平底。外面ヘラ削り後にナデ	鈍黄橙10YR6/3		石英、長石
42	〃		10.6	(2.5)	平底	灰黄2.5YR7/2		〃
43	〃		9.0	(4.8)	若干上げ底。外面ヘラミガキ。内面板ナデ	灰白5Y8/2	黒10YR2/1	石英、長石、角閃石
44	〃		11.4	(4.7)	若干上げ底。外面ヘラミガキ、ナデ。内面板ナデ	灰黄褐10YR5/2	灰白5Y7/2	〃
45	〃		6.8	(5.1)	若干上げ底。外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ、ナデ	黒10YR2/1		〃
46	〃		8.6	(10.9)	若干上げ底。外面ヘラミガキ。内面板ヘラナデ	オリーブ黒5Y3/1	褐灰10YR5/1	〃
47	〃		10.6	(8.6)	平底。外面ヘラミガキ後にナデ。内面、底部ヘラ削り後にナデ	暗灰黄2.5Y5/2		〃
48	〃		11.0	(9.3)	外面ヘラミガキ、ヘラナデ。内面ヘラナデ	黒褐10YR3/1	灰黄褐10YR5/2	〃
49	〃		10.4	(10.6)	平底。外面ヘラミガキ後にナデ。内面、底部ヘラ削り後にナデ	灰黄褐10YR5/2		石英、長石多量
50	〃		17.0	(14.3)	外面ヘラ削り、刷毛目後にナデ。内面ヘラ削り後に刷毛目	灰黄褐10YR4/2		〃
51	〃			(17.0)	外面ヘラミガキ、ナデ。内面刷毛目	〃	褐灰10YR5/1	石英、長石、角閃石
52	〃		18.0	(5.1)	外面ヘラナデ。内面刷毛目	灰黄褐10YR6/2	黒褐10YR3/1	〃
53	〃		17.0	(18.0)	平底。外面ヘラミガキ。内面刷毛目。底部ヘラミガキ、ナデ	灰白2.5Y8/2	灰黄2.5Y7/2	石英、長石

第60図　SR01出土遺物(5)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
54	弥生土器　甕		6.0	(4.3)	外面ヘラミガキ、ヘラ削り。内面ヘラ削り	褐灰10YR4/2		石英、角閃石
55	〃		4.6	(3.1)	外面板ナデ、ヘラナデ。底部指頭圧痕、ヘラナデ	灰白2.5Y8/1		微砂若干
56	〃		3.7×3.3	(3.6)	内面ヘラナデ、ヘラ削り。底部にワラの痕有り。	黒5Y2/1	鈍黄橙10YR7/2	微～細砂
57	〃		6.4	(2.3)	外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り。高台	灰黄褐10YR5/2		石英、微～細砂
58	弥生土器　大鉢	43.4		(5.7)	口縁部ヨコナデ。内面にわずかな凹線	灰黄褐10YR6/2		石英、長石、角閃石
59	弥生土器　鉢	11.0		(4.0)	口縁部ヨコナデ。内面ヘラナデ	灰白2.5Y7/1		微砂若干
60	〃	21.0		(9.6)	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラナデ後にナデ	明灰黄2.5Y4/2		微～細砂多量
61	弥生土器　高杯			(3.0)	外面ヘラミガキ。杯部内面ヘラミガキ。脚部内面ヘラ削り	黒褐2.5Y3/1	褐灰10YR5/2	石英、長石、角閃石
62	〃		16.0	(7.3)	内外面刷毛目。円孔１個	浅黄2.5Y7/3	鈍黄褐10YR6/3	石英、長石
63	〃		19.6	(4.7)	外面ヘラミガキ。内面ナデ	黒10YR2/1	黄灰2.5Y4/1	細～粗砂
64	〃		20.6	(6.0)	内外面摩耗	鈍黄橙10YR6/3		〃
65	弥生土器　蓋		7.3	(3.2)	外面ヘラ削り後にヘラナデ。円孔４個	灰黄2.5Y6/2	鈍黄2.5Y6/3	石英、長石
66	弥生土器　製塩土器			(3.0)	外面タタキ目、ヘラ削り	浅黄2.5Y7/3		〃
67	〃			(3.5)	外面タタキ目	灰白5Y7/1		〃
68	〃			(8.0)	外面タタキ目後に刷毛目。内面ヘラ削り	灰黄2.5Y7/2		〃

第61図　SR01出土遺物(6)（S：1/4）

刷毛目が見られる。底部外面は，47がヘラ削り後にナデ，53の中央はナデ，周辺にはヘラミガキが施されるが，その他はナデである。54～57は底径６cm未満で，56の底部外面にワラ状の押圧痕が残る。

58は口径43.4cmを測る大鉢であり，内面に擬凹線が数条巡る。59は口縁部が水平に広がり，半球形の体部である。60は小形の鉢で，口縁部はゆるやかに外反する。

61の外面，杯部内面はヘラミガキが施される。62の内外面とも刷毛目が施され，円孔１個が残存する。63の外面はヘラミガキである。

65は口径7.3cmを測る蓋であり，上部を欠損する。４個の円孔が等間隔に見られる。

66は脚台を持つ製塩土器で，外面に平行タタキ目，ヘラ削りが施される。67の外面は平行タタキ目，68は平行タタキ目後に刷毛目が施される。

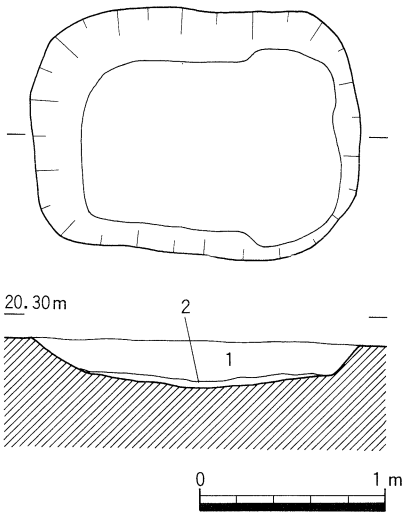
2）近世

1．土坑

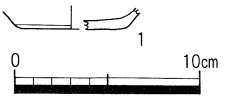
ＳＫ03（第62・63図）

Ｂ－２地区中央南寄りにおいて単独で検出された土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し，1.75×1.30ｍの規模である。確認面のレベルは標高20.15ｍである。掘り込みはゆるやかであるが，一隅だけは急傾斜となっている。深さは0.20ｍである。底面は中央部がわずかに低くなっている。埋土は底面直上に灰白色細～中砂がうすく堆積している。

出土遺物　埋土中より土師質土器杯（１）の小片が出土した。底径5.6㎝を測る平底の杯である。



第62図　SK03平・断面図（Ｓ：１/40）



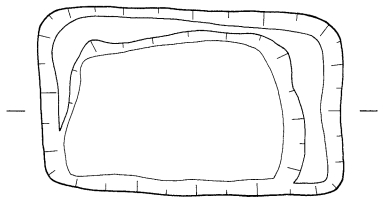
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器　杯		6.0	(0.9)	回転ナデ	鈍器橙10YR7/4		粗砂

第63図　SK03出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ04（第64・65図）

Ｂ－２地区のＳＤ08の北側にある土坑である。平面形は長方形を呈し，1.60×0.98ｍを測る。確認面のレベルは標高20.40ｍである。掘り込みの深さは0.30ｍである。底部に段を有し中央部が低くなる。埋土は灰褐色シルト質細砂である。

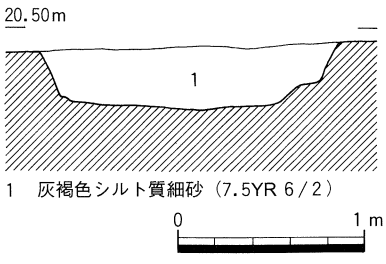
出土遺物　埋土より石鏃（１）と数点の陶磁器片が出土した。



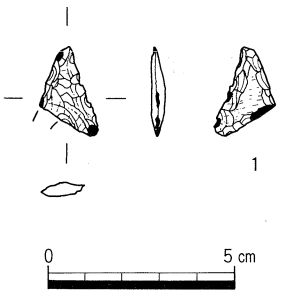
ＳＫ05

Ｂ－２地区南部にある土坑である。平面形は，1.75×1.00ｍを測る楕円形である。確認面のレベルは標高20.40ｍである。深さは0.20ｍで，埋土は灰白色シルト質細砂である。

出土遺物はなかった。



第64図　SK04平・断面図（Ｓ：１/40）



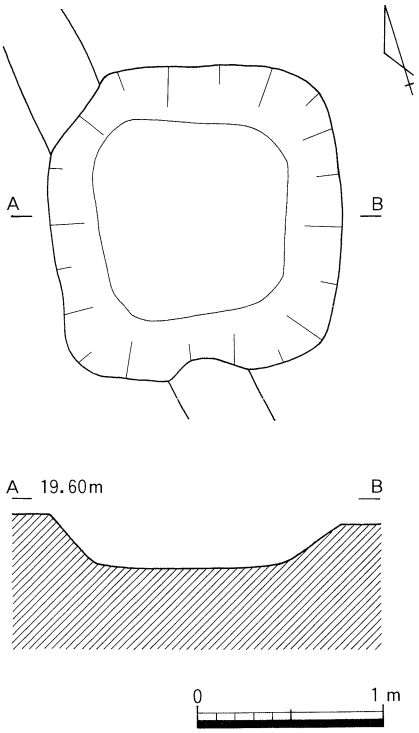
番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
1	石鏃	2.4	(1.5)	0.3	1.0	サヌカイト	凹基式。左側逆刺を欠損。両側縁は両面から調整

第65図　SK04出土遺物（Ｓ：１/２）

ＳＫ06（第66図）

Ｂ－２地区北部において検出された土坑である。平面形は1.65×1.55ｍのほぼ正方形を呈す。確認面のレベルは標高19.50ｍである。掘り込みはゆるやかであり，深さは0.25ｍである。底面は平坦である。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

出土遺物は数点の陶磁器片のみであった。



第66図　SK06平・断面図（Ｓ：１/40）

ＳＫ07（第67図）

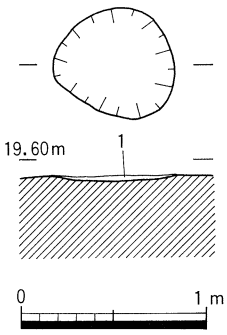
Ｂ－２地区北部でＳＫ08の北側の土坑である。平面形は0.60×0.65ｍの不整な円形である。確認面のレベルは標高19.50ｍである。深さは５㎝で埋土は灰白色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。

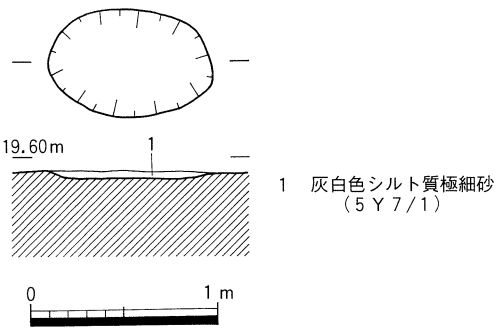
ＳＫ08（第68図）

Ｂ－２地区北部でＳＫ07南側にある土坑である。平面形は0.57×0.87ｍを測る楕円形を呈す。確認面のレベルは標高19.50ｍである。深さは５㎝で，埋土は灰白色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。



第67図　SK07平・断面図（Ｓ：１/40）



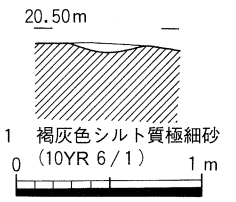
第68図　SK08平・断面図（Ｓ：１/40）

２．溝

ＳＤ10（第69図）

Ｂ－２地区南部でＳＤ08・09の南側において検された溝である。確認面のレベルは標高20.40ｍ前後である。溝はＳＤ08に平行して若干湾曲しながら北西－南東方向に延びている。南端，北端とも後世の削平によって消滅している。溝上場の幅は0.40ｍを測り，深さは４㎝で，断面は船底形を呈す。底面のレベルはほぼ均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

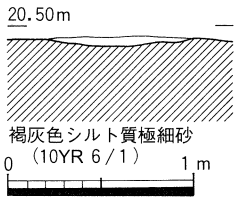
出土遺物はなかった。



第69図　SD10断面図
（Ｓ：１/40）

SD11（第70図）

B－2地区南部でSD09の南側において検出された溝である。確認面のレベルは標高20.40m前後である。溝の方向はほぼ南北である。溝上場の幅は，0.80m前後を測り，深さは5cmである。溝の断面は中央部がやや深く船底形を呈している。底面のレベルはほぼ均一である。埋土は単一層である。出土遺物はなかった。



第70図　SD11断面図（S：1/40）

SD12

B－2地区中央やや南寄りで検出された。確認面のレベルは標高20.15mであり，溝の幅は0.20m，深さは3cmを測る。方向は東西方向である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

SD13

B－2地区中央南寄りで検出された。確認面のレベルは標高20.15mである。平面形はやや湾曲しながら東西方向に延びる。幅は0.20m，深さは3cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

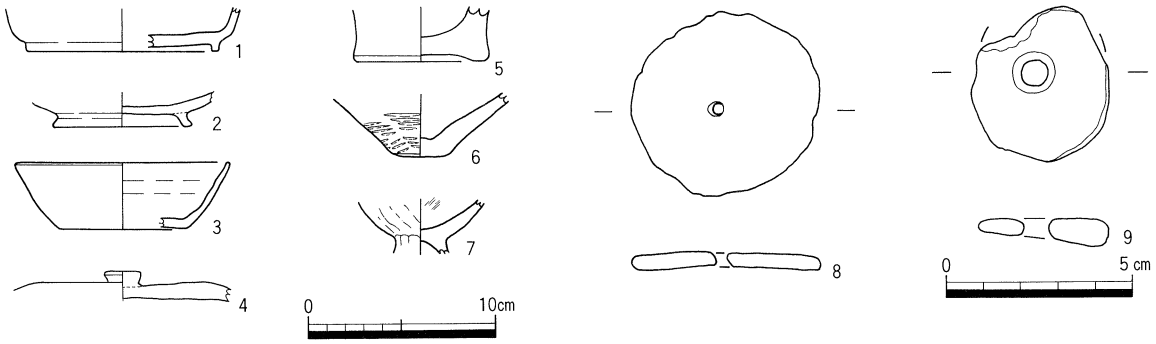
SD14

B－2地区中央やや南寄りにおいて検出された。直線的で東西方向に延びる。確認面のレベルは標高20.15mである。溝の幅は1.30m，深さは5cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

3）包含層出土遺物（第71・72図）

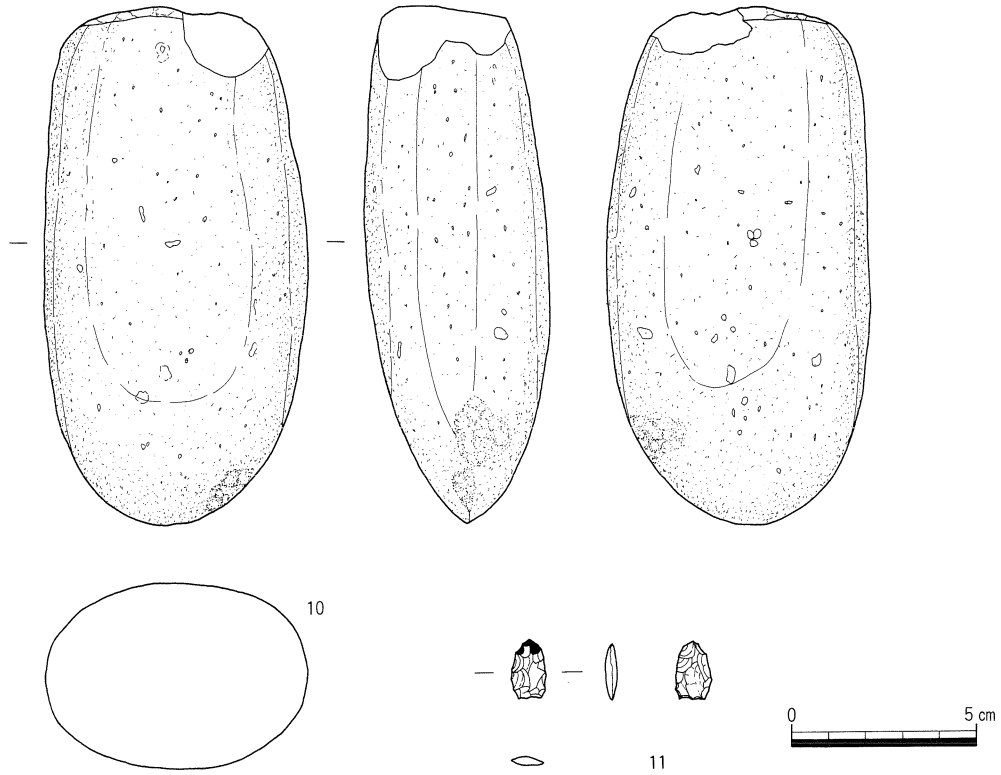
第1面上層及び直上より出土した遺物で図化できたのは少数である。1は須恵器椀，3同杯，4同蓋である。2は土師質土器椀である。5は弥生土器甕，6は同鉢，7は同製塩土器である。8．9は弥生土器片を再利用した紡錘車である。

10は第1面直上より出土したほぼ完形の太型蛤刃石斧，11はサヌカイト製の平基式石鏃である。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器　椀		10.4	(2.2)	回転ナデ	灰N6/	褐灰5YR6/1	微砂
2	土師質土器　椀		7.5	(1.8)	回転ナデ。高い高台	淡黄2.5Y7/3	黒2.5Y2/1	微砂
3	須恵器　杯	11.6	6.8	3.6	回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	灰白7.5Y7/1	灰7.5Y6/1	微砂若干
4	須恵器　蓋			(1.5)	回転ナデ。宝珠直径2cm	緑灰10GY5/1	オリーブ灰5GY 6/1	微砂
5	弥生土器　甕		6.8	(2.9)	上げ底。外面ヘラナデ	橙5YR7/6	鈍黄橙10YR7/2	石英、長石、角閃石
6	〃		3.0	(3.4)	外面平行タタキ目、ナデ。底部ヘラナデ	鈍黄橙10YR7/4	灰白2.5Y8/1	〃
7	弥生土器　製塩土器			(3.0)	外面ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/3	褐灰7.5YR4/1	〃
8	紡錘車	4.9×5.1　厚0.7			中央に直径0.4cmの孔	橙2.5YR6/8	鈍赤褐5YR5/3	石英、長石
9	〃	3.7　厚0.7			中央に直径1.0cmの孔	鈍黄橙10YR7/3	褐灰10YR6/1	〃

第71図　包含層出土遺物(1)（S：1/4、1/2）



番号	器　種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材　質	特　徴
10	蛤刃石斧	13.8	7.0	4.9	71.99	砂岩	完形。全面にていねいな研磨。基端部に敲打痕
11	石鏃	1.6	1.0	0.3	0.50	サヌカイト	平基式。五角形状を呈す小形の石鏃

第72図　包含層出土遺物⑵（S：1／2）

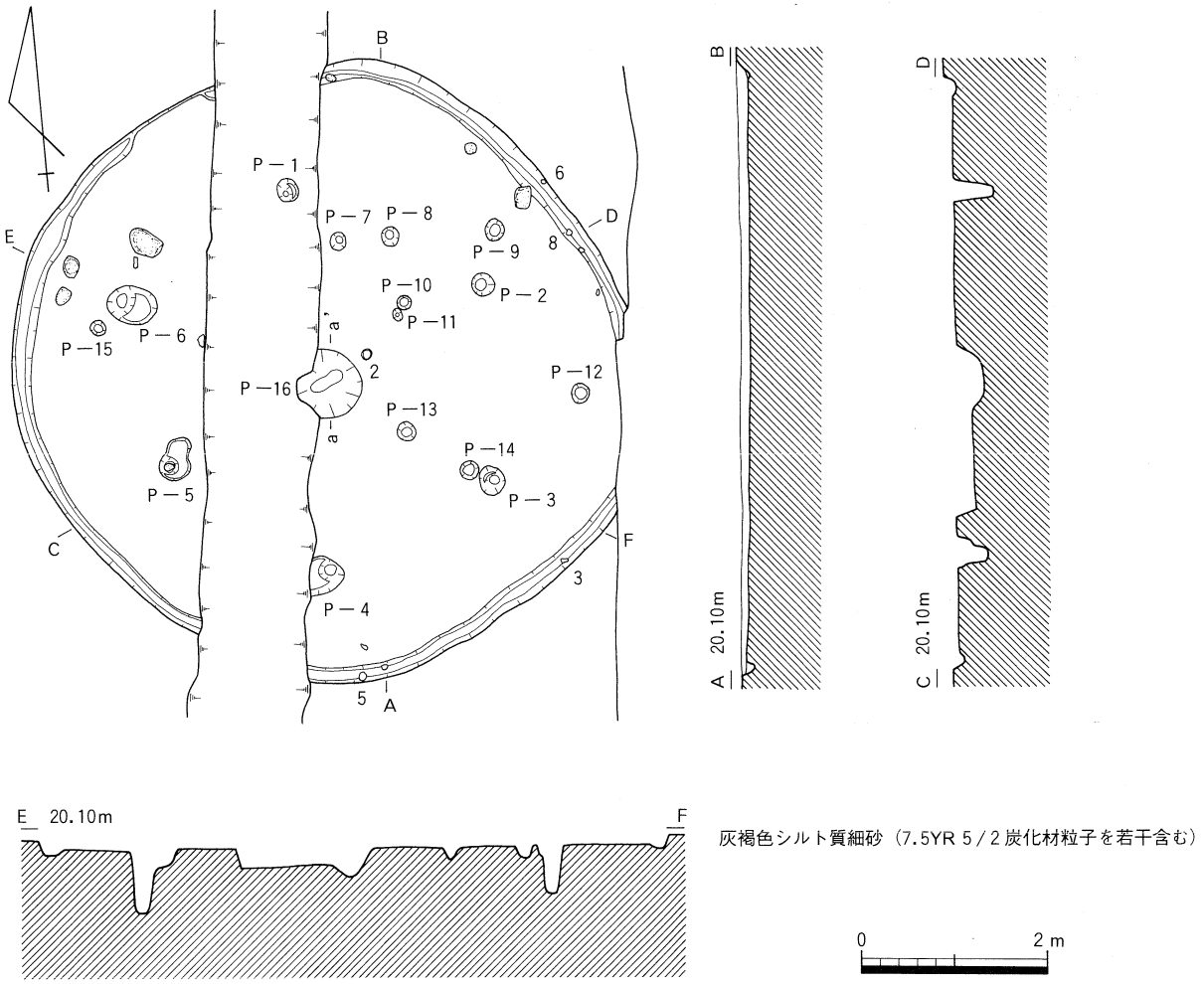
⑵　第２面

１）弥生時代

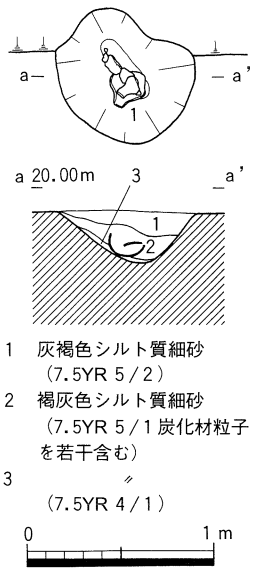
１．住居址

ＳＨ06（第73～75図）

Ｂ－２地区中央部の北東寄りにおいて検出した竪穴住居である。住居の中央は南北方向に試掘調査のトレンチが掘削され，さらに東側の一部は調査区域外である。住居の平面形は円形を呈し，その直径は6.30～6.50ｍを測る。確認面のレベルは標高20.00ｍ前後である。掘り込みは急傾斜であり，床面までの深さは0.10ｍ前後である。床面は直床であり，全体的に軟弱である。床面のレベルは，中央部と西側部がやや低くなっているが，全体としては平坦である。ピットはＰ－１～15の15個検出されるが，その位置，規模から考えてＰ－１～６が主柱穴である。柱穴の規模は0.25～0.55ｍを測り，円形ないし楕円形を呈する。Ｐ－４～６が楕円形であり，浅い段を有する。柱穴の深さは0.42～0.67ｍを測る。Ｐ－５は底面に根石を残している。Ｐ－７～15は直径0.15～0.20ｍの円形で，深さは0.42～0.67ｍを測る。住居の中央には直径0.74ｍを測る円形のピットが検出された。断面は船底形をなし，床面からの深さは0.30ｍである。ピットの埋土は灰褐色シルト質細砂，炭化材粒を若干含む褐灰色シルト質細砂，褐灰色シルト質細砂であり，底面直上から壷（１）が出土した。炉址と認識できる。床面周縁には幅0.15ｍ，深さ５㎝前後の壁溝がほぼ全周している。住居の北西部よりＳＤ18が北流しており，排水溝と考えられる。埋土は炭化材粒子を若干含む灰褐色シルト質細砂の単一層である。



第73図　SH06平・断面図（S：1/80）



第74図　SH02 P－16
平・断面図
(S：1/40)

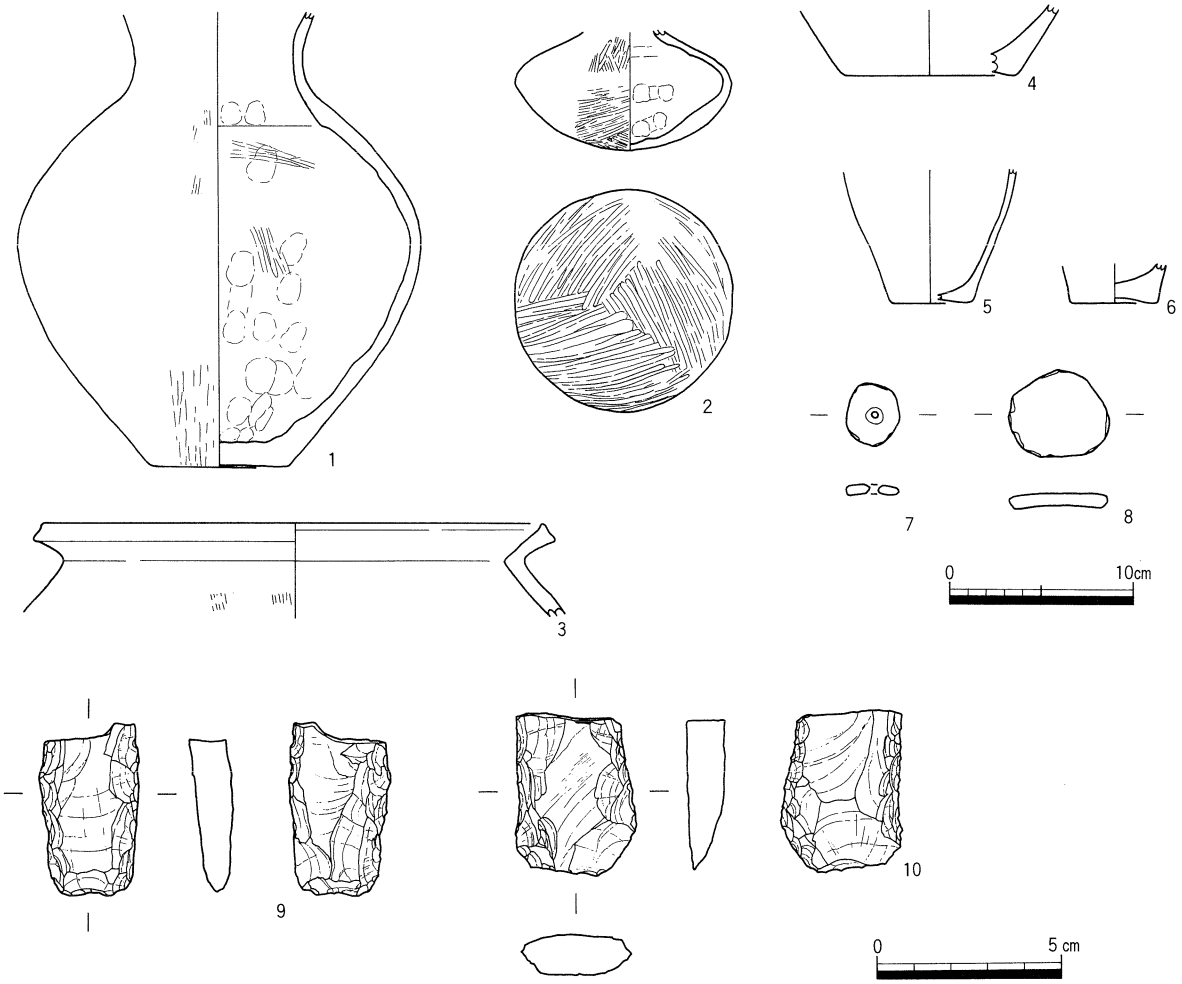
出土遺物　住居の全域から遺物が出土したが，炉址周辺と壁溝上面に集中している。P－6の周囲にはやや大きい自然石が4個出土した。遺物は，弥生土器壺（1，2），同甕（3～6），紡錘車（7，8），石槍（9，10）であり，これらの遺物のほとんどは，床面直上からの出土である。

1は口縁部を欠損する壺である。底部は平底で器壁が厚い。頸部は胴部からほぼ直立する。外面は磨滅しているため調整は不明だが，一部に縦方向のヘラミガキが残存する。内面は指頭圧痕の後に部分的なヘラミガキが施される。2は頸部以上を欠損する細頸壺である。胴部は低い器高で中央が大きく張った，いわゆる算盤玉形を呈す。胴部下半の器壁は厚くなる。胴部外面の調整は，上半が縦方向のヘラミガキ，中央ヘラミガキ，下半は3方向からの丁寧なヘラミガキが施される。内面上半は指ナデ，下半は指頭圧痕が残る。

3は口縁部が「く」字状に鋭角に屈曲し，口縁端部は上下に若干拡張し，外面に凹線が巡る。口縁部はヨコナデ，胴部外面は一部に太い刷毛目，内面にはナデが施される。4～6は上げ底の底部で，ナデ調整である。5は器壁が非常に薄く，急傾斜で立ち上がる。

7は中央に両面穿孔の孔を有し，8は未製品である。

9，10は尖頭部を欠損する。尖頭部から基部にかけて両面からの細かい調整により鋭利な刃部を作る。9の両側縁は並行だが，10は右側縁が膨らみ左右対称でない。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器 壷		7.4	(24.0)	平底。外面摩滅一部にヘラミガキ。内面指頭圧痕	灰白2.5Y7/1	黄灰2.5Y5/1	石英、長石
2	弥生土器 細頸壷			(6.3)	算盤球形の胴部。外面ていねいなヘラミガキ。内面指頭圧痕	褐7.5YR4/3	黒7.5YR2/1	長石、角閃石
3	弥生土器 甕	27.0		(4.9)	口縁端部拡張。口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目	暗灰黄2.5Y5/2	灰白2.5Y7/1	石英、長石、角閃石
4	〃		9.0	(3.5)	上げ底。ナデ	鈍黄橙10YR7/4	灰白2.5Y7/1	〃
5	〃		4.7	(7.1)	上げ底。ナデ	灰褐7.5YR5/2	褐灰7.5YR6/1	長石、角閃石
6	〃		4.8	(7.1)	上げ底。ナデ	鈍褐5YR6/4	橙5YR6/6	石英、長石
7	紡錘車				中央に直径0.8cmの孔	灰白10YR8/1		〃
8	〃				未製品	灰白10YR8/2		微砂

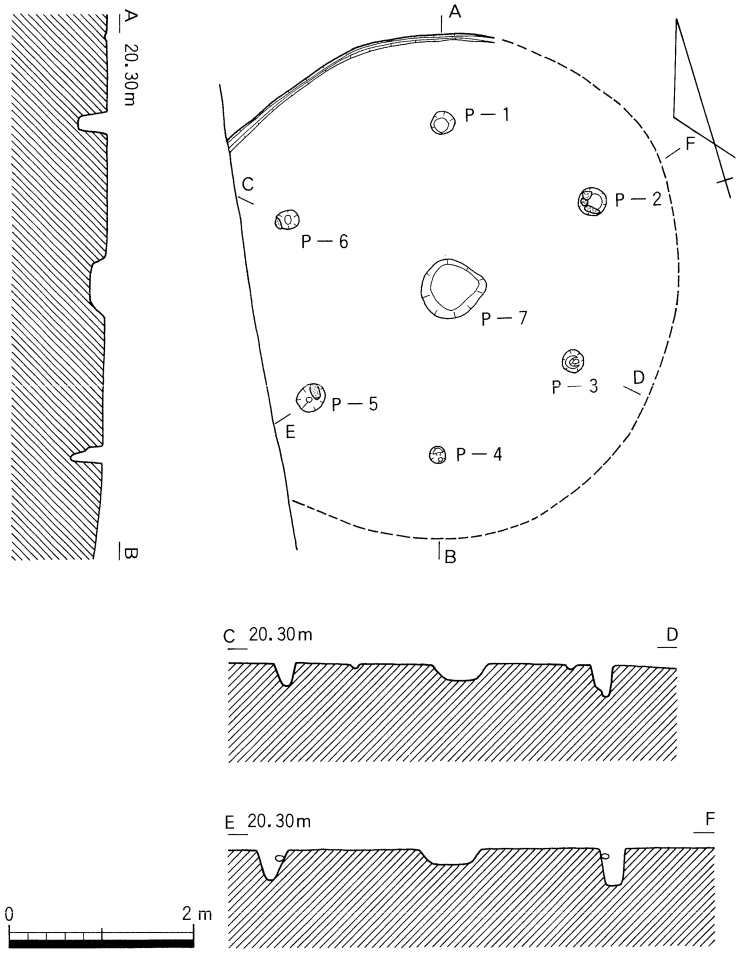
番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
9	石槍	4.1	2.6	1.0	17.60	サヌカイト	尖頭部欠損。両面からの調整。
10	〃	4.1	3.0	1.0	21.20	〃	尖頭部欠損。両面からの細かい調整により鋭利な縁辺部をなす

第75図　SH06出土遺物（S：1/4、1/2）

ＳＨ07（第76･77図）

Ｂ－２地区ほぼ中央西寄りにおいて検出された竪穴住居であり，不規則に点在する多数のピットと重複する。ピット群との新旧関係は不明である。

後世の削平により壁溝・床面の一部と柱穴のみ残存する。確認面のレベルは標高20.20ｍ前後である。残存する壁溝を基に復原される住居の平面形は円形であり，壁溝とＰ－１の距離が約0.80ｍを測る事を参考にして推定される規模は，直径5.40ｍである。床面は北側のみ残存するが，残存部は直床である。床面の状態は軟弱である。後世の削平の影響であると考えられる。住居の範囲内には，ピット群と重複するため多数のピットが検出されたが，位置や規模から考えてＰ－１～６の６個が主柱穴である。柱穴の規模は直径0.25～0.30ｍを測り，深さは0.30～0.40ｍである。平面形は円形である。Ｐ－３，４は掘り込みにわずかな段を有し，Ｐ－２，５，６には柱の横部を止める詰石が残存する。詰石の数はＰ－２が３個，他は１個である。柱穴は，ほぼ等間隔で円を描いて位置している。これらの柱穴に囲まれた住居の中央部に直径0.65ｍを測る土坑が検出された。平面形は，東側の一部が角ばる円形である。深さは0.15ｍであり，掘り込みは北東部が急傾斜であるが，他はゆるやかである。底面はほぼ平坦である。埋土は，上位に褐灰色シルト質細砂が厚く堆積し，底面直上にやや黒色を呈す褐灰色シルト質細砂がうすく堆積している。埋土中に数点の土器片が出土した。壁溝は北側のみの検出であるが，弧状を呈する。壁溝の幅は８㎝，深さ２㎝を測る。

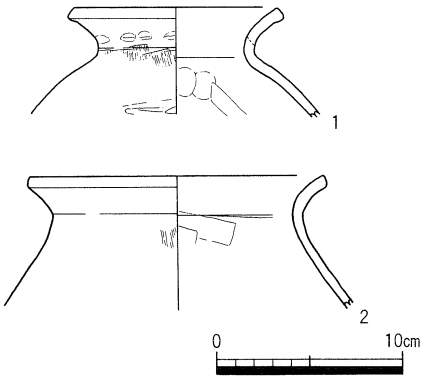


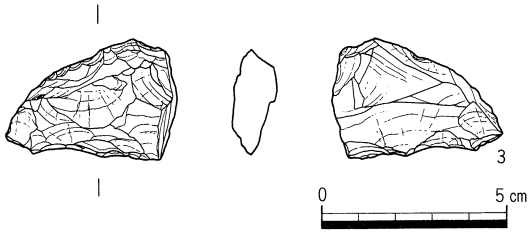
第76図　SH07平・断面図（Ｓ：１/80）

出土遺物　後世の削平により住居の遺存状態が悪く，遺物の出土は非常に少なく，図化することができたのは３点のみである。すべての遺物は床面が残存する北側と中央土坑のＰ－７から出土した。１，２は弥生土器壺，３は削器である。

１の口縁部は「く」字状に強く外反する。口縁部内面はヨコナデ，外面は一部に指頭圧痕を行った後にヨコナデが施される。頸部外面に縦方向の刷毛目，胴部外面は磨滅しているが部分的にヘラミガキが残存し，内面は指頭圧痕の後にヘラナデが施される。２は胴部から外反する口縁部であり，口縁端部は面取りされる。口縁部はヨコナデ，胴部は磨滅しているが外面の一部に刷毛目，内面にヘラナデが残存する。

３の削器は横長の剝片を利用し，刃部は両面から調整が行われる。





番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器 壷	11.6		(5.8)	口縁部外面指頭圧痕後にナデ。胴部外面刷毛目、ヘラミガキ	鈍黄橙10YR7/4	鈍黄橙10YR7/3	石英、長石
2	〃	15.8		(7.1)	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。内面ヘラナデ	灰白2.5Y8/2	鈍黄橙10YR6/4	〃

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
3	削器	2.8	4.0	1.1	21.6	サヌカイト	刃部は両面から調整。三角形を呈す

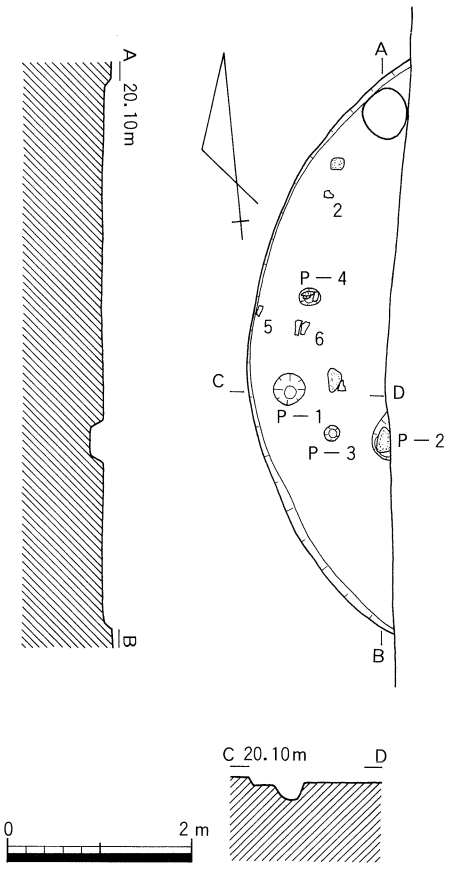
第77図　SH07出土遺物（S：1/4、1/2）

SH08（第78･79図）

B－2地区中央部の北東寄りにおいて検出された竪穴住居である。SH06の北側に近接し，SH09と重複する。住居は西端のみの検出であり，大半は調査区外となっている。

確認面のレベルは標高20.00mである。検出された住居の平面形は円形であり，推定される規模は直径7.00mである。掘り込みはほぼ垂直であり，床面までの深さは8cmである。床面は直床であり，床面の周縁部であるため軟弱である。ほぼ平坦な床面である。住居内のピットは4個検出されたが，柱穴であるかどうかは不明である。平面形はすべて円形を呈し，規模は直径0.16～0.50mを測る。深さは0.20mである。P－2は床面と同レベルの位置において長辺0.26m×短辺0.16mの自然石を残存し，柱の横部を止める詰石とも考えられ，柱穴の可能性がある。P－4は小規模なピットであるが，5～10cm位の自然石2個が残存し，その下から土器片が出土した。壁溝は検出されなかった。住居の北側には，若干時期の新しいピットが床面を切っている。

出土遺物　検出された住居の全域から遺物の出土が見られるが，特にP－1の北側より多く出土した。出土のレベルは床面直上および若干浮いた状態である。P－1の東側に0.13×0.25mの三角形の自然石が床面直上にあり，P－4の間には2個の砥石が床面直上より並んだ状態で出土した。



第78図　SH08平・断面図（S：1/80）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　細頸壺	8.6		(14.8)	外面上半横ヘラミガキ、下半縦ヘラミガキ。内面指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/4		石英、長石、角閃石
2	〃			(5.4)	算盤珠形。外面摩滅。内面指頭圧痕	褐7.5YR4/6	明褐7.5YR5/6	〃
3	弥生土器　甕		8.0	(2.6)	やや上げ底。摩滅。底面は未調整	淡橙5YR8/4	灰白7.5YR8/2	石英、長石
4	弥生土器　製塩土器		2.8	(2.2)	内外面ナデ	褐10YR4/4		〃

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
5	砥石	10.0	3.3	2.9	186.0	砂岩	完形。断面正方形を呈し、4面を使用
6	〃	13.7	4.4	3.5	262.0	珪化木	断面三角形。1面のみ使用。側面に加工痕有り

第79図　SH08出土遺物（S：1/4、1/2）

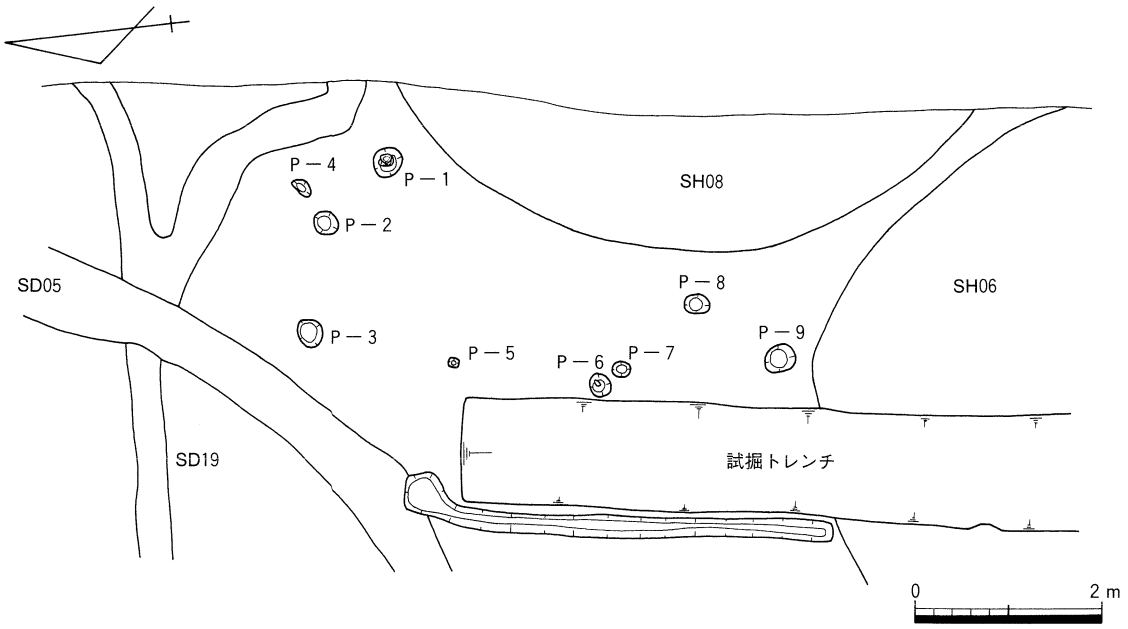
遺物は，弥生土器細頸壺（1，2），同甕（3），同製塩土器（4），砥石（5，6），その他弥生土器片が出土した。1は，胴部以下を欠損する。口縁部になるにしたがい器壁は薄くなる。内面に指頭圧痕が明瞭に残る。調整は，口縁部ヨコナデ，頸部外面の上半は横方向のヘラミガキ，下半は縦方向のヘラミガキを施し，器面は滑らかである。頸部内面の上半は絞り目と指頭圧痕，下半は指頭圧痕の後にナデが施される。2は頸部以上と底部の一部を欠損する。胴部中央が強く張る算盤玉形を呈す。外面の調整は磨滅のため不明であり，内面は指頭圧痕，ナデが施される。3は若干上げ底で，器壁が厚い。4は細い脚台を有する製塩土器で，内外面ともナデが施される。

5は4面を使用した砥石で，擦痕が明瞭に残る。中央部が最も使用されたため細くなっている。6は珪化木を利用した砥石で，1面のみ使用している。左側面に2ヶ所の加工痕が残る。

ＳＨ09（第80・81図）

Ｂ－２区中央部の北東寄りにおいて検出され竪穴住居である。ＳＨ06・08とＳＤ05・19と重複している。検出することができたのは，西側の壁溝とピットのみである。

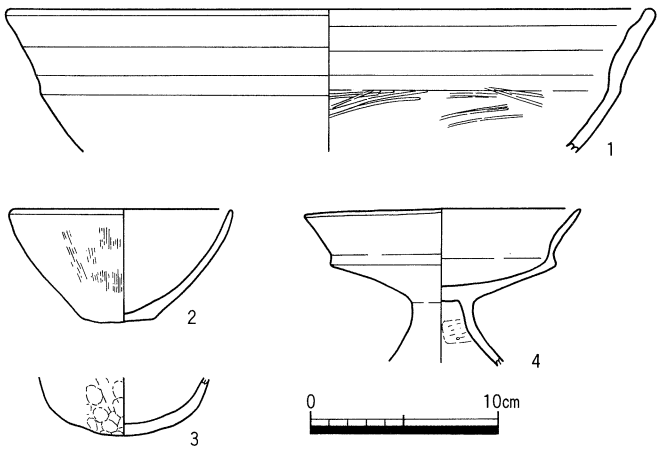
確認面のレベルは標高20.00ｍである。住居の平面形，規模は不明であるが，残存する西側の壁溝はほぼ直線であることより方形に近い平面形を呈すると考えられる。ピットはＰ－１～９の９個が検出されるが，不規則な位置関係を示しており，柱穴は不明である。ピットの平面形は円形を呈し，直径は0.13～0.35ｍとさまざまである。深さは５～15㎝である。Ｐ－１，６は底面近くに自然石を残存する。壁溝は幅0.16ｍ，深さ５㎝を測る。



第80図　SH09平面図（Ｓ：１/80）

出土遺物　遺物は弥生土器鉢（１～３），同高杯（４）で，西側壁溝上から出土した。

１は直径35㎝を測る大鉢で，体部と口縁部の境に稜を有す。口縁部に擬凹線が巡る。２は半球形の体部を呈し口縁部に至る。底面は未調整である。外面の調整は部分的に刷毛目が残る。３は外面に指頭圧痕を明瞭に残す。４は杯部外面に稜を有し，口縁部は直線的に外反する。脚部はしっかりと広がる。口縁部の調整はヨコナデ，脚部内面は横方向のヘラ削りが施される。杯部と脚部外面は不明瞭である。



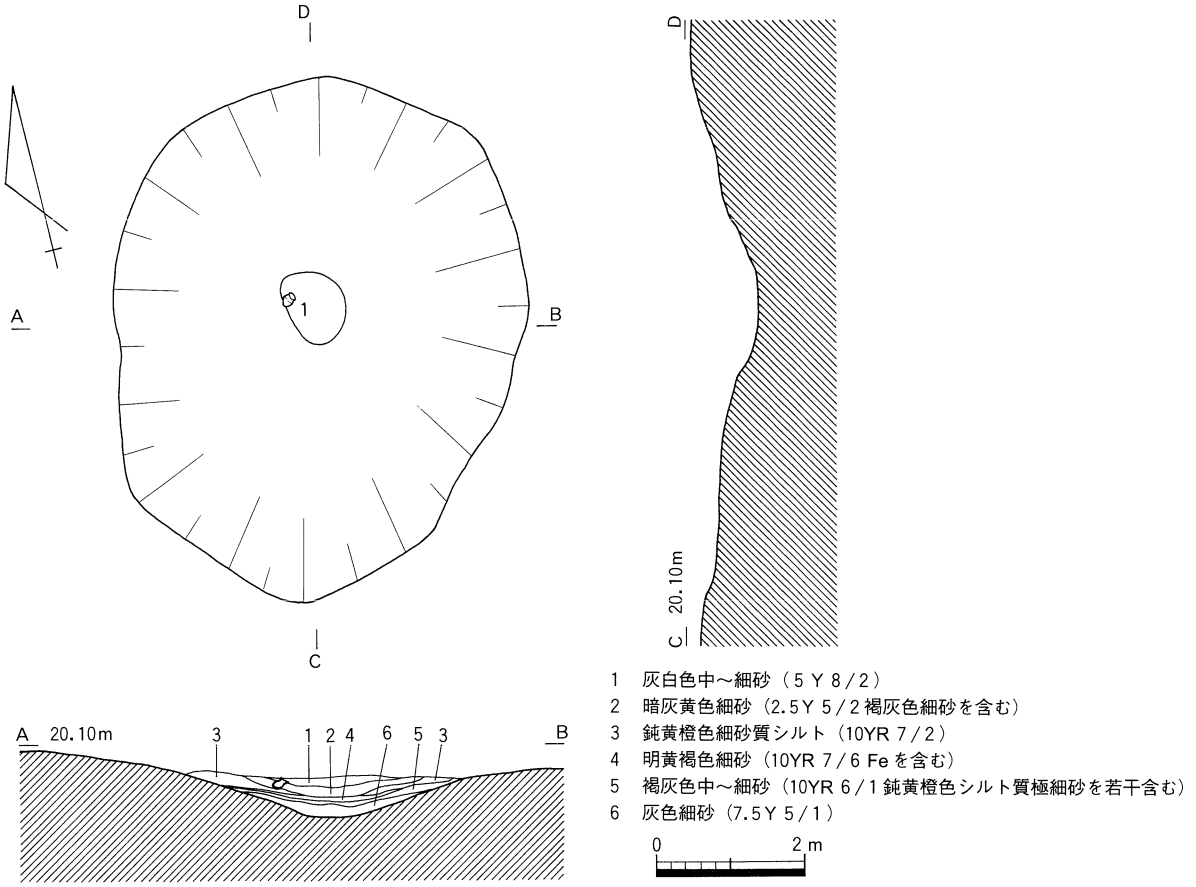
番号	器　種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　大鉢	35.0		(7.6)	外面に若干の稜。口縁部擬凹線、ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ	鈍褐7.5YR5/4	明褐7.5YR5/6	石英、長石、角閃石
2	弥生土器　鉢	11.8	3.8	6.0	平底。半球形の体部。外面刷毛目。内面ナデ	鈍橙5YR7/4		石英、長石
3	〃			(3.0)	丸底。外面指頭圧痕後にナデ。内面ナデ	鈍橙5YR7/4	鈍橙7.5YR7/3	〃
4	弥生土器　高杯	14.8		(8.1)	杯部外面に稜。口縁部ヨコナデ。脚部内面ヘラ削り	明赤褐5YR5/6	赤褐5YR4/6	石英、長石、角閃石

第81図　SH09出土遺物（Ｓ：１/４）

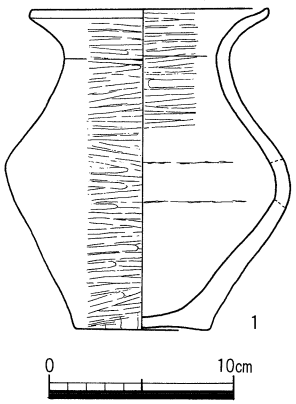
2．井戸

ＳＥ01（第82・83図）

Ｂ－２区中央西寄りにおいて検出された井戸である。ＳＨ07とＳＤ16，21に囲まれた位置にあたる。確認面のレベルは標高19.90～20.00ｍである。平面形は東西径5.40ｍ，南北径7.00ｍを測る楕円形を呈し，底面までの深さは0.80ｍである。底面は非常に狭く直径1.00ｍの不整円形である。



第82図　SE01平・断面図（Ｓ：１/100）



埋土中は６層に細分され，第３層のにぶい黄橙色細砂質シルトを除いて中～細砂がうすいレンズ状堆積を呈し，自然堆積であると思われる。掘り込みは非常にゆるやかであり，わずかな平坦部から底面にやや急傾斜に下げる。底面の最下位は粘土層中まで達しており，調査時は，常時わずかの水がわき出ていた。

出土遺物　井戸のほぼ中心の上面において弥生土器壷（１）が出土した。出土したレベルは第２層中であり，井戸の埋没のほぼ最終段階のものである。１は完形の壺で，胴部は肩を張り，口縁部は外反しながら広がる。ヘラミガキが外面，口縁部と頸部の内面に施される。内面に輪積み痕を残す。

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	13.0	7.3	17.0	肩を強く張る。外面、口縁部、頸部内面ヘラミガキ。胴部内面ナデ	浅黄2.5Y7/3		石英、長石

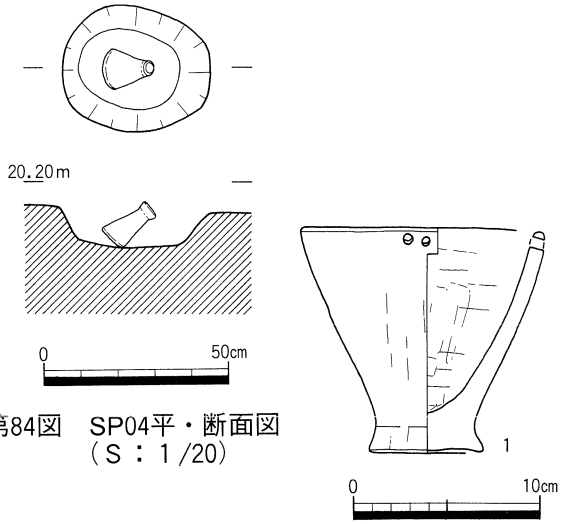
第83図　SE01出土遺物（Ｓ：１/４）

3．ピット

ＳＰ04（第84・85図）

Ｂ－２区中央部西寄りのＳＨ08の北側において検出されたピットである。平面形は0.35×0.40ｍの楕円形を呈す。確認面のレベルは標高20.10ｍである。深さは0.10ｍである。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　ピットの中央部で口縁部を下にした斜めの状態で完形の製塩土器（１）が出土した。１は脚台部は短く，ほぼ直線的な体部から口縁部に至る。口縁部に２個一対の孔を対角線上に２組有する。外面はヘラ削り，内面ヘラナデが施される。



第84図　SP04平・断面図
（Ｓ：１/20）

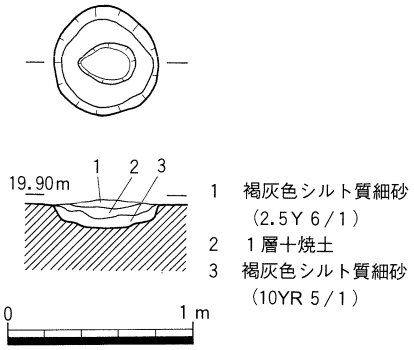
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　製塩土器	13.0	6.2	11.9	完形。外面ヘラ削り。内面指頭圧痕後にナデ。孔２個一対２個	鈍橙7.5YR7/4	鈍黄橙10YR6/4	細～粗砂、細礫

第85図　SP04出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＰ05（第86図）

Ｂ－２区北部において検出されたピットである。平面形は直径0.55ｍの円形である。確認面のレベルは標高19.85ｍである。埋土は３層に細分され，レンズ状の自然堆積を示している。埋土中にはわずかな焼土粒，炭化材粒を含むが，底面は焼けていない。

出土遺物　数点の弥生土器の小片が出土したが，図化できなかった。



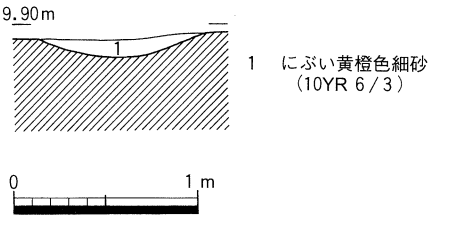
第86図　SP05平・断面図
（Ｓ：１/40）

4．溝

ＳＤ15（第87図）

Ｂ－２区ほぼ中央でＳＤ17と平行して検出された溝である。方向は南東－北西であり，確認面のレベルは標高19.85ｍ前後である。溝上場の最大幅は0.87ｍ，深さは0.10ｍを測る。幅は北側になるにしたがい細くなるが，底面のレベルは低くなっている。断面は船底型を呈す。埋土はにぶい黄橙色細砂の単一層である。

出土遺物　埋土中より数点の弥生土器片が出土したが，図化できるものはなかった。

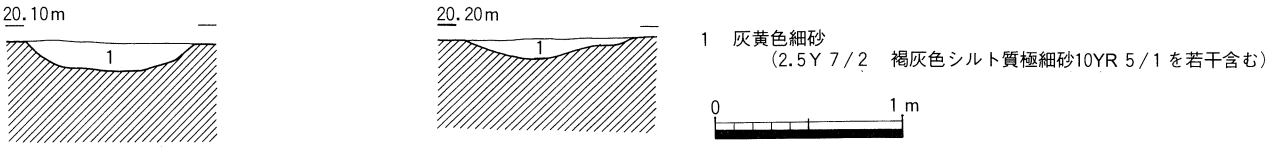


第87図　SD15断面図（Ｓ：１/40）

ＳＤ16（第88図）

Ｂ－２区ほぼ中央部を南東－北西方向に検出された溝である。ＳＤ21に切られている。平面形は中央でわずかに方向を変え，「く」の字状をなす。確認面のレベルは標高20.10～20.00ｍである。溝の幅は0.90ｍ，深さ0.15ｍである。断面形は船底型をなし，底面のレベルは北側になるにしたがい徐々に低くなっている。埋土は褐灰色シルト質極細砂を含む灰黄色細砂の単一層である。

出土遺物　埋土中より数点の弥生土器が出土したが，全て小片であり図化できるものはなかった。

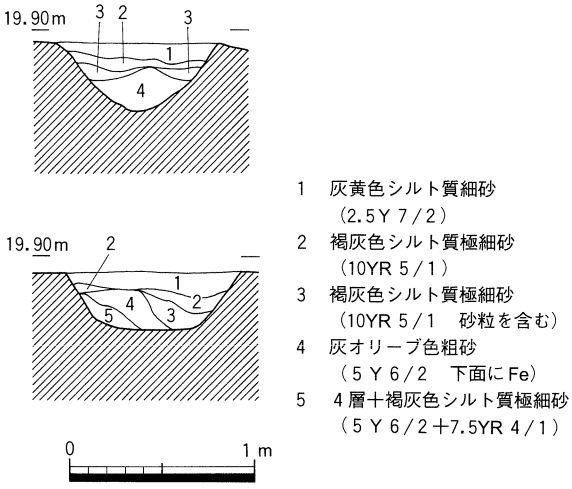


第88図 SD16断面図（S：1/40）

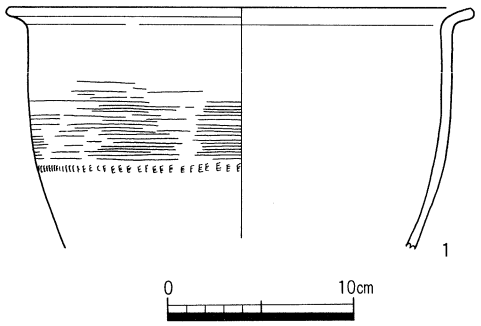
SD17（第89・90図）

B－2区中央やや北寄りにおいてSD15と平走する溝である。方向は南東－北西方向であり，北端では円形に広くなり，西走する溝と分流している。確認面のレベルは，南端で標高19.85m，北端で19.55mである。溝の最大幅は，1.00mを測り，北側になるにしたがい細くなっている。深さは0.5～0.35mである。断面はV字ないしU字形をなし，底面のレベルは北方向に低くなっている。埋土は5層に分層され，その堆積状態から西方向より埋没が主として始まったことがわかる。

出土遺物　遺物は少なく，弥生土器甕（1）を含めて数点にすぎない。1は「く」字状口縁を呈し，胴部外面に櫛描き直線文，櫛原体による押圧文が巡る。口縁部はヨコナデ，胴部はナデが施される。



第89図 SD17断面図（S：1/40）



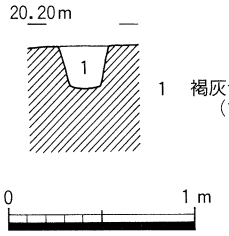
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器 甕	24.8		(12.1)	く字口縁。胴部外面に櫛描直線文22条、押圧文	橙7.5YR6/6	鈍橙7.5YR7/4	石英、長石、角閃石

第90図 SD17出土遺物（S：1/4）

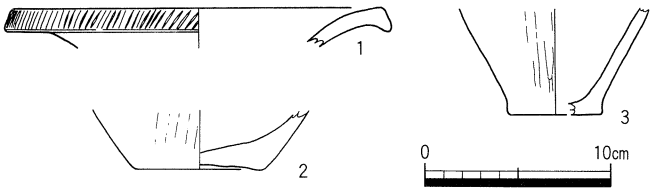
SD18（第91・92図）

B－2区中央北寄りにおいて検出された溝である。SH06の中央に掘り込みの南端があり，北西方向に直線的に延び，やや北寄りに方向を変えている。SD19を切っている。北端はSH05の西壁の壁溝の下に存在する。確認面のレベルは標高20.10mである。溝の幅は0.25m，深さ0.25cmを測る。断面はU字形を呈し，北側にゆるやかに低くなっている。埋土は褐灰色シルト質細砂である。

出土遺物　遺物の出土は少なく，図化できたのは弥生土器3点のみである。広口壷（1）は口縁部が大きく広がり，下方に拡張した口縁端部の外面に刻み目が施される。2，3は甕底部。2は上げ底気味で緩やかな傾斜に立ち上がる。3は平底であり，急傾斜に立ち上がる。調整は共に外面ヘラ削りで，底部外面ヘラナデが施されている。



第91図　SD18断面図（S：1/40）



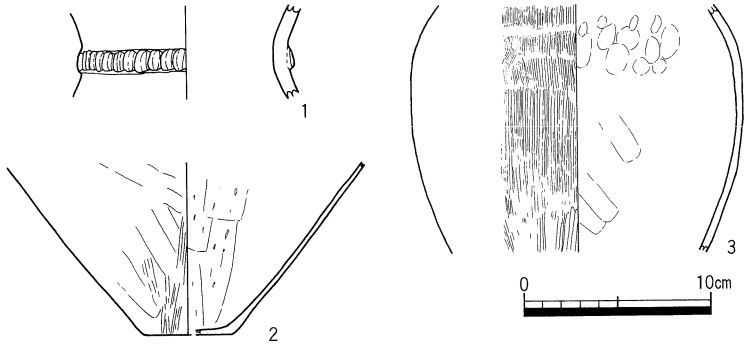
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	19.8		(2.1)	口縁端部は下方に拡張し、刻目文。	灰褐7.5YR4/2	褐7.5YR4/3	石英、長石、角閃石
2	弥生土器　甕		7.1	(3.1)	上げ底。外面ヘラ削り。底部ヘラナデ	淡黄橙10YR8/3	鈍黄橙10YR7/4	石英、長石
3	〃		5.2	(5.6)	平底。外面ヘラ削り。底部ヘラナデ	明褐灰7.5YR7/2	明褐灰7.5YR7/1	〃

第92図　SD18出土遺物（S：1/4）

SD19（第93図）

B－2区中央北寄りにおいてSD18と重複して検出された溝である。溝の方向は東西であり，ほぼ直線的に延び，東端において2つの溝に分流している。確認面のレベルは標高20.10mである。SD18に切られている。溝の幅は0.25m，深さ0.25mを測り，断面はU字形を呈す。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物の出土は少なく，図化できたのは弥生土器3点のみである。1は頸部に押圧突帯を有する壷。甕（2）は外面刷毛目，内面ヘラ削り，3は外面刷毛目，内面下半ヘラ削り，上半指頭圧痕である。



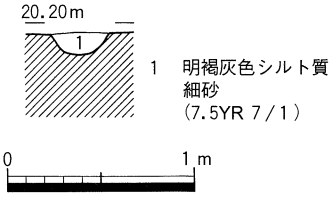
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷			(5.1)	頸部外面に押圧突帯文。摩滅	鈍黄橙10YR7/4	淡黄2.5YR8/4	石英、長石、角閃石
2	弥生土器　甕		4.8	(9.0)	平底。外面ヘラナデ後にヘラミガキ、黒斑。内面ヘラ削り	灰黄褐10YR5/2	鈍黄橙10YR6/4	〃
3	〃			(13.1)	外面上半刷毛目、下半ヘラミガキ。内面上位指頭圧痕	鈍褐7.5YR5/3		石英、長石、角閃石

第93図　SD19出土遺物（S：1/4）

SD20（第94図）

B－2区中央において「く」の字形に検出された溝である。南東から北西方向に延び，中央付近からやや北に流れを変える。確認面のレベルは標高20.15mである。溝の幅は0.30m，深さは0.14mを測る。断面は船底形を呈し，底面のレベルは北側へゆるやかに低くなっている。埋土は明褐灰色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物　数点の弥生土器片が出土したが，全て小片であり図化できなかった。



第94図　SD20断面図（S：1/40）

ＳＤ21

Ｂ－２区ほぼ中央において検出された溝である。ＳＥ01の南東にあり，ＳＤ16を切っている。西端は調査区域外に延びている。西端からやや湾曲気味に東方に短く延び，北東に方向を変え蛇行しながら延びている。確認面のレベルは標高20.15m前後である。溝の幅は最大1.00mを測り，深さは５cmである。断面は非常に浅いＵ字形を呈し，底面のレベルはほぼ均一である。北端では掘り込みがほとんどなくなっている。埋土は白色粗砂の単一層である。

出土遺物はなかった。

⑶　第３面

１）弥生時代

１．土坑

ＳＫ09（第95・96図）

Ｂ－２区中央やや北寄りにおいて単独で検出された土坑であり，ＳＤ22，23の北端近くに位置する。第１面で検出されたＳＫ01と同位置で，さらに出土した土器の時期がほぼ同時期のものであり，同じ土坑の可能性も考えられるが，本報告書では別の土坑として報告しておく。

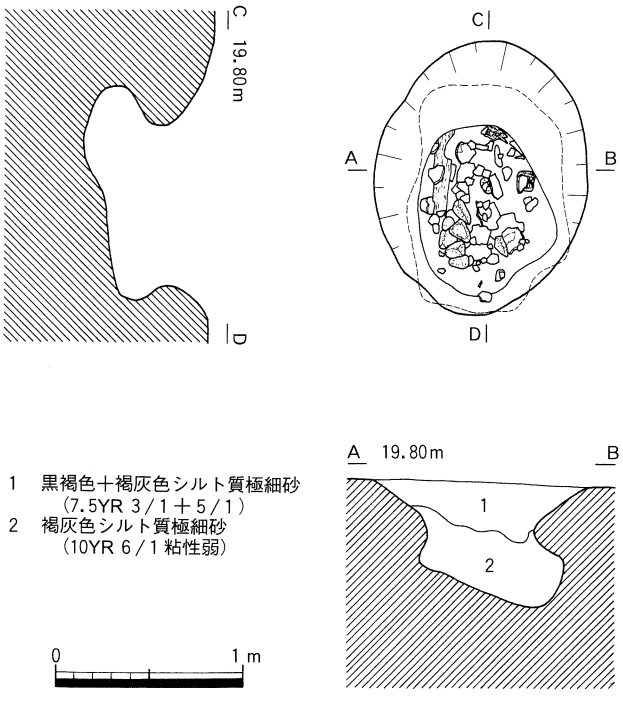
土坑の上場の平面形は1.15×1.45mを測る楕円形を呈し，確認面のレベルは標高19.70m前後である。断面形はフラスコ状を呈し，中央のくびれ部から下は非常に狭い。確認面から底面最深部までの深さは0.70mである。くびれ部の径は0.75×0.90mを測る。底面は東側に少し高い部分を持つ。くびれから下の掘り込みは西側が最も大きくオーバーハングしている。埋土は，くびれから上部は黒褐色＋褐灰色シルト質極細砂，下部は褐灰色シルト質極細砂の２層である。

出土遺物　下層の第２層中及び底面直上から多量の土器と石，植物遺体が出土した。遺物のレベルは東から西にゆるやかに低くなっている。植物遺体としては，底面直上に長さ0.70m，幅0.10m，厚さ１cmの板状木製品と自然木がある。石は自然石で，加工痕はなかった。

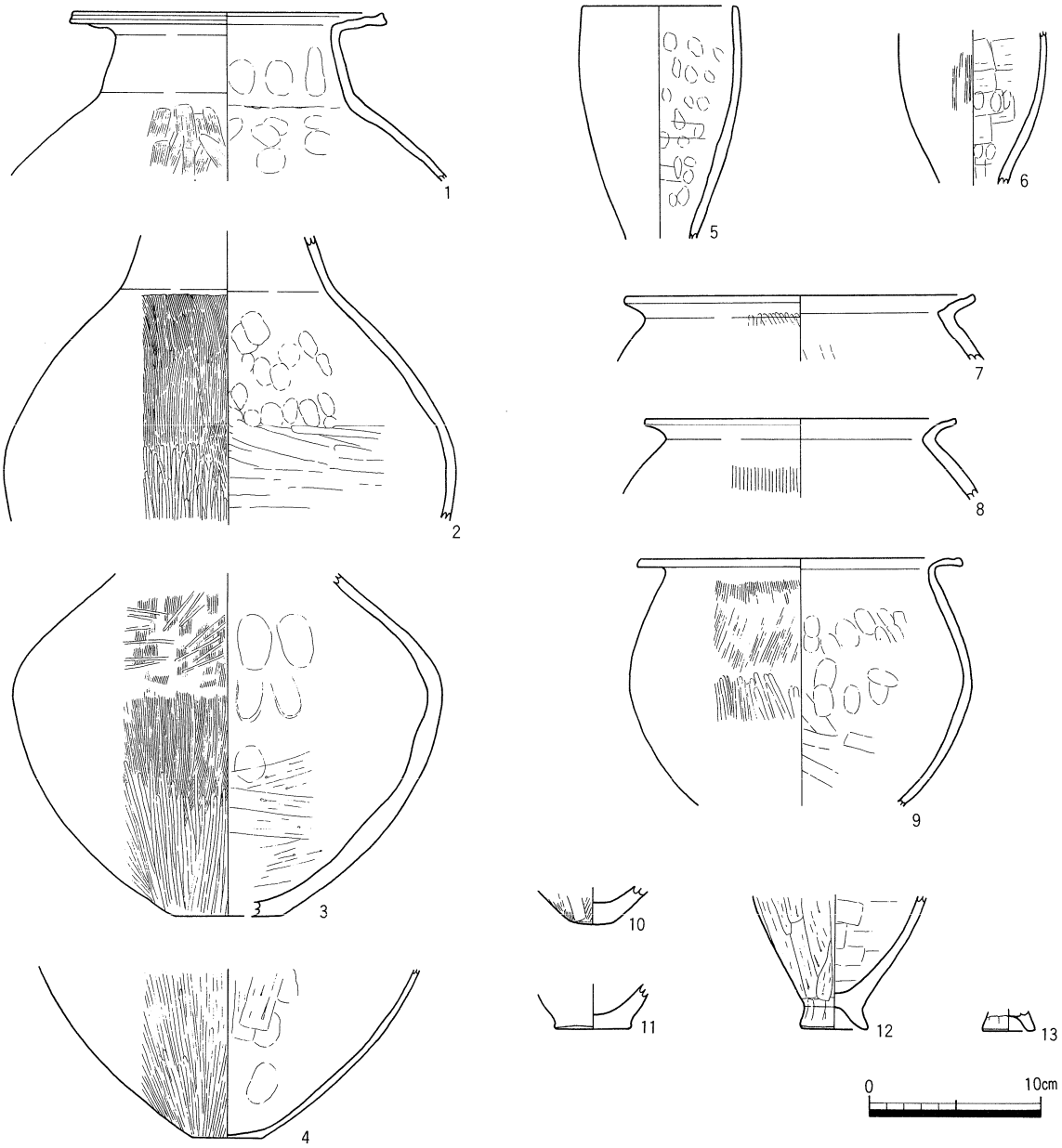
遺物は弥生土器壺（１～６），同甕（７～９，11），同鉢（10），同製塩土器（12，13）が出土した。

１，２はよく張った胴部から「ハ」字状に立ち上がる頸部で，口縁部は水平に広がる。調整は口縁部ヨコナデ，頸部外面刷毛目の後にヨコナデ，胴部外面刷毛目とヘラミガキ，内面指頭圧痕後にヘラ削りが施される。３，４は頸部と口縁部を欠損するが同種の壺である。５，６は細頸壺で，若干内湾する頸部内面には指頭圧痕が明瞭に残る。

７，８は「く」字状口縁，９は球形の胴部から口縁部はほぼ水平に屈曲する。胴部下半は二次的な熱による剥離が著しい。12，13は脚台を持つ製塩土器，外面にはヘラ削りが施される。



第95図　SK09平・断面図（Ｓ：１/40）



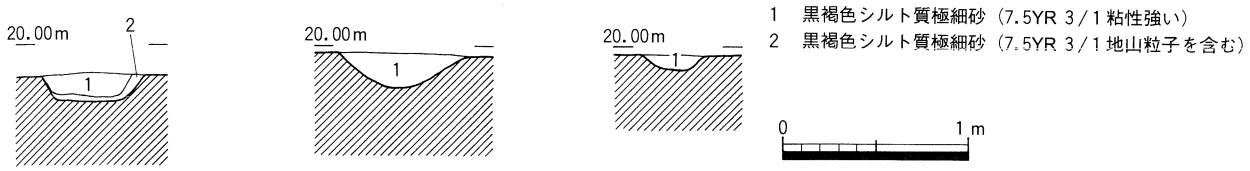
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	17.8		(9.6)	頸部内傾、口縁部水平。胴部外面刷毛目、内面指頭圧痕	鈍橙7.5YR7/4		石英、長石、角閃石
2	〃			(15.9)	胴部外面上半刷毛目、下半ヘラミガキ。内面上半指頭圧痕、下半ヘラ削り	鈍褐7.5YR6/3	鈍橙7.5YR6/4	石英、長石少量
3	〃		6.0	(19.5)	胴部外面上半刷毛目、ヘラミガキ、下半ヘラミガキ。内面下半ヘラ削り	鈍黄橙10YR6/3		石英、長石、角閃石
4	〃		4.0	(9.7)	底面、胴部外面ヘラミガキ。内面指頭圧痕、ナデ	鈍黄褐10YR5/3	鈍黄橙10YR6/3	〃
5	弥生土器　細頸壷	9.0		(18.3)	内弯。外面摩滅。内面指頭圧痕後にナデ	鈍橙10YR6/4	明赤褐2.5YR5/6	〃
6	〃			(8.8)	内弯。外面ヘラミガキ、ナデ。内面指頭圧痕後に板ナデ	鈍橙10YR6/3		〃
7	弥生土器　甕	20.0		(3.7)	く字口縁。口縁部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。内面ナデ	鈍黄橙10YR7/3	鈍黄橙10YR6/4	石英、長石
8	〃	18.0		(4.6)	く字口縁。口縁部ヨコナデ。外面刷毛目	鈍黄橙10YR6/4		石英、長石、角閃石
9	〃	18.8		(14.0)	胴部外面刷毛目、ヘラミガキ。内面指頭圧痕、ヘラナデ。外面剝離	鈍褐7.5YR5/4		〃
10	弥生土器　鉢		2.7	(2.1)	外面、底面刷毛目後にナデ	黒褐2.5Y3/1	灰白10YR8/2	〃
11	弥生土器　甕		4.6	(2.6)	平底。摩滅	灰白2.5Y8/2	淡黄2.5Y8/3	〃
12	弥生土器　製塩土器		3.8	(7.1)	外面ヘラ削り。内面ナデ。脚外面ヘラ削り後にナデ	鈍黄2.5Y6/4	鈍黄橙10YR6/4	〃
13	〃		3.0	(1.1)	外面ヘラ削り後にナデ。内面ナデ	褐10YR4/4		〃

第96図　SK09出土遺物（S：1/4）

2．溝

ＳＤ22（第97図）

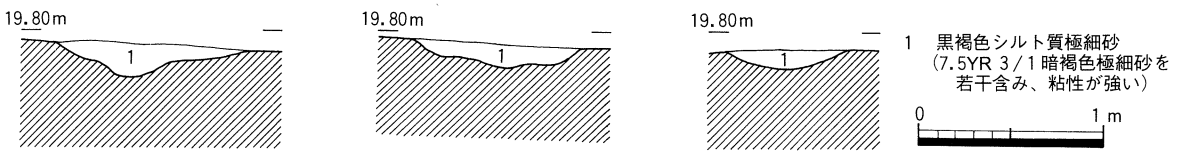
Ｂ－２区中央部で南東－北西方向に検出された溝であり，第２面で検出されたＳＤ16のほぼ下に位置し，検出された中央付近で「く」の字状に方向を変える。確認面のレベルは標高19.85～19.95m前後である。溝の幅は0.30～0.70m，深さは0.5～0.15mを測り，断面はＵ字ないし船底型を呈す。底面のレベルは南から北にしだいに低くなっている。埋土は褐灰色シルト質極細砂と若干色の異なる褐灰色シルト質極細砂の２層であるが，後者は部分的に堆積している。短期間に埋没したものと考えられる。遺物の出土はなかった。



第97図　SD22断面図（Ｓ：１/40）

ＳＤ23（第98図）

Ｂ－２区中央部においてＳＤ24と平行して検出された溝である。検出された位置は第２面のＳＤ15とほぼ同位置であり，南東－北西方向にやや蛇行しながら延びている。確認面のレベルは標高19.75m前後である。溝の幅は，北端で0.60m，南端で1.00mを測り，深さは0.10～0.20mである。断面は，北部の一部で船底型をするが，全体的には底面に段を持ち中央部が最も低くなっている。底面のレベルは南から北にしだいに低くなっている。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層であり，短期間に埋没したと考えられる。遺物の出土はなかった。

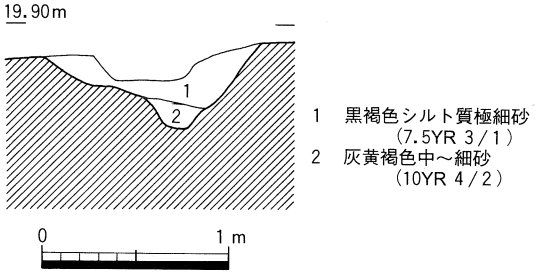


第98図　SD23断面図（Ｓ：１/40）

ＳＤ24（第99図）

Ｂ－２区中央において検出された溝である。検出された位置は第２面のＳＤ17とほぼ同位置である。溝の方向は南東－北西であり，若干蛇行するが直線的に延びている。確認面のレベルは，南側で標高19.80m，北端で19.50mである。溝の幅は南側で1.15m，北側0.90mを測る。断面は２段掘りであり，最深部までの深さは0.40mを測る。底面のレベルは南から北にゆるやかに低くなっている。埋土は上層黒褐色シルト質極細砂，下層灰黄褐色中～細砂の２層である。

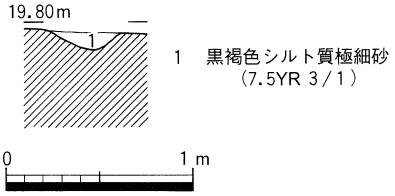
遺物の出土は，数点の弥生土器片のみであり，図化できなかった。



第99図　SD24断面図（Ｓ：１/40）

ＳＤ25（第100図）

Ｂ－２区中央において検出された溝である。溝は蛇行しながら南西－北東方向に延び，北部で２本の溝に分流している。溝の両端は自然消滅している。確認面のレベルは標高19.75m前後である。幅は0.40m前後であり，深さは0.10mを測る。断面形は船底形を呈し底面のレベルはほぼ均一であるが，若干南端が低くなっている。埋土は黒褐色シルト質極細砂の単一層である。出土遺物はなかった。



第100図　SD25断面図（Ｓ：１/40）

ＳＤ26

Ｂ－２区中央でＳＤ23とＳＤ24の間で検出された溝である。溝の方向は東西であり，非常に長さは短い。確認面のレベルは標高19.75mである。幅は0.30mであり，深さは0.10を測る。断面はＵ字形を呈す。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。出土遺物はなかった。

２）包含層出土遺物

包含層出土として報告する遺物は，地山である第３面を覆う砂層中から出土したものである。この砂層はＢ－２地区北寄りの竪穴住居や溝などの遺構が検出された部分に堆積しており，河川の氾濫によって形成されたものと考えられる。堆積状態は，南東－北西に延びるＳＤ18～22の上面が最も厚く堆積し，東側は次第に薄くなり，反対の西側では全く堆積していなかった。

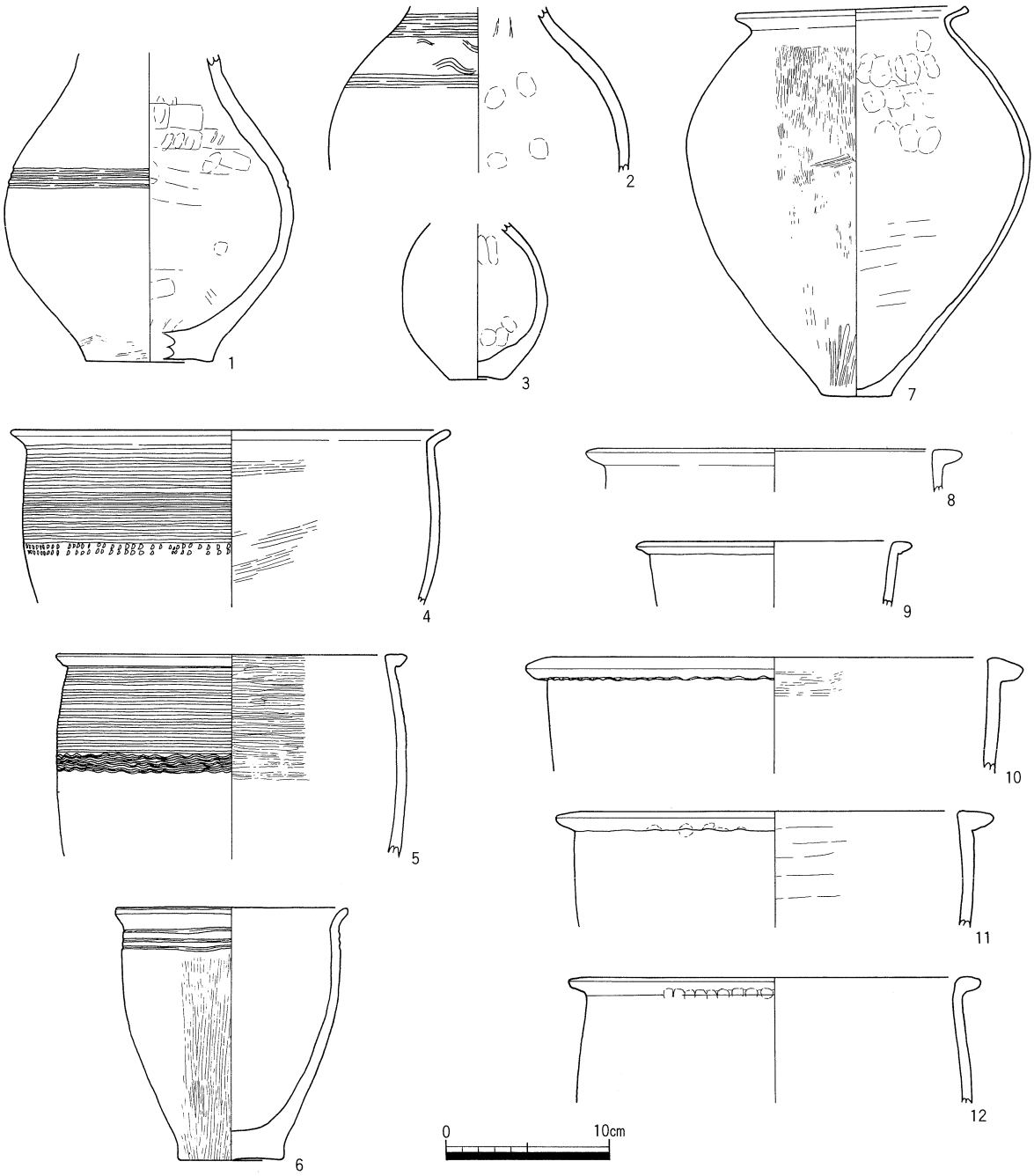
遺物は，弥生土器壺（１～３，13，14），同甕（４～12，15～21），同鉢（22～24），紡錘車（25），石鏃（26～28），石器未製品（28，29），敲石（30），磨製石包丁（31），石錐（32），石核（33）である。洪水砂層からの出土であるため弥生時代前期～後期までの遺物が含まれている。

１は球形の胴部で底部の器壁は厚い。口縁部を欠損する。胴部中央よりやや上に反時計回りに施文されるヘラ描き沈線が３本巡る。外面の調整はナデで一部に刷毛目が施され，内面は指頭圧痕の後にヘラナデとナデが施される。底部外面は未調整である。２の外面には櫛描直線文と波状文が巡り，内面は指頭圧痕の後にナデが施される。３は小形の壺で，底部の器壁が厚い。

４は「く」字状口縁を持ち，胴部外面に櫛描き直線文，刺突文が巡る。５は逆Ｌ字形口縁をなし，胴部外面に櫛描き直線文，波状文が巡る。内面は横方向のヘラミガキである。６は器壁の厚い底部から急傾斜で立ち上がり，口縁部は「く」字状に外反する。外面にヘラ描き沈線が３状巡る。調整は，口縁部ヨコナデ，胴部外面は縦方向の刷毛目，内面はヘラナデが施される。７は肩の張った胴部から「く」字状に強く屈曲する口縁部の甕で，口縁端部は上方に拡張する。口縁部はヨコナデ，胴部外面上半は刷毛目，下半はヘラミガキが施される。内面は指頭圧痕とナデが施される。８～12は逆Ｌ字形口縁であり，10～12の胴部と口縁部の境に指頭圧痕が見られる。

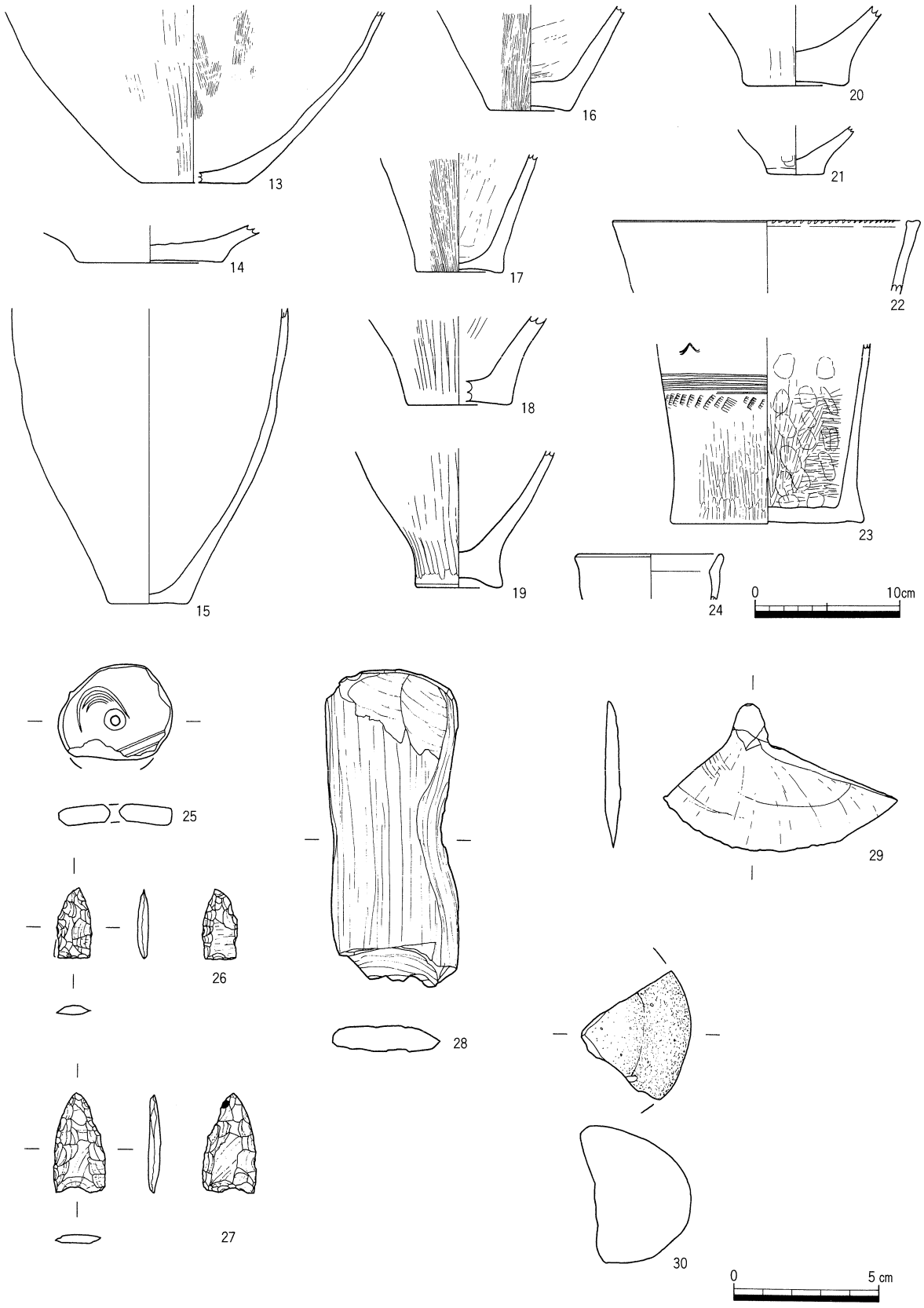
22，23は通称「バケツ型土器」と言われるもので，口唇部内面に刻み目文（22），胴部外面に櫛描き波状文，直線文と櫛原体による押圧文を巡らす（23）。

26は凹基式，27は平基式石鏃である。28は上側面を研磨している。29は石匙の未製品である。31は全面を丁寧な研磨した磨製石包丁である。半月状を呈し，２個一対の紐穴を持つ。刃部は両面からの研磨により刃をつける。32は両面からの調整による鋭利な縁辺部，先端部を持つ。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器 壷		9.8	(18.5)	外面沈線３条。内面しぼり目、指頭圧痕後にナデ	橙7.5YR6/6	鈍黄橙10YR7/4	石英、長石多量
2	〃			(10.8)	外面櫛描直線文、波状文。内面しぼり目、指頭圧痕	鈍黄橙10YR7/3		石英、長石
3	〃		3.3	(9.6)	外面摩滅。内面ナデ、指頭圧痕	灰白2.5Y8/2		石英、長石多量
4	弥生土器 甕	27.0		(10.5)	外面櫛描直線文32条、刺突文。内面ヘラミガキ後にナデ	鈍赤褐5YR5/3	灰褐5YR5/2	石英、長石、角閃石
5	〃	21.4		(12.2)	外面櫛描直線文30条。波状文５条。内面ヘラミガキ	鈍赤褐5YR5/4	鈍橙7.5YR6/4	〃
6	〃	14.2	6.6	15.2	外面ヘラ描沈線３条、刷毛目。内面ヘラナデ。厚い底部	赤褐5YR8/4	黒褐7.5YR3/1	石英、長石
7	〃	14.0	4.4	23.5	外面上半刷毛目、下半ヘラミガキ。内面上半指頭圧痕	鈍橙7.5YR6/4		石英、長石、角閃石
8	〃	23.0		(2.6)	内外面摩滅。逆Ｌ字口縁	浅黄橙10YR8/3		石英、長石
9	〃	17.0		(4.0)	摩滅。外面ヘラ描沈線の痕跡。逆Ｌ字口縁	鈍橙7.5YR7/4		石英、細～粗砂
10	〃	30.4		(6.9)	摩滅。口縁部外面指頭圧痕。逆Ｌ字口縁	鈍橙7.5YR6/4	鈍褐7.5YR5/4	細～粗砂
11	〃	24.8		(7.0)	内外面ナデ。口縁部外面指頭圧痕。逆Ｌ字口縁	明褐7.5YR5/6	鈍黄橙10YR6/3	細礫多量
12	〃	25.0		(7.0)	〃	灰黄褐10YR5/2	鈍黄褐10YR6/4	石英、長石、角閃石

第101図　包含層出土遺物(1)（Ｓ：１／４）

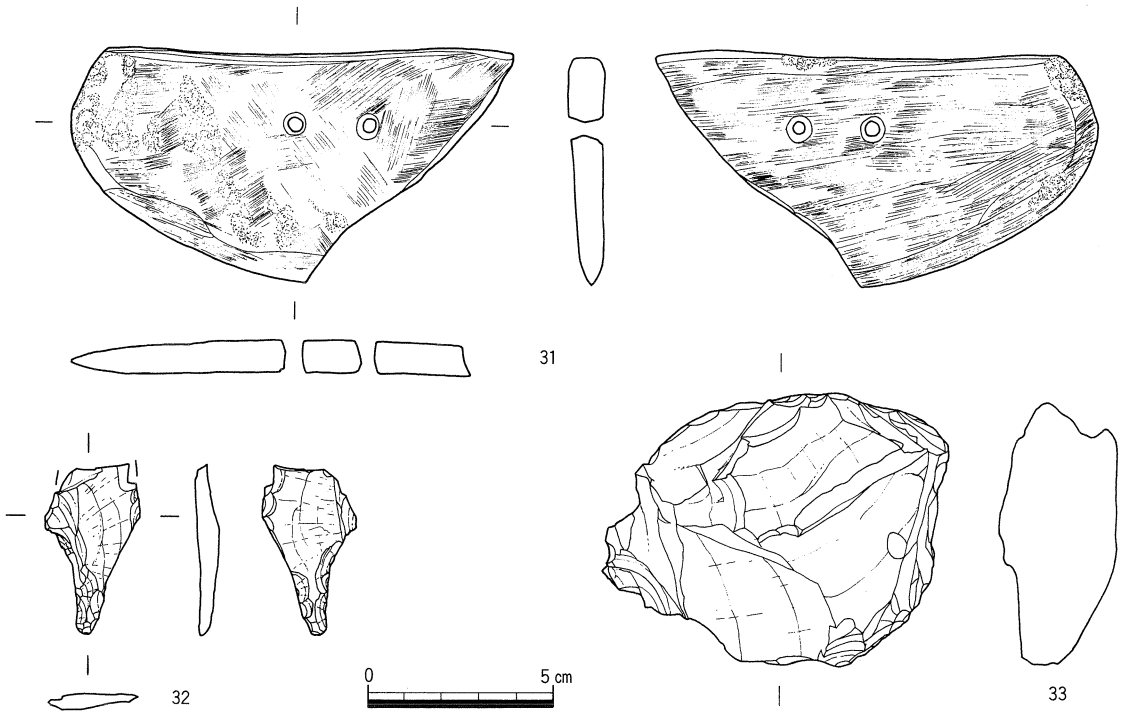


第102図　包含層出土遺物(2)（S：1/4、1/2）

（第102図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
13	弥生土器　壺		7.2	(11.6)	平底。外面ヘラミガキ。内面刷毛目後にヘラナデ	赤褐5YR4/8	鈍黄褐10YR5/3	石英、長石、角閃石
14	〃		10.0	(2.5)	若干上げ底。摩滅	鈍黄橙10YR6/4		石英、長石
15	弥生土器　甕		5.2	(19.9)	平底。長胴、摩滅するが外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ	橙5YR6/6	鈍橙7.5YR7/4	石英、長石多量
16	〃		5.5	(7.1)	若干上げ底。外面ヘラ削り後にヘラミガキ。内面ヘラナデ	〃	灰褐5YR5/2	石英、長石、粗砂
17	〃		6.0	(8.0)	上げ底。外面、底部ヘラミガキ。内面ヘラナデ、ヘラミガキ	橙5YR6/8	〃	〃
18	〃		7.2	(6.0)	厚い底部。外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ	橙2.5YR6/6	〃	〃
19	〃		6.0	(9.3)	外面ヘラミガキ。底部ナデ	鈍橙5YR7/4	灰褐7.5YR6/2	〃
20	〃		7.2	(5.4)	厚い底部。内外面摩滅	橙5YR6/6	灰褐5YR6/2	〃
21	〃		6.0	(3.3)	平底。内外面摩滅	浅黄橙7.5YR 8/3		〃
22	弥生土器　鉢	21.2		(4.9)	口唇部内面に刻目文	橙R6/8	橙.5YR7/6	石英、長石多量
23	〃		13.4×12.8	(12.2)	外面櫛描波状文、直線文7条、押圧文、内面指頭圧痕、ヘラミガキ	鈍黄橙10YR6/3		〃
24	〃	10.0		(3.1)	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ	灰白2.5Y8/2	黄灰2.5Y6/1	微～細砂
25	紡錘車	(直) 3.9	(厚) 0.6		両方向からの穿孔。	灰白5Y7/2	灰5Y5/1	〃

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
26	石鏃	2.2	1.2	0.4		サヌカイト	平基式。五角形状を呈し、両面からの細かい打ち欠きを行う
27	〃	3.5	1.7	0.4		サヌカイト	凹基式。両面からの細かい打ち欠き、鋭利
28	未製品	10.4	4.4	0.8			
29	未製品	5.0	8.0	0.6		サヌカイト	
30	敲石	3.4	3.7	4.3		砂岩	



番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
31	磨製石庖丁	11.8	6.0	0.9	85.0	サヌカイト	全面ていねいに磨き、2孔一対の紐穴
32	石錐	4.7	2.5	0.6	5.1	サヌカイト	両面からの打ち欠きにより先端部をつくる
33	石核	8.8	7.2	3.0		サヌカイト	

第103図　包含層出土遺物(3)（S：1/2）

3．C地区

C地区は遺跡のほぼ中央に位置し，B－2区の南側でD地区の北側にあたる。調査区の全長は109m，幅20mを測る。北端は現有のコンクリート水路，南端では農道が調査区を横断しており，現水路と農道を保護する必要からその部分は調査が行われなかった。そのために調査区の面積が若干狭くなっている。また，ほぼ中央部のSD42からSB09の間は，近世の水田整備事業によって地山まで削平を受けており，遺構の検出は希薄である。

遺構面は1面であり，確認面は黄白色シルトの地山である。地山のレベルは，南から北方向に緩やかに低くなっている。南端の標高は21.10m，北端では20.55mを測り，その比高差は0.55mである。調査区全体の土層堆積は，ほぼ平坦な堆積を示し，調査区全域でほぼ同一である。上位より現水田・黒灰褐色シルト質極細砂・灰褐色シルト質極細砂・地山の漸移層である灰褐色シルト質極細砂の4層である。現水田を除いて非常に固く締まっている。試掘調査の土層観察では第3層の灰褐色シルト質極細砂から遺構の掘り込みが確認できたが，本調査の面的調査においてはその面での遺構の検出は不可能であったため確実に遺構のわかる地山まで掘り下げる。

遺構の分布は，南西隅近くを除いて全域において見られる。遺構は，弥生時代に属するものが最も多く，中央部に竪穴住居1棟，北部と中央やや南寄りに16棟の掘立柱建物が検出され，さらに溝，土坑，ピットがある。調査区を南北に蛇行しながら走る古代の溝があり，数基の中世～近世の土坑，溝がある。調査区の南・北端には条里地割に基づく2本の溝が検出された。

1）弥生時代

1．住居址

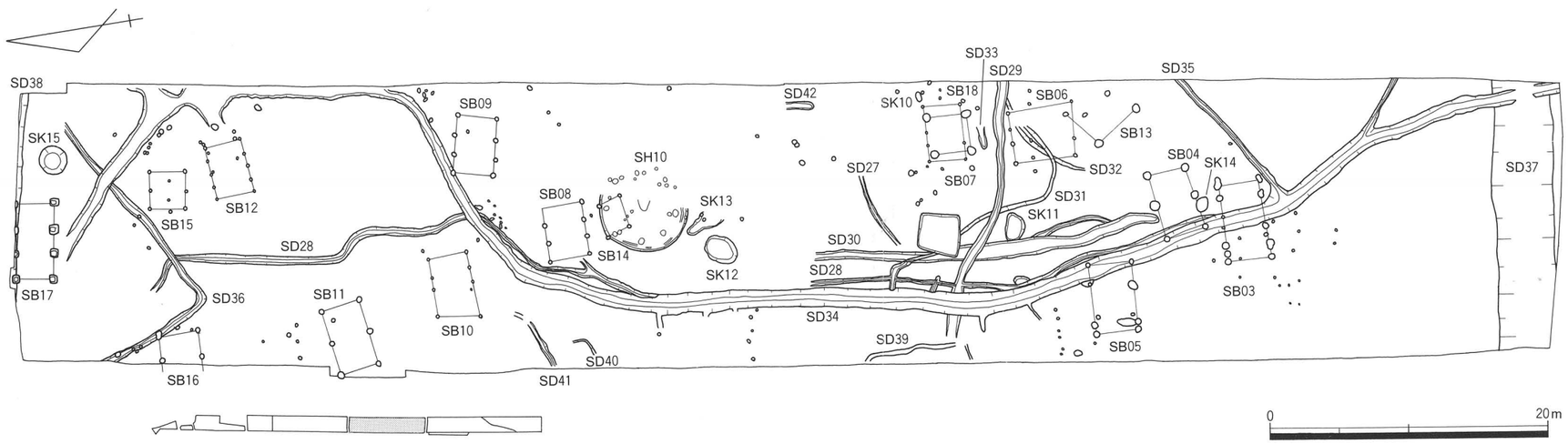
SH10（第105～107図）

C地区のほぼ中央において検出された竪穴住居である。SB14と重複するが，新旧関係は不明である。北側にあるSB08との距離は約1.00m，南側に検出されたSK13とは0.40mである。住居址の東半分は，地山にまで達する後世の削平により消滅しており，柱穴のみの検出である。さらに西半分においても後世の削平を受けて掘り込みは全くなくなり，壁溝と柱穴，床面のみの検出である。

確認面，すなわち床面のレベルは標高20.90m前後である。住居の平面形は，残存する壁溝からほぼ完全な円形を呈すると考えられ，直径は6.30mを測る。床面は後世の削平を受けていることも考慮に入れる必要はあるが，ほぼ平坦で軟弱な床面である。床面は直床である。

ピットはP－1～22が検出されるが，その位置関係や規模から考えてP－1～8が主柱穴である。主柱穴はほぼ同間隔で円形に巡っている。主柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径0.40～0.50mを測る。床面からの深さは0.30～0.45mである。P－1には柱の横部を止める詰石が2個検出され，P－1，7を除くすべての主柱穴は掘り方に段を有している。その他のピットは主柱穴よりわずかに小さいが，深さはほとんど変わらないものが多い。P－2の北側のP－10，P－4の南側にあるP－17は詰石，根石が残存する。

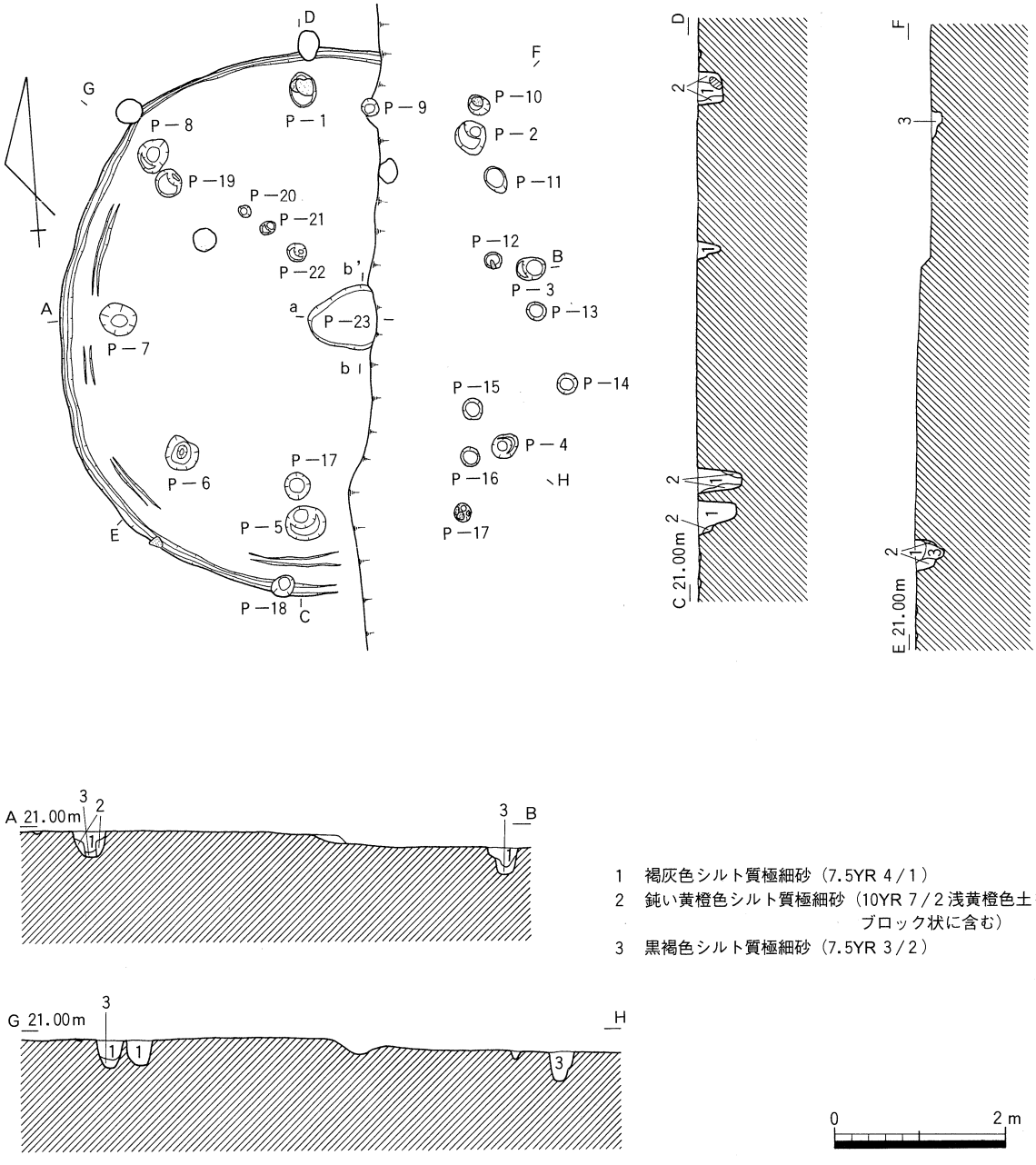
住居の中央には，0.70×0.80m以上の規模である不整な楕円形の土坑（P－23）が検出された。埋土は黒茶色シルト質極細砂の単一層であり，底面に壷（1）と鉢（2）が重なり合って出土した。底面は中央部がやや凹んでいる。いわゆる中央ピットと呼ばれるものであり，底面と掘り込み面は全く焼けておらず，焼土も検出されなかった。壁溝は，最終段階の壁溝と以前の壁溝の2本が検出された。内側の壁溝は部分的な検出であり，幅8cm，深さ1cmである。その外側にある最終段階の壁溝は，全周していたと考えられ，幅は12cm，深さ3cm前後を測る。



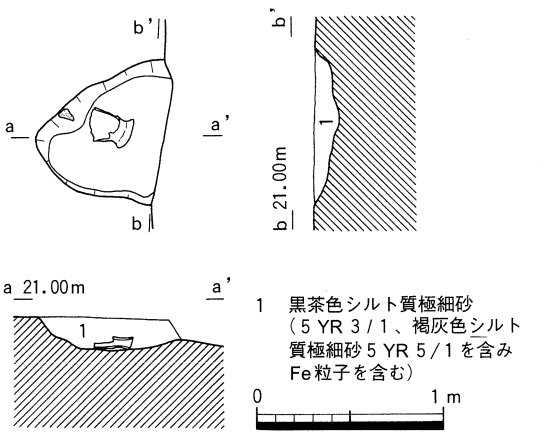
第104図　C地区遺構配置図　（S：1/400）

壁溝が２本検出され，主柱穴の掘り方に段を有すること，さらに主柱穴のまわりに数個のピットが存在することから，本住居は数回の建て直しが行われたと考えられる。

出土遺物　後世の削平を受けているため，遺物の出土はピット内のみである。弥生土器壺（１），同鉢（２）は中央のＰ－23，削器（３）はＰ－12から出土した。

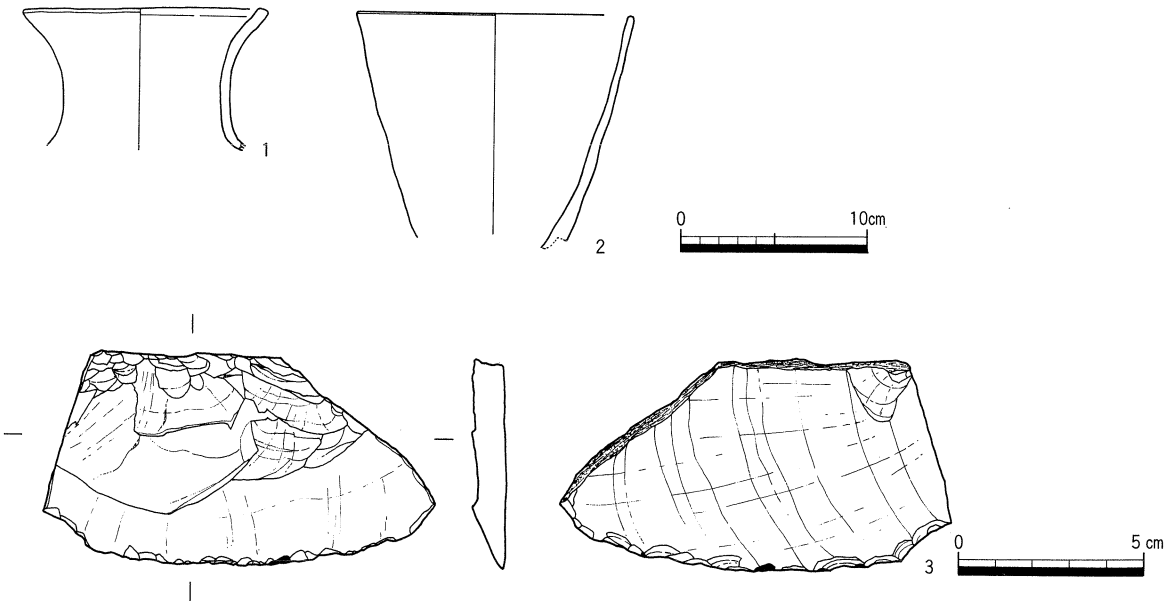


第105図　SH10平・断面図（S：1/80）



第106図　SH10P－23平・断面図（S：1/40）

1はほぼ直立する頸部から口縁部が外反しながらラッパ状に広がる。口縁部内面にわずかに窪む部分がある。内外面とも磨滅と二次的な熱による剥離が著しく，調整は不明である。2は通称「バケツ型土器」と言われるもので，筒状の胴部から直線的に口縁部に至る。口縁部になるにしたがい器壁は薄くなる。内外面とも磨滅と二次的な熱による剥離が著しく，表面は荒れており調整は不明である。下端部は輪積み痕で割れている。3はサヌカイト製の削器で，横長の石材を利用し，下縁部は両面から調整を行い刃部としている。背部は片面のみの調整であり，一部に自然面を残す。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	13.2		(7.6)	口縁部はラッパ状に広がる。摩滅	鈍黄橙10YR7/3	オリーブ黒5Y3/1	石英、長石
2	弥生土器　鉢	15.0		(11.8)	直線的な体部。内外面摩滅。最下位に輪積み痕	鈍黄橙10YR6/4	浅黄2.5Y7/3	〃

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
3	削器	5.6	8.5	0.8	79.8	サヌカイト	下縁部は両方より調整し刃部となす。大剥離。上部自然面

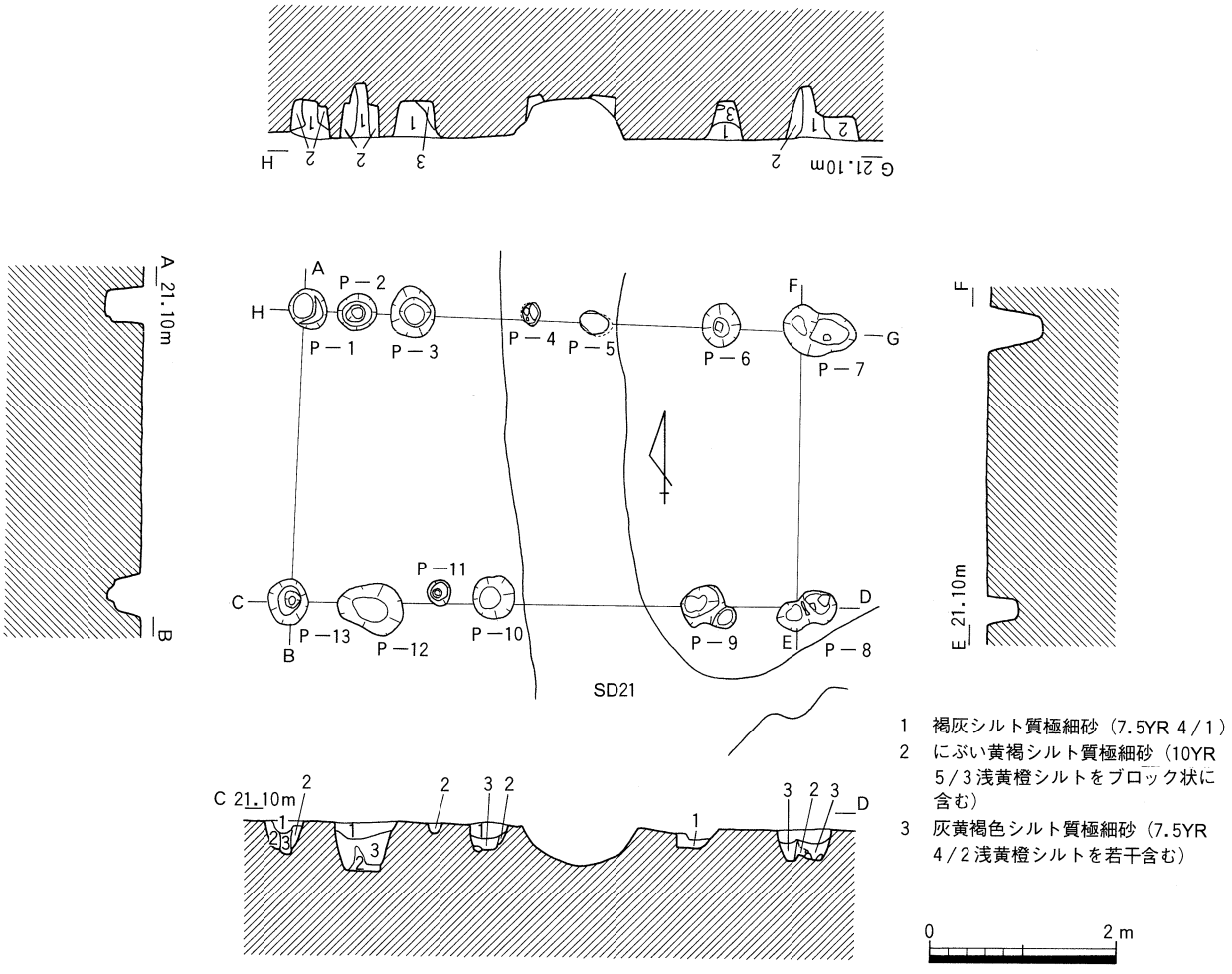
第107図　SH10出土遺物（S：1/2、1/4）

2．掘立柱建物

ＳＢ03（第108図）

Ｃ地区南部のＳＤ34とＳＤ35の合流付近で検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＤ34によってＰ－４，５の上面は削平され，南列側柱の東第３穴を欠く。桁行６間（5.4m），梁行１間（3.1m），床面積は16.7㎡を測る。柱間は，桁行0.6～1.4mを測り，非常に狭い間隔である。柱穴の確認面は標高21.15m前後である。柱穴掘り方の平面形は円形を呈し，径0.26～0.8mを測る。深さは0.26～0.56mである。掘り込みはほぼ垂直であり，Ｐ－１，２，13の底面に小穴がある。柱穴の埋土は褐灰色シルト質極細砂・にぶい黄褐色シルト質極細砂・灰褐色シルト質極細砂の３層に分けられ，Ｐ－１，２，７，13では褐灰色シルト質極細砂の充塡する柱痕が明瞭に確認された。特に，Ｐ－１，２，13では小穴の上に柱痕があり，遺存状態が非常によい。Ｐ－４，６，７，８，10は柱の横部を止める詰石がある。Ｐ－７～９は東側にやや浅いピットが接しており，建て直しがあったと考えられる。

出土遺物　柱穴から数点の弥生土器が出土したが，すべて小片であり，図化できるものはなかった。



第108図　SB03平・断面図（S：1/80）

ＳＢ04（第109～112図）

Ｃ地区南部で検出された東西棟の掘立柱建物である。Ｐ－１，６はＳＤ34によって上部を削平されている。桁行２間（4.4～4.7m），梁行１間（2.8m）を測り，北側の桁行が若干長くなっている。床面積は12.3㎡を測る。柱間は2.0～2.4mである。柱穴の確認面は標高21.10mである。柱穴掘り方の平面形は円形で，径0.55～0.75mを測り，Ｐ－２の深さは0.7m，Ｐ－５は0.6mであり，その他は0.35mで浅い。Ｐ－２は北東側に段を有し，Ｐ－4の底部には径0.1mの小穴が北側に検出された。ほかの柱穴はほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴の埋土は4層に分層され，Ｐ－２，４において褐灰色シルト質極細砂の充填する柱痕が確認された。遺物は，Ｐ－２，５の上面において多量の土器と粘土の塊が出土し，また，Ｐ－４において中位より１個の壷が出土した。

出土遺物　遺物は弥生土器壺（１～12），同甕（13～18），同鉢（19），同高杯（20.21）が出土した。１・４～８・10～12・14・17・18はＰ－２，９はＰ－４，２・３・13・15・16・19～21はＰ－５の出土である。

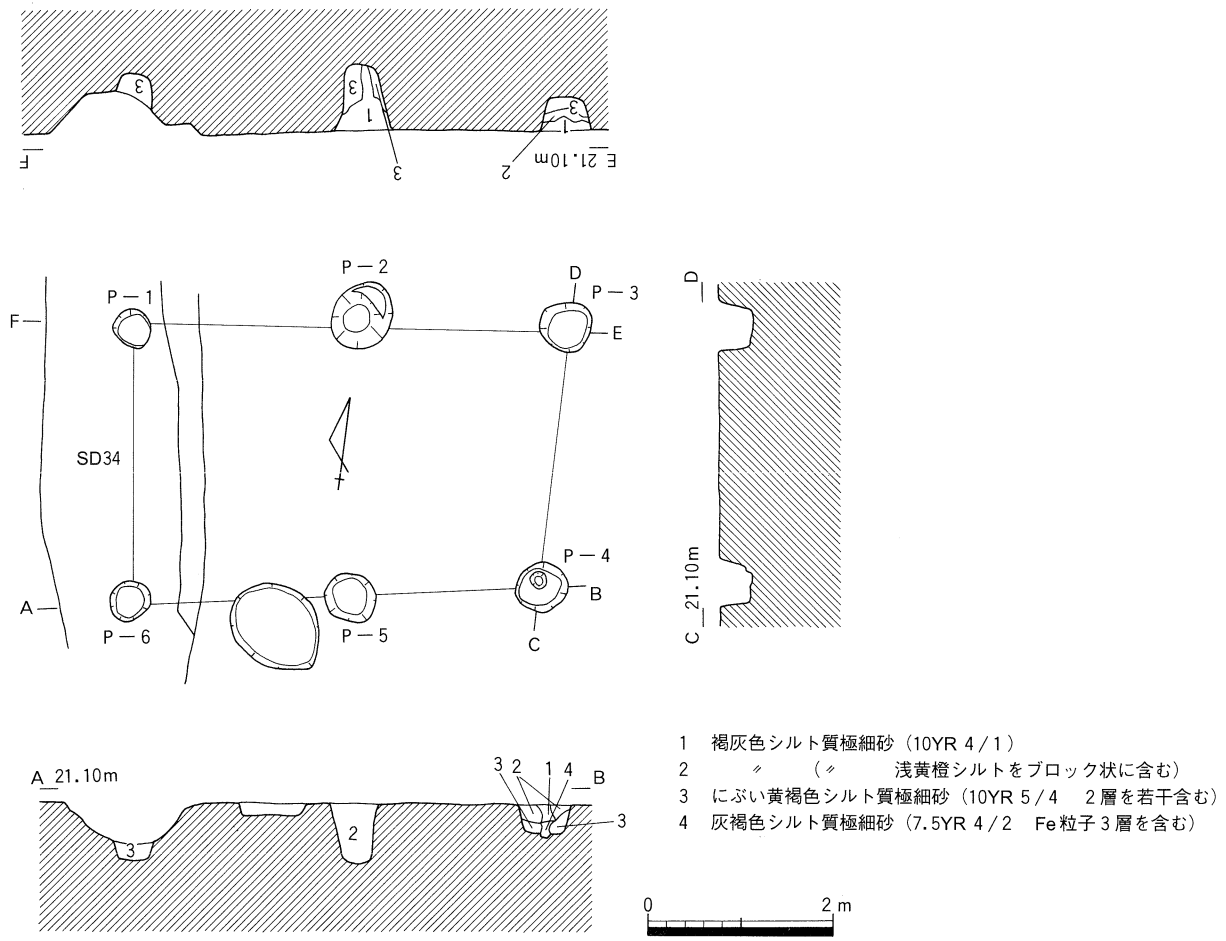
１～４は広口壺で，頸部から外反する口縁部は水平に広がり，口縁端部は上下に拡張する。１は口縁端部に刻み目文，口縁部内面に斜格子文を施し，頸部外面には押圧突帯文が巡る。調整は，口縁部がヨコナデ，頸部内面は指頭圧痕，しぼり目が施される。頸部外面は磨滅している。口縁部に２個一対の円孔が1組残存する。２は口縁端部外面に刻み目文が施され，調整は内外面ともナデである。口縁部に２個一対の円孔が２組残存する。３は口縁端部外面に刻み目文が施され，頸部外面には押圧突帯文を巡らす。調整は，口縁部がヨコナデ，頸部外面は磨滅しているが一部に刷毛目が残存している。内面は刷毛目の後に横方向と縦方向のナデが施され，絞り目が残る。口縁部に２個一対の円孔が２組（ただし，１組は１個のみ）残存する。内面に輪積み痕が明瞭に見られる。４は口縁端部に刻み目文，頸部外面に押圧突帯文を巡らす。調整は，口縁部がヨコナデ，頸部外面は不明瞭なヘラミガキが施され，内面にはしぼり目が見られる。口縁部に２個の円孔を有する。６は頸部外面に押圧突帯文を巡らす。胴部外面の調整は部分的にヘラミガキ，ナデが残存し，内面は指頭圧痕の後に指ナデが施され，絞り目が見られる。

５は広口短頸壺で，頸部から口縁部は器壁が厚く短い。口縁端部は内外面に若干拡張する。頸部外面に幅の広い押圧突帯文が巡る。調整は，口縁部がヨコナデ，胴部外面が明瞭な刷毛目，内面は刷毛目の後にナデが施される。７は頸部から大きく外反する口縁部を持ち，頸部外面に突帯文を巡らす。内外面とも磨滅しているため調整は不明瞭であるが，胴部内面に指頭圧痕が見られる。８は若干内湾気味に広がる口縁部を持ち，口縁端部は内外面に拡張する。口縁部外面にわずかな突帯文が巡る。口縁部の調整はヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面は指頭圧痕が施される。９～12は球形の胴部で，外面ヘラミガキ，内面指頭圧痕の後に刷毛目を施すもの（９～11），胴部上半は刷毛目の後に横方向のナデ，下半は横方向のヘラミガキを施し，外面に貝殻による押圧文を巡らすもの（12）がある。

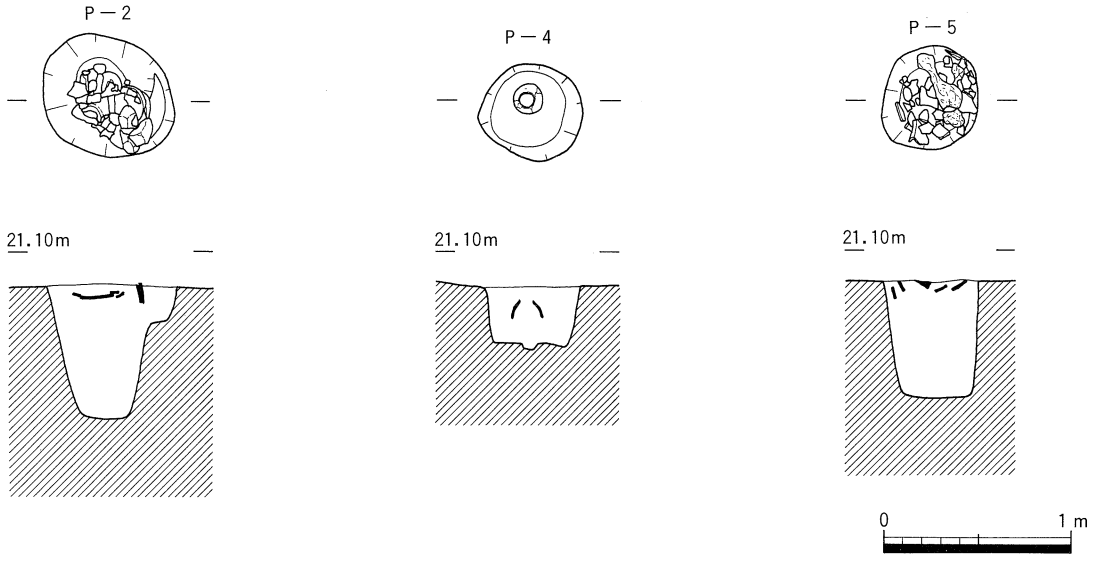
13の口縁部は「く」字形に強く屈曲し，ヨコナデが施され，胴部の一部に刷毛目が残存する。内面に輪積み痕がある。14～18は底部であり，上げ底の15を除き平底である。外面の調整はすべてヘラミガキであるが，内面はヘラ削りのもの（14）と刷毛目を施すもの（15～18）がある。

19は通称「バケツ型土器」と言われ，筒状の胴部と直立する口縁部を持つ。外面は磨滅するが，内面の口縁部はヨコナデ，胴部は指頭圧痕の後に刷毛目を施す。

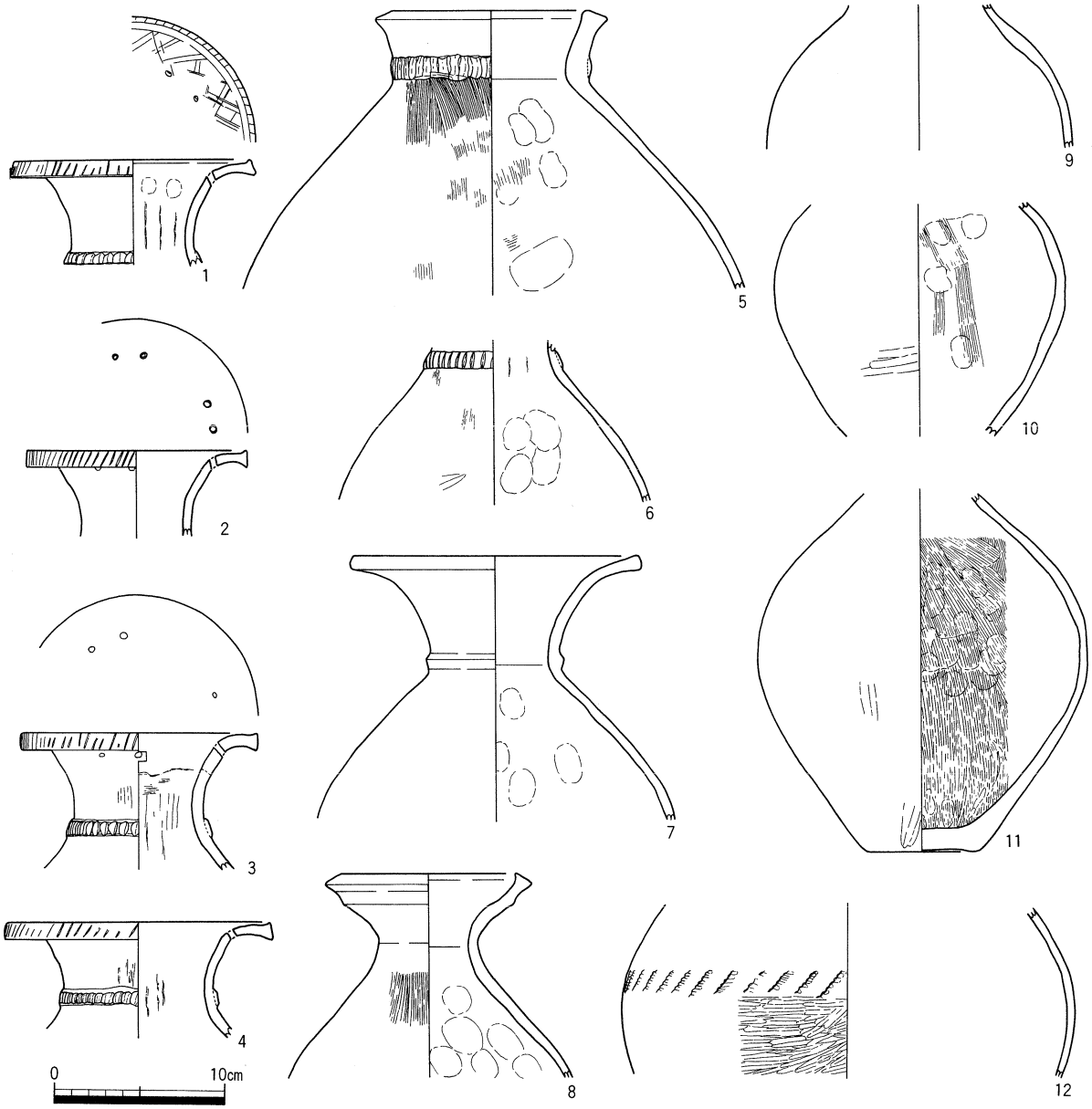
20は大形の高杯で器壁が厚い。円盤充填である。杯部，脚部外面はヘラミガキが施され，脚裾部はヨコナデ，内面ナデが施される。21は完形の高杯で，口縁部は椀形の杯部から屈曲し水平に広がり，脚部は外反気味に広がる。杯部から口縁部の屈曲部に１個の円孔を有する。杯部と脚部外面は磨滅しており，脚内面には絞り目，横方向のヘラ削りが見られる。



第109図　SB04平・断面図（S：1/80）

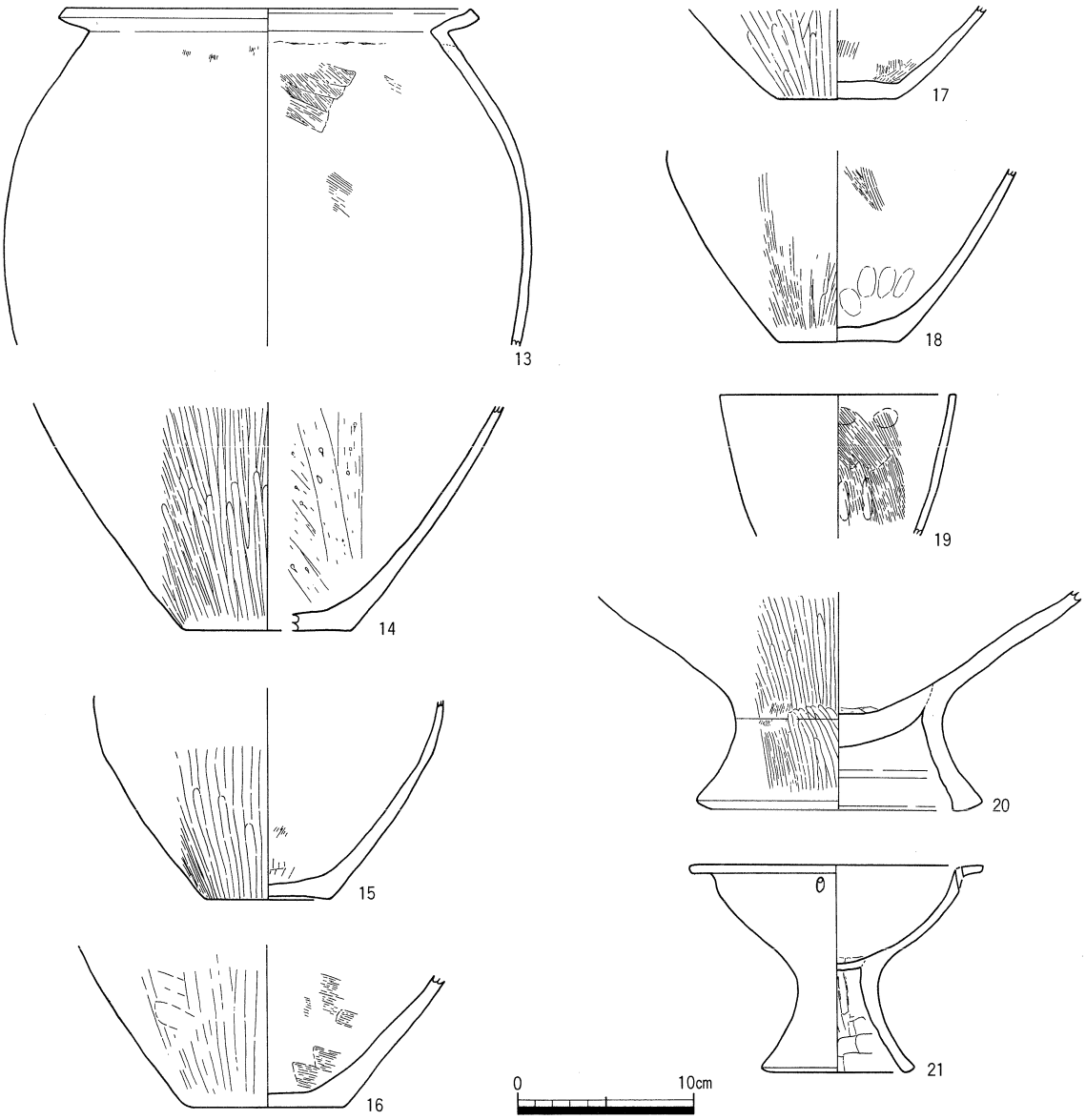


第110図　SB04ピット平・断面図（S：1/40）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	14.0		(6.2)	口縁内面斜格子文、端部刻目文。頸部押圧突帯文。孔２個	明赤褐5YR5/6	鈍橙7.5YR6/4	石英、長石
2	〃	13.0		(5.0)	口縁端部刻目文。孔２個一対２組	橙5YR6/6	浅黄2.5YR7/3	〃
3	〃	14.0		(7.9)	口縁端部刻目文。頸部押圧突帯文。孔２個一対２組	〃	橙2.5YR6/3	〃
4	〃	15.4		(6.7)	口縁端部刻目文。頸部押圧突帯文。内面しぼり目。孔２個	明赤褐2.5YR5/8		〃
5	〃	13.6		(16.2)	頸部押圧突帯文。胴部外面刷毛目。内面刷毛目後にナデ	鈍褐7.5YR5/4	灰褐7.5YR5/2	粗砂、細礫
6	〃			(9.4)	頸部刻目突帯文。内面しぼり目、指頭圧痕	明褐7.5YR5/6	褐灰7.5YR5/1	石英、長石多量
7	〃	16.6		(15.3)	口縁部大きく外反。頸部貼付突帯。内外面摩滅	赤褐10YR5/4	赤灰2.5YR4/1	〃
8	〃	10.7		(11.8)	口縁部外面突帯文１条。胴部外面刷毛目。内面指頭圧痕	橙5YR6/6		〃
9	〃			(13.4)	内外面摩滅。外面一部ヘラミガキ	鈍黄橙10YR7/4	黒褐10YR3/1	〃
10	〃			(13.5)	外面ヘラミガキ。内面指頭圧痕、刷毛目	褐灰10YR5/1	〃	〃
11	〃		6.4	(20.9)	若干上げ底。外面摩滅。内面指頭圧痕後に刷毛目	灰褐7.5YR4/2	鈍赤褐5YR5/4	〃
12	〃			(9.9)	外面に貝殻押圧文、ヘラミガキ	鈍黄褐10YR5/4		〃

第111図　SB04出土遺物(1)（S：1／4）



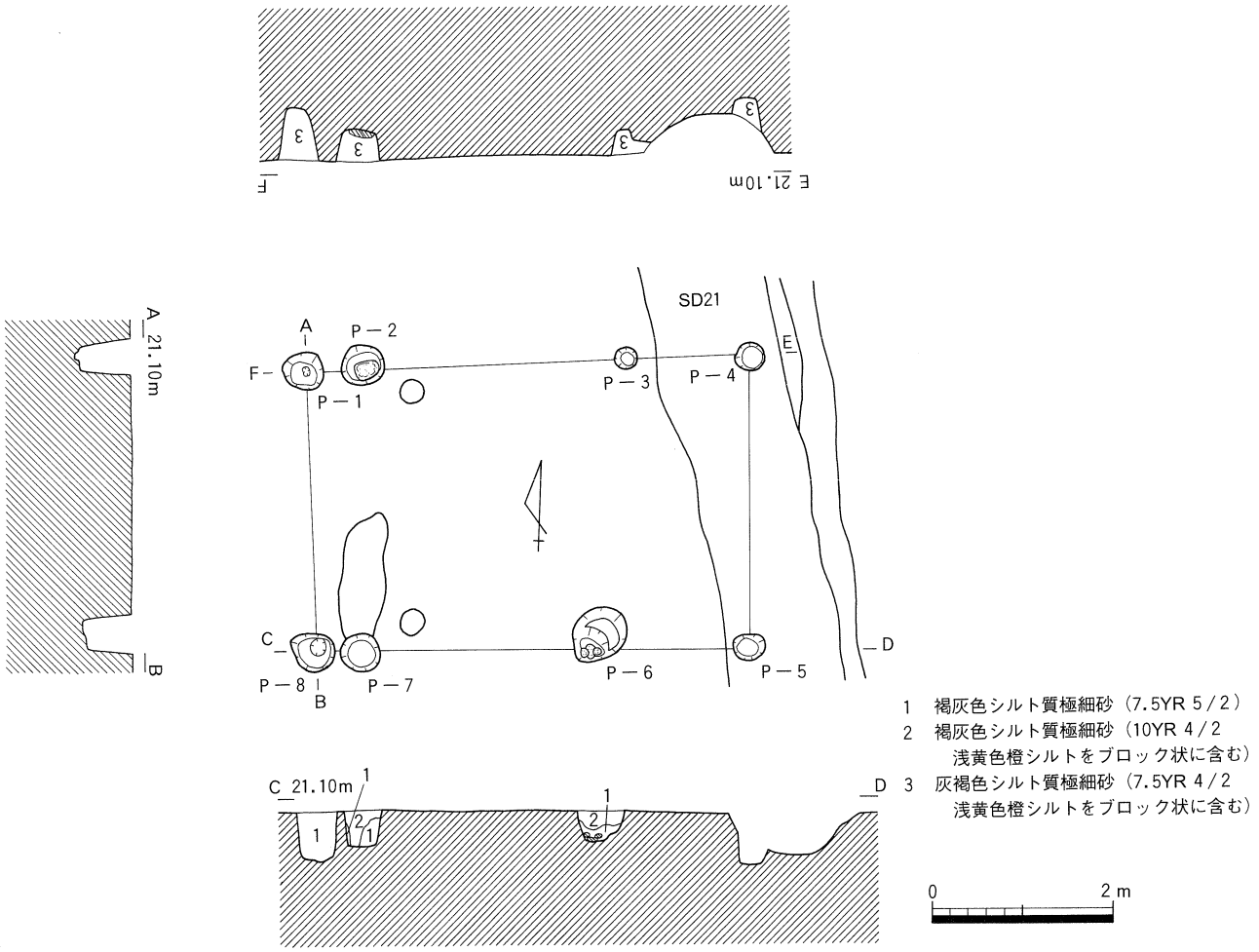
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
13	弥生土器 甕	23.2		(18.7)	く字口縁。胴部外面一部に細かい刷毛目、内面刷毛目	明褐灰7.5YR 7/2	鈍黄褐10YR4/3	細～粗砂多量
14	〃		9.6	(12.5)	平底。外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り	鈍褐7.5YR5/3		石英、長石
15	〃		7.2	(11.2)	若干上げ底。外面ヘラミガキ。内面摩滅	明赤褐2.5YR5/8	黒褐10YR3/1	〃
16	〃		8.7	(9.0)	平底。外面ヘラミガキ。内面刷毛目	灰黄2.5Y6/2	灰5Y5/1	細～粗砂多量
17	〃		6.6	(5.0)	平底。外面ヘラミガキ。内面明瞭な刷毛目	明赤褐2.5YR5/6	褐7.5YR4/3	石英、長石、角閃石
18	〃		7.0	(10.0)	平底。外面ヘラミガキ。内面刷毛目、指頭圧痕	鈍橙7.5YR7/4		粗砂、細礫
19	弥生土器 鉢	13.4		(7.9)	外面摩滅。内面指頭圧痕後に刷毛目	明褐灰5YR7/2	橙5YR6/6	石英、長石
20	弥生土器 高杯		16.2	(12.2)	円盤充填。外面刷毛目、ヘラミガキ。内面ナデ	鈍黄褐10YR5/3	黒褐10YR3/1	〃
21	〃	15.6	7.6	11.5	円盤充填。水平に広がる口縁部。脚内面ヘラ削り。孔１個	鈍赤橙10YR6/4	橙2.5Y6/6	石英、長石、角閃石

第112図　SB04出土遺物(2)（S：1／4）

ＳＢ05（第113･114図）

Ｃ地区南部においてＳＢ04の西側に検出された東西棟の掘立柱建物である。Ｐ－４，５はＳＤ21により上部を削平されている。桁行３間（4.7～4.9m），梁行１間（3.0～3.2m），床面積は14.9㎡を測る。桁行の柱穴間は0.5～2.9mを測り，Ｐ－１，２間とＰ－７，８間の距離が極端に短い。柱穴の確認面は標高21.15m前後である。柱穴掘り方の平面形は円形を呈し，径は0.25～0.7mを測り，主柱穴のＰ－１，４，５，８の深さは0.6m，その他は0.3m前後である。Ｐ－２，６は根石を有する。柱穴の埋土は２層に分層され，Ｐ－７において柱痕が確認された。

出土遺物　柱穴から数点の弥生土器片が出土したが，図化できたのは１のみである。１はＰ－７から出土した壺の頸部で，外面に押圧突帯が巡る。



第113図　SB05平・断面図（Ｓ：１/80）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺			(3.4)	頸部押圧突帯文。内面ナデ	灰褐7.5YR5/2	褐灰7.5YR4/1	石英、長石、角閃石

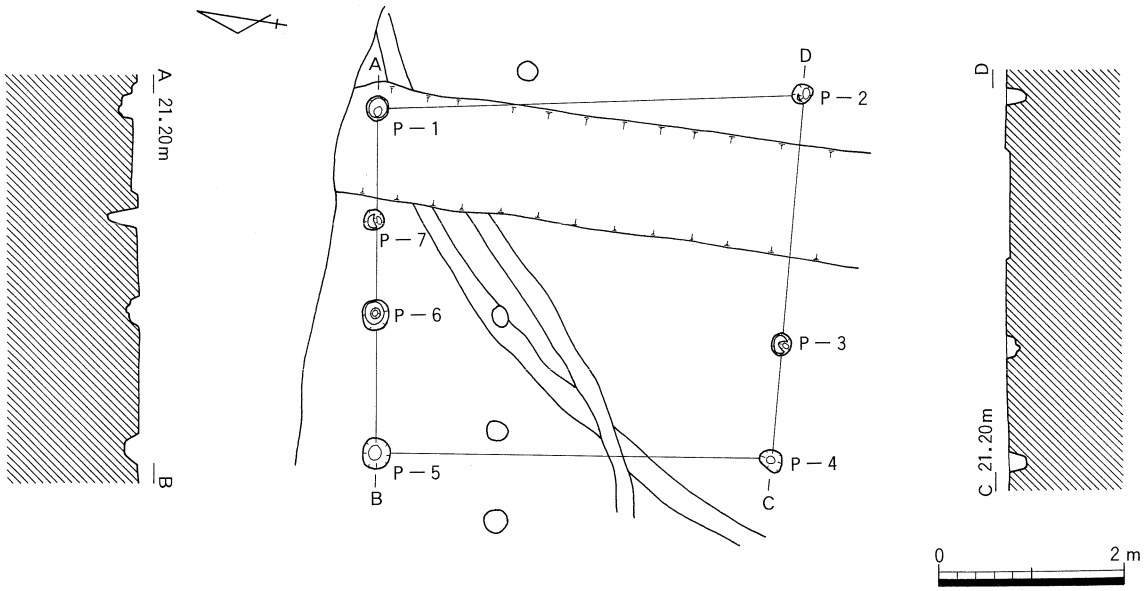
第114図　SB05出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＢ06（第115･116図）

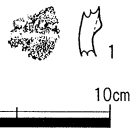
Ｃ地区中央やや南寄りの位置において検出された掘立柱建物である。建物の東側には試掘トレンチが掘削されたため，Ｐ－１の上面と南列柱の東第２穴は削平されている。北側にはＳＤ29が東西に延び，ＳＤ31・32が建物の北東隅から南西隅に延びる。

建物の規模は桁行３間（3.6～3.9m），梁行１間（4.25～4.55m）であり，Ｐ－２の位置が南に寄りすぎているため東側の梁行が長くなっており，やや不整形な形となっている。床面積は16.5㎡を測る。桁行の柱穴間は1.0～1.5mである。柱穴の確認面のレベルは標高21.05m前後である。柱穴の掘り方の平面形はすべて円形であり，径は0.2～0.35mを測る。深さは0.15～0.3mであるが，0.2m前後のものが多い。Ｐ－２は掘り込みにわずかな段を持ち，Ｐ－１・３・６・７は底面に小穴が見られる。柱穴の埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　柱穴からの遺物は数点の弥生土器の小片のみであり，図化する事ができたのは弥生土器壷（１）のみである。１はＰ－３より出土した壺の頸部の小片で，外面に刻目突帯文を有する。



第115図　SB06平・断面図（Ｓ：１/80）

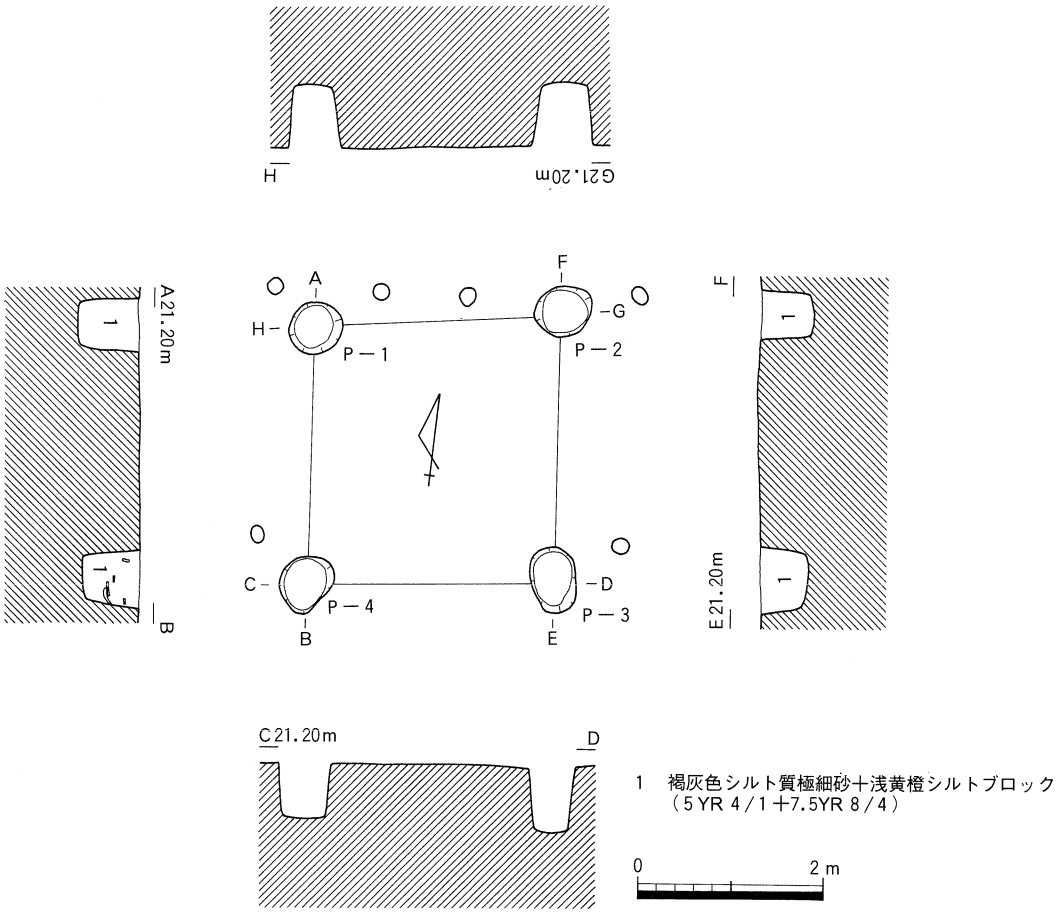


番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷			(2.7)	頸部刻目突帯文。内面ナデ	鈍褐7.5YR7/4		粗砂多量

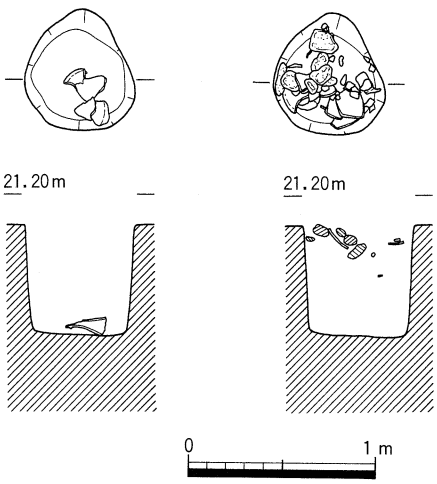
第116図　SB06出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＢ07（第117～119図）

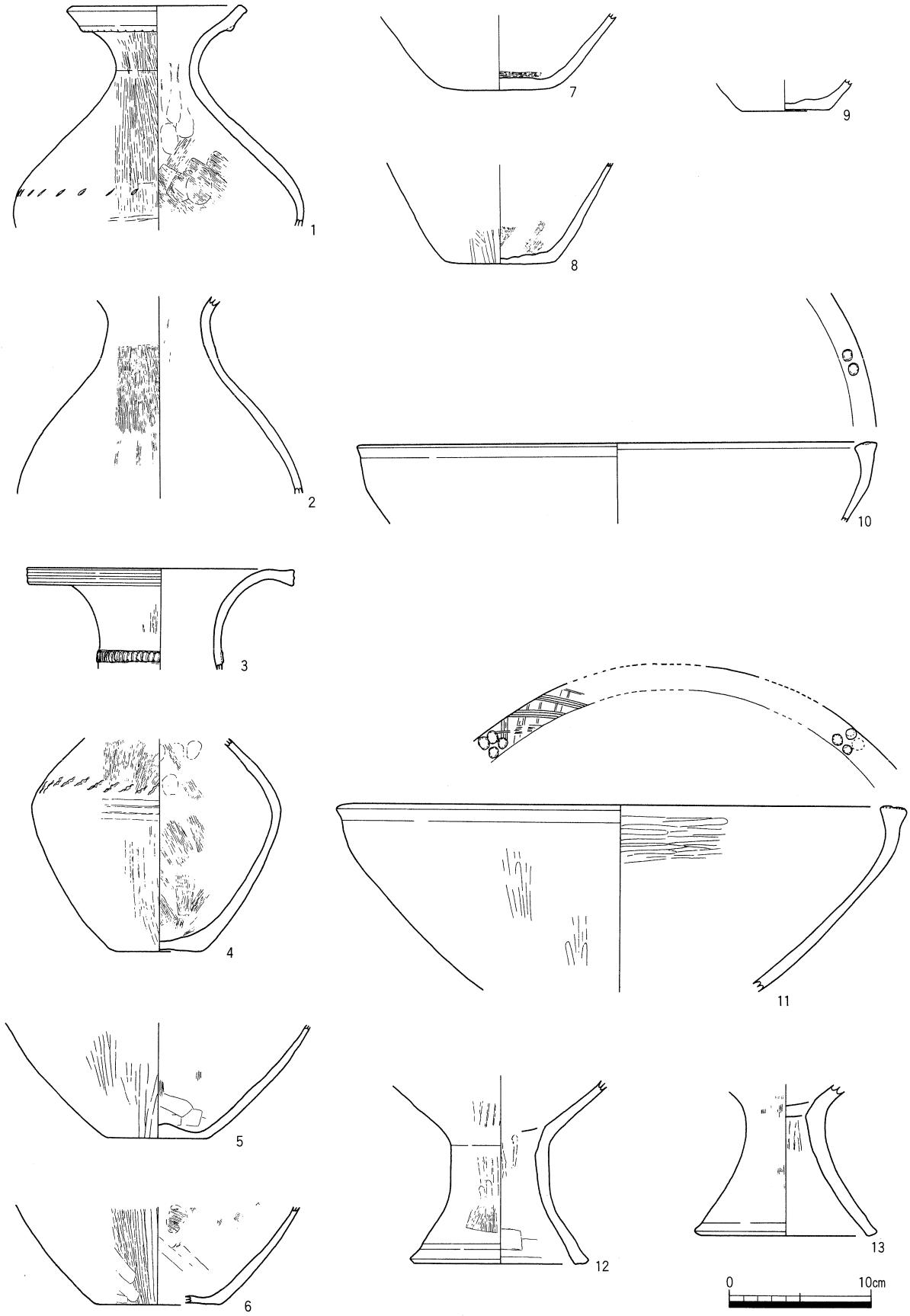
Ｃ区中央やや南寄りにおいて，ＳＢ18と重複して検出された１×１間の掘立柱建物であり，新旧関係は不明である。柱穴の芯芯間距離は2.7ｍを測り，床面積は7.3㎡である。柱穴の確認面のレベルは標高21.05ｍ前後である。柱穴掘り方の平面形は円形と楕円形を呈し，径は0.6ｍ，深さは0.6ｍ前後



第117図　SB07平・断面図（Ｓ：１/80）



第118図　SB07Ｐ－４平・断面図
（Ｓ：１/40）



第119図　SB07出土遺物（S：1／4）

（第119図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	12.8		(15.4)	口縁刻目突帯文。胴部外面刷毛目、ヘラミガキ、刻目文。内面刷毛目	鈍褐7.5YR5/4		石英、長石、角閃石
2	〃			(13.7)	外面細かい刷毛目。内面しぼり目後にナデ	〃		〃
3	〃	19.0		(7.0)	口縁端部凹線２条。頸部押圧突帯文。胴外面ヘラミガキ	鈍黄褐10YR5/4	黄褐10YR5/6	石英、長石多量
4	〃		6.5	(14.8)	外面上半刷毛目、下半ヘラミガキ、貝殻押圧文。内面指頭圧痕	〃	褐10YR4/6	〃
5	弥生土器　甕		7.2	(8.0)	底部中央が肥厚。外面ヘラミガキ。内面刷毛目、板ナデ	橙7.5YR6/6	黒褐2.5Y3/1	〃
6	〃		8.8	(6.8)	外面ヘラ削り後にヘラミガキ。内面ナデ	鈍黄褐10YR5/3	鈍黄2.5Y6/4	石英、長石、角閃石
7	〃		8.0	(5.3)	外面ナデ	鈍黄橙10YR7/2		微砂多量
8	〃		7.8	(6.9)	外面ヘラミガキ。内面刷毛目。底面ナデ	鈍橙7.5YR7/3	灰オリーブ5Y4/2	石英、角閃石
9	〃		6.2	(2.1)	内外面摩滅	鈍橙7.5YR6/4	明赤褐5YR5/6	石英、長石
10	弥生土器　高杯	37.0		(5.6)	口縁端部拡張、円形浮文２個一対。内面刷毛目	黄橙10YR6/3		粗砂、細礫多量
11	〃	40.4		(12.8)	口縁端部円形浮文４個一対２組、斜格子文。内外面ヘラミガキ	鈍褐7.5YR5/4	鈍褐10YR4/3	〃
12	〃		12.6	(12.3)	円盤欠損。外面ヘラミガキ、刷毛目。内面しぼり目、ナデ	鈍赤褐2.5YR4/4	黒褐5YR2/1	石英、長石
13	〃		12.8	(10.5)	円盤欠損。外面刷毛目後にナデ。内面しぼり目、ナデ	赤褐5YR4/6	黒褐10YR3/2	石英、長石、角閃石

を測り，ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴の埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。遺物は，Ｐ－４の上部と底面において多量の土器と石が出土した。

出土遺物　遺物は柱穴から弥生土器壺（１～４），同甕（５～９），同高杯（10～13），ほかに多量の土器片が出土した。図化できた遺物のＰ－２より出土した２以外は，Ｐ－４出土のものである。

１，２は胴部が大きく張り，細い頸部から若干内湾気味に口縁部が広がる。１は口縁部にヨコナデ，頸部・胴部外面は粗い刷毛目が縦方向に施され，胴部中央以下は縦・横方向のヘラミガキが見られる。頸部内面にしぼり目が残り，胴部内面は指頭圧痕と細かい刷毛目の後にナデが施される。口縁部外面に刻目突帯文，胴部中央に刻目文が巡る。２は一部磨滅を受けるが，頸部外面は横方向のナデ，胴部外面は縦方向の細かい刷毛目が施され，内面はしぼり目の後にナデが施される。広口壺（３）は頸部から大きく外反し，口縁端部は水平に広がる。口縁端部は上下に若干拡張し，凹線が２条巡る。頸部外面に凹圧突帯文が１条めぐり，調整は口縁部ヨコナデ，頸部は縦方向のヘラミガキが施される。４は若干上げ底気味の底部で，胴部は大きく張っている。胴部外面の調整は，上半が縦方向の刷毛目，中央は横方向のヘラミガキ，下半は縦方向のヘラミガキが施される。内面の上位は指頭圧痕の後に刷毛目，下半は縦方向の粗い刷毛目が施される。外面に貝殻による押圧文が１条巡る。

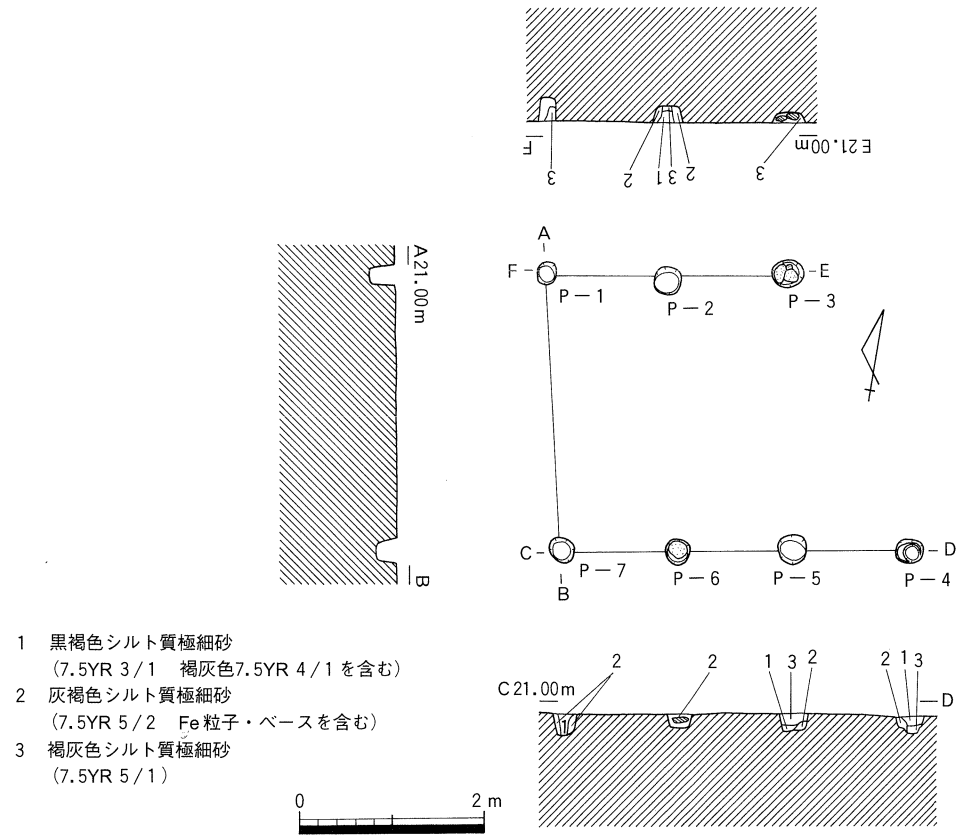
５～９は底部である。５は平底で，中央が非常に肥厚する。外面の調整は縦方向のヘラミガキが施され，内面は一部に刷毛目，底部近くは板ナデである。６は若干上げ底気味で，外面の調整はヘラ削り後に縦方向のヘラミガキとナデが施される。内面は刷毛目後のナデが部分的に残存する。７は平底で，胴部と底部外面はナデが施される。内面は磨滅を受けているが底部近くに横方向の刷毛目が少し残っている。８は平底で，内外面とも磨滅のため調整は不明瞭であるが，外面にヘラミガキ，内面に細かい刷毛目が一部残存する。底部外面はナデが施される。９は平底で，内外面とも磨滅している。

10，11は高杯の杯部である。10は椀状を呈し，口縁端部は内外面に拡張し２個一対の円形浮文を１組残存する。内外面の調整は磨滅のため不明であるが，内面に細かい刷毛目が部分的に見える。11は直径40.4cmの大形の高杯であり，椀状を呈する。口縁端部は内外面に大きく拡張し，上面に斜格子文が施され，４個一対の円形浮文が２組残存する。内外面とも磨滅しているため調整は不明瞭であるが，一部にヘラミガキが残存する。12，13は円盤を欠損する高杯の脚部である。12は外面上位にヘラミガキ，下半には刷毛目の後にヘラミガキを施し，裾部はヨコナデである。杯部内面はナデ，脚部にはしぼり目と板ナデが見られる。13の外面は細かい刷毛目の後にナデ，内面はしぼり目，ナデが施され，裾部はヨコナデである。

ＳＢ08（第120図）

Ｃ地区のほぼ中央において単独で検出された東西棟の掘立柱建物である。北列側柱の東第１穴は未検出である。桁行３間（3.7m），梁行１間（2.9m），床面積は10.6m²を測る。桁行の柱穴間は1.2～1.3mである。柱穴の確認面のレベルは標高20.85mである。柱穴掘り方の平面形は円形であり，径は0.2～0.3mを測る。深さは，Ｐ－１，７が0.25m，その他は0.1～0.15mである。Ｐ－３には0.2m以下の自然石３個，Ｐ－６には0.2mの自然石１個が底面近くに検出され，根石と考えられる。Ｐ－４は段を有する底面で，中心はやや東寄りに位置する。柱穴の埋土は黒褐色シルト質極細砂・灰褐色シルト質極細砂・褐灰色シルト質極細砂の３層であり，Ｐ－１，２，４は中央部に黒褐色シルト質極細砂が堆積し，柱痕と考えられる。

出土遺物　柱穴内から数点の弥生土器片が出土したのみであり，図化できるものはなかった。



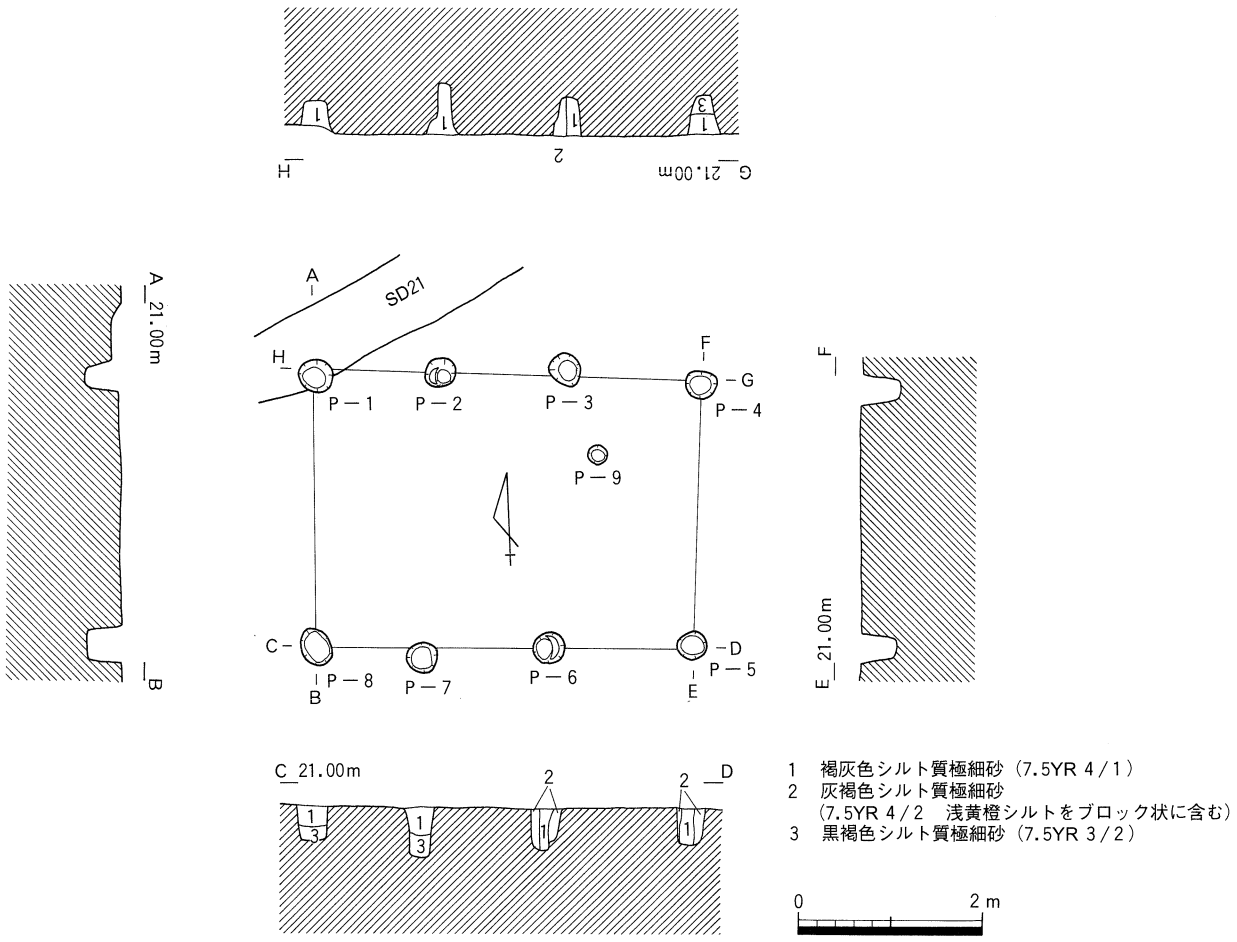
第120図　SB08平・断面図（Ｓ：１/80）

ＳＢ09（第121･122図）

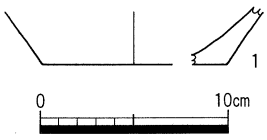
Ｃ区ほぼ中央において検出された東西棟の掘立柱建物であり，Ｐ－１がＳＤ21によって上部を削られている。桁行３間（4.0m），梁行１間（2.9m）であり，床面積は11.6m²を測る。桁行の柱間は1.1～1.5mである。柱穴の確認面のレベルは標高20.7mである。柱穴掘り方の平面形はすべて円形を呈し，径は0.3～0.4m，深さは0.4～0.55mを測る。Ｐ－２，６は二段掘となっており，底面の中心がＰ－２では東寄り，Ｐ－６では西寄りとなっている。柱穴の埋土は褐灰色シルト質極細砂・灰褐色シ

ルト質極細砂・黒褐色シルト質極細砂の３層に分けられ，Ｐ－３，５，６において褐灰色シルト質極細砂の充填する柱痕が確認された。Ｐ－３の南側にはＰ－９が検出された。規模は側柱よりやや小さく，径0.2ｍで深さは0.25ｍを測る。

出土遺物　柱穴内から数点の弥生土器片が出土したが，大部分は小片であり，図化できたのは弥生土器甕（１）のみである。１は器壁の厚い平底の底部であり，内外面ともに磨滅している。



第121図　SB09平・断面図（Ｓ：１/80）



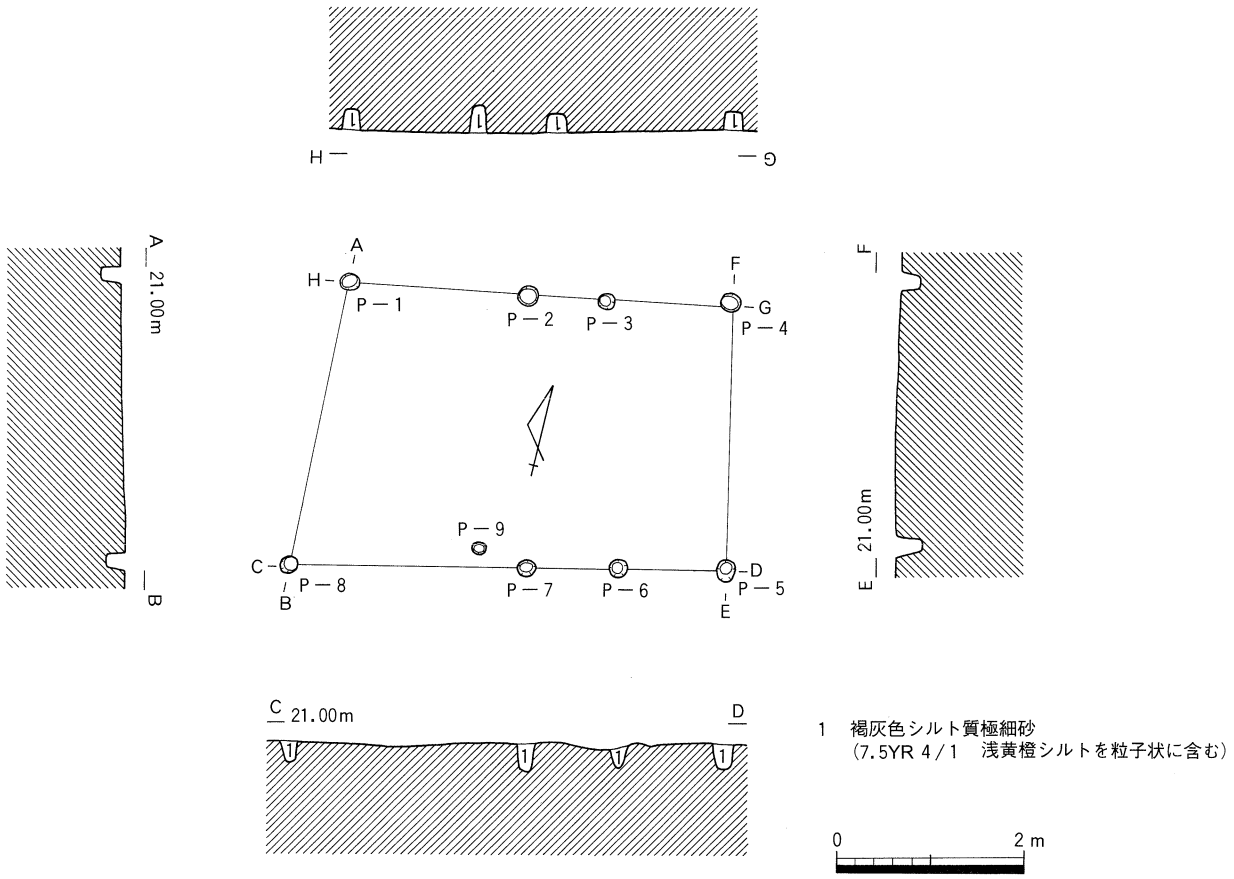
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　甕		9.8	(2.8)	平底。内外面摩滅	褐7.5YR4/4	鈍黄橙10YR6/4	粗砂、細礫多量

第122図　SB09出土遺物（Ｓ：１/４）

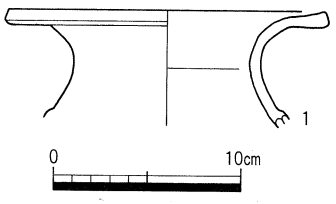
ＳＢ10（第123･124図）

Ｃ地区のほぼ中央において単独で検出された東西棟の掘立柱建物である。桁行３間（4.1～4.65m），梁行１間（2.85m）の建物であるが，Ｐ－８の位置が離れているため，やや不整形である。床面積は12.5m²を測る。桁行の柱穴間は0.8～2.5mであり，Ｐ－２と３，Ｐ－６と７間が短い。柱穴の確認面のレベルは標高20.85m前後である。柱穴掘り方の平面形はすべて円形で，径は0.15～0.2mであり，深さは0.15～0.22mを測るが，0.15m前後が多い。柱穴の埋土は単一層である。

出土遺物　遺物は柱穴内より弥生土器壺（１）と数点の弥生土器片が出土した。１は頸部から大きく外反し，端部はほぼ水平に広がり若干肥厚する。頸部外面に突帯文の一部が残存する。



第123図　SB10平・断面図（Ｓ：１/80）



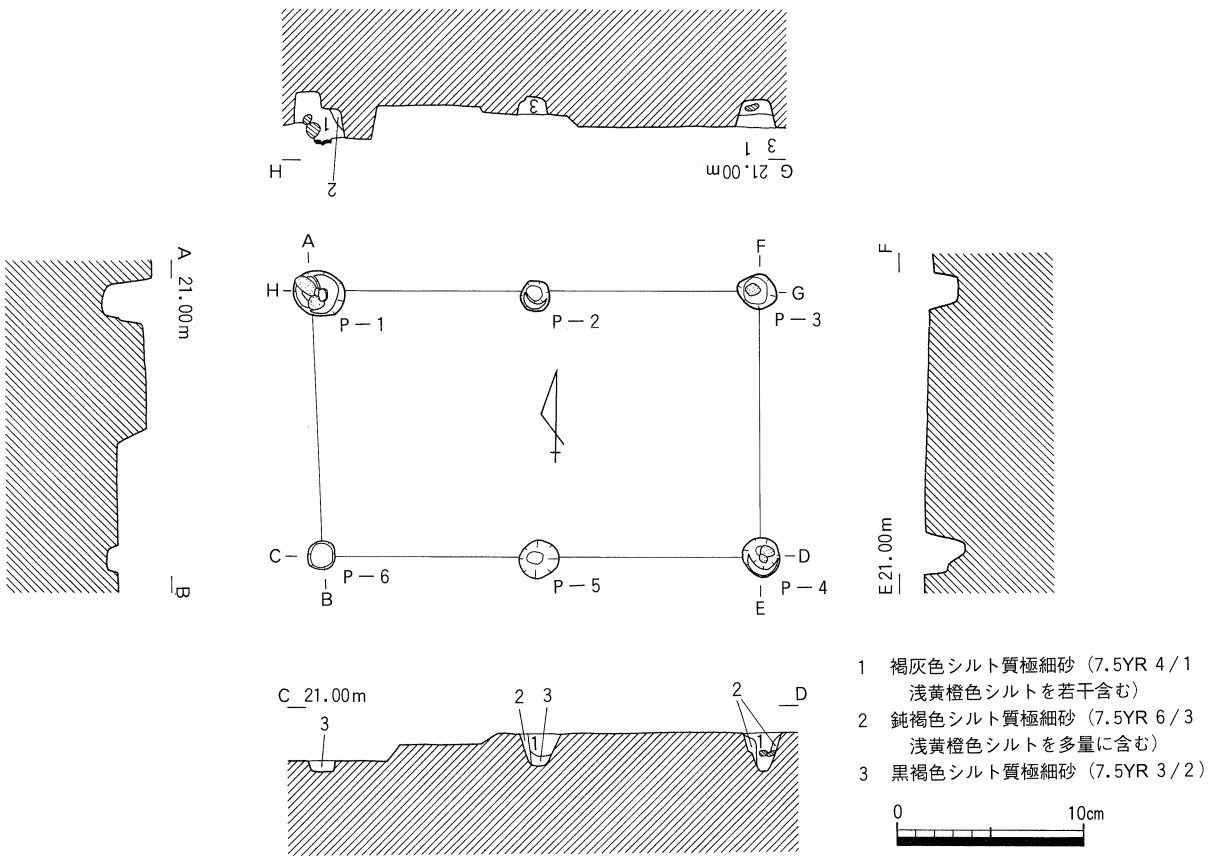
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	17.0		(6.1)	口縁部が水平に広がる。ヨコナデ	明赤褐2.5YR5/6	赤褐5YR4/6	石英、長石、角閃石

第124図　SB10出土遺物（Ｓ：１/４）

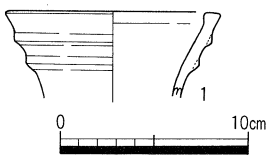
ＳＢ11（第125･126図）

Ｃ地区中央やや北寄りにおいて単独で検出された東西棟の掘立柱建物である。試掘調査時のトレンチによりＰ－２，６の上面は削平されている。桁行２間（4.7m），梁行１間（2.8m），床面積は13.2m²を測る。桁行の柱穴間の距離は芯芯で2.3mを測る。柱穴の確認面のレベルは標高20.7m前後である。柱穴掘り方の平面形はすべて円形であり，径は0.4～0.55m，深さは0.3～0.5mを測る。Ｐ－１，２，４は底面に段を有し，Ｐ－１，３，４において柱の横部を止める詰石，根石が残存している。柱穴の埋土は３層に分けられ，Ｐ－４，５で柱痕が確認される。遺物は柱穴より出土し，特にＰ－１では詰石の上部より土器片が出土した。

出土遺物　遺物はＰ－１を中心として弥生土器壺（１）と数点の弥生土器片が出土した。１は直線的に広がる口縁部で，端部が内側に拡張する。外面に貼付突帯が２条巡る。



第125図　SB11平・断面図（Ｓ：１/80）



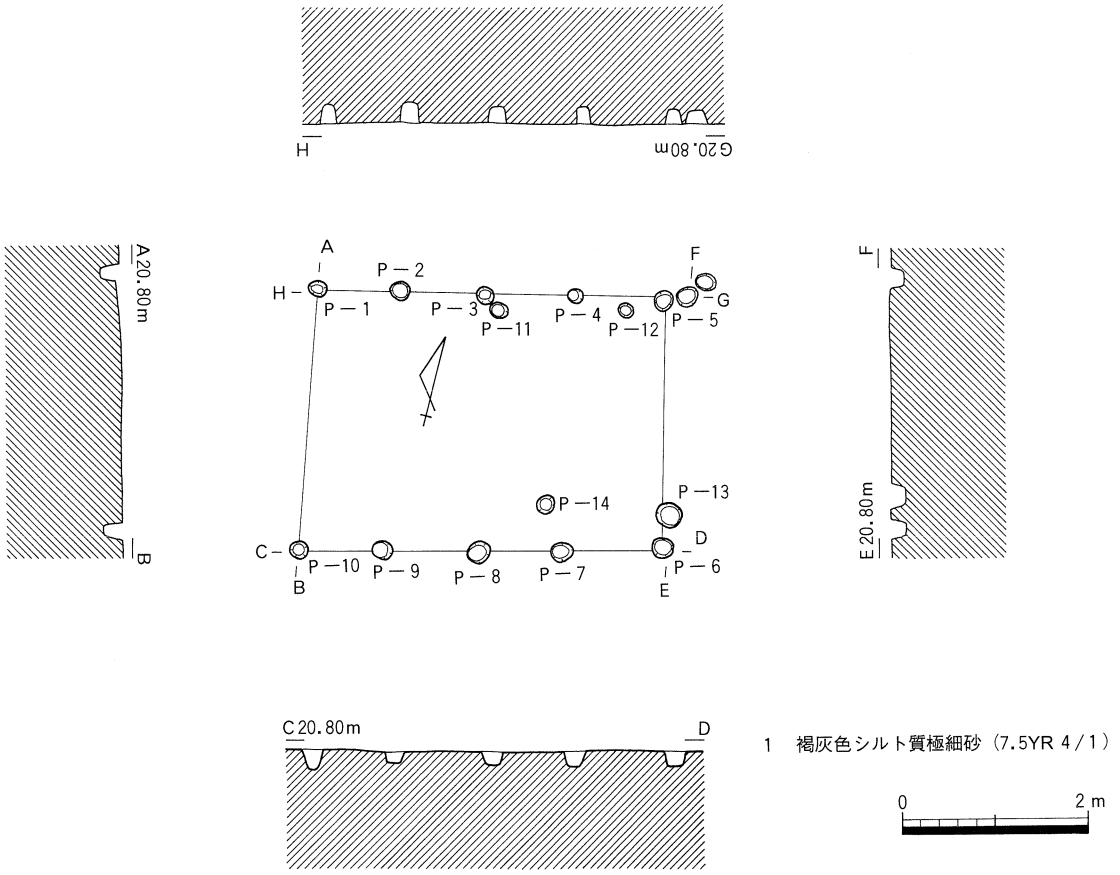
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	11.5		(4.6)	口縁部外面に貼付突帯。内外面摩滅	赤褐5YR4/6	褐灰5YR4/1	石英、長石

第126図　SB11出土遺物（Ｓ：１/４）

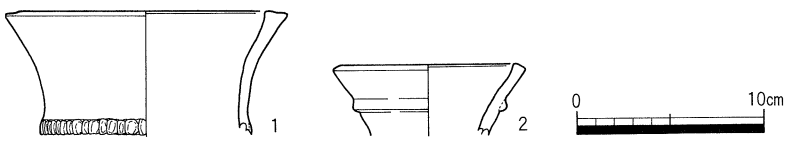
ＳＢ12（第127･128図）

Ｃ地区北部で単独に検出された東西棟の掘立柱建物である。桁行４間（3.9m），梁行１間（2.7m）の建物であり，その床面積は10.5㎡を測る。桁行の柱穴間は0.9～1.1mである。柱穴の確認面のレベルは標高20.7m前後である。柱穴掘り方の平面形はすべて円形であり，径は0.16～0.26m，深さは0.12～0.2mであるが，0.15m前後が多い。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　柱穴から弥生土器壺（１，２）と数点の弥生土器片が出土した。１は外反する口縁部で，端部を若干拡張させる。頸部外面に押圧突帯文が巡る。２はほぼ直線的に広がる口縁部で，外面に貼付突帯文を巡らす。



第127図　SB12平・断面図（Ｓ：1/80）



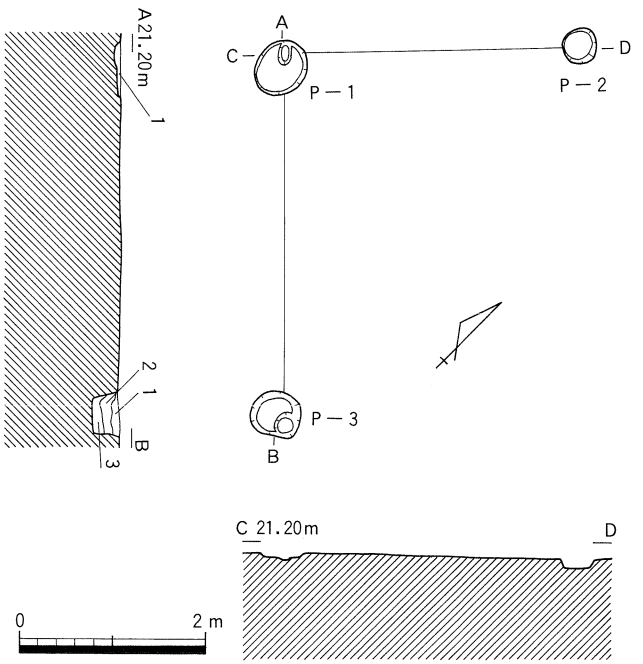
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	15.4		(6.5)	口縁端部拡張。頸部外面に押圧突帯文。摩滅	灰白7.5Y7/1	鈍黄橙10YR7/3	粗砂、細礫
2	〃	10.4		(3.9)	外面に貼付突帯。内外面摩滅	鈍赤褐5YR5/4	明赤褐2.5YR5/6	石英、長石

第128図　SB12出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＢ13（第129図）

Ｃ地区南部においてＳＢ06と重複して検出された１×１間の掘立柱建物である。南東隅の柱穴は未検出である。ＳＢ06との新旧関係は不明である。Ｐ－１，２間の芯芯距離は1.3m，Ｐ－１，３間の芯芯距離は3.95mを測る。柱穴の確認面のレベルは標高21.1mである。柱穴掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈し，径は0.35～0.6mを測る。Ｐ－3の深さは0.55mであるが，その他は0.1mと浅い。Ｐ－１，３は底面に柱痕の小穴を有する。Ｐ－３の埋土は上位から灰黄褐色＋褐灰色シルト質極細砂，明黄褐色＋灰黄褐色シルト質極細砂，浅黄橙色シルト質極細砂の３層が水平に堆積する。

出土遺物　柱穴からの遺物の出土は数点の弥生土器小片のみであり，図化できるものはなかった。



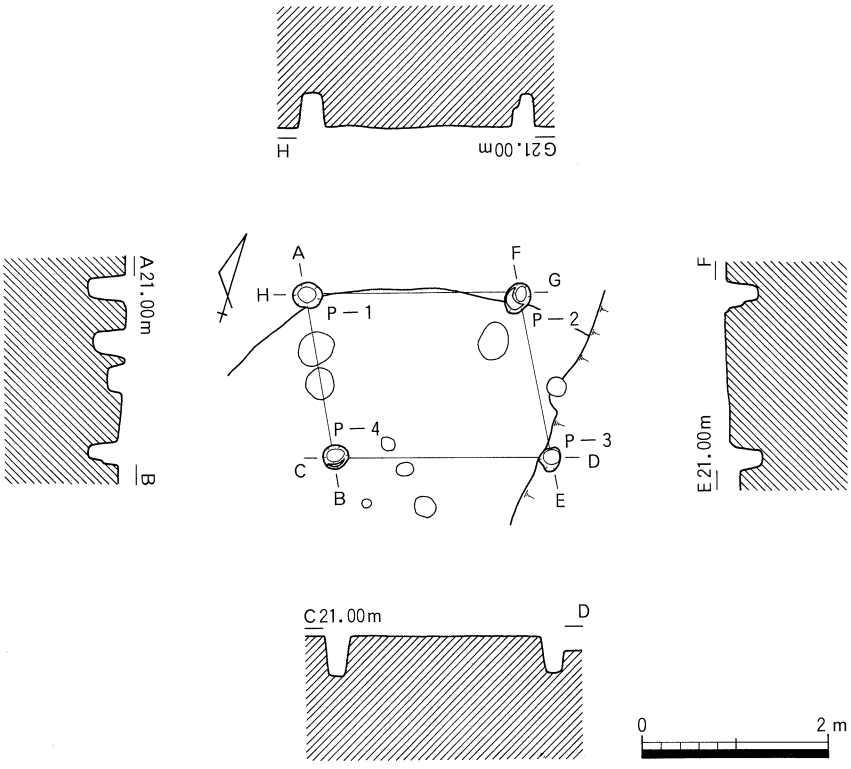
1　灰黄褐色＋褐灰色シルト質極細砂（10YR 4/2＋7.5YR 4/1）
2　明黄褐色シルト＋灰黄褐色シルト極細砂（10YR 7/6＋10YR 4/2）
3　浅黄橙色シルト（10YR 8/3）

第129図　SB13平・断面図（Ｓ：１/80）

ＳＢ14（第130図）

Ｃ地区ほぼ中央部で検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＨ10と重複するが，その新旧関係は不明である。その規模は１×１間である。柱穴間の芯芯距離は，東西2.3m，南北1.7を測り，床面積は3.9m²である。柱穴の確認面のレベルは標高20.9mである。柱穴の位置関係は西方向に傾いた菱形をなす。柱穴掘り方の平面形は円形で，径は0.3m，深さは0.3～0.4mを測る。Ｐ－２，４は段を有し，Ｐ－２の中心は東寄り，Ｐ－４では北寄りである。埋土は灰褐色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物の出土は数点の弥生土器小片のみである。

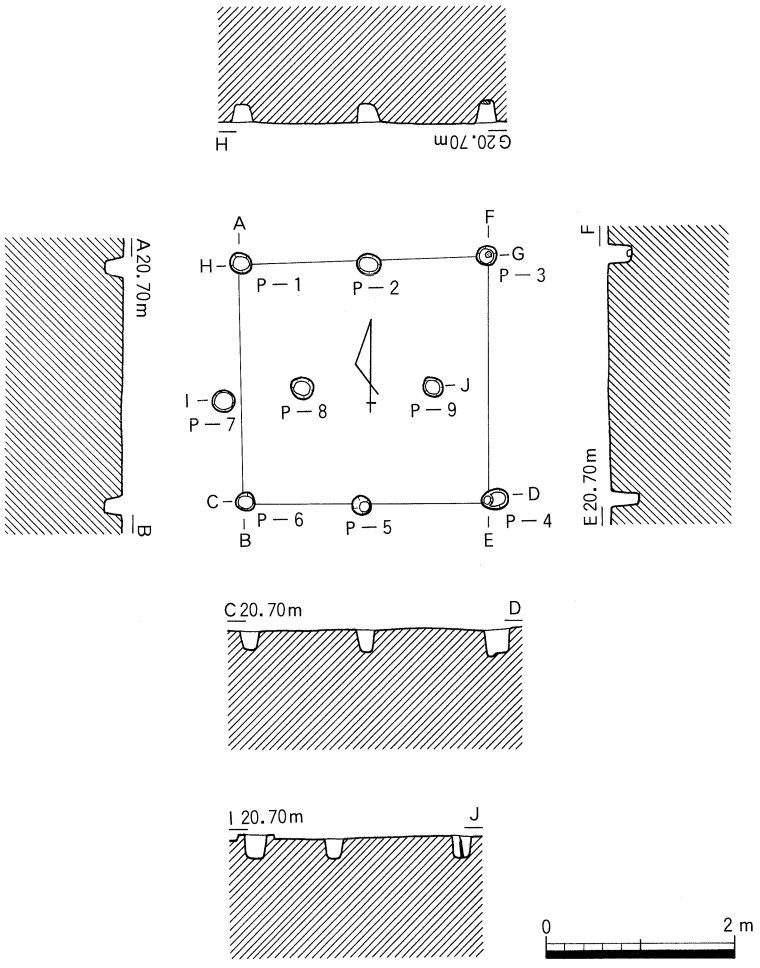


第130図　SB14平・断面図（Ｓ：１/80）

ＳＢ15（第131図）

Ｃ地区北部で単独に検出された東西棟の掘立柱建物である。桁行２間（2.7m），梁行１間（2.5m）を測り，床面積は6.8㎡である。桁行の柱穴間はほぼ均一であり，芯芯距離で1.3mを測る。柱穴の確認面のレベルは標高20.6mである。この建物の中央には２本の束柱が配されており，その西側には１本の棟持柱の柱穴が検出された。この３本の柱穴の規模は側柱と同じである。柱穴の平面形はすべて小形の円形であり，径は0.2m，深さ0.2～0.36mを測る。Ｐ－３には底面に根石を有し，Ｐ－８は柱材の芯が残存していた。柱穴の掘り方はほぼ垂直であるが，Ｐ－４は底面に段を持ち，西端に直形0.1mの柱痕である穴が確認された。Ｐ－５は底面の中心が東側に寄っている。柱穴の埋土は，灰褐色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　柱穴内より数点の弥生土器片が出土したのみであり，図化する事ができる遺物はなかった。

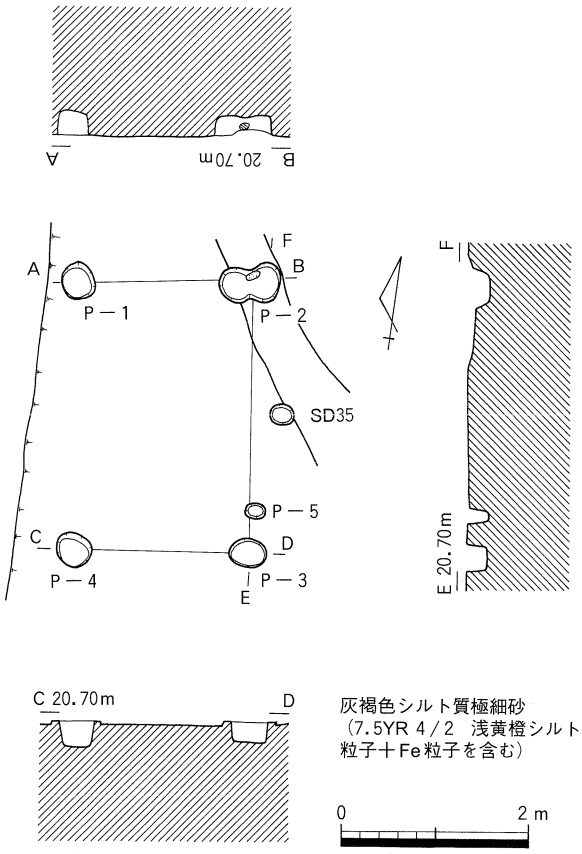


第131図　SB15平・断面図（Ｓ：１/80）

ＳＢ16（第132図）

Ｃ地区北部においてＳＤ36と重複して検出された東西棟の掘立柱建物であり，西側が調査区域外であるため建物の全容を明らかにすることはできなかった。検出できた規模は桁行１間（2.9m）以上，梁行１間（1.9m）の建物で，床面積は5.5m²以上を測る。柱穴の確認面のレベルは標高20.6mである。柱穴掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈し，Ｐ－２はＳＤ36によって上面が削平を受けているが，穴が重なった状態であり，建て替えの可能性も考えられる。柱穴の直径は0.4m，深さ0.2～0.25mを測る。埋土は灰褐色シルト質極細砂の単一層である。Ｐ－２では礫１個が検出された。

出土遺物　遺物は柱穴内より数点の弥生土器片のみであり，図化できるものはなかった。



第132図　SB16平・断面図（Ｓ：１/80）

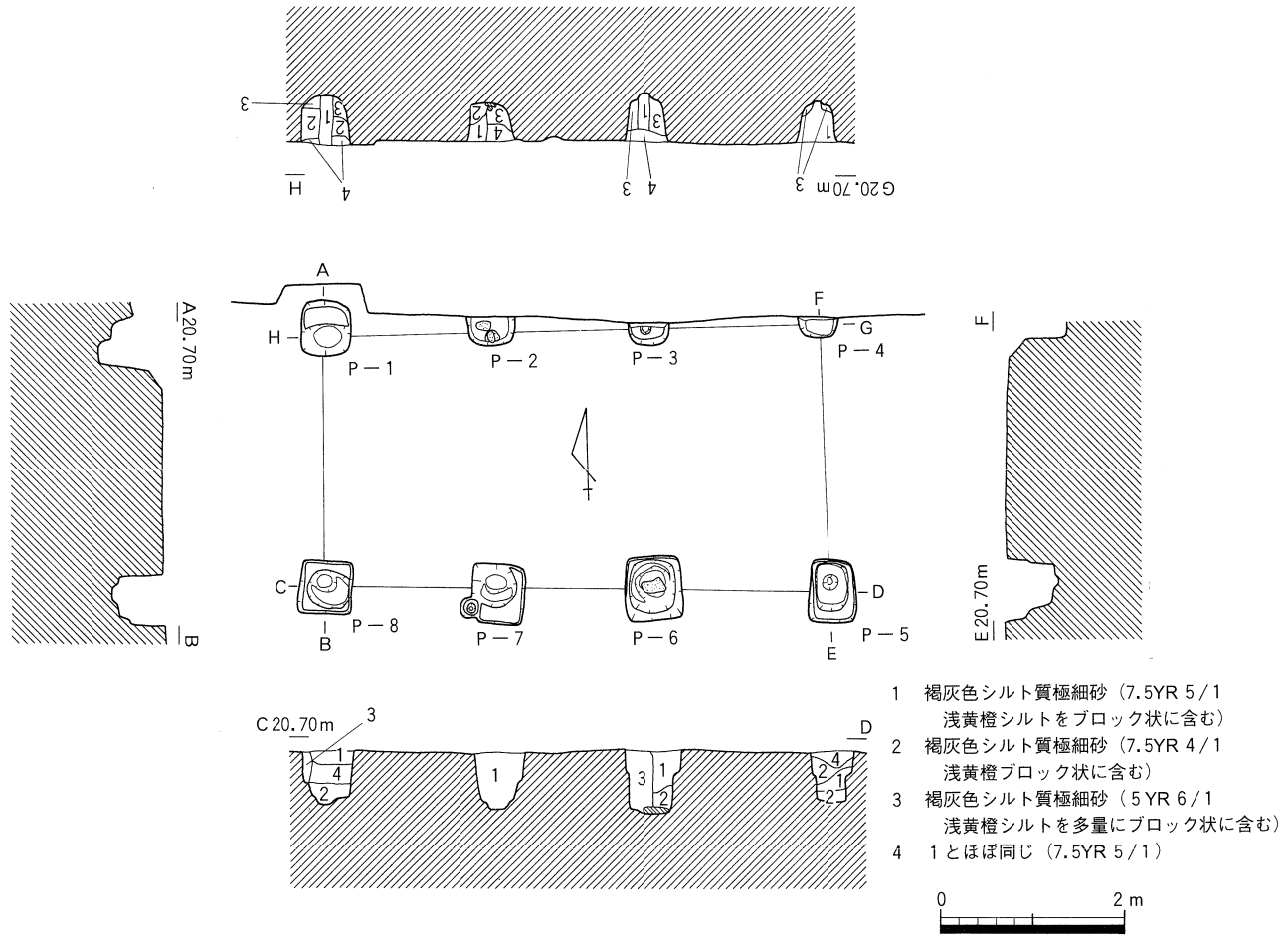
ＳＢ17（第133･134図）

Ｃ地区北端において近世のＳＤ38と重複して検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＤ38によって上面を削平されている。本遺構の北側には現水路があるため，Ｐ－２～４は完掘することができなかった。桁行３間（5.4m），梁行１間（2.6m）を測り，床面積14m²の建物である。桁行の柱穴間の芯芯距離は1.7～1.9mである。柱穴の確認面のレベルは20.55m前後である。柱穴掘り方の平面形は，上面において１辺0.5～0.6mの方形，長方形を呈するが，底面は円形である。柱穴の深さは0.5～0.7mを測る。Ｐ－１の掘り方は北側に段を有する。Ｐ－３～８は底面に柱痕の小穴や段を有する掘り方があり，Ｐ－２，６では柱の横部を止める詰め石と根石が残存している。柱穴の埋土は褐灰色シルト質極細砂であり，若干の色の違いと内容物によって4層に分層する事ができる。Ｐ－１～３，６は土層断面の観察により第１層と第２層の充填する柱痕が確認された。Ｐ－６では根石の直上に第１層と第２層が堆積しており，柱と根石の原位置を明瞭に保っている。Ｐ－３，４を除くすべての柱穴の上面に土器，石が密集した状態で出土した。

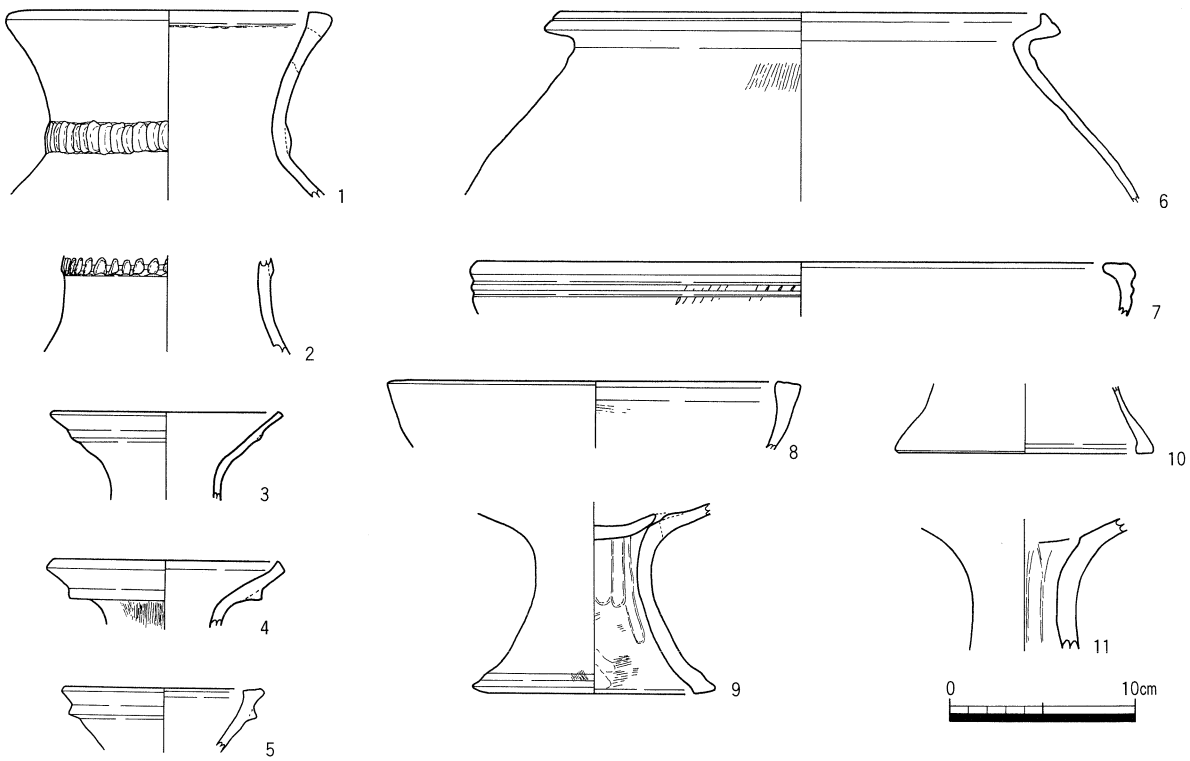
出土遺物　柱穴上面および埋土中より弥生土器壺（１～５），同甕（６），同鉢（７），同高杯（８～11）が出土した。

１は頸部から外反する口縁部を持ち，端部は内側に若干肥厚する。頸部外面に１条の押圧突帯文を巡らす。断面の観察により２ヶ所の輪積み痕が確認され，その１ヶ所は内面にも明瞭に見られる。２は頸部のみであり，外面に押圧突帯文を1条巡らす。３～５は口縁部外面に１条の突帯文を巡らす壺である。３は直線的な口縁部が頸部から大きく外反し，内外面とも磨滅している。４，５はわずかに内湾する口縁で，端部は若干肥厚し，４の調整は外面刷毛目，５はナデが施される。

６は張った胴部から「く」字状に強く屈曲し，口縁端部は上方に大きく拡張させ，１条の浅い凹線が巡る。口縁部の調整はヨコナデ，胴部外面は磨滅しているが一部に刷毛目が残っている。７は口縁部が直立し，端部は内側に大きく拡張して水平面を作り出す。口縁部外面には凹線文が２条めぐり，



第133図　SB17平・断面図（S：1/80）



第134図　SB17出土遺物（S：1/4）

（第134図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	17.6		(9.8)	口縁端部やや拡張。頸部外面に押圧突帯文。摩滅	鈍黄橙10YR6/4		長石、角閃石多量
2	〃			(5.1)	頸部外面に押圧突帯文。摩滅	橙5YR6/6	褐灰7.5YR6/1	石英、長石、角閃石
3	〃	12.6		(4.7)	口縁部は直線的に外反。外面に貼付突帯文。摩滅	浅黄橙10YR8/4	浅黄2.5Y8/3	〃
4	〃	12.2		(3.6)	口縁端部上方にやや拡張。外面に貼付突帯文、刷毛目	灰黄褐10YR5/2		〃
5	〃	11.0		(3.4)	口縁端部拡張。外面に貼付突帯文。ナデ	黄褐10YR5/6	褐10YR4/6	石英、長石
6	弥生土器　甕	26.0		(9.7)	く字口縁で、端部上方に屈曲。凹線１条。外面刷毛目	褐7.5YR4/6	鈍褐7.5YR4/4	〃
7	弥生土器　鉢	25.2		(2.3)	口縁端部肥厚。外面に凹線２条、刻目文	黒褐10YR3/1		〃
8	弥生土器　高杯	22.4		(3.6)	口縁端部拡張し、凹線２条。内面刷毛目	赤褐10YR5/3	黒褐7.5YR3/1	粗砂、細礫
9	〃		13.2	(10.0)	円盤充填。外面刷毛目。内面しぼり目、刷毛目後に板ナデ	鈍赤褐5YR4/4	〃	石英、長石、角閃石
10	〃		14.0	(3.7)	脚裾部肥厚。摩滅	浅黄橙7.5YR8/4	鈍黄橙2.5YR5/1	石英、長石
11	〃			(6.9)	円盤欠損。摩滅。内面しぼり目	灰黄2.5Y6/2	明赤褐2.5YR5/6	〃

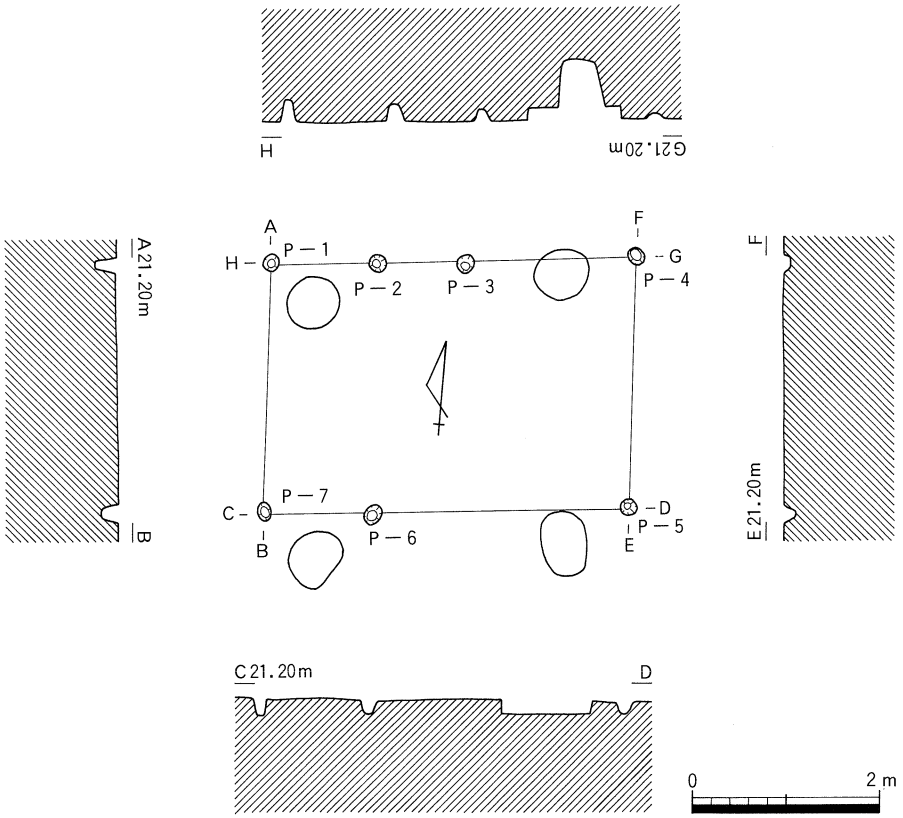
刻目文が部分的に見られる。

８は椀状の杯部を持ち，口縁端部は肥厚し上面に非常に浅い凹線を巡らす。９，11は円盤充填の高杯の脚部であり，内面にしぼり目が残っている。９の調整は外面の一部に刷毛目，内面は刷毛目の後に板ナデが施される。10は器壁の薄い脚で裾部は肥厚する。

ＳＢ18（第135図）

Ｃ地区中央やや南寄りにおいてＳＢ07と重複して検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＢ07との新旧関係は不明である。桁行３間（3.9m），梁行１間（2.6m），床面積10.1m²を測る建物である。南列側柱の東第２穴は未検出である。桁行の柱穴間の距離は0.9～1.8mである。柱穴の確認面のレベルは，標高21.05m前後である。柱穴の掘り方の平面形はすべて円形を呈し，径は0.2m，深さは0.06～0.23mを測る。柱穴の埋土は灰褐色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物は数点の弥生土器片のみであり，図化できるものはなかった。



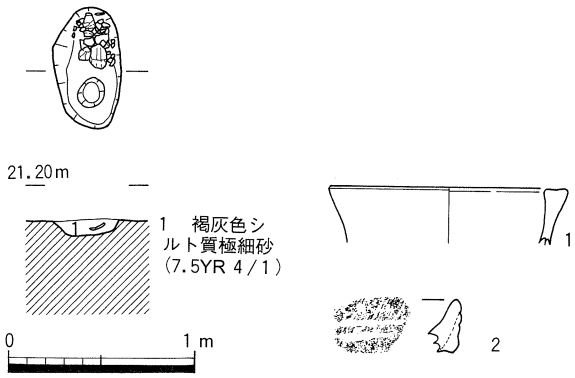
第135図　SB18平・断面図（Ｓ：１/80）

3．土坑

ＳＫ10（第136･137図）

Ｃ地区の中央南寄りでＳＢ07・18の東側において検出された土坑である。確認面のレベルは標高21.00ｍである。平面形は0.35×0.65ｍを測る楕円形を呈し，深さは８㎝である。底面は平坦で円形の落ちを有す。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　床面直上から弥生土器が出土したが，図化できたのは壷（１，２）のみである。



第136図　SK10平・断面図（Ｓ：１/40）

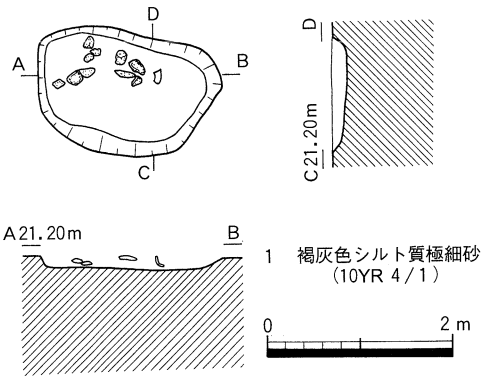
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	13.0		(3.0)	口唇部拡張。摩滅	鈍橙7.5YR6/4		細～粗砂
2	〃			(2.8)	口縁端部外面に凹線２条、刻目文	鈍褐7.5YR5/3	褐灰7.5YR6/1	石英、長石、角閃石

第137図　SK10出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ11（第138･139図）

Ｃ地区中央南寄りで検出された土坑である。確認面のレベルは標高21.05ｍである。平面形は不整な長方形を呈し，長辺1.90m，短辺1.30ｍを測る。深さは10㎝である。底面は平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。掘り込みはゆるやかである。

出土遺物　底面直上及び埋土中より土器片が出土し，底面には多量の自然石が検出された。遺物は，弥生土器壷（１～３），同高杯（４，５），削器（６）である。



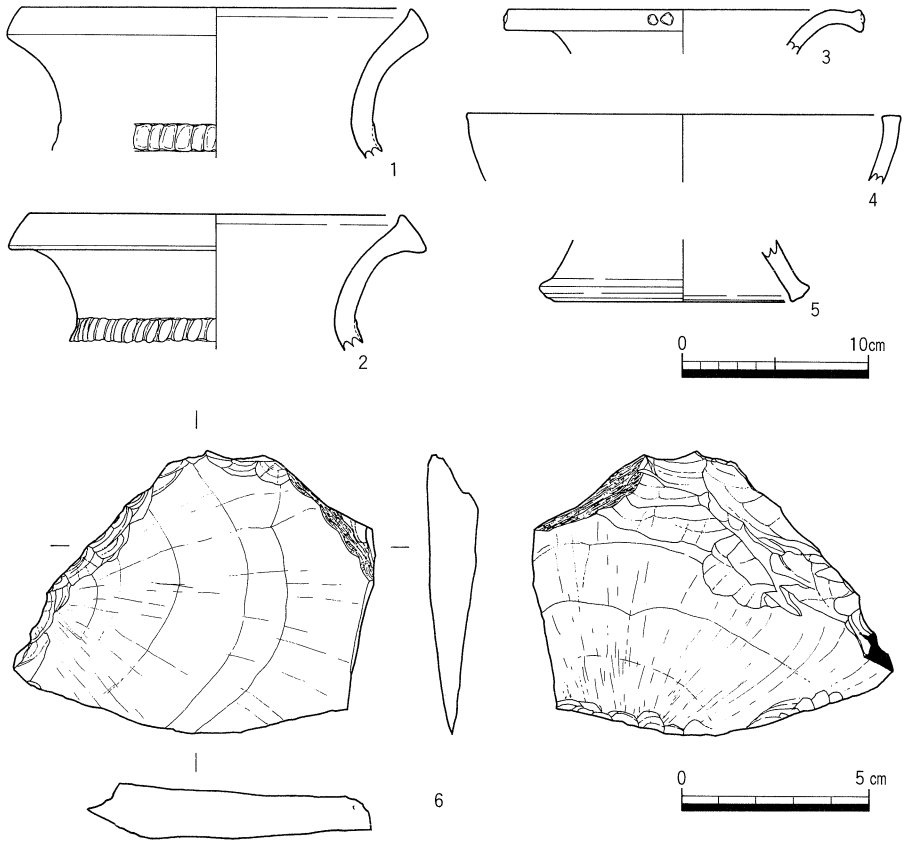
第138図　SK11平・断面図（Ｓ：１/80）

１は頸部から大きく外反する口縁部を持ち，端部は上方に拡張する。頸部外面に押圧突帯文を巡らす。２は頸部から大きく外反する口縁部を持ち，端部を上下に大きく拡張させる。頸部外面に押圧突帯文を巡らす。１，２ともに器壁は厚く，内外面の磨耗が著しく調整は不明である。３は水平に大きく広がる口縁部を持ち，端部を上下に若干拡張させ，外面に２個一対の円形浮文が１組残存する。４は椀状の杯部であり，端部を若干拡張させる。５は外反しながら広がる脚部で，上下に肥厚する口縁端部外面に凹線文を２条巡らす。６は横長の剥片を素材とした削器である。下辺の刃部は片面からの調整が行われ，背部には自然面が一部残る。

ＳＫ12

Ｃ地区のほぼ中央部において単独で検出された土坑である。ＳＫ13から約0.60ｍ西側に位置する。確認面のレベルは標高20.90ｍである。平面形は不整な円形を呈し，直径は2.00ｍ前後である。深さは10㎝であり，掘り込みはゆるやかである。底面はほぼ平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物は数点の弥生土器片のみであるが，図化することはできなかった。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	21.0		(7.9)	口縁端部上方に拡張。頸部外面押圧突帯文。摩滅	褐灰10YR5/1	鈍黄橙10YR7/3	石英、長石、角閃石
2	〃	20.2		(7.1)	口縁端部両方に拡張。頸部外面に押圧突帯文。摩滅	鈍橙7.5YR7/4	橙7.5YR7/6	〃
3	〃	19.0		(2.4)	口縁部は水平に広がる。口縁端部円形浮文２個一対	鈍黄橙10YR6/4	灰黄褐10YR6/2	〃
4	弥生土器　高杯	23.4		(3.6)	椀状の杯部。摩滅	鈍橙7.5YR7/4	鈍黄橙10YR7/3	〃
5	〃		12.8	(3.3)	脚裾部に凹線２条。摩滅	鈍黄橙10YR7/3	褐灰10YR6/1	石英、長石

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
6	削器	7.4	7.7	1.2		サヌカイト	横長の剝片を素材とし、刃部片面のみ調整

第139図　SK11出土遺物（S：1/4、1/2）

SK13

C地区のほぼ中央において単独で検出された土坑である。SH10とSK12の中間に位置する。東半分は後世の削平により消滅している。確認面のレベルは標高20.90mである。平面形は不整な楕円形を呈し，長径は2.00m以上，短径1.00mを測る。深さは5cmである。埋土は褐灰色シルト質極細砂。

出土遺物は弥生土器片数点のみであり，図化できなかった。

SK14

C地区南部においてSB04と重複して検出された土坑である。新旧関係は不明である。確認面のレベルは標高20.95mである。平面形は不整な円形を呈し，直径0.90m前後を測る。深さは0.10mであり，掘り込みはほぼ垂直である。底面は平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

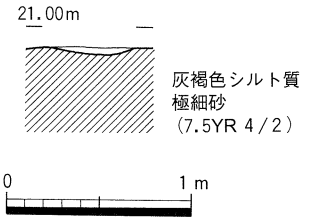
出土遺物は弥生土器片数点のみである。

4．溝

ＳＤ27（第140図）

Ｃ地区中央やや南寄りで検出された溝である。確認面のレベルは標高20.90mである。溝は若干湾曲気味に南西－北東方向に延び，両端は消滅している。幅は0.40m，深さは５cmを測る。埋土は灰褐色シルト質極細砂である。

出土遺物　弥生土器片数点のみであり，図化できるものはなかった。

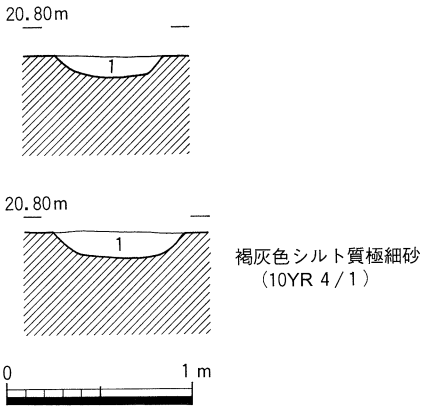


第140図　SD27断面図（Ｓ：１/40）

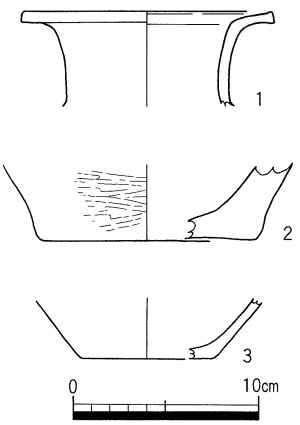
ＳＤ28（第141･142図）

Ｃ地区中央から北部で南北方向に延びる溝であり，ＳＤ34に切られている。確認面のレベルは標高20.80m前後である。中央部はＳＤ34とほぼ同方向に走り，北部では湾曲しながら北方向に延びている。幅は0.60～0.70m，深さは0.10mを測り，船底形の断面を呈す。底面のレベルは，南から北へゆるやかに低くなっている。ＳＢ08の西側で東方向に分流する溝がわずかに検出された。南端は，ＳＢ03付近まで検出されるが，ＳＤ34に切られている。北端はＳＤ35付近にまで達し，消滅している。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　埋土中より弥生土器が出土し，３点のみ図化できた。１は広口壺であり，頸部はほぼ直立し，口縁部が大きく広がる。口縁端部は若干つまみ出される。内外面ともヘラナデ調整が施される。２，３は底部であり，２は若干上げ底で，器壁が厚く，外面にヘラミガキがある。３は非常に器壁が薄い。



第141図　SD28断面図（Ｓ：１/40）

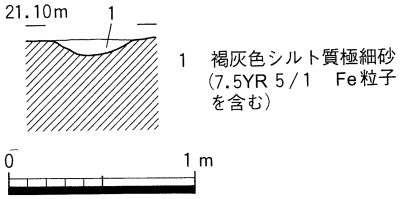


番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	13.4		(5.0)	頸部はほぼ直立、口縁部は水平に広がる。摩滅	鈍黄橙10YR7/3		石英、長石多量
2	〃		11.6	(4.0)	やや上げ底。外面ヘラミガキ。底面ヘラナデ	鈍橙7.5YR6/4	黒褐2.5Y3/1	石英、長石、角閃石
3	弥生土器　甕		7.0	(3.2)	平底。摩滅	鈍橙5YR6/4	明赤褐5YR5/6	石英、長石多量

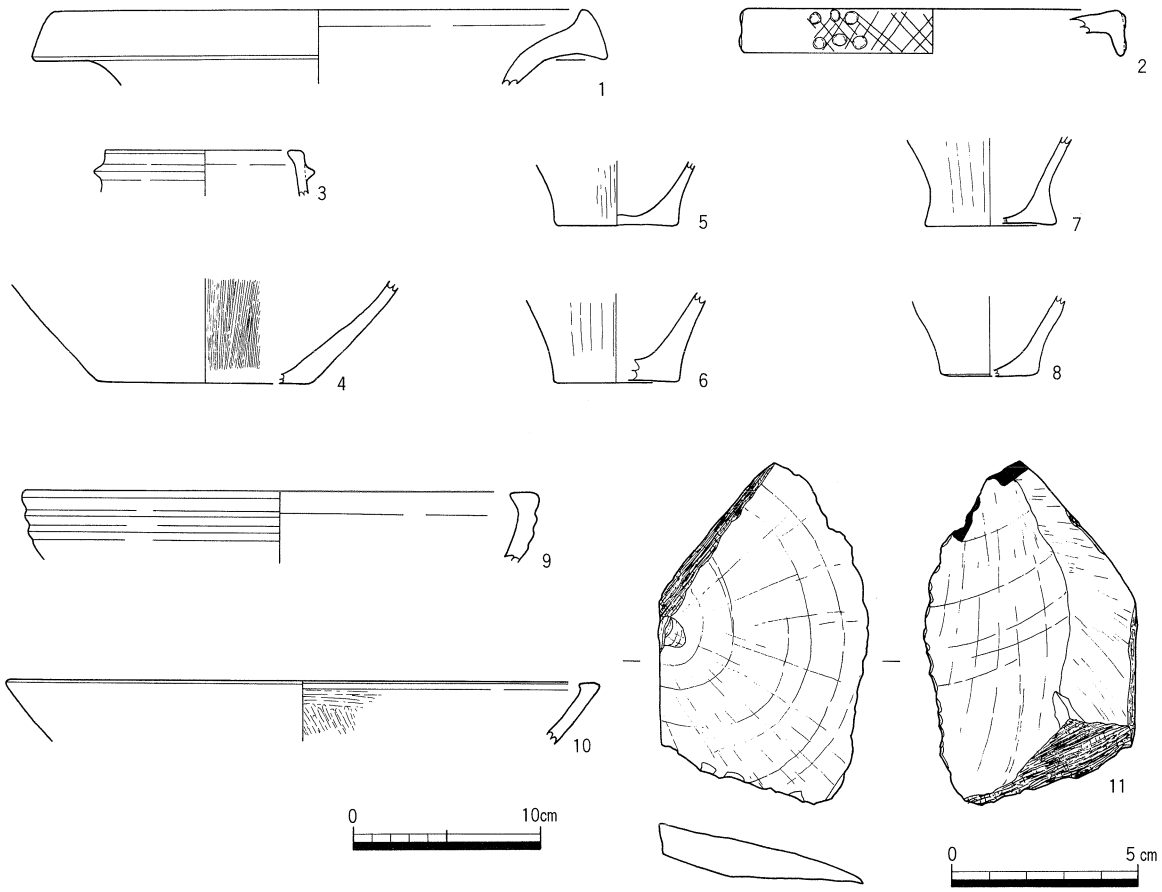
第142図　SD28出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ29（第143･144図）

Ｃ地区の中央南寄りにおいて検出された溝であり，ＳＤ30～32を切り，ＳＤ34に切られている。確認面のレベルは標高21.00mである。溝は湾曲しながら東西方向に延びている。東端は調査区外へ延び，西端は消滅している。幅は0.40～0.50m，深さは0.10mを測る。中央部がやや細くなっている。断面は船底形を呈し，



第143図　SD29断面図（Ｓ：１/40）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	28.6		(4.0)	口縁端部は上下に拡張。摩滅	鈍褐7.5YR5/4		石英、長石、角閃石
2	〃	20.0		(2.4)	口縁端部は下方に拡張し、斜格子文、円形浮文６個一対	鈍褐7.5YR6/3	明赤褐5YR5/6	〃
3	〃	10.6		(2.4)	口縁端部は内側に拡張。外面に貼付突帯	黒10YR2/1		〃
4	弥生土器　甕		11.6	(5.5)	平底。外面摩滅。内面刷毛目	明赤褐2.5YR5/6		石英、長石多量
5	〃		6.5	(3.3)	平底。外面ヘラ削り後にナデ、黒斑	明赤褐5YR5/6	橙5YR6/3	〃
6	〃		6.8	(4.7)	やや上げ底。外面ヘラ削り。内面、底面ヘラナデ	灰黄褐10YR6/2	鈍黄橙10YR7/4	〃
7	〃		7.0	(4.6)	やや上げ底。外面ヘラ削り後にナデ。内面、底面ヘラナデ	褐10YR4/6		〃
8	〃		5.2	(4.2)	平底。摩滅	橙2.5YR6/6	鈍黄橙10YR7/3	石英、長石、角閃石
9	弥生土器　鉢	27.4		(3.7)	口縁端部は内側に拡張。外面凹線３条	灰黄2.5Y6/2	黒褐10YR2/1	〃
10	弥生土器　高杯	32.0		(3.2)	口縁端部は内側に若干拡張。内面ヘラミガキ	鈍褐7.5YR6/3	鈍褐7.5YR5/4	石英、長石

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
11	削器	8.5	5.5	0.8		サヌカイト	側面に自然面を残す。打撃痕。フィシャー明瞭

第144図　SD29出土遺物（S：1/4、1/2）

底面のレベルはほぼ均一である。埋土は酸化鉄の粒子を含む褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

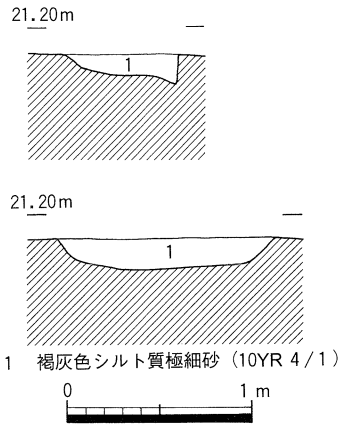
出土遺物　埋土中からの遺物は，弥生土器壺（１～３），同甕（４～８），同鉢（９），同高杯(10)，削器（11），その他の弥生土器片が出土した。

壺は口縁部のみであり，１は端部を上下に拡張し，２は下方に大きく拡張した外面に斜格子文を施し，６個一対の円形浮文が１組残存する。３は口縁部が内傾し外面に貼付突帯文を巡らす。４～８は底部であり，４は内面刷毛目，５は外面ヘラ削り後にナデ，６は外面ヘラ削り，内面と底面はヘラナデを施す。７，８は底部中央が極端に薄くなる。９は椀状の体部で口縁部は内側に拡張する。外面に凹線文が３条巡る。10は内面にヘラミガキを施し，皿状の体部である。

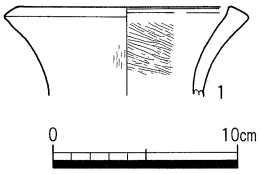
ＳＤ30（第145・146図）

Ｃ地区中央やや南寄りにおいて検出された南北方向の溝である。ＳＤ29・31に切られている。南端はＳＢ04と接し，やや蛇行しながら北走している。確認面のレベルは標高21.10m前後である。幅は0.60～1.20m，深さ0.16mを測る。断面は船底形を呈し，底面のレベルはほぼ均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。南側では，同一の埋土である細い溝が派生し，再び合流している。中央部がもっとも幅広く，北側になると次第に細くなり，北端は消滅している。近世の撹乱により一部切られている。

出土遺物　埋土中より数点の弥生土器片が出土したが，図化できたのは壺（１）のみである。１はゆるやかな口縁部で，端部は若干平坦面をなす。口縁部はヨコナデ，頸部外面は刷毛目，内面は刷毛目とナデが施されている。



第145図　SD30断面図
（Ｓ：１/40）



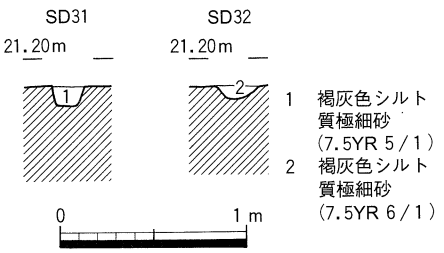
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	13.2		(4.7)	口縁端部は若干肥厚。外面刷毛目。内面刷毛目、ナデ	褐7.5YR4/4	鈍黄褐10YR5/3	長石、角閃石

第146図　SD30出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ31（第147・148図）

Ｃ地区中央やや南寄りにおいて検出された溝である。ＳＢ06・ＳＤ28～30･32と重複し，ＳＤ29に切られ，ＳＤ30・32を切っている。東端はＳＤ29に切られ不明であるが，ＳＢ06側に南走し，急激に曲がり北方向に延びている。北端はＳＤ34に切られている。確認面のレベルは標高21.10m前後である。幅は0.20m，深さ0.10mを測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルはほぼ均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　埋土中より弥生土器の破片が数点出土したが，図化できたのは１点のみである。１は甕であり，頸部から「く」の字形に外反する。内外面とも調整は不明瞭である。

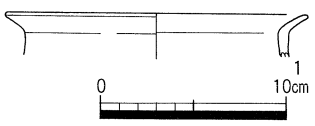


第147図　SD31・32断面図
（Ｓ：１/40）

ＳＤ32（第147図）

Ｃ地区中央やや南寄りにおいて，ＳＢ06・ＳＤ29・30と重複して検出された溝で，ＳＤ29・30に切られている。確認面のレベルは標高21.10mである。溝の方向は若干湾曲気味に南西－北東である。幅は0.20m，深さは0.10mを測り，断面は逆台形を呈す。底面のレベルは均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。



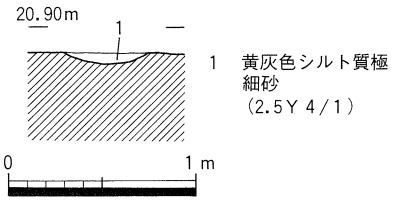
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　甕	16.4		(2.3)	く字口縁。摩滅	鈍黄橙10YR7/2		細砂、石英

第148図　SD31出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ33（第149図）

Ｃ地区中央南寄りにおいて単独で検出された溝である。ＳＢ07とＳＤ29の中間にある。確認面のレベルは標高21.10ｍである。検出された全長は1.60ｍで，東西方向に延びる。幅は0.40ｍ，深さ５㎝を測り，断面は浅い船底形を呈す。埋土は黄灰色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。



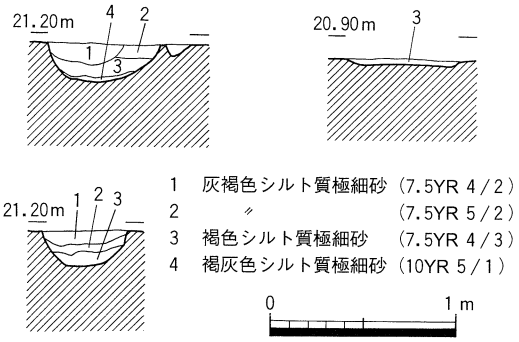
第149図　SD33断面図（Ｓ：１/40）

２）古代

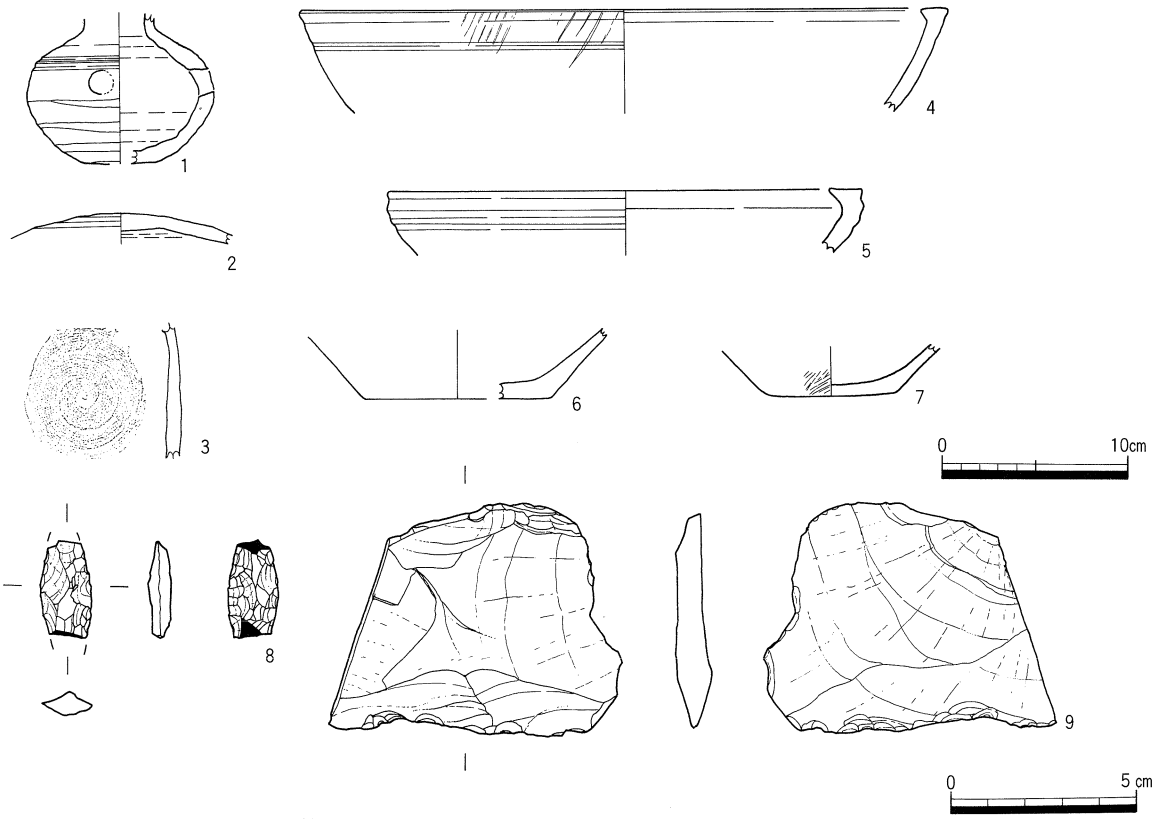
１．溝

ＳＤ34（第150･151図）

Ｃ地区全域において検出された溝である。南端は調査区外に延びる。南側はＳＤ35・36と合流し，北西方向に延び中央部では北流し，北東方向にゆるやかに曲がる。ＳＢ09の北側で再び北方向に延び，ＳＢ12付近で３方向に分流しＳＢ17の南側まで延び，消滅している。確認面のレベルは標高20.70～21.10ｍである。幅は0.90～1.20ｍを測るが，大部分が1.20ｍである。深さは0.10～0.40ｍを測る。断面は船底形を呈し，底面のレベルはわずかに北側へ低くなるが，ほぼ均一である。中央より南側では掘り込みが深く，北側では非常に浅い。埋土は４層に細分され，自然堆積を示す。底面の一部に動物の足跡が検出された。



第150図　SD34断面図（Ｓ：１/40）



第151図　SD34出土遺物（Ｓ：１/４、１/２）

（第151図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器 瓶			(8.0)	回転ナデ。下半ヘラ削り。直径1.3cmの孔	灰白N7/		微～細砂多量
2	須恵器 蓋			(1.6)	回転ナデ。外面ヘラ削り	灰白N7/	灰白N8/	微砂若干
3	須恵器 提瓶			(6.8)	外面カキ目調整。内面指ナデ	灰白N7/		微砂
4	弥生土器 鉢	35.0		(5.5)	口縁端部拡張。外面刻目文、凹線2条	鈍黄橙10YR7/3		石英、長石多量
5	〃	25.6		(3.4)	口縁端部拡張。外面凹線3条	灰白10YR8/1	灰白10YR8/2	石英、長石、細砂
6	弥生土器 甕		10.0	(3.6)	平底。摩滅。外面黒斑	褐灰10YR4/1	浅黄橙10YR8/3	〃
7	〃		7.0	(2.6)	平底。外面ヘラミガキ。内面、底部ヘラナデ	鈍褐7.5YR6/4		〃

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
8	石鏃	2.5	1.4	0.6	1.9	サヌカイト	先端部、基部欠損。縁辺部に両面から細かい調整
9	削器	5.7	6.1	0.7		サヌカイト	側面に自然面を有す。下縁部は両面調整で刃部をつくる

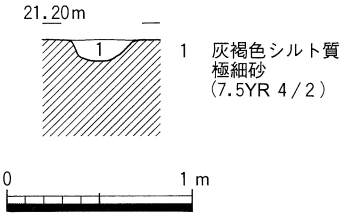
出土遺物　遺物は埋土上層～下層より須恵器瓶（1），同蓋（2），同堤瓶（3），弥生土器鉢（4，5），同甕（6，7），石鏃（8），削器（9）が出土した。

1は底面直上から出土した瓶で，底部と口縁部を欠損する。胴部は球形を呈し，中央に直径1.3cmの円孔を有する。肩部にわずかな沈線を巡らす。外面下半はヘラ削り，内面にはロクロ整形痕が明瞭に残る。2は天井部のみであり，外面は回転ヘラ削りが施される。3は外面カキ目調整，内面指ナデが施された堤瓶の胴部中央である。

4～7の弥生土器は埋土上層より出土した。4，5は口縁端部が肥厚し，外面に2ないし3状の凹線を巡らせる。調整はナデであり，4にはヘラによるわずかな刻目文が見られる。6，7は平底で，7の調整は外面ヘラミガキ，内面ヘラナデである。8は先端部と基部を欠損する石鏃で，両縁辺部は両面からの調整により鋭利である。横断面は菱形を呈す。9の下縁部は両面からの調整により刃部とし，両面に大剝離面を残し側辺には自然面が見られる。

SD35（第152図）

C地区南部において検出された溝である。SB03の南側でSD34から派生し，北東方向に延びる。さらに約8m南側で再びSD34から南東方向に派生する。2方向の溝は規模，埋土より同一の溝と考えられる。確認面のレベルは標高21.10mである。幅は0.35m，深さ0.10～0.40mを測る。底面のレベルは，SD34との交流点ではSD34の底面と同じ深さであり，北東と南東端方向にしだいに高くなっている。断面は船底形をなすが，SD34付近ではV字形を呈する。埋土はSD34と同じ灰褐色シルト質極細砂である。



第152図　SD35断面図（S：1/40）

出土遺物は数点の弥生土器片のみであったが，SD34と同時期のものと考えられる。

SD36

C地区北部において逆L字状に検出された溝である。SD28・SB16を切り，SD34に切られている。SK15の東側よりほぼ直線的に南西方向に延び，SB16の東側で直角に曲がり調査区外に延びる。確認面のレベルは標高20.70mである。幅は0.30～0.50m，深さ0.10mを測る。断面は船底形を呈し，底面のレベルはほぼ均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

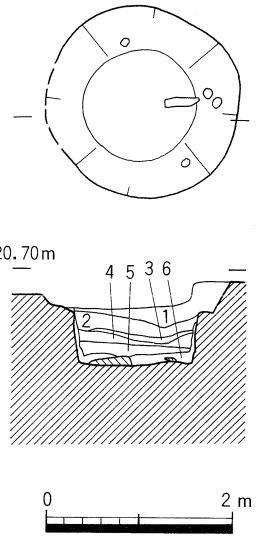
出土遺物　埋土中より数点の弥生土器，須恵器の破片が出土したが，図化できなかった。

3）中世～近世

1．土坑

SK15（第153・154図）

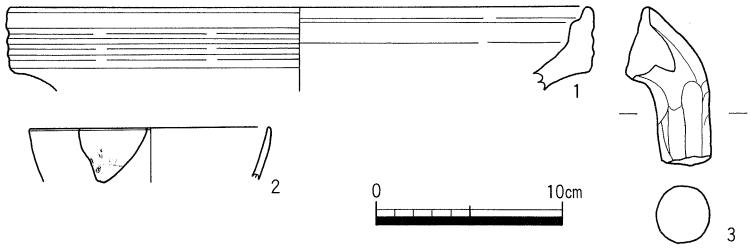
C地区北部で単独に検出された土壙である。東側は近世の粘土取りにより上面を削平される。確認面のレベルは標高20.55mである。平面形は円形を呈し，直径2.00mを測る。掘り込みの上部はゆるやかな傾斜であるが，下部はほぼ垂直であり，二段掘りとなっている。底面はほぼ平坦であり，板の一部が出土した。垂直に掘り込まれた面には編んだ竹が部分的に3本検出された。埋土は6層に細分されるが，1～5層は自然埋積であるが，6層は底面と掘り込み面にうすく堆積している。板，竹の出土，埋土状態から，本土壙は墓であると考えられる。



1　灰白色シルト質極細砂（5Y7/2　褐灰色土をブロック状に含む）
2　灰色＋褐灰色＋浅黄橙色シルト質極細砂（5Y6/8＋7.5YR 5/1＋7.5YR 8/3）
3　にぶい赤褐色シルト質極細砂（5YR 5/4）
4　2層と同じ
5　3層とほぼ同じ
6　灰色シルト質極細砂（7.5Y 6/1　粘性強い）

第153図　SK15平・断面図（S：1/80）

出土遺物　埋土の上位より若干の土器が出土した。1は備前焼の擂鉢であり，口縁端部外面に凹線を持ち内面に段がある。2は草文の染付がある碗，3は土師質土器土鍋の脚である。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	備前焼　擂鉢	31.4		(3.4)	口縁部が拡張し、外面に凹線3条。回転ナデ	灰赤2.5YR6/2	暗赤灰10R4/1	細～粗砂
2	染付　椀	12.8		(2.9)	外面に草花文染付。	灰白N8/		微砂若干
3	土師質土器　土鍋				脚部主軸方向にヘラ削り	橙5YR6/6		細～粗砂多量

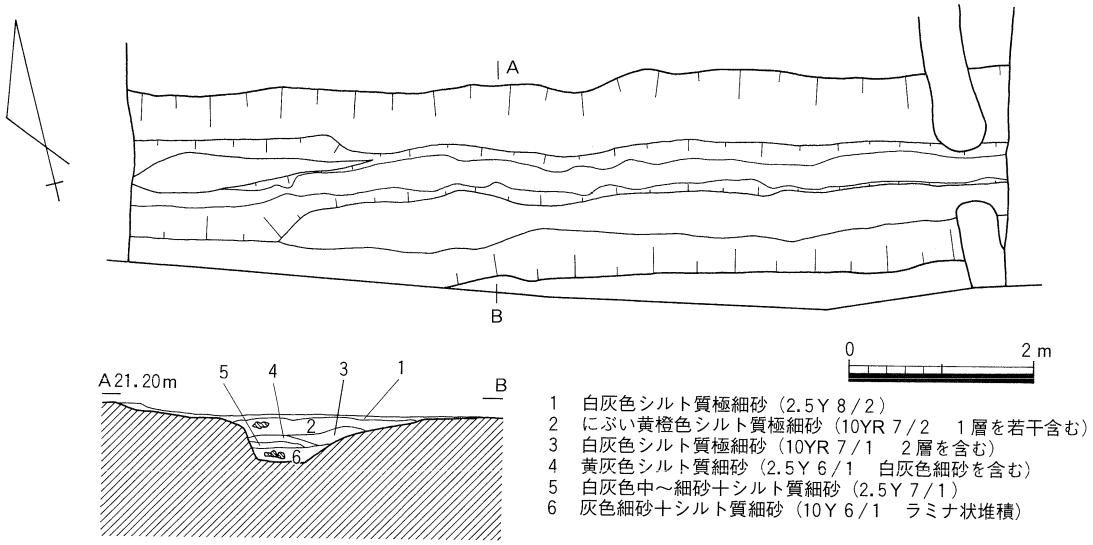
第154図　SD15出土遺物（S：1/4）

2．溝

SD37（第155～157図）

C地区南端において検出された溝であり，西側は農道のため上部の一部が未調査である。東端でSD34を切っている。溝の方向は東西であり，ほぼ直線である。東，西側共に調査区外へ延びている。確認面のレベルは標高21.10mである。溝上場の幅は3.90m，深さは0.50mを測る。掘り込みは二段掘りであり，上部は非常にゆるやかな傾斜であるが，中央より以下は急激に落ち込んでいる。底面の幅は0.50mである。西側の底面はわずかに段を持つが，全体としてはほぼ平坦な底面であり，均一なレベルである。埋土は上層より白灰色シルト質極細砂，にぶい黄橙色シルト質極細砂，白灰色シルト質極細砂，黄灰色シルト質極細砂，白灰色中～細砂＋シルト質細砂，灰色細砂＋シルト質細砂の6層に細分され，レンズ状堆積をなす。最下層の6層はラミナ状堆積である。

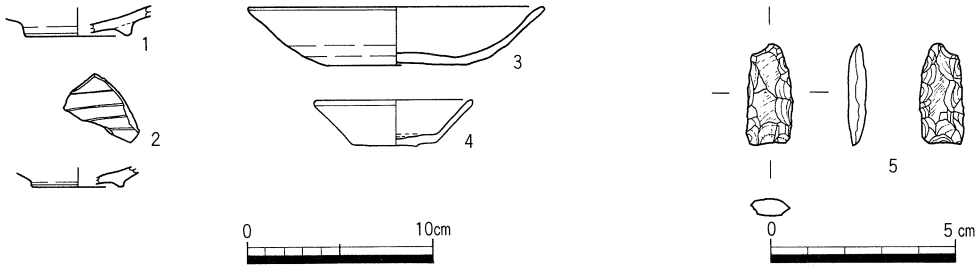
本溝は，後述するSD38・D地区SD51との距離が約109m前後を測り，条里地割りの溝である。



第155図　SD37平・断面図（S：1/80、1/40）

遺物は2層を中心とする上層と6層を中心とする下層からの出土に分かれ，土師質土器椀（1，2，6～8），土師器杯（3，4），須恵器短頸壺（9），須恵質土器甕（10），土師質土器こね鉢（11），同土鍋（13），亀山焼甕（12），石鏃（5），柱状片刃石斧（14），その他に多量の土器片や自然石，動物の骨などが出土した。1～5は上層，6～14は下層からの出土である。

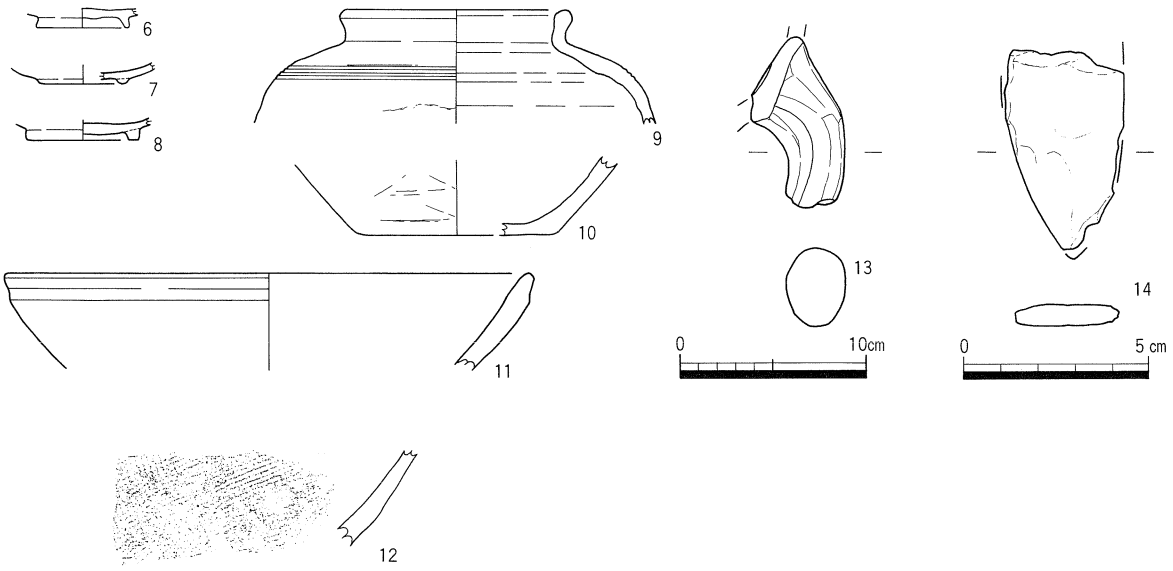
1，2は断面逆台形の貼付高台を有し，2は内面に平行に走る暗文が見られる。3，4は回転ヘラ切りによって切り離された後にナデが施される杯であり，3は若干上げ底気味の底部から緩やかな傾斜で立ち上がり，4は急傾斜で立ち上がる小形の杯である。6～8は貼付高台の底部で，6の底面は回転ヘラ切りである。9は玉縁状の口唇部をなし，肩部がやや張る。11は口縁部外面にわずかな凹線を有し，口縁部の調整はヨコナデ，体部はナデである。12は亀山焼である。13は断面楕円形を呈し，ヘラ削りされている。5は平基式の石鏃，14は側面の一部のみ残存する柱状片刃石斧である。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器 椀		5.4	(1.6)	回転ナデ	明黄褐10YR6/6	オリーブ褐2.5Y 4/4	微～細砂多量
2	〃		5.0	(1.0)	貼付高台後にナデ。内面平行の暗文	橙7.5YR6/6		微砂
3	土師器 杯	16.0	7.6	3.1	体部回転ナデ。底部回転ヘラ切り後にナデ	灰白10YR8/2	浅黄橙10YR8/3	微砂若干
4	〃	8.4	4.5	2.4	体部回転ナデ。底部回転ヘラ切り後にナデ	橙5YR7/6	淡橙5YR8/4	微～細砂

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
5	石鏃	2.6	1.2	0.4	2.00	サヌカイト	平基式。先端部欠損。断面六角形、細かい調整

第156図　SD37出土遺物(1)（S：1/4、1/2）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
6	土師質土器　椀		5.0	(1.0)	底部回転ヘラ切り。貼付高台後にナデ	淡黄2.5Y8/3	灰白2.5Y8/2	微砂
7	〃		4.6	(1.1)	回転ナデ。貼付高台後にナデ。	灰10Y5/1	灰7.5Y6/1	微砂若干
8	〃		6.0	(1.1)	回転ナデ。貼付高台	灰白2.5Y8/1		細～粗砂
9	須恵器　壺	11.8		(6.0)	回転ナデ。肩部に沈線４～６条	灰N6/	灰白N7/	細砂若干
10	須恵質土器　甕		10.6	(4.1)	平底。外面ヘラ削り。内面、底面ナデ	灰白10YR8/1	灰白2.5Y8/2	微～細砂
11	土師質土器　こね鉢	28.2		(5.1)	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ	鈍橙7.5Y7/4		微～細砂多量
12	亀山焼　甕			(5.0)	外面タタキ目。内面ナデ	褐灰10YR4/1	明黄褐10YR6/6	微砂
13	土師質土器　土鍋				脚主軸に沿ってヘラ削り	橙7.5YR6/6		細～粗砂、細礫

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
14	柱状片刃石斧	5.3	3.1	0.6	16.40	結晶片岩	側面のみ原形を保ち、側面は磨いている

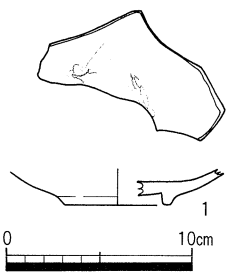
第157図　SD37出土遺物(2)（S：1/4、1/2）

ＳＤ38（第158図）

Ｃ地区の北端においてＳＢ17と重複して検出された溝である。現有する水路があるため，大部分は未調査であり，南側の掘り込みの一部のみ検出された。確認面のレベルは標高20.55ｍである。溝の方向は東西に走り，ほぼ直線である。検出された全長は約15ｍであるが，東，西側の調査区外に延びている。溝の幅，深さは未調査部分が多いため不明である。検出された掘り込みは非常にゆるやかな傾斜であり，溝の断面は前述したＳＤ37と同様にゆるやかな上部から急激に落ち込むものと考えられる。埋土はＳＤ37の上層と同じ白灰色シルト質極細砂，にぶい黄橙色シルト質極細砂である。

本溝はＳＤ37から約109ｍ北側の位置にあたり，高松平野に現在でも見られる条里地割りに関係する溝と考えられる。

出土遺物　埋土中より数点の土師器，土師質土器片と共に（１）の染付碗が出土した。逆台形の高台を有し，内面に草花文が描かれている。



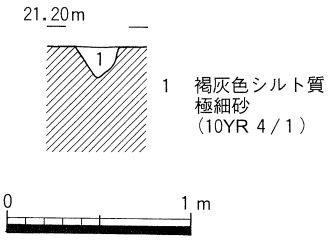
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	染付　碗		5.8	(1.9)	内面に草花文の染付。畳付以外釉薬	灰白2.5Y8/2		微砂

第158図　SD38出土遺物（S：1/4）

ＳＤ39（第159図）

Ｃ地区中央やや南寄りにおいて単独で検出された溝である。確認面のレベルは標高21.10ｍである。ＳＤ29の西端近くより検出され，わずかに蛇行しながら北方向に延び，北端でやや西方に曲がり調査区外へ延びている。幅は0.25ｍ，深さ0.18ｍを測る。断面は，中央部でＶ字形をなすが，両端部ではＵ字形を呈す。底面のレベルはほぼ均一である。南側にほぼ直交する角度の東西方向の細い溝があり，同一の溝と考えられる。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物はなかった。



第159図　SD39断面図（Ｓ：1/40）

ＳＤ40（第160図）

Ｃ地区中央やや北寄りにおいて単独で検出された溝である。確認面のレベルは標高20.85ｍである。検出された全長は2.20ｍにすぎず，平面形は「へ」の字状である。溝の方向は南西－北東であり，両端は自然消滅している。幅は0.10ｍ，深さ３㎝を測り，断面は非常に浅い船底形を呈す。底面のレベルは均一である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物はなかった。

ＳＤ41（第160図）

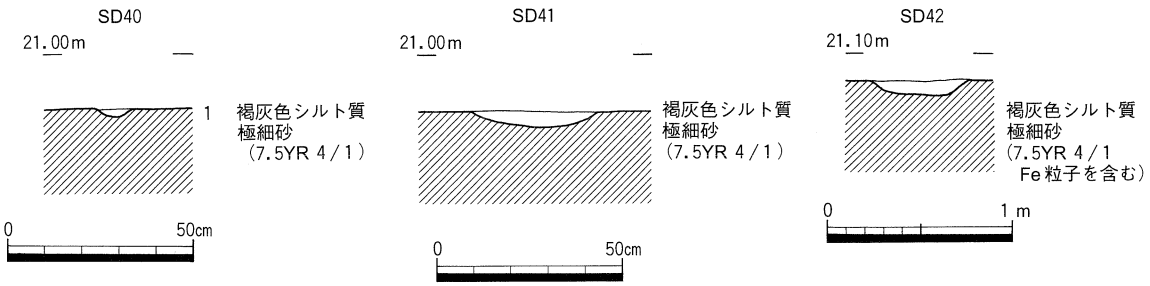
Ｃ地区中央やや北寄りにおいて単独で検出された溝である。ＳＢ10とＳＤ40のほぼ中間位置にあたる。確認面のレベルは標高20.85ｍ前後である。溝の方向は南西－北東であり，ほぼ直線的に延びている。南端は調査区外へ延び，北端は一部消滅するが，方向をやや北向きに再び短く検出される。検出された全長は約5.00ｍである。溝の幅は0.30ｍ前後，深さは５㎝を測る。中央部がやや幅広くなっている。溝の断面は浅い船底形を呈する。底面のレベルは均一である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物はなかった。

ＳＤ42（第160図）

Ｃ地区ほぼ中央部の東側において単独で検出された溝である。確認面のレベルは標高20.95ｍである。溝の方向は南北であり，直線上に延びる。北端は近世の削平により消滅している。幅は0.50ｍ，深さは0.10ｍを測り，断面は船底形を呈す。検出された全長は約2.00ｍである。底面のレベルは均一である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物はなかった。



第160図　SD40・41・42断面図（Ｓ：1/20、1/40）

4．D地区

D地区は遺跡の南端にあたり，C地区の南端と農道をはさんで接している。D地区の全長は，約162mである。D地区の南端より約35m北側には現有の水路が北東方向に流れているため，幅約4mの未調査部分がある。さらに，その水路の北端近くは東側に延びる水路がある。また，D地区南端より約22m北側には幅約5mの農道があるため，調査は実施されなかった。

D地区は近世の水田整備事業により地山が3段に削平されている。D地区中央～北端の東半分が最も低く，北端よりSB19の間の約38m，幅8mの範囲はやや高くなっている。その南側の部分が最も高く，比高差は約0.30mである。また，D地区南東隅は微高地となっており，現在では畑が営まれ，現水田との比高差は約0.50mである。この微高地は東側に広がっており，現耕作土の直下が砂礫層の地山となっている。その他の土層堆積状態はレベルが若干異なるが，ほぼ同一の状態である。現水田耕作土の下に近世の水田層が薄く堆積し，その下は地山である。

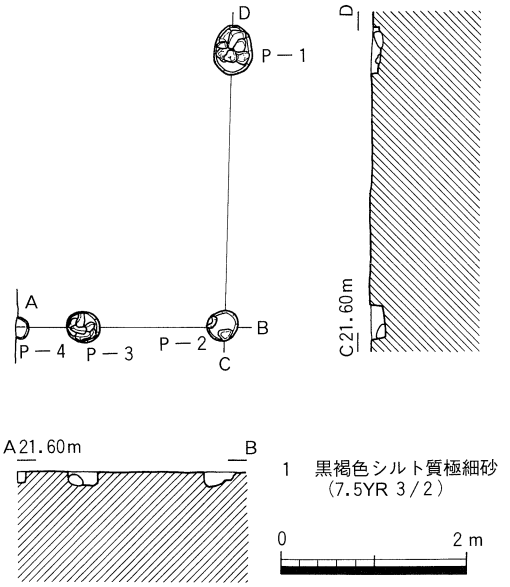
1）弥生時代

1．掘立柱建物

SB19（第161図）

D地区北部の西端において単独で検出された掘立柱建物である。検出されたのは4個の柱穴のみであり，その他は調査区外となっている。確認面のレベルは標高21.50mである。P－1と2の芯芯間の距離は3.00m，P－2と3の距離は1.50mを測る。建物の方向は東西であり，梁行1間以上×桁行1間である。柱穴の平面形は円形を呈し，直径0.30～0.50mを測る。確認面からの深さは0.15mである。P1～3の底面には0.10～0.20mの石が検出される。柱の根石である。P－4は東半分のみの検出である。埋土は黒褐色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物は数点の弥生土器片のみであり，図化することはできなかった。

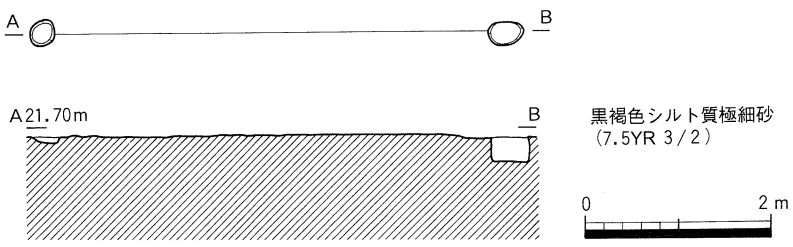


第161図　SB19平・断面図（S：1/80）

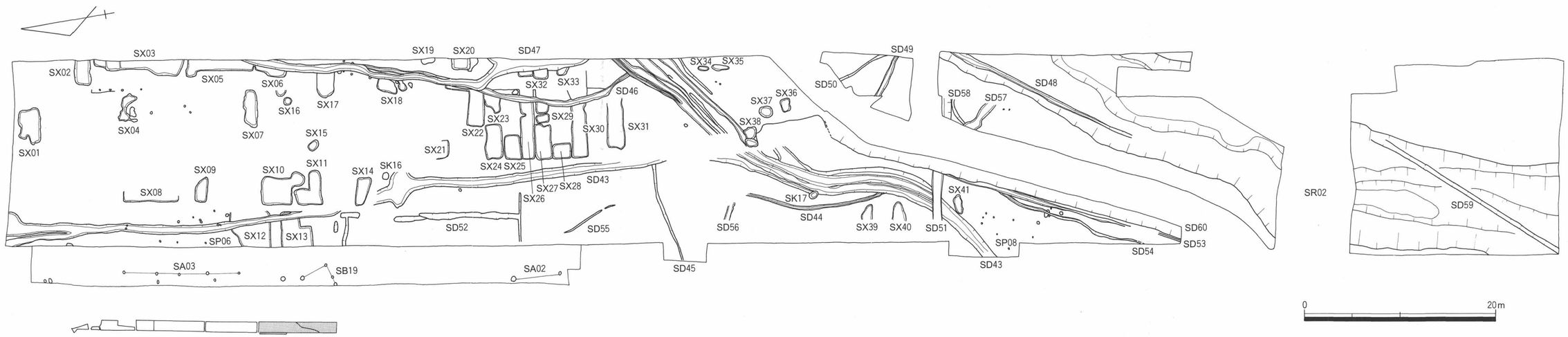
SA02（第162図）

D地区の中央北寄りにおいて検出された柵列である。SB19の南側に位置し，P－1・2のみ検出された。確認面のレベルは標高21.60mである。柱穴の平面形は円形を呈し，P－2の直径は0.40m，深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。



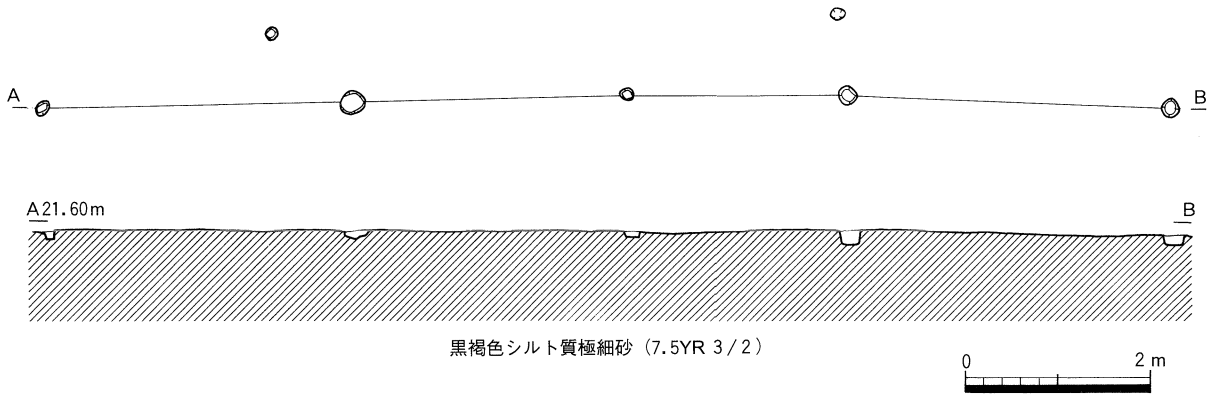
第162図　SA02平・断面図（S：1/80）



第163図　D地区遺構配置図　（S：1/400）

ＳＡ03（第164図）

Ｄ地区北部西寄りにおいて検出された５個の柱穴からなる柵列である。確認面のレベルは標高21.50ｍ前後である。方向は南北である。柱穴は円形を呈し，直径0.14～0.26ｍを測る。深さは0.05～0.15ｍである。埋土は黒褐色シルト質極細砂である。出土遺物は数点の弥生土器片のみである。



第164図　SA03平・断面図（Ｓ：１/80）

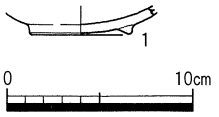
2）中世

１．ピット

ＳＰ06（第165図）

確認面のレベルは標高21.40ｍである。直径0.10ｍを測る円形を呈し，深さは0.10ｍである。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

出土遺物　わずかな高台を持つ土師質土器椀（１）が出土した。

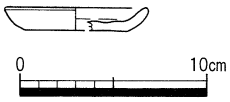


番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器　椀		5.4	(1.5)	回転ナデ。低い高台	浅黄2.5Y7/3		微砂多量

第165図　SP06出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＰ07（第166図）

確認面のレベルは標高21.40ｍである。直径は0.10ｍ，深さは0，10ｍを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。土師質土器皿（１）が出土した。

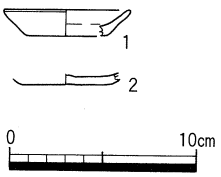


番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器　皿	7.6	5.4	(1.25)	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	橙5YR7/7	鈍黄橙10YR7/2	微砂

第166図　SP07出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＰ08（第167図）

確認面のレベルは標高21.70ｍである。直径0.10ｍを測る円形のピットで，深さは0.13ｍである。埋土は灰白色シルト質極細砂である。埋土中より土師質土器皿（１）と土師器杯（２）が出土した。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器　皿	6.8	4.2	1.35	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4		微～細砂多量
2	土師器　杯		4.8	0.6	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	浅黄橙7.5Y8/3		微砂

第167図　SP08出土遺物（Ｓ：１/４）

2．溝

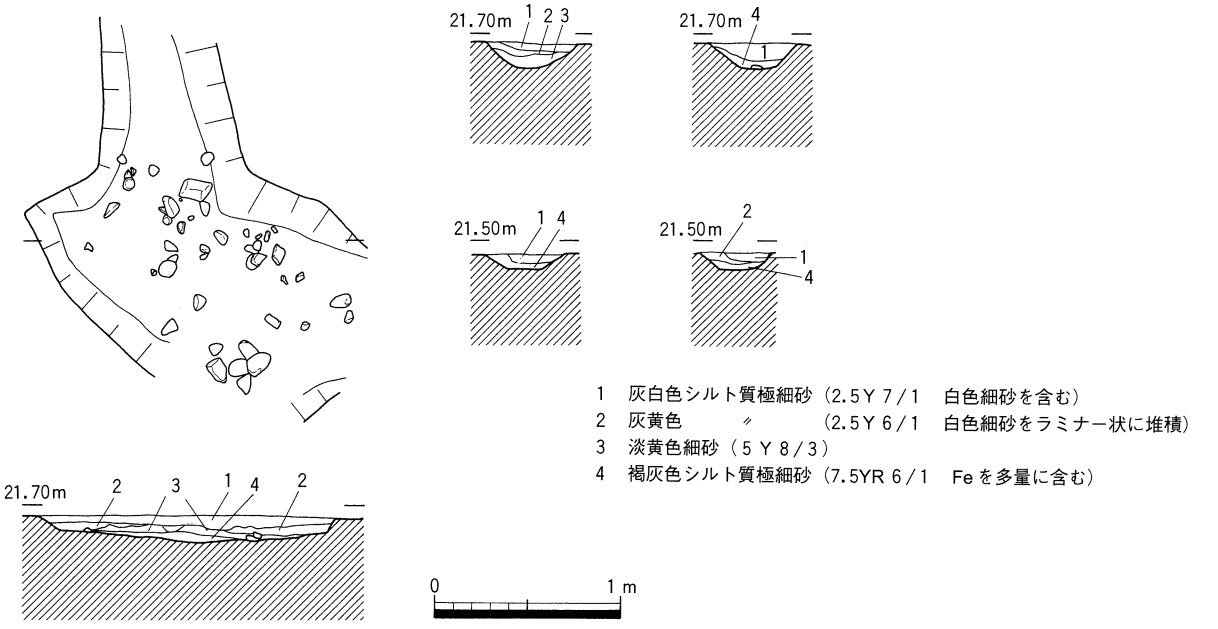
ＳＤ43（第168～171図）

Ｄ地区中央部から北端に至る範囲で検出された溝である。溝の南端はＳＰ08の北側にあり，緩やかなＳ字状に蛇行しながら北東方向に延びる。後述するように，溝は堆積状態から４期に分けることができ，ＳＤ51より北側は規模の違いはあるけれども７条の溝に分流している。溝の南端部ではこれらの溝が重なり合っており，結果として１本の溝となり南西方向（香川県埋蔵文化財調査センターが調査を行った多肥松林遺跡）に延びている。また，７条の溝の１条はほぼ北方向に直線的に延びている。溝の中央付近と北流する溝の一部は近代の削平によって消滅している。

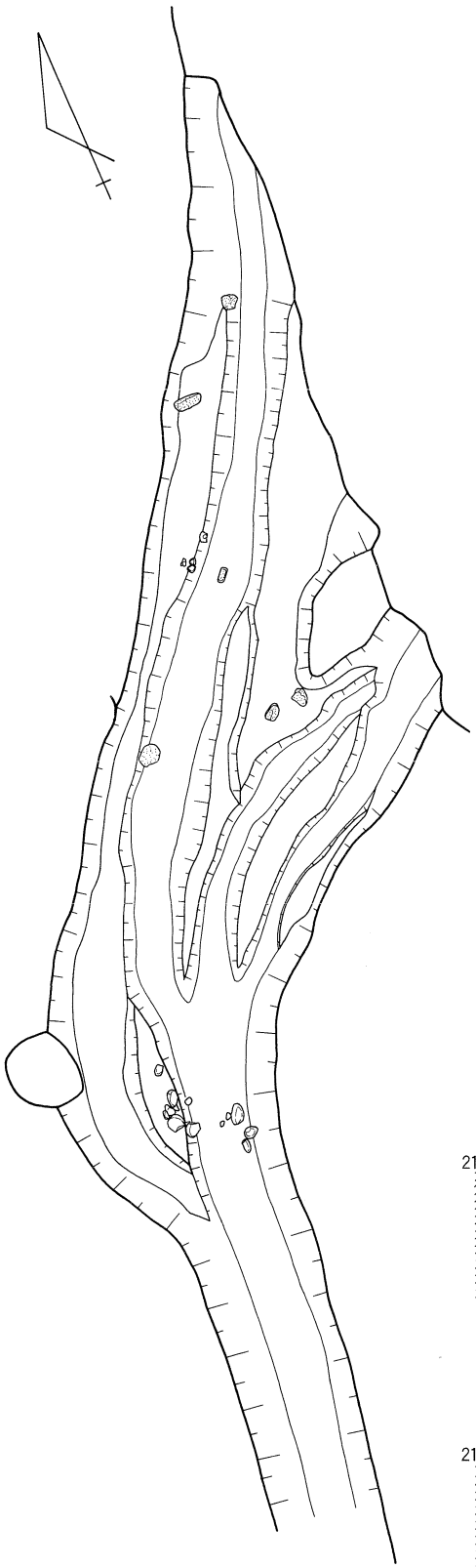
溝の確認面のレベルは，南端で標高21.70m，北東隅では21.25m，北部で21.40～21.60mである。溝は土層堆積状態や平面形から考えて，４期に分けられる。最も新しい１期の溝は，幅1.30mで深さ0.40mを測り，断面は逆台形を呈する。埋土は第169図の第１～３層である。２期の溝は第４，５層を埋土とする溝で，深さは0.40mを測る。断面は逆台形を呈する。３期の溝は第７～９層を埋土とし，深さは0.40mを測り，断面は逆台形を呈する。４期の溝は１，２期の下に掘り込まれており，第６層を埋土とする。確認面からの深さは0.50mを測る。１～４期の溝が重なり合っている南端での溝の幅は2.40mを測る。北方向に延びる溝の幅は0.50m，深さ0.15mを測り，断面は船底形ないし逆台形である。４期の溝は堆積の段階を示すが，時間差はほとんどないと考えられる。

ＳＫ17の北側の溝が数条に分かれる場所（第169図）では，人頭大～拳大の石が溝と直交するように並べられている。また，北に延びる溝には土坑状に広くなる部分があり（第168図），同サイズの石が多量に検出された。ここからは動物の骨・土器が出土した。

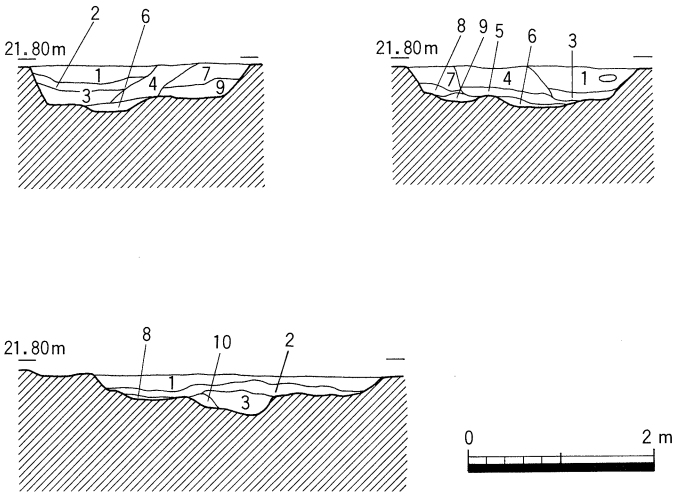
出土遺物　遺物は溝の全域から出土したが，特に南端近くの上層において完形に近い瓦器椀や土師質土器皿が多量に出土した。遺物は，瓦器椀（1～22），土師質土器椀（24～27），同杯（28～30），同皿（31～37），須恵器椀（23），同鉢（38），同壺（39），同甕（40，43～48），同高杯（41），土師質土器土鍋（49～51），白磁碗（52），磁器碗（53），加工材，動物遺存体がある。



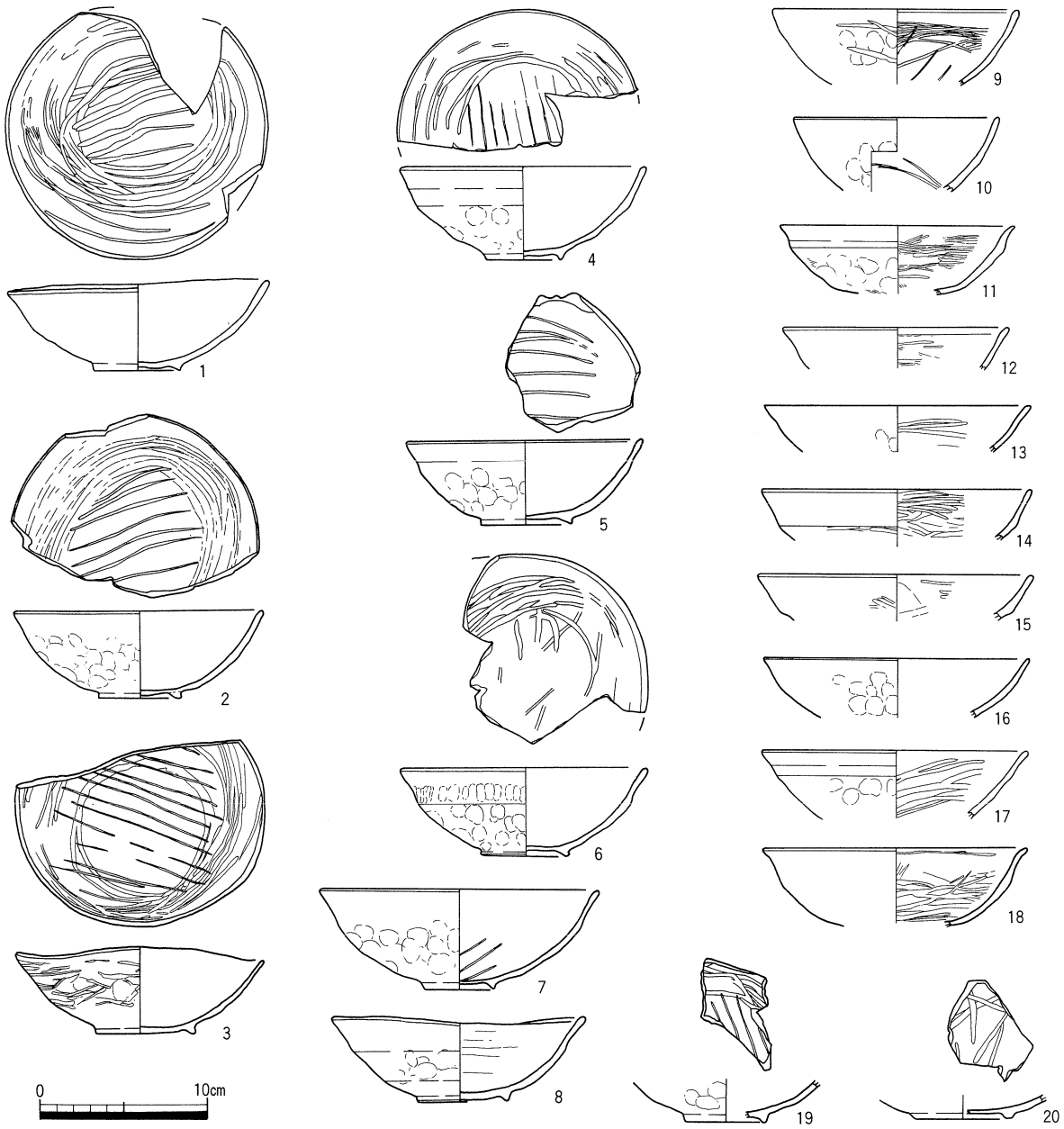
第168図　SD43平・断面図（Ｓ：1/40）



1　褐灰色シルト質極細砂（7.5YR 6/1　灰白色細砂を多く含む
　　下層にFeを多く層となす）
2　灰白色中細砂十灰白色シルト質極細砂（2.5Y 8/1）
3　褐灰色シルト質極細砂（7.5YR 5/1　灰白色細砂を含む）
4　にぶい黄橙色　〃　（10YR 7/2）
5　　〃　（　〃　Fe粒子細砂を含む）
6　灰褐色　〃　（7.5YR 4/2）
7　明褐灰色　〃　（7.5YR 7/1）
8　　〃　〃　（　〃　白灰色細砂を含む）
9　灰褐色　〃　（5YR 5/2）
10　褐色極細砂質シルト　（7.5Y 4/4　Feを含む）



第169図　SD43平・断面図（S：1/80）

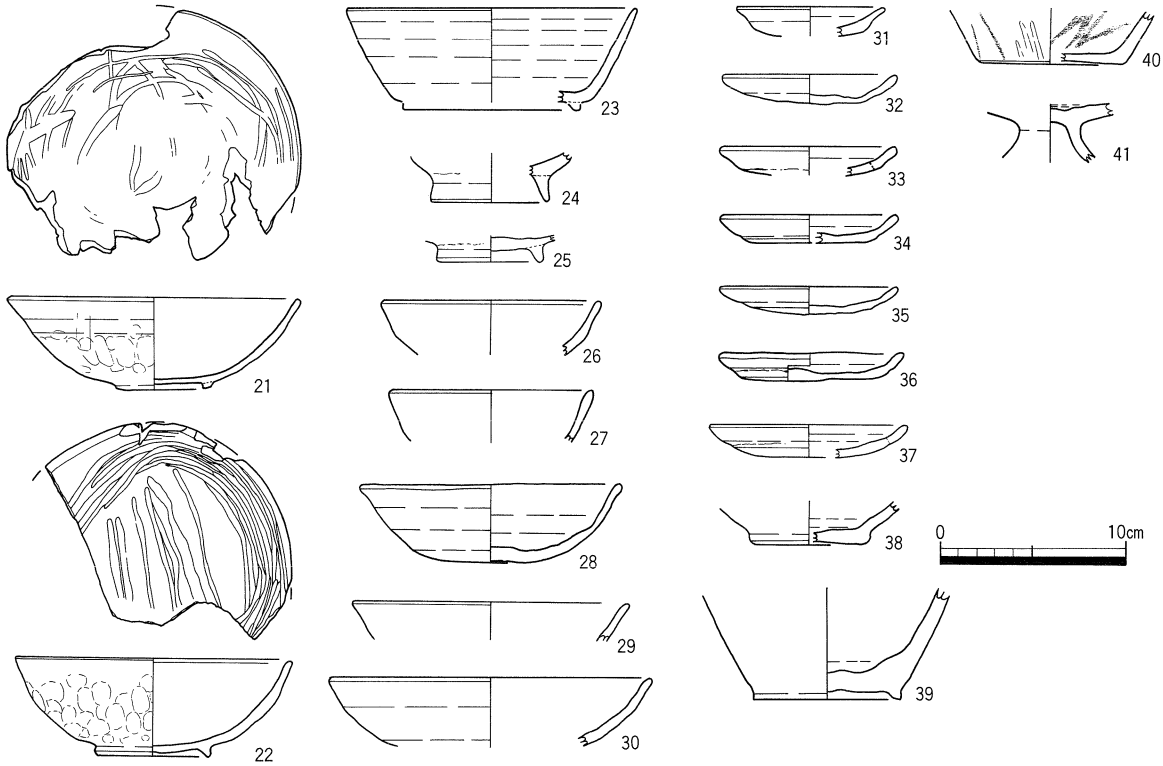


番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器 椀	15.8	5.2	5.1	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ、暗文	黒褐10YR2/2		微砂若干
2	〃	14.8	5.0	5.15	〃	〃		微砂
3	〃	15.0	5.9	5.0	外面指押え後にナデ、ヘラミガキ。内面ナデ後にヘラミガキ、暗文	〃		微砂若干
4	〃	14.6	4.6	5.5	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ、暗文	黒10YR2/1		微砂
5	〃	14.2	5.4	4.9	外面指押え後にナデ。内面ナデ、ヘラミガキ後に暗文	黒褐10YR2/2		〃
6	〃	14.8	5.4	5.2	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	黒10YR2/1		〃
7	〃	16.8	4.2	5.8	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ、暗文	黒褐10YR2/2		〃
8	〃	15.2	5.5	5.0	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	黒10YR2/1		〃
9	〃	14.8		(4.4)	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ、暗文	黒褐10YR2/2	灰白N8/	微砂若干
10	〃	12.4		(4.4)	〃	〃		微砂
11	〃	14.0		(4.0)	外面指押え後にナデ、ヘラミガキ。内面ナデ後にヘラミガキ	〃		微砂若干
12	〃	13.4		(2.5)	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	黒10YR2/1		〃
13	〃	15.9		(2.7)	〃	黒褐10YR2/2		〃
14	〃	16.0		(3.0)	外面ナデ、ヘラミガキ。内面ナデ後にヘラミガキ	〃		〃
15	〃	16.2		(2.75)	〃	黒10YR2/1		〃
16	〃	16.0		(3.5)	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	〃		微砂
17	〃	15.8		(4.0)	〃	〃		微砂若干
18	〃	15.8		(4.6)	〃	黒褐10YR2/2		〃
19	〃		4.8	(2.5)	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ、暗文	〃		〃
20	〃		6.0	(1.4)	貼付高台後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	オリーブ黒7.5Y 3/2	灰5Y2/1	〃

第170図　SD43出土遺物(1)（S：1／4）

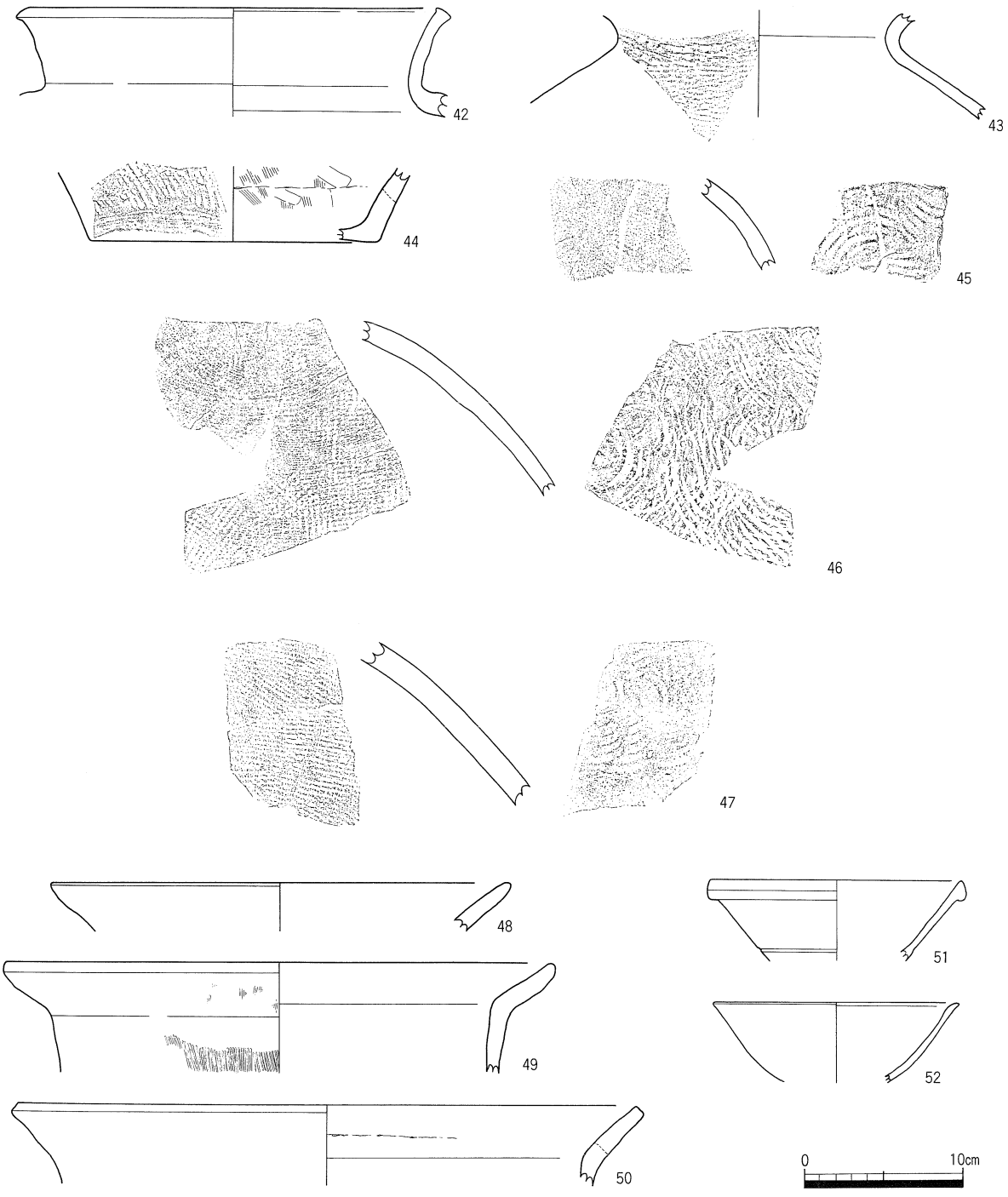
1～22の瓦器碗は和泉型Ⅱ－3期～Ⅲ－1期に比定され，法量の縮小化傾向が著しい。口縁部のヨコナデの範囲が広くなり，体部外面は成形時の指押えの後にナデが施されている。3は指押さえの後にヘラミガキが簡略に行われている。高台の断面は，逆台形のもの（2，6，20～22），先端の尖った三角形のもの（1，3～5，7，8，19）がある。内面には，間隔の大きく開いた圏線ヘラミガキと不規則なヘラミガキが施されている。見込みには，暗文と化したヘラミガキが粗い平行線状になったもの（1，22），不規則なもの（6，17，18，20，21），平行線状の明瞭な暗文（2～5，7，9，19）がある。平行線状のヘラミガキは体部内面のヘラミガキより先に施されるが，暗文は圏線ミガキを切っており最後に施されている。

31～37の土師質土器皿は、31を除きほぼ同じ法量であり，回転ナデによる調整が行われる。底部外



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
21	瓦器 椀	15.8	5.2	5.0	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	黒10YR2/1		微砂
22	〃	15.0	6.0	5.2	外面指押え後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ、暗文。底面指押え	〃		〃
23	須恵器 椀	15.6		4.95	回転ナデ。高台を欠損	黒2.5GY2/1	青灰5PB6/1	〃
24	土師質土器 椀		6.2	(2.6)	回転ナデ。摩滅	浅黄橙7.5YR8/4		微砂若干
25	〃		5.6	(1.4)	回転ナデ。貼付高台後にナデ。底面切り離し後静止ヘラ削り	浅黄2.5Y8/3	黒10YR2/1	微砂多量
26	〃	11.8		(2.8)	回転ナデ。外面ナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	灰白10Y8/1		微砂
27	〃	11.0		(2.8)	回転ナデ	灰白7.5YR8/2	浅黄橙7.5YR8/3	微～細砂
28	土師質土器 杯	13.8	5.2	4.1	回転ナデ。外面下半ナデ。底面切り離し後に静止ヘラ削り	灰白7.5YR8/1		〃
29	〃	15.0		(2.0)	回転ナデ	赤橙10YR6/8		微砂
30	〃	17.4		(3.7)	回転ナデ。体部内外面ナデ	灰白10YR8/2	鈍黄橙10YR7/2	微砂多量
31	土師質土器 皿	8.0		1.6	回転ナデ。体部ナデ	黒褐10YR2/2		微砂
32	〃	9.4		1.6	底面回転ヘラ切り後に中央静止ヘラ削り、周辺回転ヘラ削り	浅黄橙10YR8/3	灰白10YR8/2	微～細砂多量
33	〃	9.4		1.5	回転ナデ。体部ナデ	灰白10YR8/2	灰白10YR8/1	微砂
34	〃	9.6	6.0	1.5	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後に回転ヘラナデ	浅黄橙7.5YR8/3	灰白10YR8/2	細～粗砂、細礫
35	〃	9.6	5.6	1.5	回転ナデ。底面静止ヘラ削り後に周辺回転ヘラナデ	淡橙5YR8/3	灰白7.5Y8/1	微砂
36	〃	9.9	6.8	1.5	底面回転ヘラ切り後に中央静止ヘラ削り、周辺回転ヘラ削り	灰色10YR8/2	灰白2.5Y8/1	微砂多量
37	〃	10.6		1.7	回転ナデ。底面静止ヘラ削り後にヘラナデ	〃	〃	微砂
38	須恵器 鉢		6.6	(2.3)	ナデ。底面回転ヘラ削り後に周辺ナデ	灰白10YR8/1		〃
39	須恵器 壺		8.0	(5.8)	高台ナデ。底面中央に布目痕	灰白N8/		微砂若干
40	須恵器 甕		7.8	(2.9)	底面ヘラナデ。内外面に棒状黒斑	明青灰5BG7/1	明オリーブ灰2.5GY7/1	微砂
41	須恵器 高杯			(3.2)	脚外面ナデ	灰白N7/		〃

第171図　SD43出土遺物(2)（S：1/4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
42	須恵器　甕	26.0		(6.7)	肩部の張り強い。ヨコナデ	灰N5/	灰N6/	微～細砂
43	〃			(9.7)	回転ナデ。胴部外面タタキ目。内面青海波タタキ目	青灰5PB6/2		微砂多量
44	〃		18.0	(4.7)	外面縦タタキ目、ヘラ削り。内面刷毛目、ヘラナデ	明青灰5PB7/1	青灰10BG5/1	微砂
45	〃			(5.6)	外面斜行タタキ目。内面青海波タタキ目	灰白7.5Y7/1		微～細砂
46	〃			(11.5)	外面平行タタキ目。内面青海波タタキ目	灰白5Y8/1		微砂
47	〃			(10.0)	〃	明青灰5PB7/1		〃
48	土師質土器　土鍋	29.0		(3.0)	口縁部ヨコナデ、ナデ	灰白10YR8/2		細～粗砂
49	〃	35.0		(6.8)	口縁部外面刷毛目後にナデ。体部外面刷毛目。内面ナデ	暗褐10YR3/3	灰白5Y7/1	微～細砂多量
50	〃	39.0		(5.0)	内外面ナデ。口唇部角ばる。輪積み痕	灰白7.5Y8/1		〃
51	白磁　碗	16.0		(5.0)	残存部は全面に釉及ぶ。釉灰白10Y7/1	灰白7.5Y8/1		きわめて精良
52	陶磁　碗	15.6		(4.9)	口縁部若干外反。全面に釉及ぶ。釉浅黄5Y7/3	灰白10Y8/1		〃

第172図　SD43出土遺物(3)（S：1／4）

面は，回転ヘラ切りにより切り離された後に，中央を静止ヘラケズリし周辺を回転ヘラケズリ（32，36），回転ヘラナデ（34）を施すもの，静止ヘラケズリ後に周辺に回転ヘラナデを施すもの（35，37）がある。

須恵器は，椀，鉢，壺，高坏，甕がある。23は高台部を欠損する。42～47は大型の甕で，42の口縁部は直線的で，端部が若干拡張する。43，45～47は外面にタタキ目，内面に青海波タタキ目が施される。

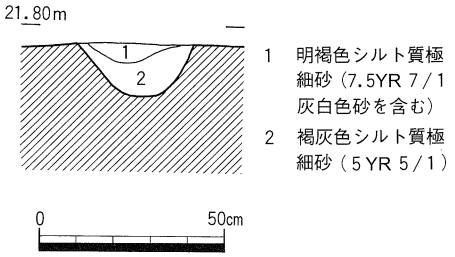
48～50は土鍋であり，口縁部はヨコナデ，50の体部外面は刷毛目が施される。

51の外面に沈線が巡り，直線的な体部であり，52の体部は内湾し，口縁部は外反する。

ＳＤ44（第173図）

Ｄ地区ほぼ中央に検出された溝であり，ＳＤ43・ＳＫ17の西側に位置し，ＳＤ43に南端を切られる。確認面のレベルは標高21.70ｍである。溝の平面形は西方に湾曲しながら南北方向に延びる。北端は自然消滅している。検出された全長は約14ｍである。溝の幅は0.30ｍ前後を測り，深さは0.15ｍである。断面はゆるやかな掘り込みの船底形を呈する。底面のレベルはほぼ均一であり，北側は掘り込みが徐々に浅くなる。埋土はほぼ同質の灰褐色シルト質極細砂2層であり，自然堆積状態を示す。

出土遺物は数点の土師質土器片のみである。

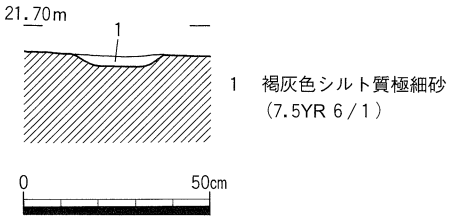


第173図　SD44断面図（Ｓ：1/20）

ＳＤ45（第174図）

Ｄ地区のほぼ中央において検出された溝で，ＳＤ55とＳＤ56の中間に位置する。確認面のレベルは標高21.60ｍ前後である。溝は東西方向に延び，検出された全長は約10ｍである。東端はＳＤ43に切られ，約３ｍ西方に延び，やや方向を南西方向に変え，ほぼ直線的に西側の調査区外に延びている。溝の幅は0.30ｍ前後であり，深さは５㎝を測る。断面は底面が平坦で逆台形を呈する。溝の幅は西側になるにしたがい細くなっている。底面のレベルはわずかに東側が低くなるが，ほぼ均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物はなかった。

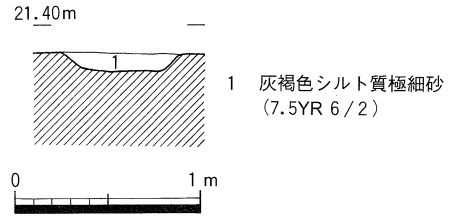


第174図　SD45断面図（Ｓ：1/20）

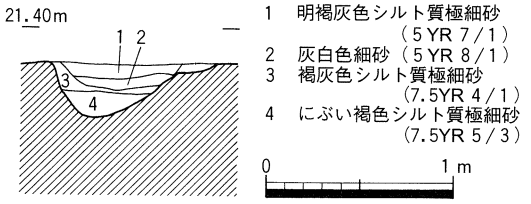
ＳＤ46（第175図）

Ｄ地区中央から北部の東側において検出された溝である。南端はＳＤ43に切られ，北側はＳＤ47に切られている。北端は調査区外へ延びる。確認面のレベルは標高21.30ｍである。溝は西方に湾曲しながら南北方向に延びる。溝の幅は0.30～0.60ｍを測り，深さは0.10ｍである。断面は逆台形を呈し，底面のレベルは北側にやや低くなっている。埋土は灰褐色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物は数点の瓦器片，土師質土器片のみである。



第175図　SD46断面図（Ｓ：1/40）

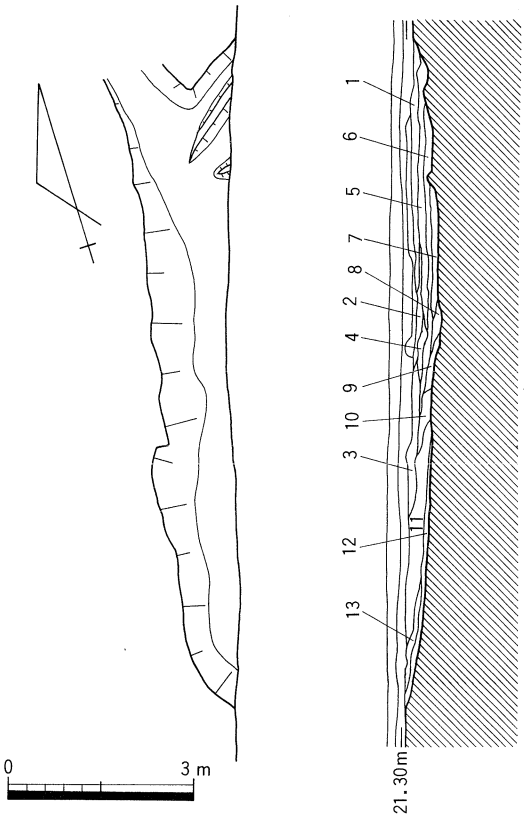


第176図　SD47断面図（S：1/40）

SD47（第176・177図）

D地区中央から北部の東端に検出された溝である。SD43の北約2mを南端とし，北方向へ延びる。確認面のレベルは標高21.30mである。検出された全長は約36.50mである。南端部は調査区外のため全体を検出できなかったが，確認面からの深さが0.50mを測り埋土は13層に分か，南方向からの埋没過程を呈し，埋土中に細～中砂を多く含み，さらに褐鉄鉱の層が見られる。これらの事より，溝より規模の大きな落ち込みがあると考えられ，ため池的な性格の可能性がある。落ち込みの北側には北東方向に延びる溝の一部が検出される。北方向に延びる溝の幅は0.70m，深さは0.30mを測る。溝の断面は船底形を呈し，北側にゆるやかにレベルは低くなっている。北端は調査区外へ延びる。溝の埋土は4層に分けられ，堆積状態から一度埋没した後に再び掘り下げられたと考えられる。

出土遺物　瓦器椀，土師質土器皿，土師器片，弥生土器片があるが，図化できるものはなかった。



1 にぶい褐色シルト質極細砂 (7.5YR 6/3)
2 明褐灰色 〃 (5YR 7/1 白色細砂を含む)
3 にぶい褐色 〃 (7.5YR 5/3)
4 灰白色細砂 (5YR 8/1)
5 褐灰色シルト質極細砂 (5YR 6/1)
6 〃 (5YR 4/1)
7 〃 (〃 Feを含む)
8 白灰色細～中砂 (5Y 8/1)
9 褐灰色シルト質極細砂 (5YR 5/2)
10 7とほぼ同じ
11 褐灰色シルト質極細砂 (7.5YR 4/1)
12 にぶい褐色シルト質極細砂 (7.5YR 5/3 Feを含む)
13 灰褐色シルト質極細砂 (5YR 6/2 Feを含む)

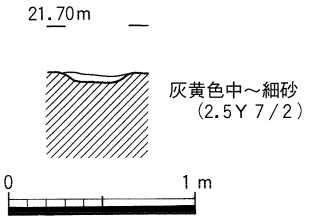
第177図　SD47平・断面図（S：1/120）

SD48（第178・179図）

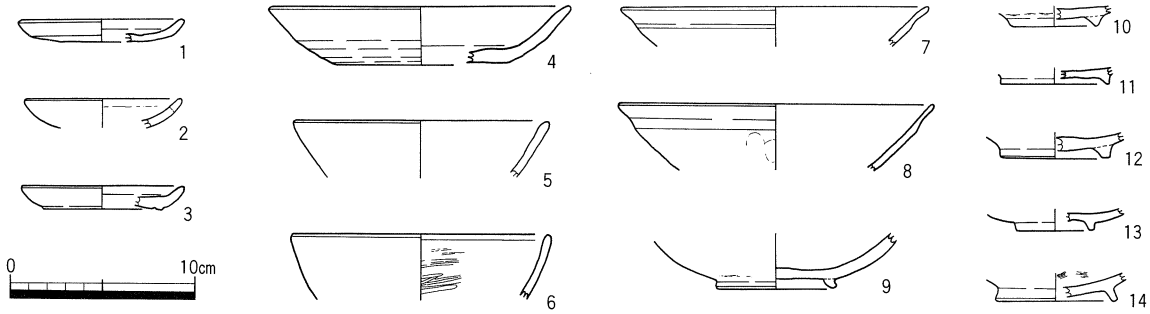
D地区の中央南寄りにおいて検出された溝であり，SR02の西岸の内側を走っている。確認面のレベルは標高21.45m前後である。溝はほぼ直線的に南西－北東方向に延び，北端は調査区外となっている。幅は0.30～0.90m，深さは0.05～0.25mを測り，北側になるにしたがい幅は広くなり，掘り込みも深くなる。底面のレベルは北方向にゆるやかに低くなっている。
断面は逆台形を呈す。埋土は南側で灰黄色中～細砂のみであるが，北側では上位に褐灰色シルト質極細砂が堆積している。

本溝はSR02とほぼ同時期のものと考えられる。

出土遺物　北側の掘り込みの深い部分に土器の出土があった。遺物は土師質土器皿（1～3），土師器杯（4），土師質土器椀（5～14）である。1～3はナデ調整，3の底部切り離しはヘラ切り。4は底部から緩やかに立ち上がり，体部は若干内湾する。椀は均一な器壁のもの（5，6），口縁部が若干薄くなるもの（7，8）がある。9～14は底部，9は回転糸切り後に周縁をナデ，中央は静止ヘラ切りを施す。



第178図　SD48断面図
（S：1/40）



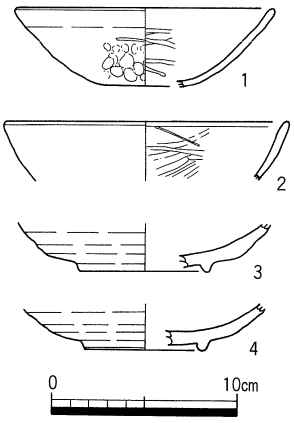
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器 皿	9.0	7.8	1.2	回転ナデ	灰白2.5Y8/1		微砂
2	〃	8.6		1.55	回転ナデ。輪積み痕	淡橙5YR8/3	灰白5Y8/2	〃
3	〃	8.8	6.4	1.25	回転ナデ。底面ヘラ切り	灰白5YR8/2		〃
4	土師器 杯	16.2	9.4	3.1	回転ナデ。底面切り離し後にナデ	淡黄2.5Y8/3		微～細砂
5	土師質土器 椀	13.8		(3.0)	回転ナデ	灰黄2.5Y7/2	灰白10Y8/1	〃
6	〃	15.8		(3.5)	回転ナデ。内面ヘラミガキ	緑黒7.5GY2/1		微砂
7	〃	16.6		(2.1)	回転ナデ。	黒褐10YR2/2		微砂若干
8	〃	17.0		(3.5)	回転ナデ。外面指押え後にナデ	〃		〃
9	〃		6.2	(2.9)	回転ナデ。底面回転糸切り後に周辺ナデ、中央静止ヘラ削り	灰白7.5Y8/1		微砂
10	〃		4.8	(1.1)	回転ナデ。貼付高台	オリーブ黒7.5Y3/1		〃
11	〃		6.0	(0.9)	回転ナデ。貼付高台後にナデ	黒褐10YR2/2		〃
12	〃		6.0	(1.3)	〃	暗褐10YR3/3	灰白7.5Y8/1	〃
13	〃		4.2	(1.1)	〃	黒褐10YR2/2		微砂若干
14	〃		6.6	(1.5)	回転ナデ。内面ヘラミガキ。底面切り離し後にナデ	灰黄2.5Y7/2	黒褐2.5Y3/1	微砂

第179図　SD48出土遺物（S：1/4）

SD49（第180図）

D地中央やや南寄りに検出された溝であり，SD50とSD58の中間に位置する。確認面のレベルは標高21.60mである。溝は直線的に東西方向に延びる。東端は調査区外へ延び，西端は現有の水路のため未調査である。幅は0.40～0.60mを測り，深さは0.10mである。底面のレベルはほぼ均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

出土遺物　瓦器椀（1），土師質土器椀（2），須恵器椀（3，4）が出土した。1は底部を欠損し，緩やかに立ち上がる。体部外面は指押さえの後にナデ，内面はヘラミガキが施され，暗文が見られる。2は若干内湾気味の体部で，外面指押さえの後にナデ，内面はヘラミガキが施される。3，4は低い高台を持つ底部である。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器 椀	14.0		(4.1)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ、暗文	灰白10Y8/1		微砂
2	土師質土器 椀	17.2		(3.15)	回転ナデ。外面指押え後にナデ	黒褐10YR2/2		〃
3	須恵器 椀		7.0	(2.5)	回転ナデ。貼付高台後にナデ	灰白10Y8/1		〃
4	〃		6.4	(2.4)	〃	灰白5Y8/1		〃

第180図　SD49出土遺物（S：1/4）

SD50

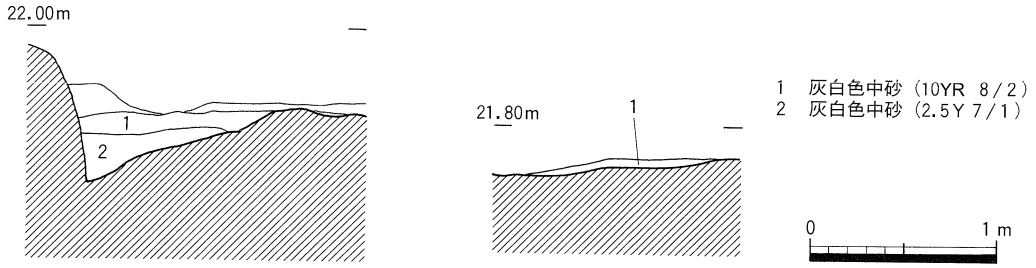
D地区中央やや南寄りに検出された溝であり，SD49の北側に位置する。確認面のレベルは標高21.60mである。溝は南東－北西方向に延び，幅は0.20m，深さ5cmを測る。底面のレベルは均一である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物はなかったが，埋土状態からSD49と同時期と考えられる。

ＳＤ51（第181・182図）

Ｄ地区中央やや南寄りにおいて検出された溝である。ＳＤ43を切っている。溝は東西方向に直線的に延びるが，中央部は現有の水路のため未調査である。東端は調査時の不注意で未検出である。幅は西側で１ｍ，東側では推定２ｍ前後である。深さは0.03～0.35ｍを測り，西側はほとんど底面近くのみ残存し，東側は0.35ｍの深さで，断面は船底形を呈する。底面のレベルは東方向に低くなっている。埋土は若干色の異なる２層の灰白色中砂であり，短期間に埋没したと考えられる。

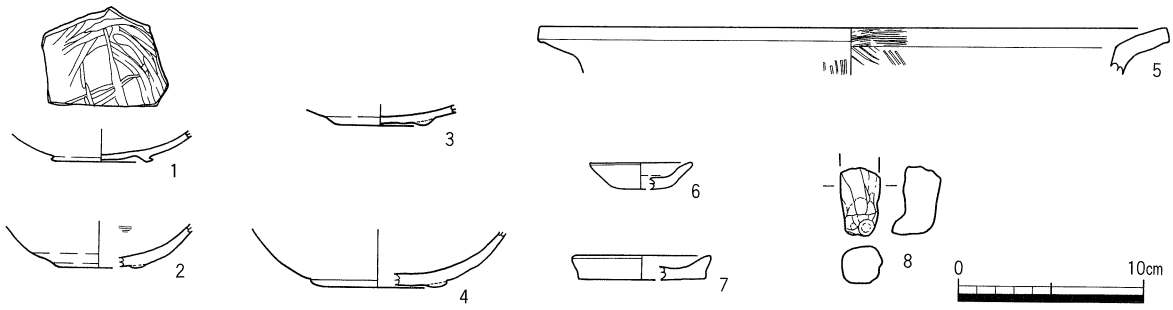
本溝は，Ｃ地区南端で検出されたＳＤ37と同方向であり，芯芯距離は約106ｍを測る。条里地割に関係する溝と考えられる。



第181図　SD51断面図（Ｓ：１/40）

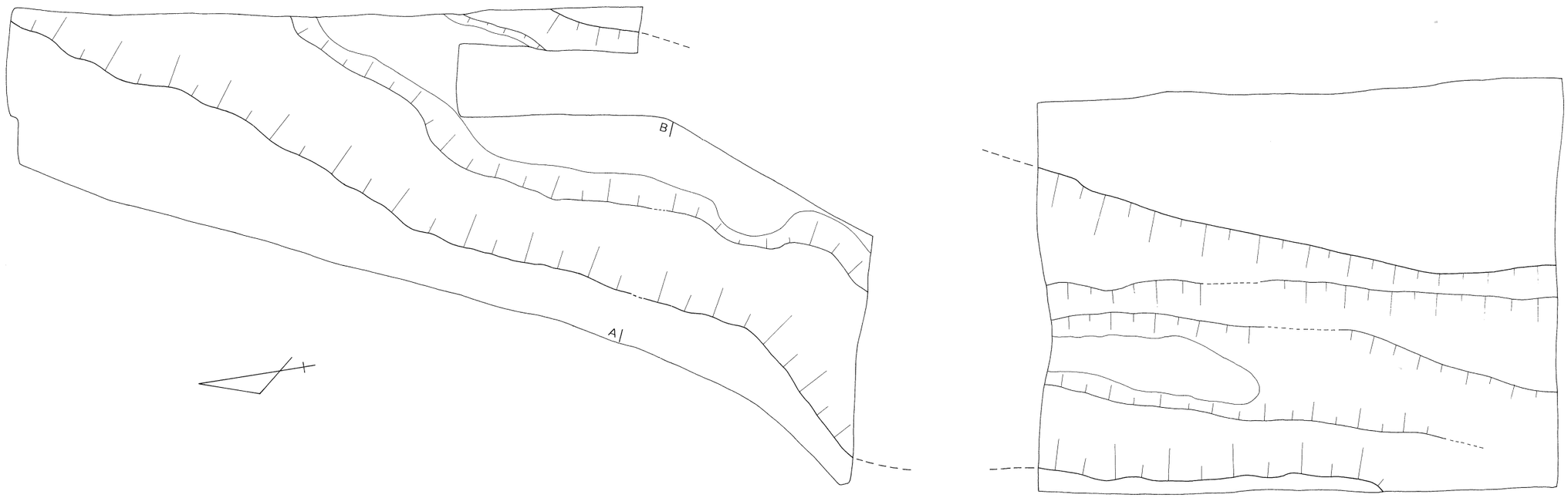
出土遺物　遺物は遺構の遺存状態の良い東側からの出土が大部分であり，瓦器椀（１），土師質土器椀（２～４），同土鍋（５，８），同皿（６，７），染付碗等がある。

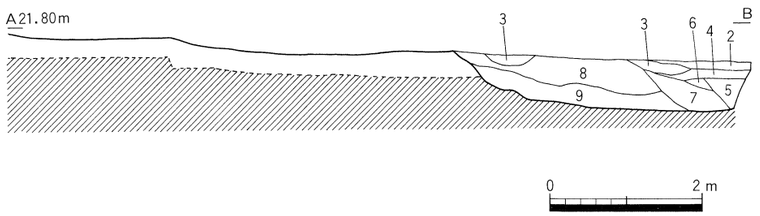
１は低いがシャープな高台をもち，体部外面は指押さえ後にナデ，内面は暗文風のヘラミガキが施される。２～４は非常に低い貼付高台でナデが施され，２は内面の一部にヘラミガキ，３の底部は回転ヘラ切りにより切り離された後にナデが施される。５は内面に稜をもち，口唇部は面取りされ，口縁部内面は横方向の刷毛目，体部は粗い刷毛目が施され，煤が付着する。８の断面は隅丸方形を呈し，端部は外側に屈曲する。皿には小形で緩やかな傾斜の体部のもの（６），口径と底径がほぼ等しく器高の低いもの（７）がある。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器　椀		5.6	(1.7)	回転ナデ。シャープな高台。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ	灰白N8/	黒褐10YR2/2	微砂若干
2	土師質土器　椀		4.5	(2.4)	回転ナデ。非常に低い高台。内面一部ヘラミガキ	灰白2.5Y7/1		〃
3	〃		5.0	(1.1)	回転ナデ。非常に低い高台。底面回転ヘラ切り後にナデ	灰白2.5Y8/2		微砂
4	〃		6.0	(2.9)	回転ナデ。非常に低い高台	黒5Y2/1	灰白5Y8/2	〃
5	土師質土器　土鍋	34.0		(2.5)	口縁部外面ヘラナデ。内面横刷毛目。体部内外面刷毛目	褐7.5YR4/4	浅黄橙10YR8/3	微～細砂多量
6	土師質土器　皿	5.6	3.4	1.4	摩滅	橙5YR7/6		微砂
7	〃	7.6	6.8	1.3	体部は非常に短い。回転ナデ。底面回転糸切り	明赤褐5YR5/6	明褐灰7.5YR7/2	微砂多量
8	土師質土器　土鍋				脚主軸に沿ってヘラ削り。端部外側に屈曲	鈍黄橙10YR7/3		微砂

第182図　SD51出土遺物（Ｓ：１/４）





0 2m

0 5m

1　黄灰色シルト質極細砂（2.5Y 6/1）
2　灰褐色シルト質極細砂（7.5YR 6/2）
3　灰褐色シルト質極細砂（5YR 6/2）
4　砂層灰白色粗砂十礫（7.5Y 8/2）
5　〃　灰色粗砂　（5Y 7/1）
6　にぶい黄橙色シルト　（10YR 7/2）
7　黒褐色シルト質極細砂　（10YR 3/1　粘性有り）
8　褐灰色シルト質極細砂十礫（10YR 4/1）
9　褐灰色シルト質極細砂　（10YR 4/1）
注）1～3層は水平堆積を呈しているが、実測時には掘り下げていた。

第183図　SR02平・断面図（S：1/200、1/80）

3．旧河道

ＳＲ02（第183～202図）

Ｄ地区南端において検出された自然旧河道である。旧河道のほぼ中央部には調査区を東西に横断する農道があり，保護するために農道を含めた幅８ｍの範囲に関しては調査を実施することができなかった。周辺部を含めた広い範囲にわたって調査以前の水田区画や地形を分析すると，Ｄ地区の東側にある微高地を挟んで西側と東側に旧河道の痕跡を示す帯状の不規則な水田が存在し，北東でその２条の旧河道が合流した後に蛇行しながら現在の下池へと延びている。本調査のＳＲ02は，西側の旧河道であると考えられる。

ＳＲ02は調査区南西隅から北東方向にほぼ直線的に延びている。北側の西岸には同時期と考えられるＳＤ48が平行して走っており，南側では木樋を有する近世の溝のＳＤ59が上面を斜行している。確認面のレベルは，南端で標高21.70ｍ，北端で21.50ｍを測る。検出された全長は約60ｍ，幅は９～12ｍである。断面形は中央に段を有し，上面は非常に緩やかな傾斜であるが，中央部から急激に落ち込んでいる。底面の幅は２～３ｍである。確認面からの深さは，南端と北端では0.40ｍであるが，中央の最深部では0.80～１ｍを測り，周囲より深くなっている。底面のレベルは南から北に向かって低くなっており，その比高差は0.30ｍである。

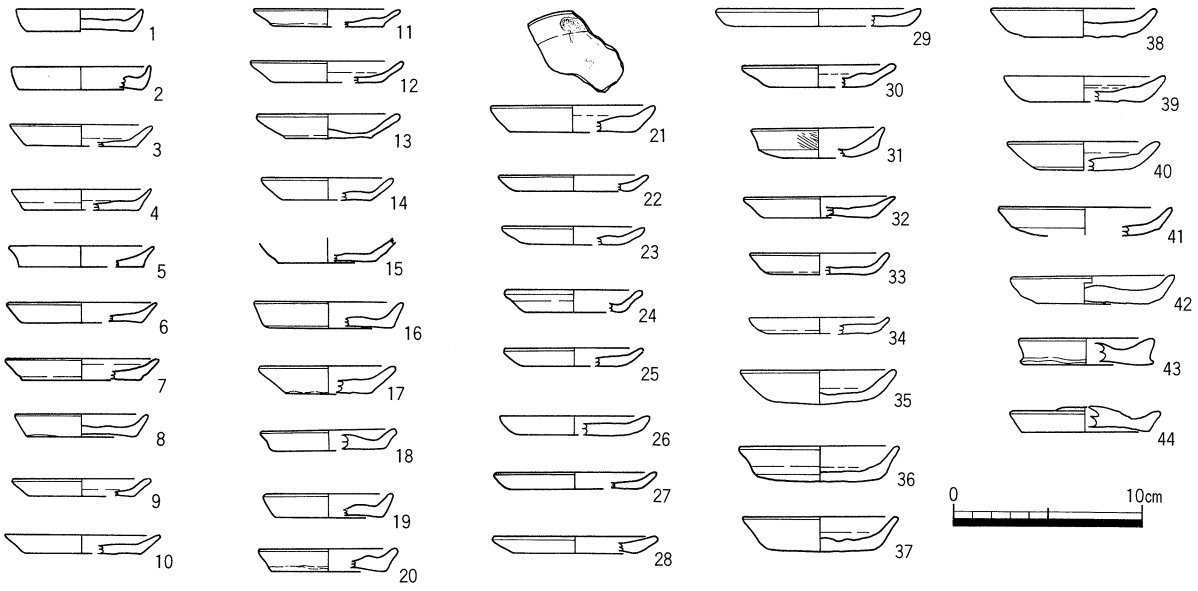
埋土に関しては，第182図では第１～９層に分層されているが，水の影響による堆積であり場所が違うと堆積層は少しづつ異なっている。しかし，全体としては自然堆積のレンズ状堆積を呈している。第１～９層は大きく３回の堆積過程が考えられる。第１～３層は旧河道の上面を全域にわたって堆積しており，多量の土師質土器や須恵器・瓦器等の遺物を含む。第４～７層は中央に堆積し，第４，５層は洪水による厚い粗砂層である。第８，９層は前層の両側に堆積する。さらに，中央より南側の最深部では第９層の下に砂礫層（第10層）が厚く堆積しており，完形の須恵器杯身・蓋・高杯等がまとまった状態で出土した。

ＳＲ02の埋没過程は次のようになると考えられる。まず，埋没が始まったのは古墳時代後期であり，第８～10層が中央の一段低い部分を埋めてしまった。その後の急激な水の流れによって新たな流路ができた。その流路もまた洪水によって中世初め頃までに埋まってしまい（第４～７層），さらに第１～３層の堆積によりＳＲ02は完全に埋まってしまった。

出土遺物　遺物はＳＲ02の全域において全ての埋土から出土し，層毎に遺物の取り上げを行った。本報告書では３段階の埋没過程に沿って報告する。

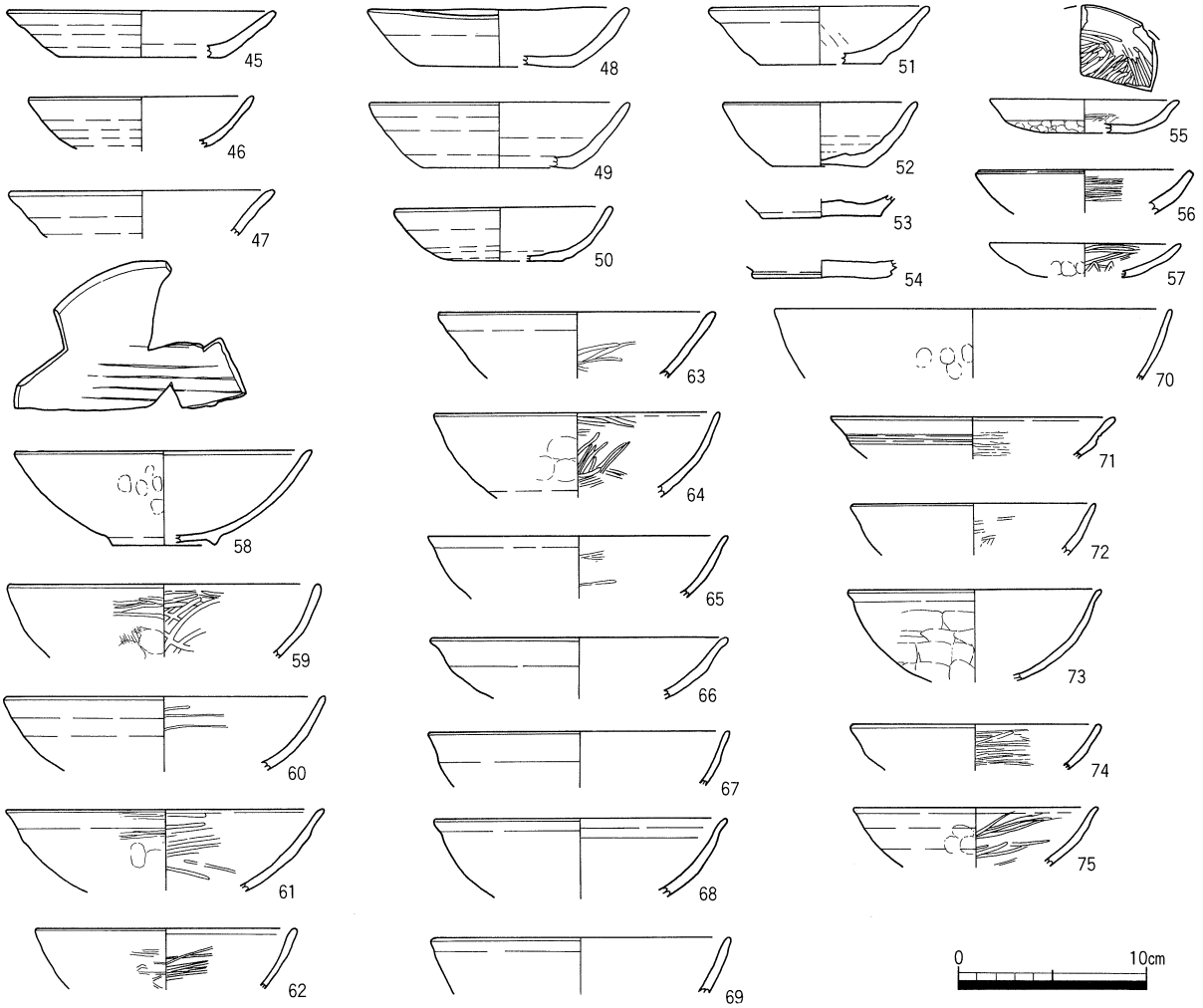
第１～３層は最も多量の遺物が出土した。遺物は，土師質土器皿（１～44），同杯（55～57），同椀（66～72，76～82，85～106，108～175），同高杯（238），同土鍋（263～271，281～291），同羽釜（272），同こね鉢（273～275），同甕（276，277，279），同カマド（280），土師器杯（45～54），同椀（242），同高杯（236，237，239～241），瓦器椀（58～65，83，84），瓦質土器椀（73～75，107），須恵器杯身（177～182），同杯蓋（183～194），同高杯（195～200），同平瓶（201），同壺（202，208～219），同甕（220～235），同こね鉢（278），須恵質土器椀（203～307），灰釉皿（243，244），中国産青磁皿（245，246），同碗（247～251），国産陶器碗（252～254，256），同白磁碗（255，260～262），同青磁碗（258，259），平瓦（292～302），柱状片刃石斧（303），石鏃（304～307），石鍋（308），羽口（309），キセル（310）である。

土師質土器皿は，底部と体部の境が明瞭なもの（１～20），緩やかな立ち上がりで不明瞭なもの（21～42），底部中央が大きく盛り上がるもの（43，44）に分けられる。１～20は形態の違いによって６タイプに分けられる。体部が短く直立気味のもの（１，２），体部の器壁が薄いもの（４～７），やや



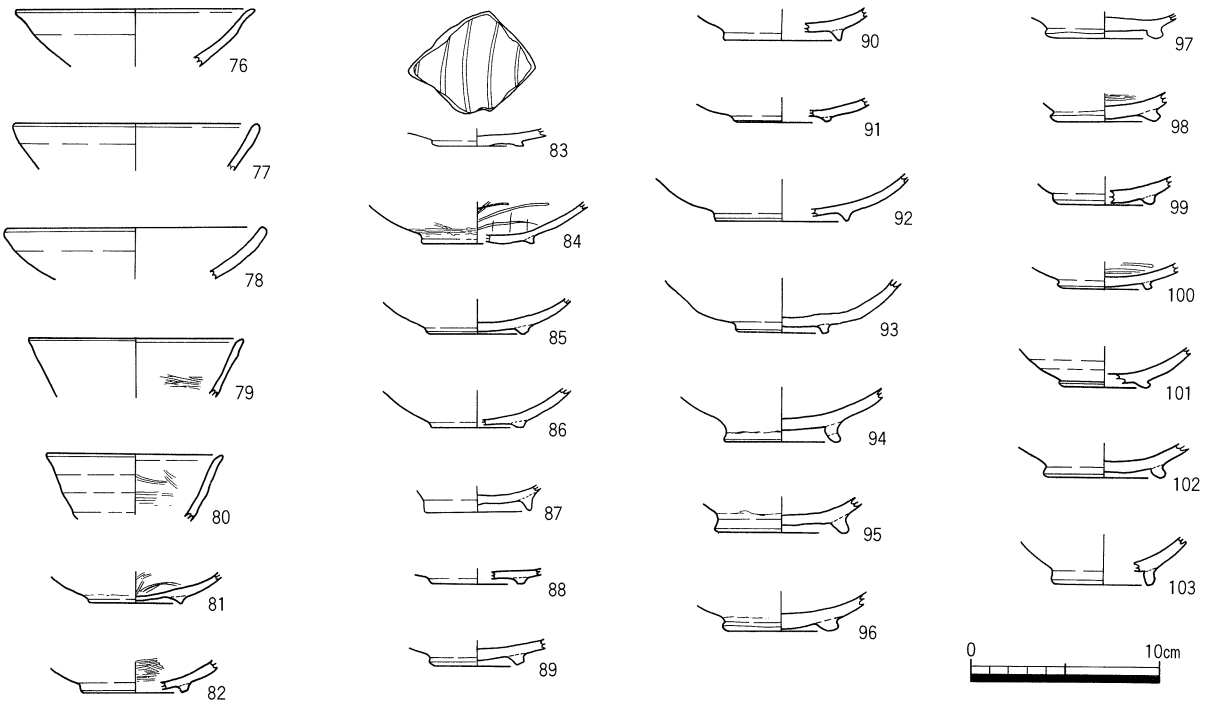
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器　皿	6.8	5.8	1.15	回転ナデ。底面回転ヘラ切り	浅黄橙10YR8/4	淡黄2.5Y8/3	細～粗砂多量
2	〃	7.4	6.5	1.2	回転ナデ	浅黄橙10YR8/3		〃
3	〃	7.6	6.0	1.1	回転ナデ。底面回転ヘラ切り	灰白2.5Y8/2		〃
4	〃	7.4	6.0	1.1	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	鈍黄橙10YR7/4	灰白2.5Y8/2	微砂
5	〃	7.7	6.6	1.05	回転ナデ	〃		〃
6	〃	8.0	6.4	1.0	回転ナデ	浅黄橙10YR8/3		〃
7	〃	8.2	6.3	1.1	回転ナデ	黒褐2.5Y3/1	黄灰2.5Y6/1	微砂若干
8	〃	7.0	6.0	1.2	回転ナデ。上げ底	灰白7.5YR8/2	鈍黄橙5YR7/4	微～細砂
9	〃	7.4	5.4	0.9	回転ナデ	灰5Y4/1		微砂若干
10	〃	8.2	6.1	1.0	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	橙7.5YR7/6	鈍橙7.5YR7/4	細～粗砂
11	〃	7.8	5.8	0.9	回転ナデ。体部薄い	淡黄2.5Y8/4	灰白2.5Y8/2	〃
12	〃	8.0	5.4	1.15	回転ナデ	〃	〃	微～細砂
13	〃	7.8	4.5	1.3	回転ナデ。底部中央厚い。底面回転ヘラ切り	鈍橙2.5Y6/6	橙5YR6/6	微～細砂多量
14	〃	7.0	4.8	1.2	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	鈍褐7.5YR6/3		微～細砂
15	〃		5.0	(1.3)	回転ナデ	灰白10YR7/1	黄灰2.5Y5/1	〃
16	〃	7.8	6.5	1.4	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にヘラナデ	灰白10YR8/1	灰白7.5Y8/1	細～粗砂
17	〃	7.4	4.4	1.45	〃	灰白2.5Y8/2		微砂
18	〃	7.2	6.0	1.0	回転ナデ。底部中央厚い	淡黄2.5Y8/3		粗砂
19	〃	6.8	5.8	1.2	回転ナデ	灰白7.5YR8/1	灰白7.5YR8/2	細～粗砂
20	〃	7.4	6.0	1.2	回転ナデ。底部周辺厚い	浅黄橙7.5YR8/4	橙7.5YR7/6	〃
21	〃	8.8	6.6	1.4	回転ナデ。底面回転糸切り。内面に炭化物付着	鈍黄橙10YR6/3		〃
22	〃	8.0	6.0	0.8	回転ナデ	淡黄2.5Y5/3	灰白2.5Y8/1	微砂若干
23	〃	7.6	5.2	0.9	回転ナデ。底面切り離し後に静止ヘラ削り	灰白2.5Y8/2		微砂
24	〃	7.4	5.0	1.2	回転ナデ。口唇部若干外反	灰白10YR8/2		微砂若干
25	〃	7.4	5.2	0.9	回転ナデ	灰白7.5Y8/1		〃
26	〃	8.0	6.0	1.0	回転ナデ。底面切り離し後に回転ヘラ削り	灰黄2.5Y7/1	黄灰2.5Y6/1	細～粗砂多量
27	〃	8.8	7.2	0.9	回転ナデ	灰白2.5Y8/2		微砂
28	〃	8.5	6.4	0.9	回転ナデ。上げ底	灰白7.5YR8/2	鈍橙5YR7/4	細～粗砂
29	〃	10.8	9.6	0.9	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	灰黄2.5Y6/2		微～細砂
30	〃	8.0	5.4	1.15	回転ナデ。底部厚い。底面回転ヘラ切り後にナデ	灰白5Y8/2		微砂若干
31	〃	7.0	3.8	1.6	回転ナデ。口唇部先細。外面一部ヘラミガキ	灰白10YR8/2	鈍黄橙10YR7/2	微～細砂、細礫
32	〃	8.0	6.0	1.1	回転ナデ	灰白5Y8/2		〃
33	〃	7.3	6.9	1.1	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	淡黄2.5Y8/3		微砂若干
34	〃	7.5	5.4	0.85	回転ナデ。底面回転ヘラ切り	〃	灰白2.5Y8/2	微～細砂多量
35	〃	8.2	5.4	1.85	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	鈍黄橙10YR7/2		微～細砂
36	〃	8.3	5.6	1.9	回転ナデ	灰白10YR8/2		細～粗砂多量
37	〃	8.4	6.7	1.8	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	灰白2.5Y8/2		〃
38	〃	7.8	4.4	1.5	〃	〃		微砂
39	〃	8.6	6.0	1.4	回転ナデ。底面回転ヘラ切り	淡黄2.5Y8/3		微～細砂
40	〃	8.0	5.6	1.5	回転ナデ	灰白10YR8/1		微砂
41	〃	9.3	5.6	1.4	回転ナデ。体部、底面未調整	灰N4/	灰N6/	微砂
42	〃	8.8	5.6	1.45	回転ナデ。底面回転糸切り後に一部ナデ	鈍橙5YR7/3	淡黄2.5Y8/3	微砂多量
43	〃	7.2	7.0	1.4	回転ナデ。底部中央肥厚。底面回転ヘラ切り後に刷毛目	灰白2.5Y8/2	〃	微～細砂
44	〃	8.0	6.8	1.3	底部中央肥厚。底面刷毛目。内面ナデ、板ナデ、刷毛目	鈍黄橙10YR7/2	鈍橙5YR6/4	微砂

第184図　SR02出土遺物(1)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
45	土師器　杯	14.4	8.8	2.45	回転ナデ	灰白10YR8/2		微砂多量
46	〃	12.0		(2.7)	〃	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/2	微砂
47	〃	14.0		(2.4)	〃	〃		〃
48	〃	13.4	7.6	3.1	回転ナデ。口縁部不整形。底面回転ヘラ切り後にナデ、煤	淡黄2.5Y8/3		微～細砂
49	〃	15.8	8.0	3.5	回転ナデ	〃		微砂
50	〃	11.6	5.8	2.4	回転ナデ。底面切り離し後に静止ヘラ削り	〃	灰白2.5Y8/2	〃
51	〃	11.8	6.5	3.0	回転ナデ。体部ヘラナデ。底面静止ヘラ削り	〃		〃
52	〃	10.4	5.0	3.4	回転ナデ。底部中央薄い。底面回転糸切り	鈍黄橙10YR7/2	褐灰7.5YR4/1	〃
53	〃		6.4	(1.0)	回転ナデ。底面回転糸切り	灰黄褐10YR5/2	鈍黄橙10YR6/3	〃
54	〃		7.4	(0.9)	〃	〃	灰白2.5Y8/2	微砂多量
55	土師質土器　杯	10.2	4.0	1.8	回転ナデ。外面指押え。内面ヘラミガキ	暗灰N3/		微砂若干
56	〃	11.4		(2.3)	回転ナデ。内面ヘラミガキ。口唇部角ばる	黒10Y2/1		〃
57	〃	10.2		(1.8)	回転ナデ。体部外面指押え、内面ナデ後にヘラミガキ	〃		微～細砂若干
58	瓦器　椀	15.8	5.6	5.0	回転ナデ。体部外面指押え後にナデ。内面ナデ後に暗文	黒褐10YR2/2		微砂
59	〃	16.4		(3.9)	外面指押え後に刷毛目、ナデ、ヘラミガキ。内面ヘラミガキ	灰白N7/	灰N6/	〃
60	〃	17.0		(3.9)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ナデ、ヘラミガキ、暗文	灰N4/		微砂若干
61	〃	17.0		(4.3)	口縁部外面ヘラミガキ。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ、暗文	〃		微～細砂
62	〃	13.8		(3.3)	外面指押え後にナデ、ヘラミガキ。内面ヘラミガキ、暗文	オリーブ黒5Y3/1	灰白10Y7/1	微～細砂若干
63	〃	14.6		(3.5)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ナデ、暗文	灰N4/		微～細砂
64	〃	14.8		(4.5)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ、ナデ	〃		〃
65	〃	16.0		(3.3)	〃	〃		〃
66	土師質土器　椀	16.0		(3.2)	回転ナデ	灰5Y4/1		細砂多量
67	〃	16.1		(2.9)	回転ナデ。体部ナデ	暗灰N3/		微砂
68	〃	15.8		(4.2)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ナデ	黒褐2.5Y3/1	灰白2.5Y8/2	〃
69	〃	16.0		(3.0)	回転ナデ	灰N4/		微～細砂
70	〃	21.2		(3.7)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ナデ	オリーブ黒10Y3/2		微砂
71	〃	15.2		(2.2)	回転ナデ。内面ヘラミガキ	黒褐10YR3/1		〃
72	〃	13.2		(3.7)	回転ナデ。外面ナデ。内面ナデ、ヘラミガキ	オリーブ黒10Y3/1		〃
73	瓦質土器　椀	13.6		(4.9)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ	灰5Y4/1		〃
74	〃	13.4		(2.4)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ていねいなヘラミガキ	灰N4/		微砂若干
75	〃	13.1		(3.2)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ	暗灰N3/	褐灰10YR4/1	微～細砂

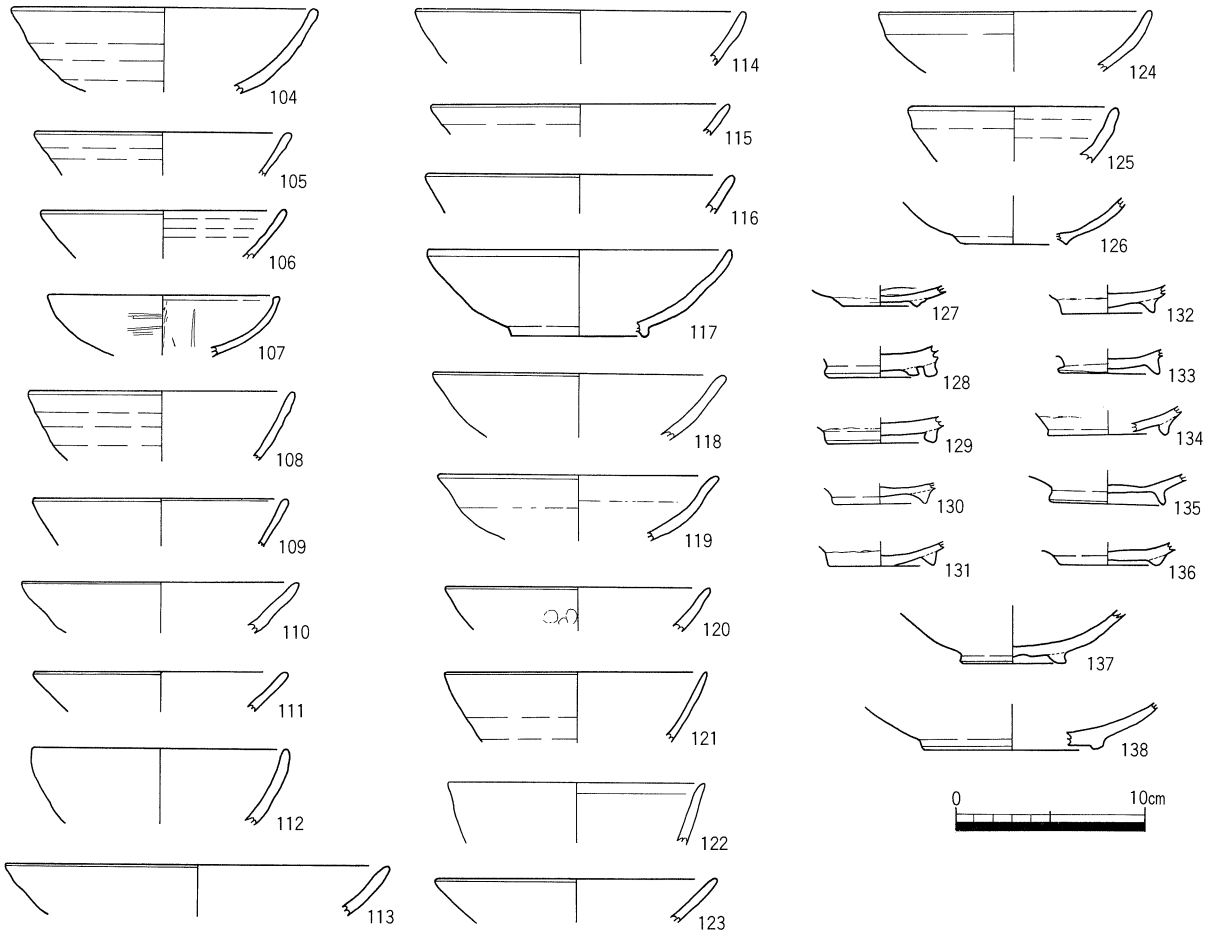
第185図　SR02出土遺物(2)（S：1/4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
76	土師質土器 椀	17.8		(3.0)	回転ナデ。外面未調整。内面ナデ	灰N4/		微砂
77	〃	13.0		(2.5)	回転ナデ。内面ナデ	灰N6/	灰N5/	〃
78	〃	13.6		(2.7)	回転ナデ	黄灰2.5Y6/1		微砂若干
79	〃	11.4		(3.1)	回転ナデ。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ	黒10YR1.7/1		微砂
80	〃	9.5		(3.5)	〃	灰白N8/	灰白7.5Y7/1	〃
81	〃		5.0	(1.6)	貼付高台後にナデ。内面ナデ後にヘラミガキ	灰N4/	灰N6/	〃
82	〃		5.6	(1.7)	貼付高台後にナデ。外面指押え後にナデ。内面ヘラミガキ	黒10Y2/1		〃
83	瓦器 椀		4.6	(0.9)	低い高台。ナデ。内面ヘラミガキ後に暗文	黒2.5GY2/1		微砂若干
84	〃		6.0	(2.0)	貼付高台後にナデ。外面指押え、ヘラミガキ。内面ナデ、暗文	灰N5/		〃
85	土師質土器 椀		5.0	(1.8)	貼付高台後にナデ。外面指押え。内面ナデ	灰7.5Y5/1		〃
86	〃		4.8	(2.0)	貼付高台後にナデ。外面指押え後にナデ。内面ナデ	オリーブ黒10Y3/1		〃
87	〃		5.6	(1.3)	高い貼付高台後にナデ。内面ヘラミガキ	黄灰2.5Y4/1		微～細砂若干
88	〃		4.8	(0.8)	貼付高台	灰白N7/		微砂若干
89	〃		5.1	(1.3)	角ばった貼付高台。	黒10YR1.7/1		微砂
90	〃		6.2	(1.7)	貼付高台。摩滅	灰5Y4/1	灰白5Y7/2	〃
91	〃		5.1	(1.3)	低い貼付高台	灰N6/	灰白N7/	〃
92	〃		7.0	(2.5)	摩滅	浅黄2.5Y7/4	鈍黄2.5Y6/2	細砂～細礫
93	〃		5.0	(2.8)	角ばった貼付高台後にナデ。外面指押え。内面ナデ	灰N5/	灰N6/	微砂若干
94	〃		6.2	(2.8)	高い貼付高台後にナデ。	灰白2.5Y8/1	黒2.5Y2/1	微～細砂
95	〃		6.8	(1.9)	高い貼付高台後にナデ。底面静止ヘラ削り。内面ナデ	明褐灰5YR7/2	黒7.5YR2/1	微砂若干
96	〃		6.1	(2.1)	太く低い貼付高台後にナデ	淡黄2.5Y8/3	暗灰N3/	粗砂～細礫
97	〃		6×5.5	(1.4)	太く低い貼付高台	灰白7.5Y8/1	灰N4/	細～粗砂
98	〃		5.6	(1.5)	太く低い貼付高台後にナデ。内面ヘラミガキ	〃	灰N5/	〃
99	〃		5.4	(1.5)	低い貼付高台後にナデ。内面ナデ	灰白5Y8/2	褐灰10YR5/1	微砂若干
100	〃		4.8	(1.4)	貼付高台後にナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ。内面ヘラミガキ	灰白N8/	灰N6/	〃
101	〃		4.8	(2.2)	高台は外側に若干拡張	灰白5Y8/1		微砂
102	〃		6.4	(1.8)	貼付高台後にナデ。内面ナデ	淡黄2.5Y8/3	黒2.5Y2/1	微～細砂
103	〃		5.2	(2.6)	高い貼付高台後にナデ。内面ヘラミガキ	灰白2.5Y8/2	〃	微砂若干

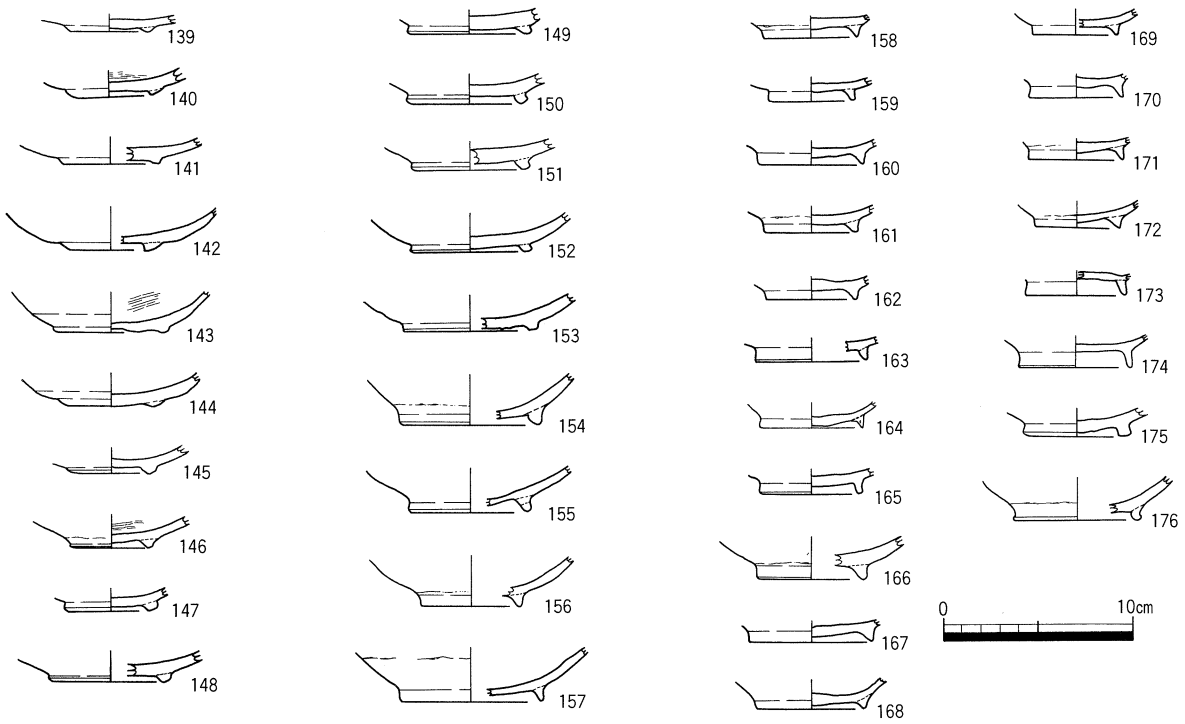
第186図　SR02出土遺物(3)（S：1/4）

緩やかな傾斜のもの（3，8～10，15，16），体部が長く薄いもの（11～14），底部が厚いもの（17），底部内面に凹凸のあるもの（18～20）の6タイプである。21～42は3タイプに分けられる。体部が短いもの（21～29，33，34，42），体部の器壁が薄いもの（30～32），体部がやや長いもの（35～41）である。21は内面に煤が付着しており灯明皿である。44は底部中央が口縁部より上に盛り上がり，内面の低い部分には刷毛目が施される。底部の調整は，回転ヘラ切り（1，3，13，34，39），回転ヘラ



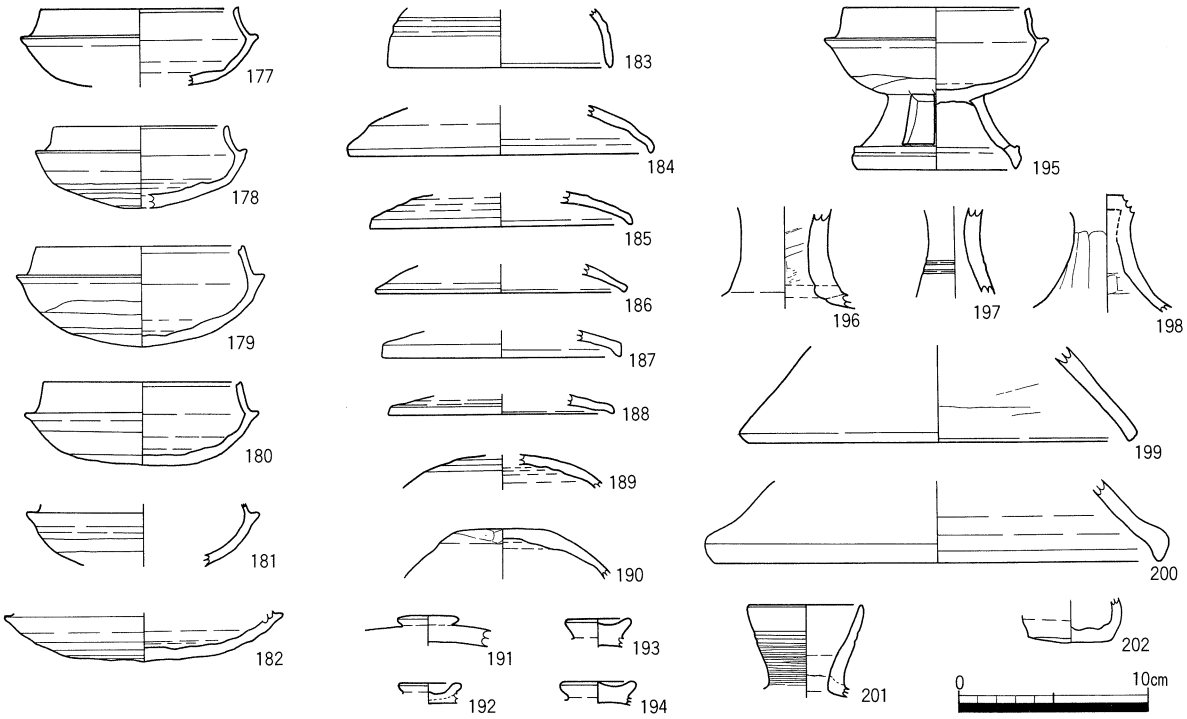
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
104	土師質土器　椀	16.2		(4.5)	回転ナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。重ね焼き痕	灰白7.5Y7/1		微砂若干
105	〃	13.4		(2.3)	回転ナデ。重ね焼き痕	灰白7.5Y8/1		微砂
106	〃	13.0		(3.6)	〃	灰白10Y8/1		微砂若干
107	瓦質土器　椀	12.4		(3.2)	回転ナデ。外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ、暗文	灰白7.5Y8/2	灰白10Y8/1	微～細砂
108	土師質土器　椀	14.2		(3.7)	回転ナデ	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y7/1	微～細砂多量
109	〃	13.4		(2.5)	〃	〃		微砂
110	〃	14.8		(2.7)	〃	灰白2.5Y8/2		〃
111	〃	17.4		(2.1)	〃	灰白2.5Y8/1		微砂若干
112	〃	13.6		(4.0)	回転ナデ。若干内弯	灰白7.5Y8/1		微～細砂
113	〃	20.4		(2.8)	回転ナデ。黒斑	灰白N7/	灰白N8/	〃
114	〃	17.6		(2.9)	回転ナデ。口縁部内外面に重ね焼き痕	灰白7.5Y8/1		微～細砂若干
115	〃	15.8		(1.7)	〃	灰白10Y7/1		微砂少量
116	〃	16.4		(2.1)	〃	灰白7.5Y8/1		微砂若干
117	〃	16.2	7.2	4.5	回転ナデ。角ばった高台	浅黄7.5Y7/3		微砂
118	〃	15.4		(3.4)	回転ナデ	灰白2.5Y8/2		〃
119	〃	15.0		(3.5)	外面に稜。口縁部やや外反。回転ナデ。体部ナデ	灰白2.5Y8/1		微～細砂
120	〃	14.0		(2.4)	外面にわずかな稜。回転ナデ。体部外面指押え後にナデ	黒7.5Y2/1		微砂少量
121	〃	14.0		(3.7)	回転ナデ	淡橙5YR8/3	灰白7.5YR8/1	微砂
122	〃	13.6		(3.2)	口縁部若干外反。回転ナデ	灰N6/		微砂多量
123	〃	14.8		(2.3)	回転ナデ	灰白10YR8/1	灰白10YR7/1	微砂
124	〃	14.6		(3.2)	回転ナデ。口縁部外面に重ね焼き痕	灰白7.5Y8/1	浅黄5Y8/3	微砂若干
125	〃	11.0		(2.9)	回転ナデ	淡黄2.5Y8/4	淡黄2.5Y8/3	細～粗砂
126	〃		6.0	(2.6)	断面三角形の高台後にナデ。外面指押え。内面ナデ	灰N4/	灰白N8/	微砂若干
127	〃		4.0	(1.1)	断面三角形の貼付高台。内面ヘラミガキ	灰白7.5Y8/1	灰N6/	〃
128	〃		5.5	(1.6)	２重の貼付高台。内面ヘラミガキ	淡黄2.5Y8/3	黒2.5Y2/1	微砂
129	〃		5.6	(1.4)	貼付高台	鈍黄褐10YR4/3	灰白5Y8/1	微砂多量
130	〃		4.8	(1.0)	断面三角形の貼付高台後にナデ。内面ナデ	淡黄2.5Y8/3		細～粗砂
131	〃		5.6	(1.3)	貼付高台	浅黄橙10YR8/3		微砂若干
132	〃		5.0	(1.4)	貼付高台後にナデ。底面ヘラ切り後に刷毛目。内面ナデ	灰白2.5Y8/2		細～粗砂多量
133	〃		5×5.4	(1.4)	高台不整形。高台ナデ。内面ヘラナデ	鈍黄橙10YR7/3		微砂多量
134	〃		6.4	(1.4)	貼付高台	灰白7.5Y8/1		細～粗砂多量
135	〃		6.2	(1.7)	高い貼付高台。底面回転ヘラ切り後にナデ。内面ヘラミガキ、ナデ	淡黄5Y8/3		微砂
136	〃		5.2	(1.2)	低い貼付高台。	淡赤橙2.5YR7/3	灰赤2.5YR5/2	微砂若干
137	〃		5.4	(2.9)	太い貼付高台後にナデ。外面指押え後にナデ。内面ナデ	淡黄2.5Y8/3	灰白2.5Y8/2	細砂
138	〃		9.6	(2.4)	低い高台。摩滅	淡赤橙2.5YR7/4		微砂

第187図　SR02出土遺物(4)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
139	土師質土器 椀		4.2	(0.9)	低い貼付高台後にナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ。内面刷毛目	灰白2.5Y8/1		微～細砂
140	〃		3.9	(1.4)	低い貼付高台後にナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	灰白7.5Y8/1	灰オリーブ5Y7/2	微砂若干
141	〃		5.3	(1.4)	低い貼付高台	灰白10YR8/2	灰白7.5Y8/1	微～細砂
142	〃		4.4	(2.3)	〃	灰白N8/	〃	〃
143	〃		6.0	(2.2)	低い貼付高台。底面回転ヘラ切り。内面ヘラミガキ	灰白2.5Y8/1	褐灰10YR6/1	微砂若干
144	〃		4.6	(1.8)	低い貼付高台。内面ナデ	〃	灰白2.5Y8/2	〃
145	〃		3.8	(1.9)	高台部ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	灰白N8/		〃
146	〃		4.4	(1.7)	貼付高台後ナデ。内面ヘラミガキ	灰白7.5Y8/1		〃
147	〃		5.0	(1.2)	断面長方形の貼付高台後にナデ。内面ヘラナデ、ヘラミガキ	灰白N8/	灰白2.5GY8/1	〃
148	〃		5.6	(1.6)	貼付高台後にナデ	灰白2.5GY8/1	灰白N8/	細～粗砂
149	〃		6.6	(1.3)	貼付高台	灰白7.5Y8/1	灰白5Y8/2	細砂
150	〃		6.4	(1.6)	貼付高台後にナデ。内面ナデ	灰5Y6/1	灰白10Y8/1	微砂多量
151	〃		6.4	(1.6)	貼付高台後にナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ。内面ナデ	灰白2.5Y8/1	黄灰2.5Y6/2	〃
152	〃		6.6	(2.0)	貼付高台後にナデ。底面回転ヘラ切り後に静止ヘラナデ	灰白10Y8/1		微砂若干
153	〃		7.2	(1.9)	角ばった高台	灰白N8/	灰白N7/	〃
154	〃		7.0	(2.7)	貼付高台後にナデ。	灰白2.5Y8/2		細～粗砂
155	〃		6.2	(2.4)	貼付高台後にナデ。内面ナデ、ヘラミガキ	橙2.5YR7/6		細～粗砂多量
156	〃		5.4	(2.7)	貼付高台	灰白2.5Y8/2		微砂
157	〃		7.6	(2.8)	細長い貼付高台。内面ナデ	灰白7.5Y8/1		微～細砂
158	〃		5.0	(1.2)	断面三角形の貼付高台	灰白2.5Y8/2	淡黄2.5Y8/3	〃
159	〃		4.6	(1.2)	貼付高台。内面ナデ	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y8/1	微砂
160	〃		5.6	(1.3)	高台部ナデ。底面ナデ。内面ナデ、ヘラミガキ	灰白2.5Y8/2		微砂若干
161	〃		5.0	(1.4)	貼付高台	灰白7.5Y8/1		〃
162	〃		4.8	(1.1)	貼付高台。底部中央が若干厚くなる	灰白10YR8/2		細～粗砂
163	〃		6.0	(1.2)	やや外反する貼付高台	灰白7.5Y8/1		微砂若干
164	〃		5.4	(1.4)	細い貼付高台。底面ナデ	灰白5Y8/2		微砂
165	〃		5.4	(1.3)	貼付高台後にナデ。内面ヘラミガキ	灰白2.5Y8/1		細～粗砂
166	〃		5.8	(2.3)	貼付高台	淡黄2.5Y8/3	灰白2.5Y8/2	〃
167	〃		6.6	(1.1)	断面三角形の高台	黒褐10YR3/2	灰白7.5Y8/1	〃
168	〃		5.8	(1.6)	断面三角形の貼付高台。底部中央が厚くなる	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/2	微砂
169	〃		4.6	(1.4)	貼付高台後にナデ	灰白2.5Y8/2	青黒5B2/1	微～細砂
170	〃		5.0	(1.2)	細い高台部ナデ	鈍黄橙10YR7/3		〃
171	〃		5.0	(1.1)	断面二等辺三角形の貼付高台	〃	浅黄橙10YR8/3	〃
172	〃		4.4	(1.4)	断面三角形の貼付高台後にナデ。内面ナデ、刷毛目	灰白2.5Y8/2		微砂若干
173	〃		5.4	(1.2)	細長い貼付高台	〃		細～粗砂
174	〃		6.0	(1.7)	細長い高台。内面ナデ	灰白7.5Y8/1		微砂若干
175	〃		5.8	(1.5)	断面四角形の高台。内面ナデ	灰白2.5Y8/2		微～細砂
176	〃		6.8	(2.3)	貼付高台。端部が外側に拡張	灰白7.5Y8/1		細～粗砂

第188図　SR02出土遺物(5)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
177	須恵器　杯身	10.5		(4.1)	回転ナデ。口辺部が内傾	暗灰N3/	灰5Y4/1	細砂多量
178	〃	9.2		4.3	回転ナデ。体部下半回転ヘラ削り。口辺部内傾	灰N5/		微砂
179	〃	11.0		5.3	回転ナデ。体部下半回転ヘラ削り。口辺部内傾。端部稜	灰N4/	褐灰10YR5/1	微砂若干
180	〃	10.6		4.4	〃	灰白N7/		〃
181	〃			(3.3)	回転ナデ。体部下半回転ヘラ削り	灰N6/		微砂多量
182	〃			(2.5)	〃	灰白N7/	灰N6/	微砂
183	須恵器　杯蓋	12.0		(3.0)	回転ナデ。口縁内面に若干の稜	灰N6/		微砂若干
184	〃	16.2		(2.6)	回転ナデ。外面上半回転ヘラ削り後にナデ	灰白N7/		微砂
185	〃	14.0		(1.8)	回転ナデ。口縁部直立	〃		微砂少量
186	〃	13.4		(1.5)	回転ナデ	灰白7.5Y7/1		〃
187	〃	12.8		(1.4)	回転ナデ。口縁部直立	明紫灰5RP7/1		微砂若干
188	〃	12.0		(1.0)	回転ナデ。口縁部わずかに直立	灰白N7/		〃
189	〃			(1.9)	回転ナデ。外面上半回転ヘラ削り	灰N6/		微砂
190	〃			(2.7)	〃	灰白N8/		〃
191	〃			(1.6)	宝珠径3.3cm	灰白N7/		微～細砂
192	〃			(1.1)	宝珠径3.4cm	灰N6/	灰白N7/	微砂若干
193	〃			(1.6)	宝珠径3.5cm	明青灰5PB7/1		微砂
194	〃			(1.2)	宝珠径4.0cm	灰白N7/		〃
195	須恵器　高杯	10.0	8.4	8.5	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。脚部四角形透し３個	〃		〃
196	〃			(4.9)	回転ナデ。内面ヘラ削り。外面に灰オリーブ色釉	オリーブ灰2.5GY6/1	灰白N8/	微砂若干
197	〃			(4.6)	回転ナデ。外面沈線２条	灰N6/		微～細砂多量
198	〃			(6.1)	脚部外面ヘラ削り後にナデ。内面ヘラ削り、未調整	灰白2.5Y8/1		微砂若干
199	〃		20.2	(5.0)	回転ナデ。内面ヘラ削り。脚端部外面黒斑	灰白10Y8/1		微砂少量
200	〃		23.6	(4.3)	回転ナデ。脚端部外面黒斑	灰白N7/		微砂多量
201	須恵器　平瓶	6.0		(4.9)	回転ナデ。沈線２条。内外面に部分的な自然釉	暗緑灰5GY4/1	灰白N7/	微砂少量
202	須恵器　壺		4.5	(2.3)	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ	明紫灰5P7/1		微～細砂

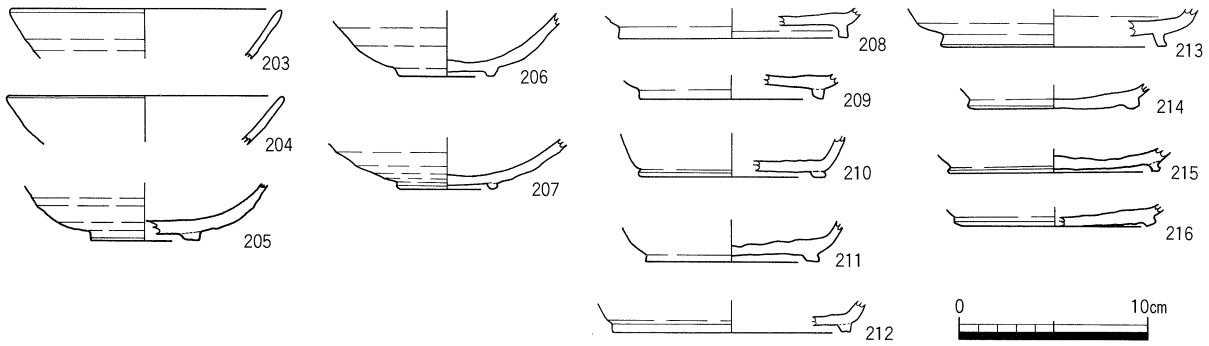
第189図　SR02出土遺物(6)（S：1/4）

切り後にナデ（4，10，14，16，17，29，30，33，35，37），回転糸切り（21），静止ヘラケズリ（23），回転ヘラケズリ（26），回転糸切り後にナデ（42），回転ヘラ切り後に刷毛目（43）である。

土師器杯は口径と底径の比が小さく，低い器高（45～50）であり，47を除き内湾する体部である。51は口縁部が若干外反し，器高がやや高い。52～54の底部は回転糸切りである。

55～57の土師質土器杯は非常に器高が低く，外面の調整は指押さえ，内面はヘラミガキである。

瓦器椀は和泉型Ⅲ期であり，高台は先端の尖った断面三角形を呈す（58，84）。体部外面の調整は指押さえの後にヘラミガキが部分的に施され，内面は隙間の開いたヘラミガキを施す。見込みのヘラ



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
203	須恵質土器　椀	14.4		(2.7)	回転ナデ。口縁部内外面に重ね焼き痕	灰白N8/	灰白2.5GY8/1	微砂若干
204	〃	14.6		(2.4)	〃	〃	灰N5/	〃
205	〃		5.6	(3.0)	回転ナデ。貼付高台後にナデ	灰白N7/	灰白7.5Y7/1	〃
206	〃		5.4	(2.7)	回転ナデ。貼付高台後にナデ。底面回転ヘラ切り	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y8/1	〃
207	〃		5.0	(3.4)	回転ナデ。高台部ナデ	灰白N8/	灰白7.5Y8/1	微～細砂
208	須恵器　壺		12.2	(1.6)	回転ナデ。高台部ナデ。底面回転ヘラ切り後ナデ。外面釉	〃		微砂多量
209	〃		9.6	(1.3)	回転ナデ。貼付高台	灰N5/		微砂若干
210	〃		9.9	(2.2)	〃	浅黄2.5Y7/3	灰白N8/	細～粗砂多量
211	〃		9.2	(2.2)	回転ナデ。シャープな高台。底面切り離し後にヘラナデ	灰白N7/	灰白N8/	微砂若干
212	〃		12.6	(1.7)	回転ナデ。貼付高台	〃	灰白7.5Y8/1	〃
213	〃		12.0	(2.0)	回転ナデ。	暗緑灰10GY3/1	灰白N7/	微砂多量
214	〃		9.2	(1.3)	〃	灰白N7/		微砂若干
215	〃		9.2	(1.2)	貼付高台後にナデ。底面回転ヘラ切り後にナデ。内面静止指ナデ	灰白N8/		〃
216	〃		10.7	(1.0)	回転ナデ。外面にオリーブ灰色の自然釉	灰白N7/	灰白N8/	〃

第190図　SR02出土遺物(7)（S：1／4）

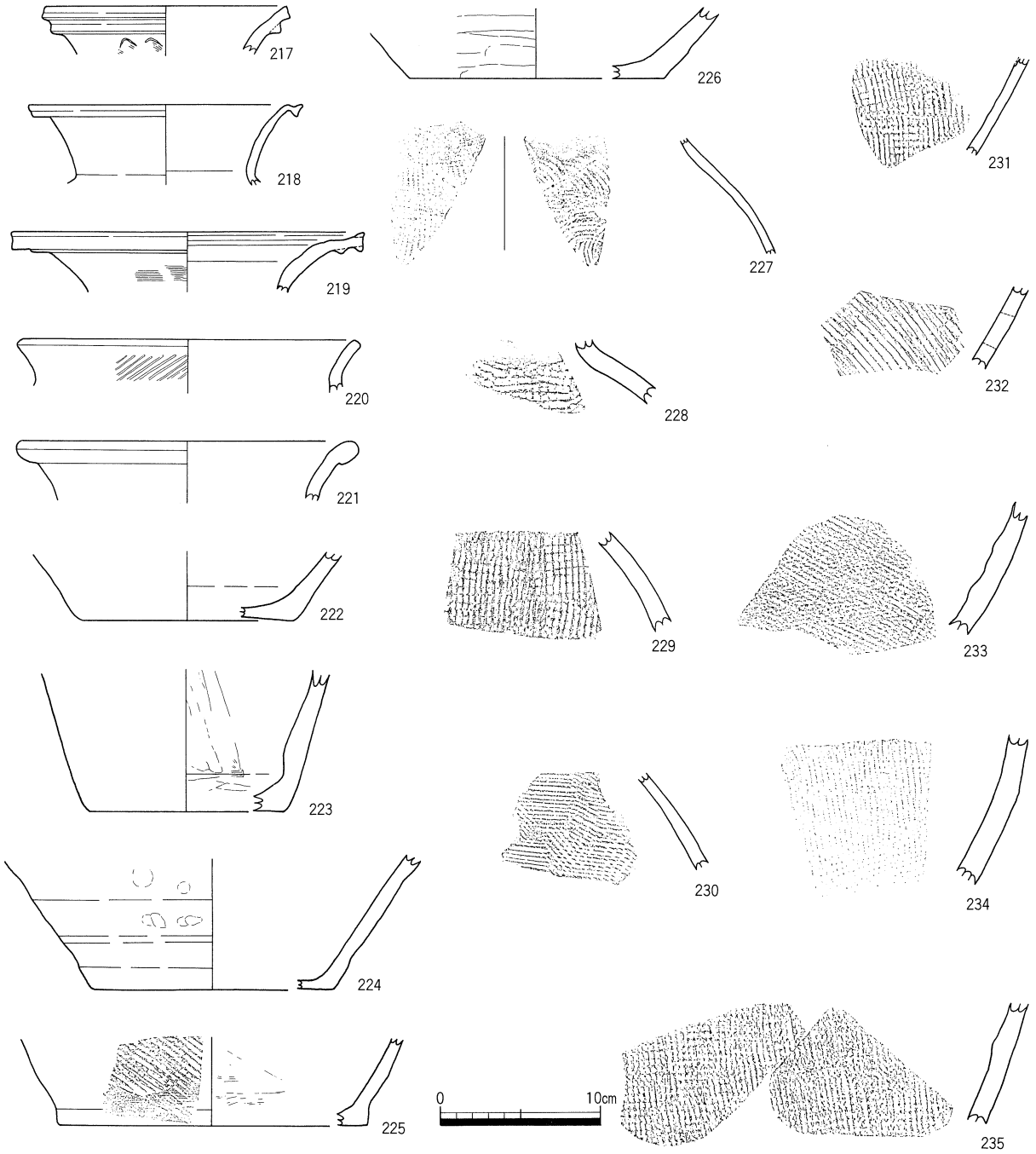
ミガキは暗文化しており，58，60，61，83，84は平行線状の暗文が見られる。

73～75は外反気味の口縁部，107は内湾し端部がやや拡張する。体部外面は指押さえの後にナデ，内面はヘラミガキが施される。

多量の土師質土器椀は色調の違いにより3タイプに分けられる。Aタイプは内外面とも黒色のもの（66～72，76～82，85～93），Bタイプは内面のみ黒色のもの（94～103），Cタイプは黒色でないものである。Aタイプは，口縁部が若干外反するもの（66～72，76）と内湾するもの（77～80）がある。高台の断面形は，高いもの（87），三角形（81，82，90，92），逆台形（85，86，88，89，91，93）がある。外反する口縁部の椀の外面は指押さえの後にナデ，内面はナデが施される。79，80～82，87では内面にヘラミガキが若干見られる。Bタイプは，全て底部であり，高い高台（94，95，103），逆台形（96，97），丸みを帯びる（98～102）がある。Cタイプは，若干口縁部が外反する（118～120，122，124，125）を除き，内湾する体部から口縁部に至る形態をなす。104～106，114～116，124の口縁部には重ね焼き痕が見られる。高台の断面形は，最も多数を占める三角形をはじめ，非常に低い半円形（139～144）と逆台形がある。128は二重高台である。底部の調整には，回転ヘラ切り後にナデが施されるもの（135，139，140，143，145，151），回転ヘラ切り後に刷毛目を施すもの（132），回転ヘラ切り後に静止ヘラナデを施すもの（152）がある。体部の調整はナデがほとんどであり，一部に刷毛目やヘラミガキもある。

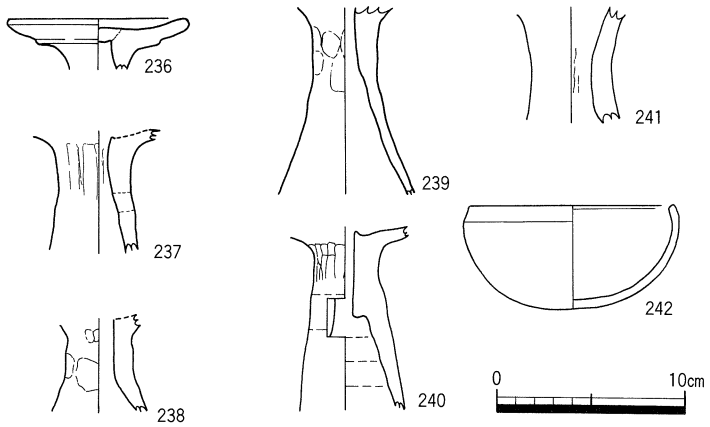
須恵器杯身は，口径9.2～11cmで器高4.3～5.3cmを測る。平坦な体部とやや丸い体部があり，受部はやや斜め上方に付けられ，口縁部は内傾する。178の口唇部は丸く収まるが，177，179，180は段を持ち斜め方向に切られている。体部下半は回転ヘラケズリ，その他はナデが施される。

須恵器杯蓋は，器高が高くほぼ垂直する口縁部との境にわずかな稜を持つもの（183），器高が低く口縁部がわずかに直立するもの（184～188）がある。天井部の残存するものが少ないが，外面に回転



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
217	須恵器　壺	15.2		(3.0)	回転ナデ。波状文（？）。内外面に灰オリーブ色の自然釉	灰10Y6/1		微砂
218	〃	17.0		(5.0)	回転ナデ。口唇部拡張。内外面に灰オリーブ色の自然釉	灰N6/	オリーブ灰2.5GY5/1	〃
219	〃	22.0		(3.7)	回転ナデ。頸部外面ナデ。口唇部拡張	灰N5/	灰N7/	微砂若干
220	須恵器　甕	21.0		(3.3)	回転ナデ。外面にヘラ描き斜行文	灰白N7/		〃
221	〃	21.0		(3.7)	回転ナデ。口唇部玉縁状	灰白5Y7/1	灰白N8/	〃
222	〃		13.4	(4.2)	上げ底。回転ナデ。底面ナデ	灰N5/		微砂
223	〃		11.8	(8.8)	平底。外面摩滅。内面ヘラ削り	〃	灰N6/	微砂若干
224	〃		14.8	(8.4)	回転ナデ。底部内面指ナデ	暗灰N3/	灰N4/	〃
225	〃		18.8	(5.4)	外面斜行タタキ目、ナデ。内面ナデ。底面未調整	灰白7.5Y7/1	灰白N8/	〃
226	〃		16.0	(4.4)	平底。外面ヘラ削り	灰白5Y7/1	灰白10Y8/1	〃
227	〃				外面格子状タタキ目。内面青海波状タタキ目	灰白10Y8/1		〃
228	〃				外面平行タタキ目。内面ヘラナデ	明青灰5PB7/1		微～細砂
229	〃				外面格子状タタキ目。内面指頭圧痕後にヘラ削り、ナデ	灰白2.5GY8/1		微～細砂若干
230	〃				外面平行タタキ目。内面ナデ	灰N6/	灰白2.5GY8/1	微砂多量
231	〃				外面タタキ目。内面ヘラナデ	灰白7.5Y8/1	灰白7.5Y8/2	微～細砂若干
232	〃				外面タタキ目。内面ナデ	青灰5PB6/1	明青灰5PB7/1	微砂若干
233	〃				外面格子状タタキ目	灰白N7/		微～細砂若干
234	〃				外面タタキ目。内面ヘラナデ	青灰5PB6/1		〃
235	〃				外面格子状タタキ目	明紫灰5RP7/1		微～細砂

第191図　SR02出土遺物(8)（S：1/4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
236	土師器　高杯	9.4		(2.7)	摩滅。外面に稜	淡赤橙2.5Y7/4	鈍橙5YR7/4	粗砂、細礫
237	〃			(6.5)	外面ヘラ削り。内面しぼり目	灰白2.5Y8/2		微砂若干
238	土師質土器　高杯			(5.0)	外面指頭圧痕後にナデ。内面ヘラナデ	〃	浅黄橙10YR8/4	〃
239	土師器　高杯			(9.9)	外面上半指頭圧痕後にナデ。下半ナデ、刷毛目。内面ヘラ削り	浅黄橙10YR8/3		微砂
240	〃			(9.7)	外面ヘラ削り	灰白2.5Y8/2		〃
241	〃			(6.2)	外面摩滅。内面しぼり目、ナデ	〃		微砂若干
242	土師器　椀	10.9		5.5	半球形の体部。回転ナデ。外面ヘラ削り後にナデ。内面ナデ	灰黄2.5Y7/2	鈍黄橙10YR7/2	粗砂、細礫少量

第192図　SR02出土遺物(9)（S：1/4）

ヘラケズリが施され，他の部分はナデ調整である。191～194は宝珠のみである。

195は唯一完形の高杯であり，器高8.5cmを測る小形である。口縁部は内傾し，受部はほぼ水平方向に付く。脚部は短く，裾部が拡張し，台形の透かしを3個有する。体部下半は回転ヘラケズリが施される。197は外面に2条の沈線が巡る。199，200は大形の高杯で，裾部に黒斑が見られる。

201は平瓶の口辺部で，外面に2条の沈線が巡り，外面にカキ目調整が施される。内外面には部分的に自然釉がかかっている。

須恵質土器椀（203～207）は口縁部に重ね焼き痕があり，高台を貼り付けた後にナデが施される。

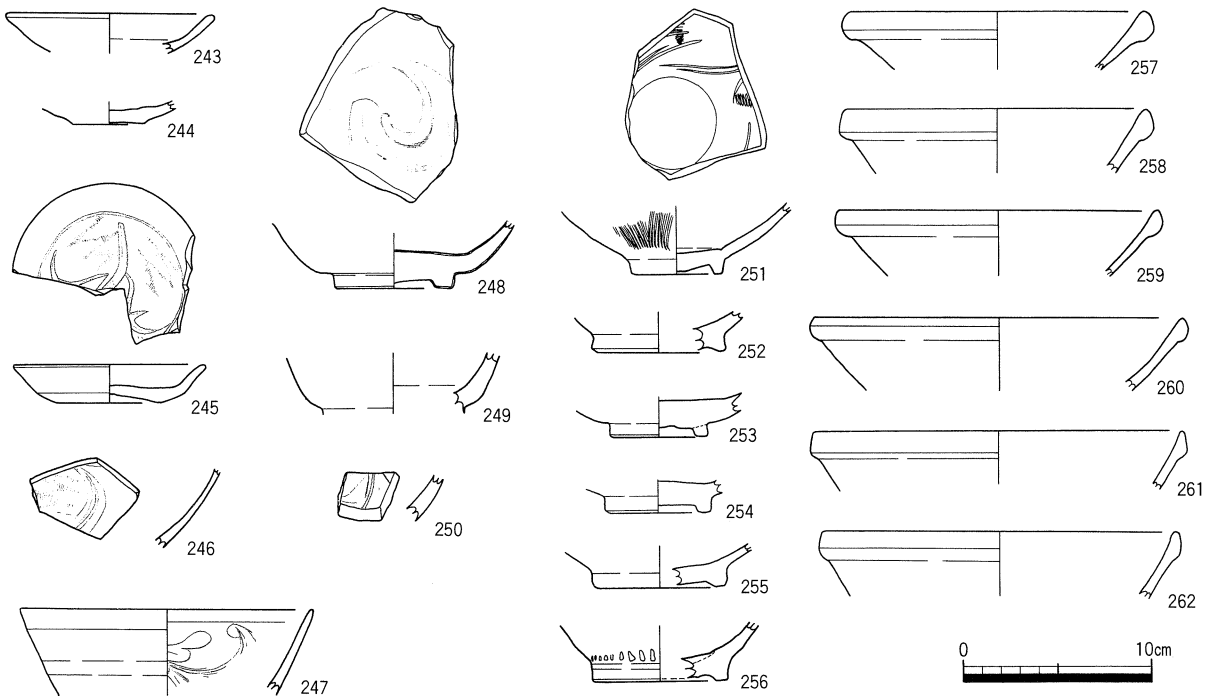
須恵器壺（217～219）は大きく外反する口縁部で，217は外面に突帯が付き櫛描波状文の一部を残存する。217，218は内外面に自然釉がかかる。219の外面には突帯が付き，口縁端部は拡張する。202は底部を平たく切った壺である。208～216はシャープな高台を持つ。

220，221は甕の口縁部で，221は玉縁状の口縁部である。223～226は平底，227～234は胴部破片であり，外面には格子状・平行タタキ目，内面には青海波状タタキ目・ナデが施される。

236～241は土師器・土師質土器の高杯である。236は非常に浅い皿状の杯部である。237，240の外面はヘラケズリ，238，239は指頭圧痕・ナデ・刷毛目が施される。242は半球形の体部の椀である。

243，244は灰釉を全面施釉し，244の底部は回転ヘラ切りの後に回転ヘラケズリ・ナデが施される。245，246は同安窯系の皿で，見込みに櫛描きの「之」字状と片切彫りを配する。247～250は龍泉窯系の碗で，内面および見込みに片切彫りで花文（247，250）・雲文（248）を描く。251は同安窯系の碗で，内外面に櫛描文が施される。252～254は陶器の底部で，253の高台に砂目が残る。255の底部はカキ目調整が見られる。257～262は青磁・白磁の碗で，玉縁状口縁を呈し，全面施釉されている。

263～271は土師質土器土鍋である。263，267は胴部から緩やかに口縁部が外反し，267の外面はヘラナデ・ヘラミガキ，内面にナデ・刷毛目が施され，内面に焦げが付着する。264は口唇部が短く直立する。265，266，268～271は胴部から「く」字状に口縁部が外反する。口唇部は丸く収まるもの（267，271），平坦なもの（265，269），2方向から面取りされたようなもの（266，270）の3タイプ



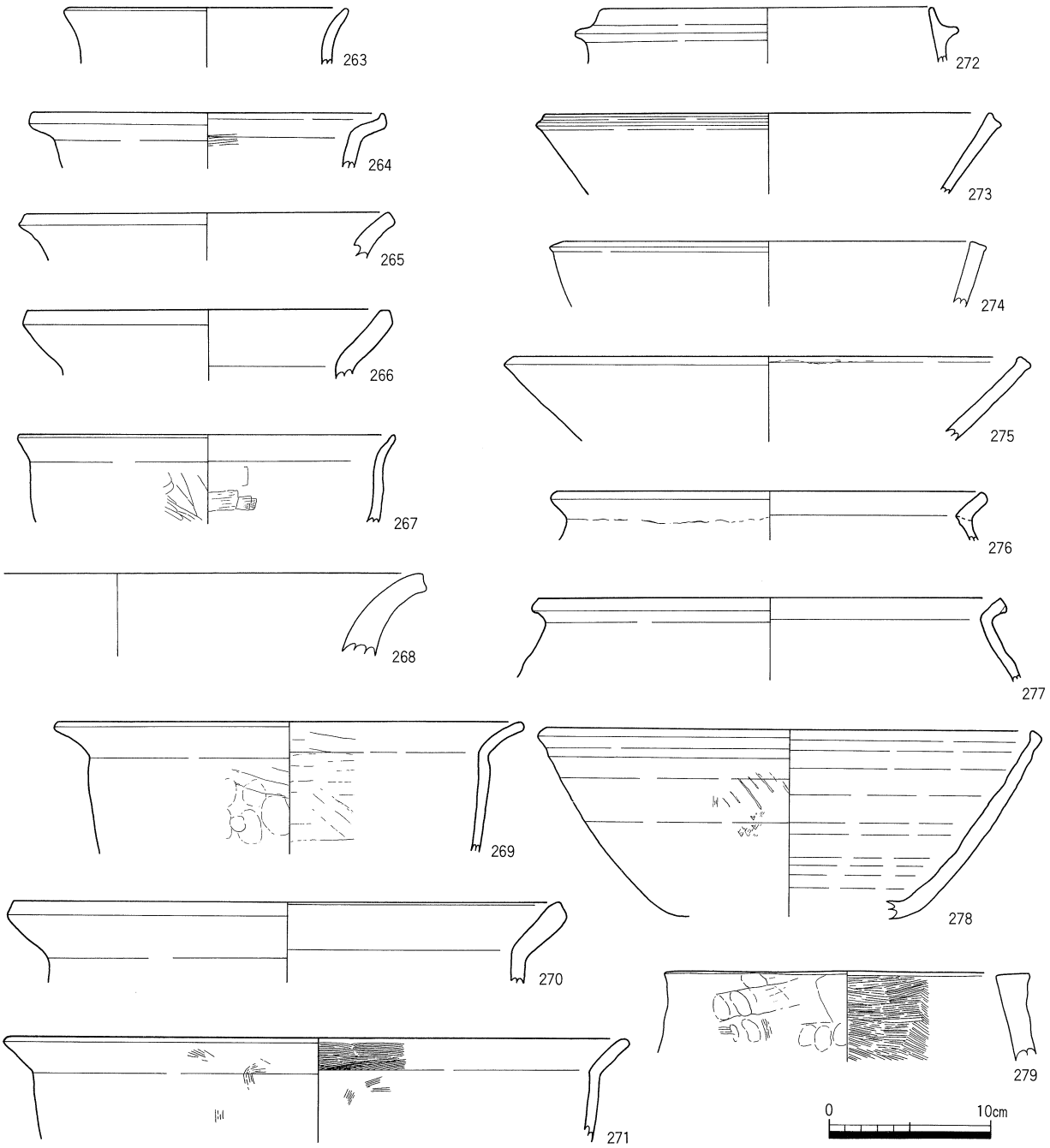
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
243	灰釉　皿	11.0		(2.1)	回転ナデ。内外面施釉	（地）	灰白5Y7/2	微砂若干
244	〃	3.8		(1.2)	底面回転ヘラ切り後に回転ヘラ削り、ナデ。内外面明オリーブ灰釉	（地）	灰白7.5Y8/1	〃
245	青磁　皿	10.2	5.6	(2.0)	同安窯系。底面回転ヘラ切り後に中央ヘラミガキ、周辺ナデ、ヘラミガキ	明緑灰10G7/1		〃
246	〃				同安窯系。内外面灰オリーブ色の釉	（地）	灰白7.5Y7/1	〃
247	青磁　碗	15.6		(4.6)	内面に片切彫りで花文を描く。明紫灰色の釉。龍泉窯系	10GY7/1　（地）	灰N8/	〃
248	〃		6.2	(2.5)	内面に雲文。釉灰オリーブ。龍泉窯系	5Y6/2	〃	〃
249	〃			(3.3)	内外面にオリーブ灰色の釉	10Y6/2	〃	〃
250	〃				内面に花文。内外面に明緑灰色の釉。龍泉窯系	7.5GY7/1	〃	〃
251	〃		5.0	(3.7)	内外面に櫛描文。内面、体部外面に明緑灰釉。同安窯系	10GY8/1	〃	〃
252	磁器　碗		7.2	(2.1)	内面に灰白色の釉2.5Y8/2	（地）	灰白2.5Y8/2	〃
253	〃		5.2	(2.3)	貼付高台に砂目。内面、体部外面に灰オリーブの釉7.5Y5/2	（地）	明オリーブ灰2.5GY7/1	〃
254	〃		5.6	(1.8)	内面、高台以高にオリーブ灰の釉10Y6/2	（地）	緑灰10YG5/1	〃
255	白磁　碗		7.0	(2.3)	底面カキ目調整。内面灰白色釉7.5Y8/1	（地）	灰白10Y8/1	〃
256	磁器　〃		7.0	(3.0)	内面釉	（地）	灰白2.5Y8/2	〃
257	白磁　碗	15.6		(3.1)	玉縁口縁。内外面灰白色の釉7.5Y7/1	（地）	灰白N8/	〃
258	青磁　碗	16.4		(3.4)	玉縁口縁。内外面明オリーブ灰色の釉2.5GY7/1	（地）	〃	〃
259	〃	17.2		(3.5)	〃	（地）	〃	〃
260	白磁　碗	19.6		(3.9)	玉縁口縁。内外面灰白色の釉7.5Y7/1	（地）	〃	〃
261	〃	19.8		(3.1)	玉縁口縁。内外面灰白色の釉10Y8/1	（地）	〃	〃
262	〃	19.0		(3.4)	玉縁口縁。内外面明オリーブ灰色の釉2.5GY7/1	（地）	〃	〃

第193図　SR02出土遺物(10)（S：1/4）

がある。272は土師質土器羽釜でやや内傾する。273～275はこね鉢で，胴部から直線的に広がり口唇部がやや拡張する。276，277は「く」字口縁の甕である。279は口縁部が内傾し，口唇部が拡張する。278はほぼ直線的な体部を呈する須恵器のこね鉢で，内外面にロクロ成形痕が明瞭にあり，外面に斜め方向のヘラ描き線がある。

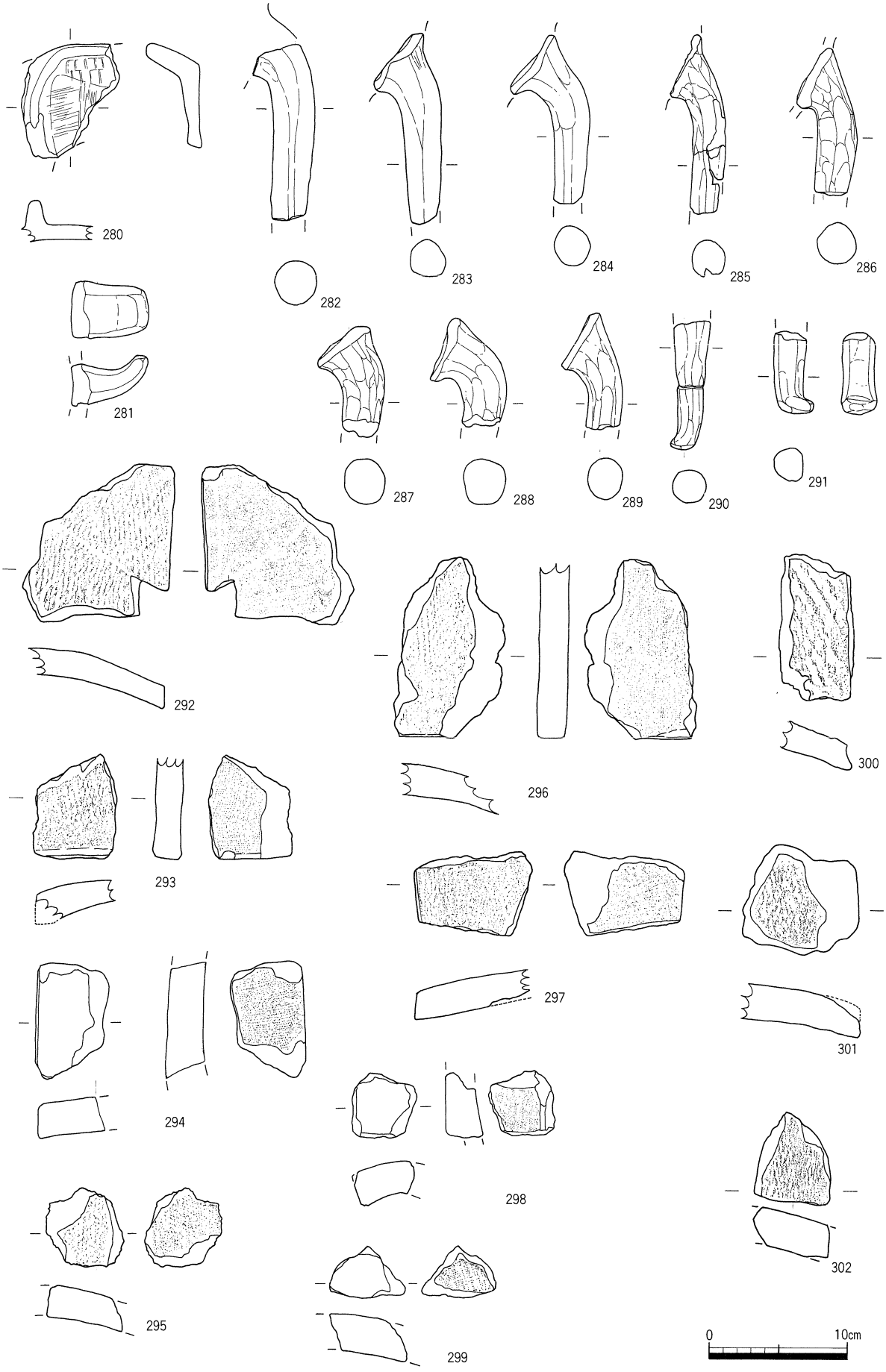
280は土師質土器カマドの炊き口部の破片で，外面に鰭状の突帯が付く。内外面に刷毛目・ヘラケズリが施される。282～290は土鍋の脚で，主軸に沿ってヘラケズリが施され，煤が付着するものもある。285は土鍋の胴部との接合部分に格子状突起が見られる。

292～302の平瓦は，外面に縄目のタタキ痕があり，樋の当たる内面は布目で，一部にナデ・ヘラケズリを行っているものもある。小口はヘラケズリである。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
263	土師質土器　土鍋	17.6		(3.8)	口縁部ヨコナデ	灰白10YR8/2	灰白2.5YR8/2	微～細砂
264	〃	21.6		(3.4)	口唇部直立。口縁部ヨコナデ。体部内面刷毛目、ナデ	灰黄褐10YR5/2		細砂多量
265	〃	22.6		(2.9)		灰白N7/		微～細砂多量
266	〃	22.6		(4.4)	口縁部ヨコナデ、ナデ	褐灰10YR4/1	褐灰10YR5/1	細～粗砂多量
267	〃	23.2		(5.5)	体部外面ヘラナデ、ヘラミガキ。内面ナデ、刷毛目、焦付着	鈍褐5YR6/3	黒褐10YR3/1	粗砂
268	〃	28.8		(8.1)	口縁部ヨコナデ。体部外面指頭圧痕後にナデ。内面ナデ	灰褐7.5YR4/2	鈍褐7.5YR6/2	〃
269	〃	38.0		(5.1)	口縁部ヨコナデ。内面ナデ	明青灰5PB7/1		微～粗砂若干
270	〃	34.0		(5.0)	口縁部ヨコナデ。体部ナデ	黄灰2.5Y5/1		粗砂多量
271	〃	39.1		(6.4)	外面刷毛目、ナデ。口縁部内面刷毛目。体部内面に焦付着	黄灰2.5Y6/1	黒2.5Y2/1	微砂
272	土師質土器　羽釜	20.8		(3.4)		橙2.5YR7/6		粗砂多量
273	土師質土器　こね鉢	27.4		(5.0)	口縁端部に擬凹線。口縁部ヨコナデ。体部ナデ	灰5Y4/1		微砂若干
274	〃	27.2		(4.0)	口縁端部は外側に若干拡張。内面ヘラナデ	黒7.5Y2/1	灰白10Y8/1	微～細砂
275	〃	31.4		(5.2)	口縁部ヨコナデ。体部ナデ	〃		微～細砂多量
276	土師質土器　甕	26.6		(3.0)	く字口縁。口縁部ヨコナデ。胴部内面ナデ。輪積み	淡黄2.5Y8/3		〃
277	〃	28.8		(5.1)	く字口縁。口縁部ヨコナデ。胴部ナデ	鈍橙5YR7/3	褐灰7.5YR5/1	細～粗砂多量
278	須恵器　こね鉢	30.2	14.0	11.6	回転ナデ。底面ヘラ削り。外面にヘラ描き沈線	灰白N7/		微砂若干
279	土師質土器　甕	22.6		(5.5)	口縁部内傾。外面指頭圧痕後にナデ、刷毛目。内面刷毛目	橙7.5Y6/6		微砂多量

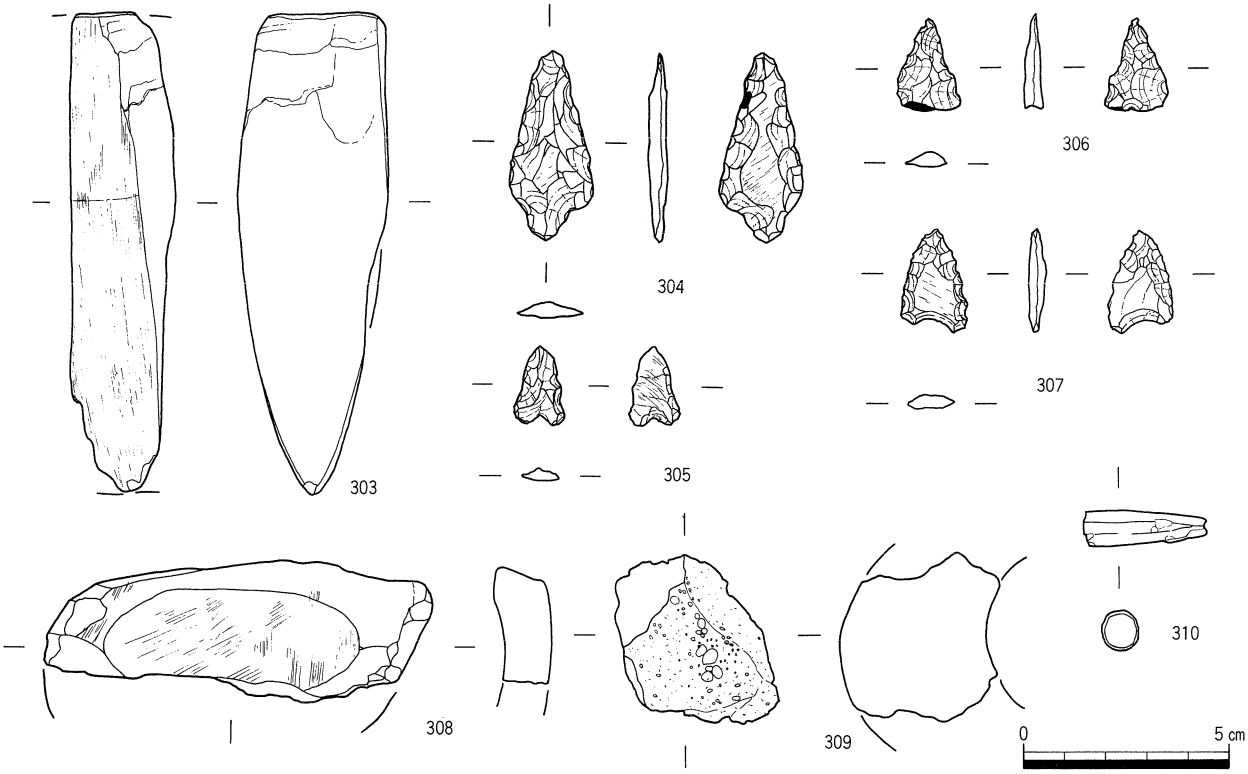
第194図　SR02出土遺物(11)（S：1／4）



第195図　SR02出土遺物(12)（S：1／4）

（第195図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
280	土師質土器　カマド				刷毛目。ヘラ削り	灰黄褐10YR6/2		微～細砂多量
281	土師質土器　土鍋				二次的に焼けている	淡橙5YR8/4		微砂、粗砂
282	〃				脚主軸に沿ったヘラ削り	灰白7.5Y8/1		細～粗砂
283	〃				〃	淡黄2.5Y8/3		〃
284	〃				〃	褐灰7.5YR4/1		〃
285	〃				ヘラ削り。二次的燃焼。接合部分に格子状突起	灰白2.5Y7/1	鈍橙7.5YR7/3	微～細砂
286	〃				ヘラ削り。外側に煤付着。	灰褐7.5YR6/2		〃
287	〃				ヘラ削り。内側の一部を除いて煤付着	鈍黄橙10YR7/4		細～粗砂多量
288	〃				ヘラ削り	鈍黄褐10YR5/3		〃
289	〃				ヘラ削り。内側に煤付着	鈍黄橙10YR7/3	褐灰10YR6/1	細砂多量
290	〃				ヘラ削り。端部外側に屈曲	明赤褐5YR5/6		微～細砂
291	〃				〃	鈍黄橙10YR7/3		細～粗砂、細礫
292	平　瓦				外面縄目タタキ目。内面布目	黄灰2.5Y5/1		細砂、粗砂
293	〃				〃	明青灰5PB7/1		細砂
294	〃				〃	灰白7.5Y7/1		微～細砂
295	〃				外面縄目タタキ目。内面布目後にナデ	鈍黄2.5Y6/3		微～細砂若干
296	〃				外面縄目タタキ目。内面布目	灰白10YR8/2	灰白10YR7/1	微～細砂
297	〃				外面縄目タタキ目。内面布目後にヘラ削り	灰白2.5Y8/2		微砂
298	〃				外面縄目タタキ目。内面布目	灰白10Y8/1		微～細砂若干
299	〃				外面摩滅。内面布目	オリーブ黒7.5Y3/2	灰白7.5Y7/1	微砂若干
300	〃				外面縄目タタキ目。内面ヘラ削り	灰白5Y8/2		細砂、粗砂
301	〃				外面縄目タタキ目	灰5Y4/1		微～細砂
302	〃				〃	灰5Y6/1		〃

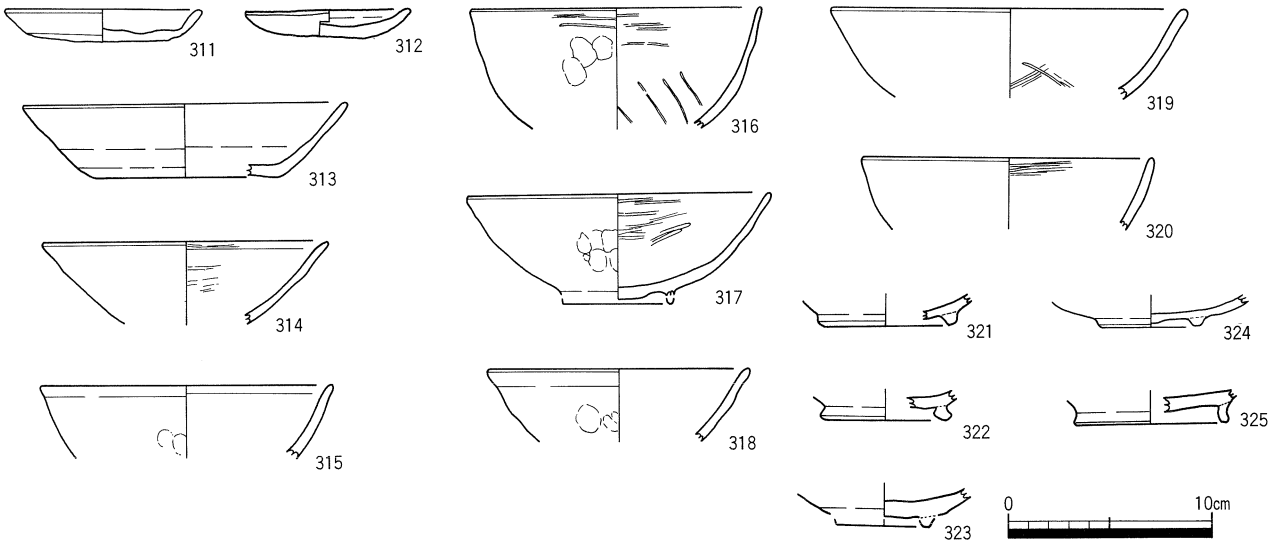


番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
303	柱状片刃石斧	11.55	(2.6)	3.1	182.6	緑泥片岩	2面の一部のみ残存。ていねいな研磨
304	石　鏃	4.6	2.0	0.4	3.9	サヌカイト	凸基式。両側縁部は両面からの調整
305	〃	1.7	1.2	0.3	0.7	〃	凹基式。左側縁は両面、右側縁は片面からの調整
306	〃	(2.2)	(1.4)	(0.35)	(1.2)	〃	基部を欠損。両面からの調整により鋭利
307	〃	2.1	1.5	0.3	1.4	〃	凹基式。両側縁部は両面からの調整
308	石　鍋					滑　石	全面なめらかに研磨

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
309	羽　口						

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
310	キセル	(3.0)	(0.8)			青銅	

第196図　SR02出土遺物(13)（S：1/2）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
311	土師質土器 皿	9.7	6.6	1.5	回転ナデ。底面は回転ヘラ切り後に回転ヘラ削り	灰白10YR8/2	灰白10YR8/1	微砂
312	〃	8.1	3.5	1.3	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後に周辺回転ヘラ削り	灰白2.5Y8/1		微～細砂多量
313	土師器 杯	15.8	9.0	3.5	回転ナデ	淡黄2.5Y8/3		細砂、粗砂若干
314	土師質土器 椀	14.0		(3.9)	内面、口縁部外面ヘラミガキ。体部外面指押え後にナデ	黒10Y2/1		微砂若干
315	〃	14.4		(3.5)	回転ナデ。体部外面指押え後にナデ	〃		微砂少量
316	瓦器 椀	14.2		(5.8)	口縁部ヘラミガキ。体部外面指押え後ナデ。内面放射状の暗文	灰N6/		〃
317	土師質土器 椀	14.8		(5.1)	回転ナデ。体部外面指押え後ナデ。内面ヘラミガキ	オリーブ黒5Y3/1	黒5Y2/1	微砂
318	〃	12.8		(3.5)	回転ナデ。体部外面指押え後にナデ	黒10Y2/1		微砂少量
319	〃	17.6		(4.3)	回転ナデ。内面下半ヘラミガキ	淡黄2.5Y8/3		微～細砂
320	〃	14.2		(3.5)	回転ナデ。口縁部内面ヘラミガキ。内面、口縁外面黒色	灰白7.5Y8/1	黒10Y2/1	微砂少量
321	〃		7.0	(1.5)	貼付高台後にナデ	灰白7.5Y7/1	褐灰10YR5/1	微砂
322	〃		6.0	(1.5)	貼付高台	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/2	微～細砂
323	〃			(1.6)	貼付高台欠損。底面ヘラ切り後にナデ	灰白2.5Y8/2		微砂
324	〃		4.8	(1.4)	貼付高台後にナデ	オリーブ黒5Y3/1	灰白5Y7/1	細～粗砂多量
325	〃		7.6	(1.6)	〃	灰白7.5Y8/1		微砂若干

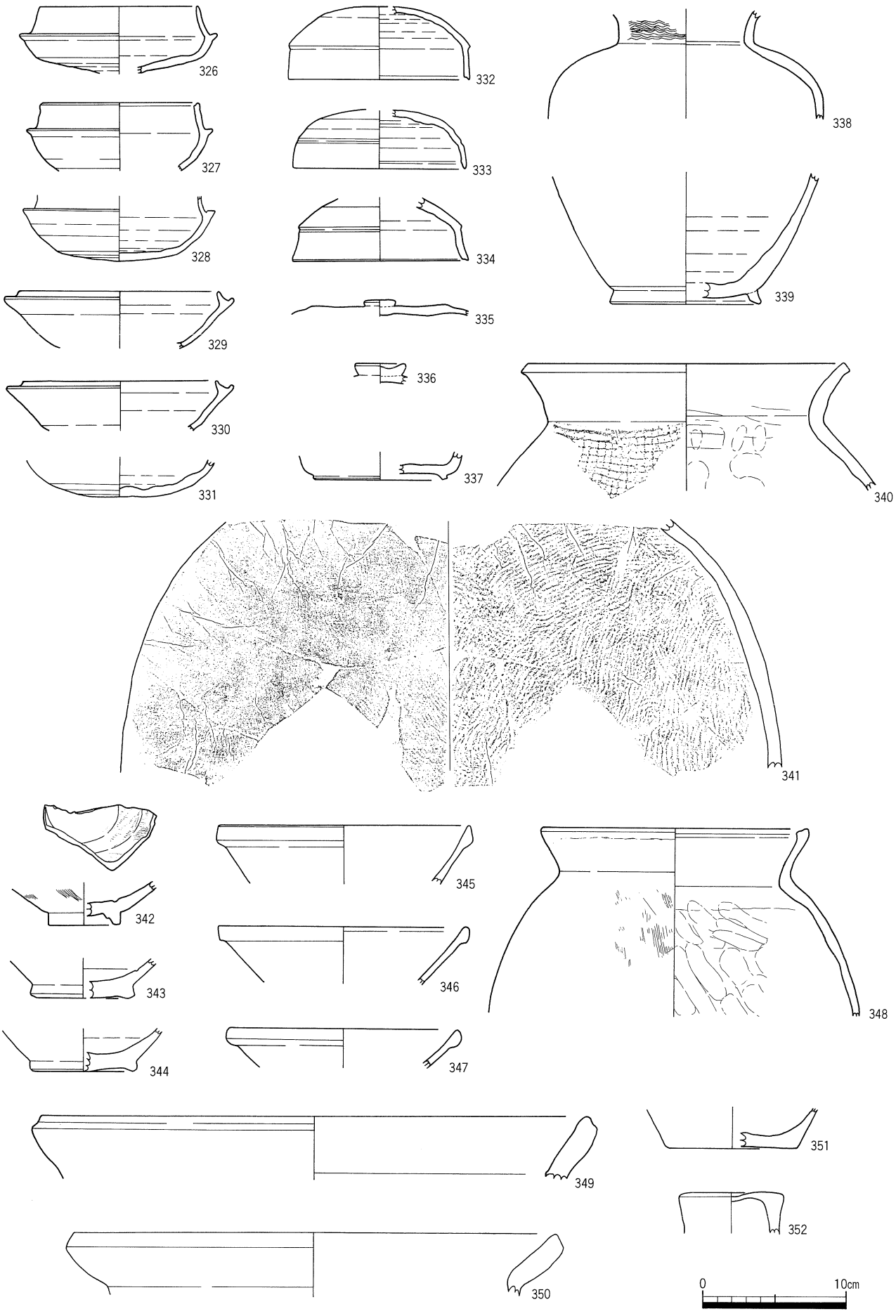
第197図　SR02出土遺物(14)（S：1／4）

303は柱状片刃石斧で，二面の一部のみ残存する。304はやや大型の凸基式石鏃であり，305から307は凹基式石鏃である。308は滑石製の石鍋の口縁部破片である。309はフイゴの羽口片であり，表面はコークス状になっている。

第4～7層の遺物は，土師質土器皿（311，312），同椀（314，315，317，325），同土鍋（349，350），同甕（351），土師器杯（313），同甕（348），同高杯（353），瓦器椀（316），須恵器杯身（326～331），同杯蓋（332～336），同椀（337），同壺（338，339），同甕（340，341），中国産青磁碗（342），青磁碗（345），白磁碗（344，346，347），磁器碗（343），須恵器回転台（352），石鏃（354～356），石破片（357）が出土した。

311の底部は回転ヘラ切り後に回転ヘラケズリ，312は回転ヘラ切り後に周囲を回転ヘラケズリする。313は直線的な体部である。瓦器椀の316は外面に指押さえの後に部分的なヘラミガキが見られる。内面は間隔の開いたヘラミガキ，見込みには平行線状の暗文が施される。和泉型である。土師質土器椀には，口縁部が若干外反し内外面とも黒色を呈する（314，315，317，318），内面のみ黒色のもの（321），外面のみ黒色のもの（324），灰白色のもの（319，320，323，325）がある。外面の調整は指押さえの目立つものとナデのみのものがあり，内面には一部にヘラミガキが施される。320は，内面と口縁部外面に黒色処理が施されている。

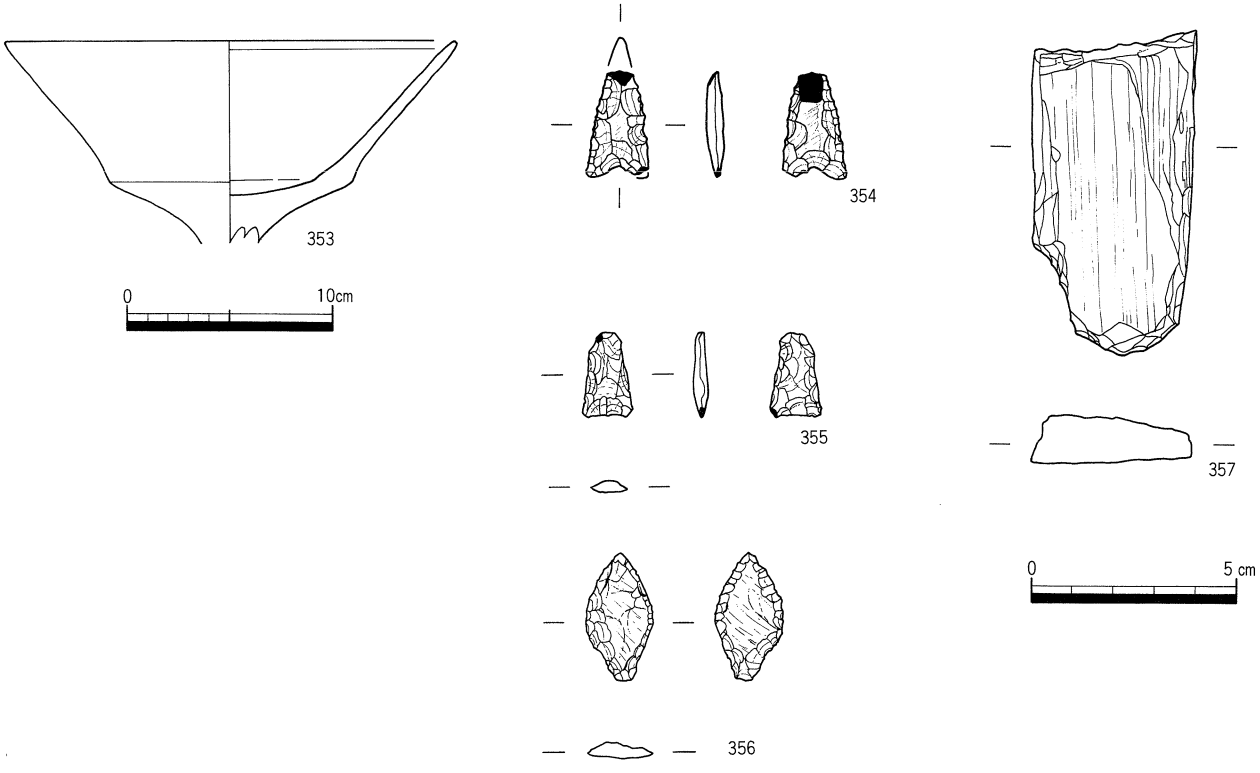
326～328は丸みのある体部に，水平の受部から内傾する口縁部が付き，体部下半は回転ヘラケズリを施している。326の口唇部は丸く収まり，327は段を有する。329，330は斜めに延びる受部から短く



第198図　SR02出土遺物(15)（S：1／4）

（第198図）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
326	須恵器　杯身	11.0		(4.6)	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。	灰N4/	灰N5/	微～細砂多量
327	〃	11.8		(4.6)	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。口唇部凹線	灰白N7/		微砂
328	〃			(4.5)	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り、静止ヘラ削り	灰N4/	灰N5/	粗砂少量
329	〃	13.8		(3.9)	回転ナデ。体部外面ナデ。口縁部は短かく内傾	灰白N7/		微砂
330	〃	13.6		(3.4)	回転ナデ。口縁部は短かく内傾	〃		微砂若干
331	〃			(2.6)	回転ナデ。体部外面下半は回転ヘラ削り後にナデ	暗オリーブ灰5GY4/1	灰N6/	〃
332	須恵器　蓋	12.6		5.0	回転ナデ。体部上部に灰オリーブ色の自然釉	灰5Y5/1	灰白N7/	〃
333	〃	12.0		4.0	回転ナデ。体部上半ヘラ削り。外面に凹線	灰N4/	灰N6/	〃
334	〃	12.2		4.3	回転ナデ。体部上半ヘラ削り。	灰白N7/		〃
335	〃			(1.1)	宝珠径2.2cm。体部外面回転ヘラ削り後にナデ。内面指ナデ	紫灰5P6/1	明青灰5PB7/1	細砂若干
336	〃			(1.4)	宝珠直径3.5cm	明紫灰5P7/1		微砂多量
337	須恵器　椀		9.4	(1.9)	回転ナデ	灰N6/		微砂若干
338	須恵器　壺			(7.5)	回転ナデ。頸部外面波状文。頸部、肩部外面灰オリーブ釉	灰白N7/		〃
339	〃		10.4	(8.9)	回転ナデ。貼付高台。胴部外面に自然釉	オリーブ灰2.5GY6/1	灰白N8/	〃
340	須恵器　甕	22.0		(8.7)	回転ナデ。胴部外面格子状タタキ目。内面指頭圧痕後にナデ	灰N6/		〃
341	〃			(17.0)	外面平行タタキ目、ナデ。内面青海波状タタキ目	灰白N7/		微砂多量
342	青磁　碗		5.0	(2.9)	同安窯系。内面、体部外面にオリーブ灰色の釉	10Y6/2　（地）	灰白7.5Y7/1	微砂若干
343	磁器　碗		7.2	(2.7)	低い高台。内面に灰白色の釉。高台部ナデ	灰白7.5Y8/1	灰白2.5Y8/2	〃
344	白磁　碗		6.8	(2.9)	内面、体部上半に灰白色の釉　10Y7/1	（地）	灰白5Y8/2	〃
345	青磁　碗	17.4		(4.0)	内外面に明オリーブ灰色の釉　2.5GY7/1	（地）	灰白N8/	〃
346	白磁　碗	17.4		(3.9)	内外面に灰白色の釉　7.5Y7/1	（地）	〃	〃
347	〃	16.0		(2.7)	〃	（地）	〃	〃
348	土師器　甕	18.6		(12.7)	回転ナデ。胴部外面刷毛目後にナデ。内面指頭圧痕後にナデ	鈍黄橙10YR6/3		細～粗砂
349	土師質土器　土鍋	36.0		(4.3)	口唇部に擬凹線	灰黄褐10YR6/2		微～細砂多量
350	〃	33.6		(4.2)	口縁部ヨコナデ後にナデ	鈍黄褐10YR5/3	鈍黄橙10YR7/2	微砂
351	土師質土器　甕		9.0	(2.8)	平底	灰白2.5Y8/2	褐灰10YR4/1	粗砂～細礫
352	須恵器　回転台	7.2		(2.8)	中央凹む。台部回転ヘラ切り後にナデ。	灰白5Y8/2		微砂



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
353	土師器　高杯	20.2		(9.7)	非常に摩滅。外面に稜	灰黄2.5Y7/2	灰白2.5Y8/2	微砂

番号	器種	現在長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）	材質	特徴
354	石鏃	(2.5)	1.5	0.4	1.5	サヌカイト	凹基式。先端部欠損。両側縁部は両面から調整
355	〃	2.0	1.2	0.3	0.9	〃	平基式。両側縁部は両面から調整し刃とする
356	〃	3.1	1.7	0.3	1.8	〃	凸基式。両側縁部、基部は両面から細かい調整
357	石片	(7.5)	(3.9)	(1.0)		緑泥片岩	断面台形

第199図　SR02出土遺物(16)（S：1/4、1/2）

内傾する口縁部が付き，体部下半の調整はナデである。332～334は丸みのある天井部と口縁部の境にわずかな稜がある。332の口縁部は直立し口唇部内面に段が付き，333は丸く収まる。334は若干外反気味で内面に段が付く。335は平坦な天井部に宝珠が付き，外面は回転ヘラケズリ後にナデ，内面は指ナデが施される。

338は肩の張った壺で，口縁部外面に波状文が巡り，外面に灰オリーブ色の釉がかかる。339はシャープな高台を有し，外面に自然釉がかかる。340は「く」字状に口縁部が外反し，口縁部の調整はヨコナデ，胴部外面は格子状タタキ目，内面には青海波状タタキ目が施される。

342は見込みに櫛描きの「之」字文と片刃彫りがあり同安窯系である。内面と体部に施釉する。343は内面，344は内面と体部外面に施釉する。345～347は玉縁口縁をなし，全面に施釉する。

348は「く」字状に口縁部が外反し，口唇部はやや内側に拡張する。外面に刷毛目が残存する。353は外面の稜を境に長い口縁部が直線的に広がる。内外面とも磨滅が著しい。

第８～10層の遺物は，須恵器杯身（358～360，362～365），同杯蓋（366～376），同高杯（361，377～383），同短頸壺（384），同壺（385），同甕（386～390），土師質土器皿（391），同杯（392），同椀（393～406），同土鍋（399），土師器壺（397），同ミニチュア土器（398），弥生土器壺（400～402），同甕（403～406）である

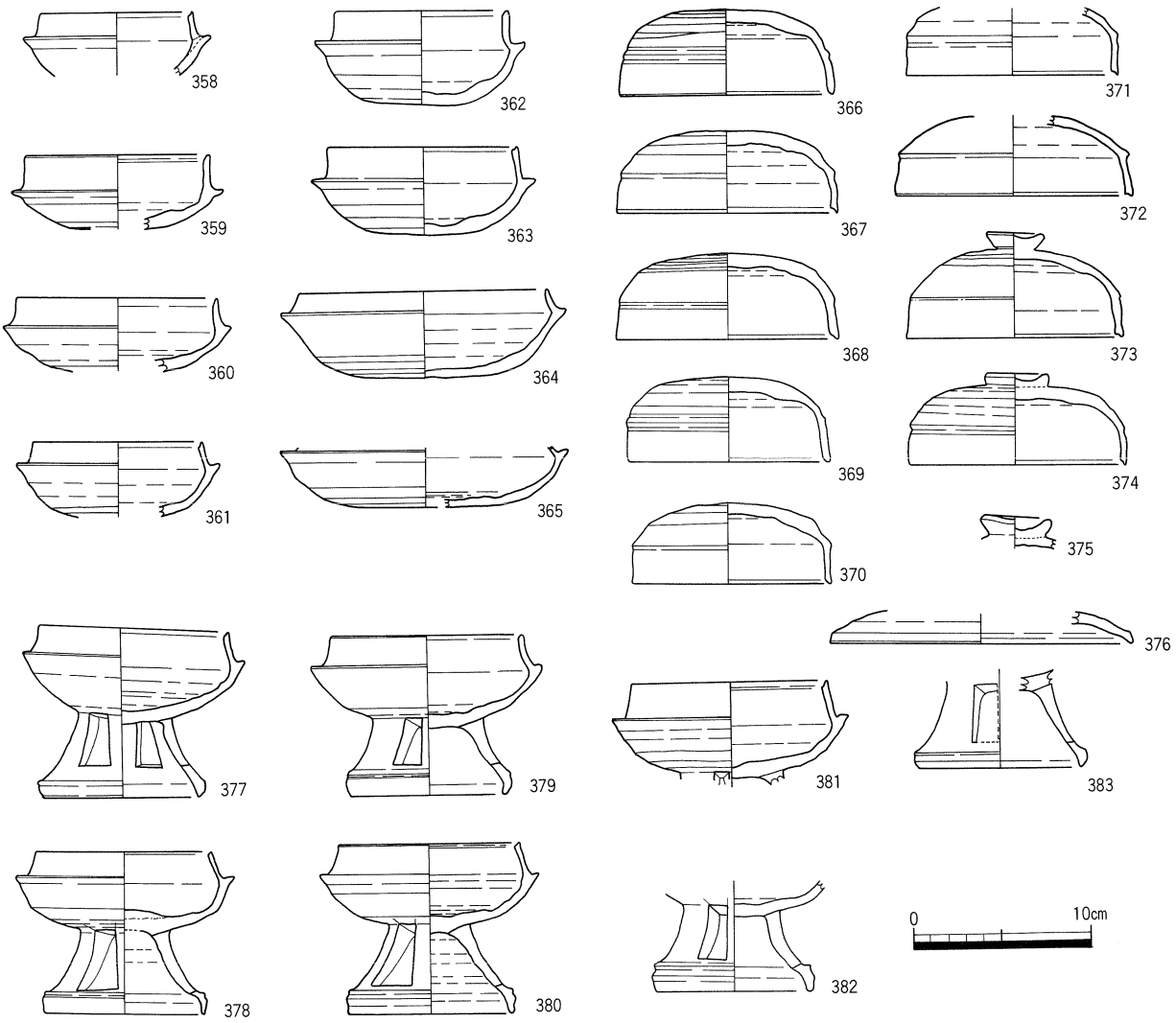
須恵器杯身は，口径10cm前後（358～360，362，363）と14cm（364，365）を測るものに分けられる。前者はやや丸みのある体部で，水平の受部から内傾する口縁部が付き，360を除き口唇部内面に段を有する。後者は平坦な体部である。全ての体部下半は回転ヘラケズリが施され，364の内面には指ナデが見られる。杯蓋は，宝珠を持たない366～380と宝珠を持つ383，384の２タイプがあるが，いずれも同型式である。天井部はやや丸みがあり，口縁部との境にわずかな稜を持ち，口縁部は直立する。366を除き，口唇部内面に段を持つ。いずれの蓋も天井部は回転ヘラケズリが施される。372の外面には自然釉がかかる。376は別形式で器高が低く，口縁部が天井部から短く屈曲する。

361，377～383の須恵器高杯は，法量・形態ともほぼ同型式であり，377～390は完形である。361は体部外面に台形透かしの痕がある。受部はほぼ水平で，口縁部が直線的に内傾する（361，377，378，380，381），あるいは若干外反気味に内傾する（379）。口唇部内面には段がある。脚部は低いが大きく広がり，裾部は内湾し直立する。脚部には台形の透かしが３ヶ所ある。体部外面下半は回転ヘラケズリが施され，その他はナデ調整である。383の外面はカキ目が施され，380の杯部内面に１本線のヘラ記号が見られる。

384はほぼ垂直に立つ短い頸部で，肩が強く張った胴部を持つ。胴部下半から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。内面に輪積み痕を残し，内外面には自然釉が部分的にかかる。386は「く」字状に口縁部が強く外反し，胴部外面には粗いタタキ目，内面にはヘラナデが施される。内面に輪積み痕と絞り目が残る。387は外面に平行タタキ目，内面に板ナデ，388，389の外面は平行タタキ目，内面に青海波状タタキ目，390の外面は格子状タタキ目，内面は青海波状タタキ目の後にナデが施される。

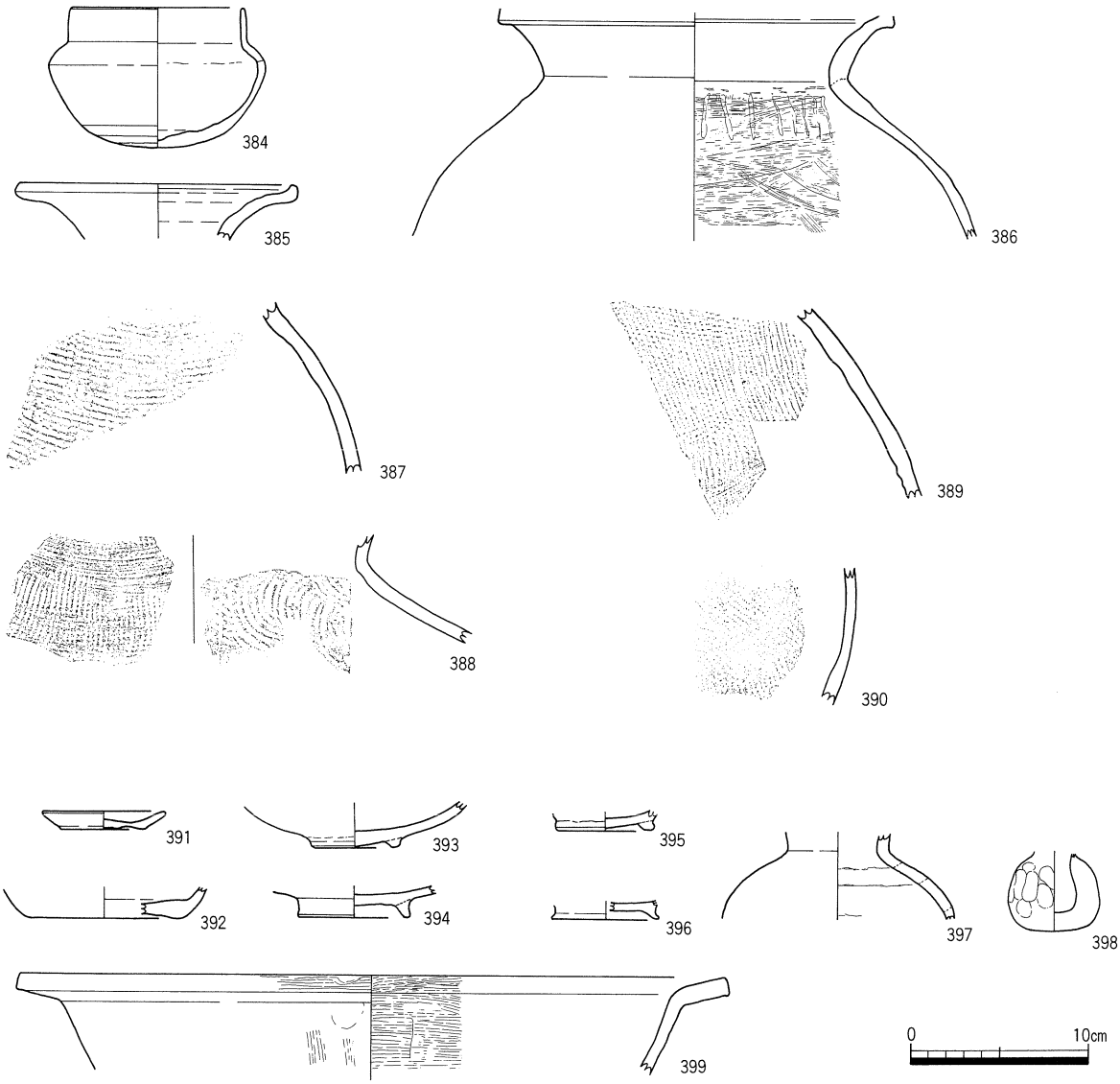
391の底部は回転ヘラ切り後に回転ヘラケズリが施される。393～396は底部のみであり，395の内面は黒色を呈しヘラミガキが施される。397は内面に３ヶ所の輪積み痕を残し，内外面とも磨滅が著しい。胴部は球形を呈すると考えられる。398は厚い器壁で，外面に指頭圧痕が明瞭に残る。１個の籾痕が検出される。

400～406は弥生土器である。400は大形の壺で，口縁部の調整は刷毛目，頸部外面は縦方向のヘラミガキ，内面は絞り目の後にヘラケズリが施される。403は，「く」字状に口縁部が強く屈曲し，404～406の外面は縦方向のヘラミガキが施される。



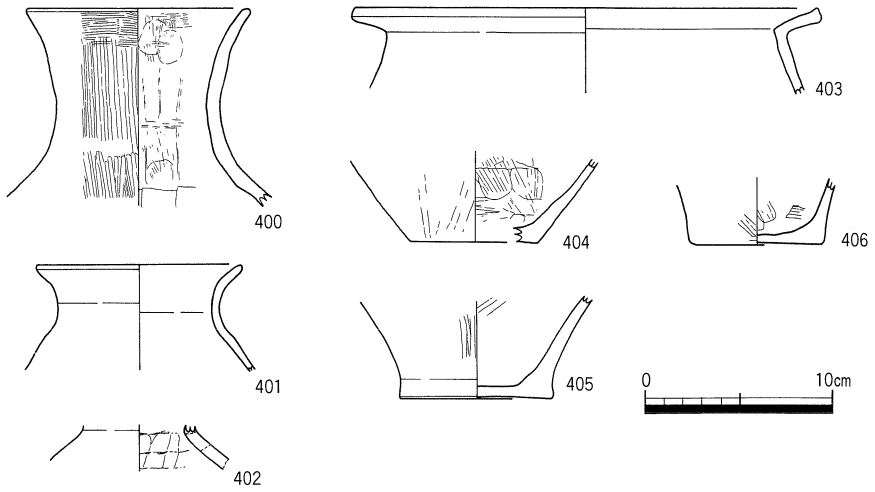
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
358	須恵器　杯身	8.6		(3.5)	回転ナデ。口唇部内面に稜	灰5Y/1	灰白N8/	微砂若干
359	〃	10.4		(4.1)	回転ナデ。体部外面下半ヘラ削り。口縁部直立し内面稜	灰N6/	灰白N7/	〃
360	〃	11.4		(4.1)	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。口縁部直立	灰N5/	灰白N7/	〃
361	須恵器　高杯	9.6		(4.2)	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。外面に透しの痕跡	灰7.5Y5/1	〃	微～細砂多量
362	須恵器　杯身	9.7		5.2	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。口縁部直立	灰N6/	〃	〃
363	〃	10.8		4.9	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。口唇部に稜	〃	N5/	微砂若干
364	〃	14.0		4.7	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。内面指ナデ	灰黄2.5Y7/2	灰白7.5Y7/1	微～細砂多量
365	〃			(3.3)	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り	灰N5/	灰N6/	微砂少量
366	須恵器　蓋	12.0		4.8	回転ナデ。体部外面回転ヘラ削り。外面に凹線２条	〃	〃	微～細砂少量
367	〃	12.4		4.5	回転ナデ。体部外面回転ヘラ削り。口唇部内面に稜	灰N6/		微砂若干
368	〃	12.4		4.8	〃	〃		細砂、細礫若干
369	〃	11.3		4.7	回転ナデ。体部外面回転ヘラ削り後にナデ。内面に稜	灰N7/		細～粗砂
370	〃	11.2		4.4	回転ナデ。体部外面回転ヘラ削り。口唇部内面に稜	青灰5PB5/1	紫灰5RP5/1	微砂若干
371	〃	12.0		(3.8)	回転ナデ。口唇部内面に稜	灰N5/	灰5Y6/1	〃
372	〃	12.8		(4.2)	回転ナデ。口唇部内面に稜。外面自然釉	灰オリーブ7.5Y5/2	灰白N7/	細～粗砂多量
373	〃	12.2		5.7	回転ナデ。宝珠径3.2cm。体部外面回転ヘラ削り	灰N5/	灰N6/	微砂若干
374	〃	12.3		5.1	回転ナデ。宝珠径3.7cm。体部外面回転ヘラ削り	灰白N7/		〃
375	〃			(1.7)	宝珠径4.0cm	灰5Y6/1		〃
376	〃	16.8		(1.8)	回転ナデ。口縁部やや直立	灰N6/	灰白N7/	〃
377	須恵器　高杯	10.8	8.8	9.4	回転ナデ。口縁部内傾。脚部台形透し３個	灰白N7/		〃
378	〃	9.8	9.0	9.0	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。脚部台形透し３個	暗青灰5PB4/1	灰白N7/	〃
379	〃	10.8	8.8	8.8	回転ナデ。体部外面下半ヘラ削り。脚部台形透し３個	灰白2.5Y8/1		〃
380	〃	10.2	9.4	9.5	体部外面下半ヘラ削り。内面に直線１本ヘラ記号。脚台形透し３個	灰N5/	灰N6/	細砂少量
381	〃	11.0		(5.7)	回転ナデ。体部外面下半回転ヘラ削り。脚部台形透し３個	〃		細砂、細礫若干
382	〃		8.6	(6.1)	回転ナデ。脚部台形透し３個	〃		微砂若干
383	〃		9.0	(5.4)	外面カキ目調整。台形透し３個	灰N6/		〃

第200図　SR02出土遺物(17)（S：1/4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
384	須恵器　短頸壺	9.8		7.9	回転ナデ。胴部下半回転ヘラ削り。内外面に部分的に釉	灰N5/		微砂若干
385	須恵器　壺	15.6		(3.0)	回転ナデ。口唇部若干つまみ上げ	灰白N8/		〃
386	須恵器　甕	21.8		(12.8)	口縁部ヨコナデ。胴部外面タタキ目。内面しぼり目、ヘラナデ。釉	灰N5/		〃
387	〃				外面平行タタキ目。内面板ナデ	暗緑灰7.5GY4/1	灰7.5Y6/1	〃
388	〃				外面平行タタキ目。内面青海波状タタキ目	灰白N7/		〃
389	〃				〃	灰N5/	灰5Y6/1	〃
390	〃				外面格子状タタキ目。内面青海波状タタキ目後にナデ	灰5Y6/1		〃
391	土師質土器　皿	7.0	4.6	1.0	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後に回転ヘラ削り	淡黄2.5Y8/3		微～細砂
392	土師質土器　杯		9.0	(1.7)	上げ底。回転ナデ	鈍黄橙10YR7/2		細～粗砂多量
393	土師質土器　椀		5.0	(2.5)	低い貼付高台	灰白N8/	灰白2.5GY8/1	微砂若干
394	〃		6.1	(1.7)	貼付高台後にナデ。底面未調整	鈍黄橙10YR7/3	鈍黄橙10YR7/2	細～粗砂多量
395	〃		5.6	(1.0)	貼付高台。内面ヘラミガキ	黄灰2.5Y6/1	黒2.5Y2/1	細～粗砂
396	〃		6.0	(1.0)	高台端部が若干屈曲	浅黄橙7.5YR8/3	淡黄2.5Y8/2	〃
397	土師器　壺			(4.8)	内外面摩滅。内面に3ヶ所の輪積み痕	浅橙5YR8/4	浅黄橙7.5YR8/3	細～粗砂多量
398	土師器ミニチュア		1.6	(4.3)	外面指頭圧痕。外面に粘痕1個	灰白2.5Y8/2	明黄褐10YR7/6	微砂
399	土師質土器　土鍋	39.8		(5.4)	外面刷毛目後にナデ。内面刷毛目。口縁部外面に煤	鈍黄褐10YR5/4	灰黄褐10YR5/2	〃

第201図　SR02出土遺物(18)（S：1／4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
400	弥生土器　壺	12.0		(10.5)	口縁部刷毛目。頸部外面ヘラミガキ。内面しぼり目、ヘラ削り	鈍黄橙10YR6/3	灰黄褐10YR5/2	石英、長石、角閃石
401	〃	11.1		(5.5)	摩滅	橙5YR6/6		〃
402	〃			(2.4)	外面ナデ。内面指頭圧痕、輪積み痕	淡橙5YR8/3	浅黄橙7.5YR8/3	〃
403	弥生土器　甕	25.2		(4.3)	く字口縁。口唇部若干つまみ上げ	鈍黄橙10YR7/3		〃
404	〃		7.0	(4.4)	外面ヘラミガキ。内面刷毛目、ナデ	鈍黄橙10YR6/3	灰黄褐10YR4/2	石英、長石多量
405	〃		8.3	(5.4)	外面ヘラミガキ、ナデ。内面ナデ、底面ヘラミガキ	〃	鈍黄2.5Y6/3	〃
406	〃		6.0	(3.5)	内外面刷毛目、ナデ。底面ナデ	灰白10YR8/1	淡黄2.5Y8/3	石英、長石

第202図　SR02出土遺物(19)（S：1/4）

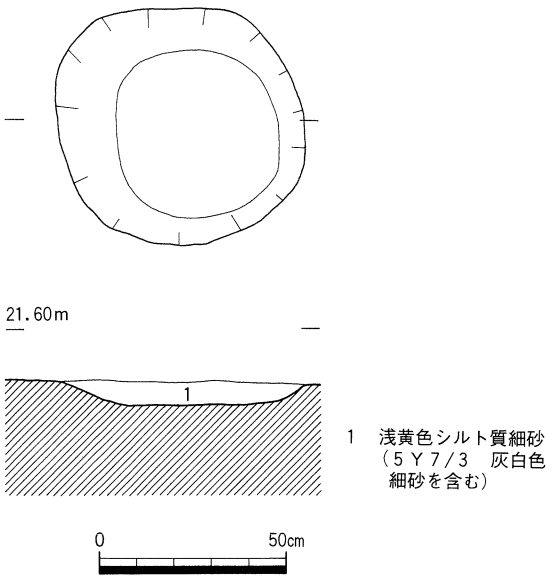
2）近世

1．土坑

SK16（第203図）

D地区北部中央寄りのSD43集石部の北側において単独に検出された土坑である。確認面のレベルは標高21.45mである。平面形はやや角ばった円形を呈し，直径は0.65mを測り，深さは6cmである。掘り込みの傾斜はゆるやかであり，底面はほぼ平坦である。底面はやや東寄りとなっている。埋土は浅黄色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は数点の陶磁器片のみであり，図化できるものはなかった。



第203図　SK16平・断面図（S：1/20）

SK17

D地区ほぼ中央においてSD43と重複して検出された土坑である。新旧関係は本土坑がSD43を切っている。確認面のレベルは標高21.70mである。平面形は円形を呈し，直径0.80m，深さ0.10mを測る。掘り込みはゆるやかで，埋土は灰白色シルト質極細砂である。

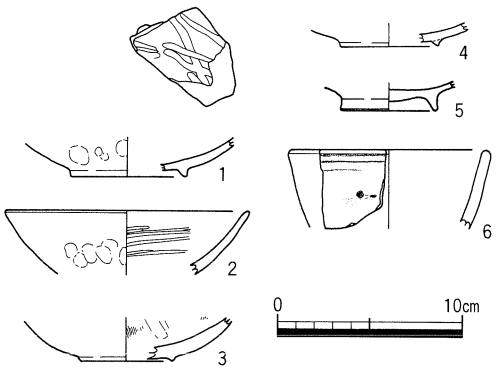
出土遺物は数点の陶磁器のみである。

2．溝

ＳＤ52（第204図）

Ｄ地区北部中央寄りにおいて検出された溝である。確認面のレベルは標高21.45m前後である。溝は短い東西方向の溝と長く幅広い南北方向の溝からなり，Ｔ字状を呈している。南北方向の溝の幅は0.60～0.80m，深さ５cmを測り，東西の溝は幅0.20m，深さ５cmを測る。断面は逆台形を呈し，底面のレベルは均一である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である

出土遺物　埋土中より瓦器椀（１，２），土師質土器椀（３～５），染付碗（６）が出土した。



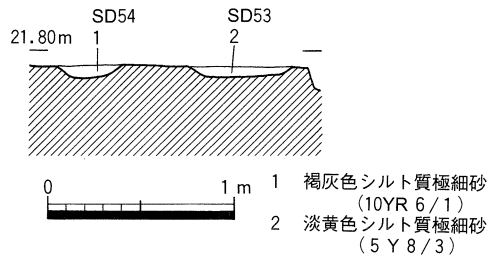
番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器　椀		6.2	(2.1)	貼付高台後にナデ。外面指押え後ナデ。内面ヘラミガキ、暗文	黒褐10YR2/2		微砂若干
2	〃	13.0		(3.4)	外面指押え後にナデ。内面ナデ、ミガキ、平行暗文	黒褐10YR2/2		〃
3	土師質土器　椀		5.0	(1.3)	低い高台。回転ナデ。内面刷毛目後にナデ	灰白10Y8/1		微～細砂
4	〃		5.2	(1.2)	低い高台。回転ナデ	黒褐10YR2/2		微砂
5	〃		5.2	(1.4)	高く細い高台。回転ナデ	淡黄2.5Y8/4	淡黄2.5Y7/3	微砂若干
6	染付　碗	10.6		(4.2)	外面に染付。釉明オリーブ5GY7/1	灰白10Y7/1		密

第204図　SD52出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ53（第205図）

Ｄ地区南部中央寄りに検出された溝である。ＳＤ54とＳＤ60の中間に位置する。確認面のレベルは標高21.70mである。溝は南西－北東方向に延び，北端はＳＤ60に切られる。溝の幅は北側で0.55m，南側0.20m，深さ５cmを測り，埋土は淡黄色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。



第205図　SD53・54断面図（Ｓ：１/40）

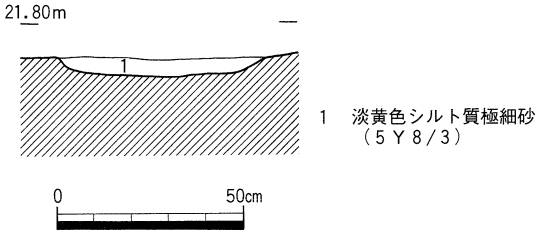
ＳＤ54（第205図）

Ｄ地区南部中央寄りのＳＤ53の西側に検出された溝である。確認面のレベルは標高21.70mである。溝は南西－北東方向にやや蛇行して延び，北端はＳＤ53に切られる。幅は0.30m，深さ0.10mを測る。埋土は褐灰色シルト質極細砂であり，出土遺物はなかった。

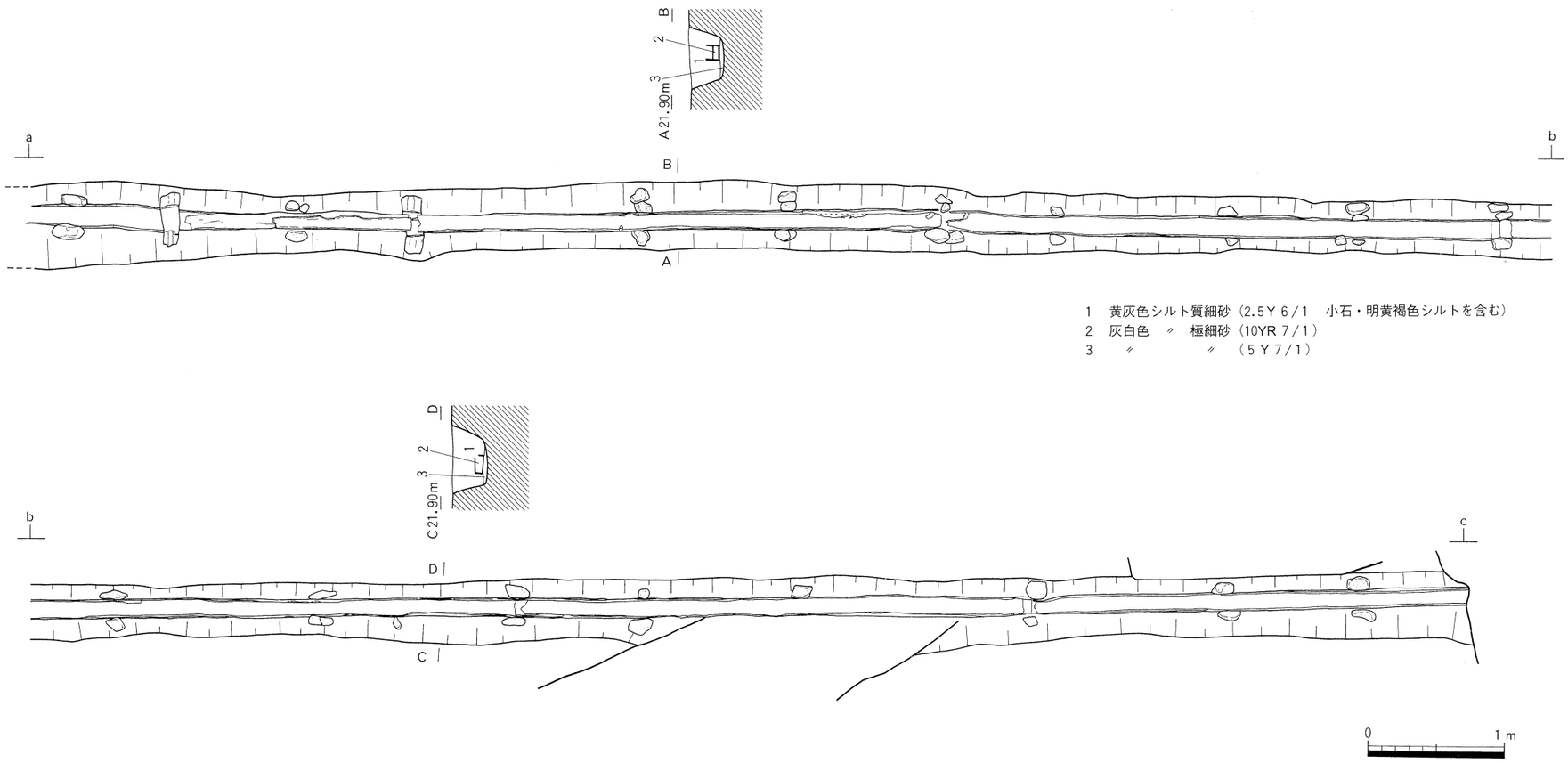
ＳＤ55

Ｄ地区中央北寄りに単独で検出された溝で，確認面のレベルは標高21.45mである。溝は南東－北西方向に延び，幅0.20，深さ５cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。

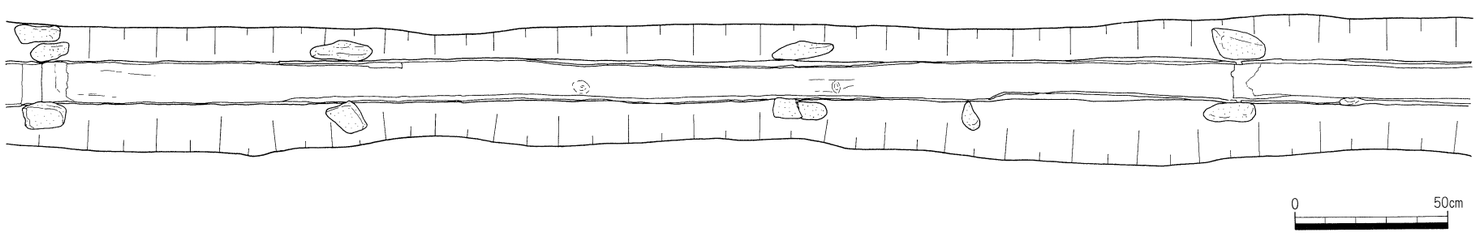


第206図　SD56断面図（Ｓ：１/20）



1　黄灰色シルト質細砂（2.5Y 6/1　小石・明黄褐色シルトを含む）
2　灰白色　〃　極細砂（10YR 7/1）
3　〃　〃　（5Y 7/1）

0　1m



0　50cm

第207図　SD59平・断面図（S：1/40、1/20）

ＳＤ56（第206図）

Ｄ地区中央に単独で検出された溝である。確認面のレベルは標高21.70m，溝は東西方向に延び，幅0.55m，深さ５cmを測る。埋土は淡黄色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。

ＳＤ57

Ｄ地区中央やや南寄りのＳＤ51の南側において検出された溝である。確認面のレベルは標高21.70mである。溝は湾曲気味に南西－北東に延び，北端はＳＤ58と合流し，現有の水路の下に延びている。溝の幅は1.05m，深さ５cmを測る。掘り込みは非常にゆるやかであり，底面はほぼ平坦で，レベルは均一である。埋土は白灰色中砂の単一層である。

出土遺物はなかった。

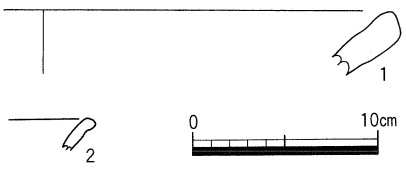
ＳＤ58

Ｄ地区中央やや南寄りにおいて検出された溝であり，ＳＤ51とＳＤ57の間に位置する。確認面のレベルは標高21.70mである。溝は湾曲しながら南西－北東方向に延び，南端はＳＤ57と合流し，北端はＳＤ51と合流する。溝の幅は0.20m，深さは３cmを測り，掘り込みはわずかである。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

出土遺物はなかった。

ＳＤ59（第207・208図）

Ｄ地区南部において検出された木樋を有する溝である。確認面のレベルは標高21.80mである。溝はＳＲ02の上を斜めに横断するように南西－北東方向に直線的に延びており，北端は後世の削平により消滅しているが，南端は調査区外まで延びている。溝の上場の幅は0.40～0.50mを測り，深さは0.20mである。底面の幅は0.30mを測り，溝の断面はほぼ垂直的な掘り込みのために逆台形を呈する。底面のレベルはほぼ均一である。底面直上には木樋が検出された。木樋は２枚の側板，底板，上板の４枚の板を組み合わせたものであり，溝底面直上に薄く粘土を敷き，その上に底板を置き，両側に２枚の側板を立て上板を置いていたが，土圧のため調査時には上板は内部に落ち込んでいた。板の保存状態は一部破損している部分もあるが，全体としては良好であり，特に底板の保存状態は良い。木樋の幅は0.15m，高さ0.10mを測り，板の厚さは１cm前後である。検出された木樋の全長は20.70mであり，長さ3.80～4.00mの板をつなげている。木樋の組み合わせには釘を使用しておらず，底板の両側に立てる側板はほぼ等間隔に置かれた２個の石によって立てられている。側板のつなぎ目には必ず石



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器　土鍋	38.0		(3.3)	外面ヨコナデ後にナデ。内面ヨコナデ後にナデ	褐10YR4/4		細砂多量
2	〃				摩滅	浅黄2.5Y7/3	淡黄2.5Y8/4	微砂

第208図　SD59出土遺物（Ｓ：１/４）

が置かれており，底板のつなぎ方は板の両端を薄く切り，約５㎝位交差させている。木樋の北側は遺存状態が悪いが，２個の横木が検出された。横木は丸太の中央部に木樋を通すため切り込みを入れたもので，長さ0.40m，直径0.15mを測る。溝の埋土は黄灰色シルト質細砂であり，木樋の上板と底板の間には灰白色シルト質極細砂がはさまれている。

出土遺物は埋土中より数点の土鍋片（１），瓦器，陶磁器片（２）が出土したのみで明確な時期は不明である。しかし，近世の水田面からの掘り込みが確認されており，当該期のものと考えられる。

ＳＤ60

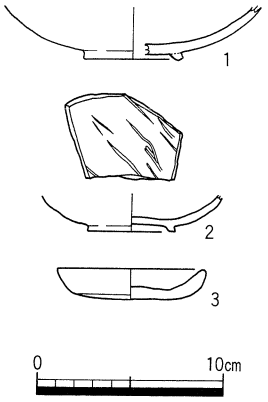
Ｄ地区中央から南部にかけて検出された石垣を有する溝であり，現有のコンクリート水路の西側を平行して延びている。このために溝の大部分はコンクリート水路にかかっており，溝の西肩のみ検出されただけであり，幅や深さ等の規模は不明である。確認面のレベルは標高21.70mである。検出された石垣は人頭大から拳大の自然石を積み重ねたものである。溝の内側には花崗土が厚く充填され，陶磁器といっしょに瓶・缶・ビニール等も出土した。

３．粘土採掘跡

ＳＸ１～41（第209図）

Ｄ地区中央から北部にかけて検出された粘土採掘跡である。平面形は長方形が大部分であるが一部に不整形のものもある。中央部の粘土採掘跡は幅1.50～2.00mを測り，東西方向に並んでいる。確認面からの深さは約５㎝前後である。この周辺ではシルト層の発達が顕著であり，戦前に瓦の原料としてシルトが採集されていたことが判明している。

出土遺物　埋め戻された土の中から土師質土器椀（１，２），同皿（３），染付碗，陶磁器がある。１，２は低い高台を持ち回転ナデ調整がなされ，内面にヘラミガキが一部残存する（２）。３は器高が低く，器壁が厚い。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器　椀		5.4	(2.8)	回転ナデ	黒褐10YR3/1	灰白N8/	微砂
2	〃		4.8	(2.0)	シャープな高台。回転ナデ。内面ヘラミガキ	灰N6/		微砂若干
3	土師質土器　皿	7.0	6.0	1.6	厚い器厚。底面若干不整	鈍橙5YR7/4	淡橙5YR8/3	〃

第209図　SX出土遺物（Ｓ：１/４）

第 4 章

自然科学的分析

第１節　日暮・松林遺跡の花粉・プラント・オパール分析

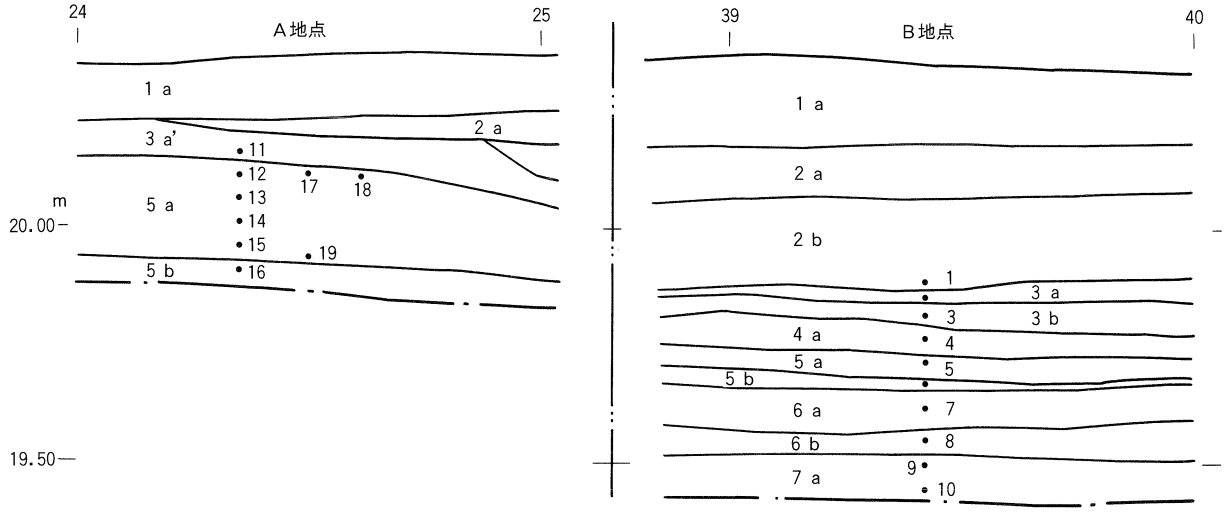
鈴木　　茂（パレオ・ラボ）

都市計画道路福岡多肥上町線の建設工事にともない，高松市多肥下町に所在する日暮・松林遺跡において発掘調査が行われ，畦畔状の遺構が検出された。時代は出土遺物から弥生時代後期と推測されている。高松市内における弥生時代の水田跡としては，浴・長池遺跡（高松市教育委員会ほか 1993）や浴・松ノ木遺跡（高松市教育委員会ほか　1994）などで検出されている。ここ日暮・松林遺跡において検出された畦畔状遺構もこの時期の水田遺構に係わるものと推測され，こうしたことから，水田稲作の確認を主目的に花粉分析，プラント・オパール分析を行い，あわせて遺跡周辺の古植生について検討した。

１．試料

第210図に試料採取地点付近の土層断面を示したが，試料は第７トレンチの24－25ライン間のＡ地点および39－40ラインのほぼ中間のＢ地点より柱状とスポットで採取された（地点名は仮）。このうちＡ地点では３ａ’～５ｂ層の柱状試料より６点（番号11～16）と５ａ層よりスポットで採取された３点（試料番号17～19）について，また，Ｂ地点の柱状試料からは，２ｂ層より下部について，ほぼ各層１点の計10点（試料番号１～10）を，土層観察の後，分析試料として採取した。以下に，各層について簡単な記載を示す。

Ｂ地点：１ａ層は現水田耕作土，２ａ層は白灰色，２ｂ層は灰白色のシルト質細砂である。３～５層もシルト質細砂で，３ａ層は褐灰色，３ｂ層は暗褐灰色，４ａ層は黒褐色，５ａ層は黒灰褐色，５ｂ層は灰褐色で，この５ｂ層には黒色のシルト～粘土が斑状に認められる。６ａ層は黒色のシルト質粘土で，粘性が高く，灰色の細砂が認められる。６ｂ層は黒～黒褐色のシルト質粘土で，粘性が高い。７ａ層は上位より褐色の強い黒～黒褐色のシルト質粘土で，細～中粒砂が塊状に認められる。



第210図　試料採取地点付近の土層断面図

A地点：３ａ’層は黒色の粘土塊（径10㎜前後）が多くはいる灰白色のシルト質砂である。５ａ層はやや砂質の黒灰色シルト質粘土で，下部ほど赤褐色酸化鉄の集積が多くみられる。５ｂ層は黒褐色のシルト質細砂で，赤褐色酸化鉄の集積が塊状に多量に認められる。また，５ａ層の上・下部よりスポットで採取した試料17～19については上記の５ａ層よりいずれも砂分が多く，17，18は黒色粘土混じりの暗灰色シルト質砂，19は黒灰色の砂質シルト～シルト質砂である。

時代は出土遺物から２層が中～近世，３～５層が弥生時代後期で，６，７層については，遺物がなく不明である。

２．花粉分析

１）分析方法

上記した19試料について次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重３～５ｇ）を遠沈管にとり，10％水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後，0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き，傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後，比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い，浮遊物を回収し，水洗する。水洗後，酢酸処理を行い，続けてアセトリシス処理（無水

和名	学名	B地点										A地点								
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
樹木																				
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	-	3	9	1	1	2	-	-	2	-	-	1	-	-	-
モミ属	*Abies*	-	-	-	-	-	5	2	6	5	3	-	-	-	-	-	2	-	1	-
ツガ属	*Tsuga*	-	-	-	-	1	22	27	31	28	24	1	3	6	-	-	11	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	-	-	-	-	-	3	2	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	2	-	-	-	1	4	4	6	7	-	2	2	-	1	3	-	-	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	-	2	32	26	23	13	16	1	7	17	4	3	11	1	-	4
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	-	-	-	-	-	2	3	2	1	2	1	-	8	-	-	12	-	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	-	-	-	-	3	1	3	2	1	-	-	6	-	-	21	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-
クルミ属	*Juglans*	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	-	-	-	2	5	4	1	-	-	-	3	-	-	3	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	-	-	-	-	7	1	3	43	24	-	-	-	-	-	4	-	-	-
ブナ属	*Fagus*	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	-	-	-	-	33	19	11	5	7	-	-	18	1	2	30	-	-	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	-	1	1	4	73	82	94	92	107	3	18	28	6	13	73	-	3	6
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	-	1	1	2	-	1	-	-	2	1	-	4	-	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	-	-	-	2	1	18	30	26	37	24	1	6	34	6	10	31	-	-	3
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	-	-	-	-	2	1	2	-	1	-	1	-	-	-	4	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤドリギ属	*Viscum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シキミ属	*Illicium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
テイカカズラ属	*Trachelospermum*	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																				
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
イネ科	Gramineae	2	1	9	4	8	91	119	65	26	26	10	14	104	15	12	148	3	2	3
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	-	-	1	17	65	25	29	34	-	1	25	2	-	44	-	-	2
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	2	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	-	-	-	1	1	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	1	2	-	-	3	-	2	2	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	3	-	1	2	-	-	-	-	-	-	2	2	2	1	1	8	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミソハギ属	*Lythrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	2	-	1	3	7	23	17	16	11	12	4	10	24	6	8	42	2	3	4
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	-	-	16	12	12	17	15	-	5	9	2	-	12	-	2	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	-	-	-	1	4	2	-	2	-	1	1	4	3	-	11	2	-	-
シダ植物																				
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	1	-	2	3	3	19	11	7	9	12	3	3	7	1	1	4	2	1	2
三条型胞子	Trilete spore	1	-	-	1	3	6	5	3	4	4	-	1	4	1	-	1	1	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	1	2	1	3	9	207	222	215	235	222	7	37	129	18	29	215	1	4	14
草本花粉	Nonarboreal pollen	8	1	11	9	17	160	224	122	87	93	17	38	175	29	21	277	7	7	9
シダ植物胞子	Spores	2	0	2	4	7	25	16	11	14	16	3	4	11	2	1	5	3	1	2
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	11	3	14	16	33	392	462	348	336	331	27	79	315	49	51	497	11	12	25
不明花粉	Unknown pollen	1	0	1	6	6	67	97	106	142	126	11	43	70	13	19	66	4	7	16

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

表１　日暮・松林遺跡の産出花粉化石一覧表

酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後，残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い，その際サフラニンにて染色を施した。

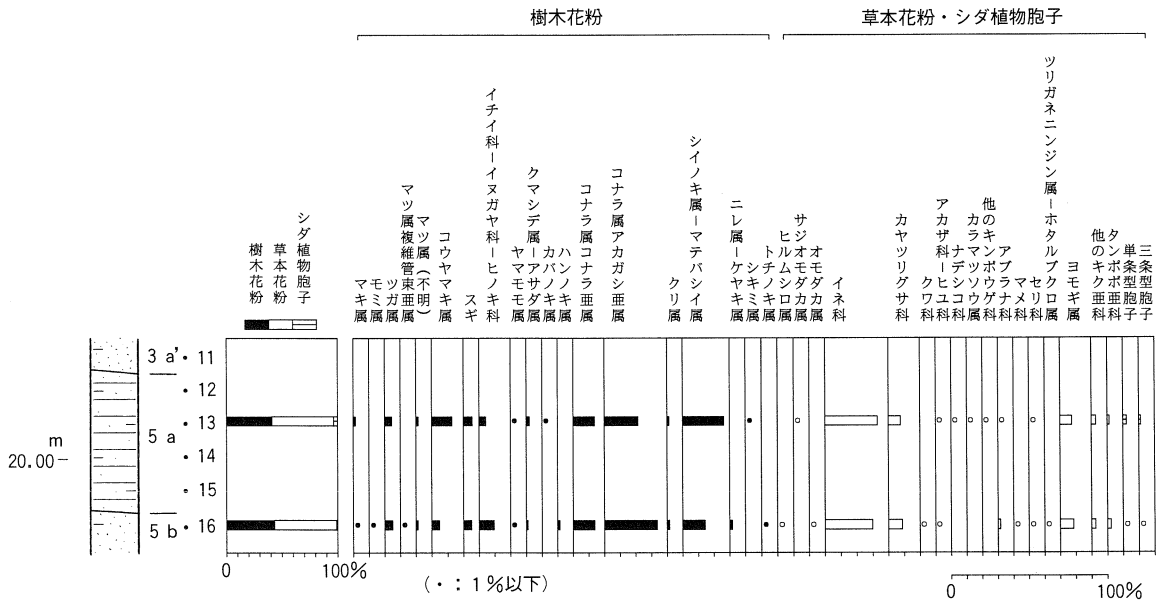
２）結果

検出された花粉・胞子の分類群数は，樹木花粉27，草本花粉22，形態分類を含むシダ植物胞子３の計52である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に，また，主要な花粉・シダ植物胞子の分布を第211図（Ａ地点），第212図（Ｂ地点）に示した。これら分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に，草本花粉およびシダ植物は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し，クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また，花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し，各々にPLC．SS番号を付し，形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果，Ａ地点では９試料中７試料，また，Ｂ地点では上位５試料からはほとんど花粉化石が得られず，分布図として示すことができなかった。また，他の試料においても花粉化石の保存状態は悪く，分解・消失してしまっている花粉もあると思われる。

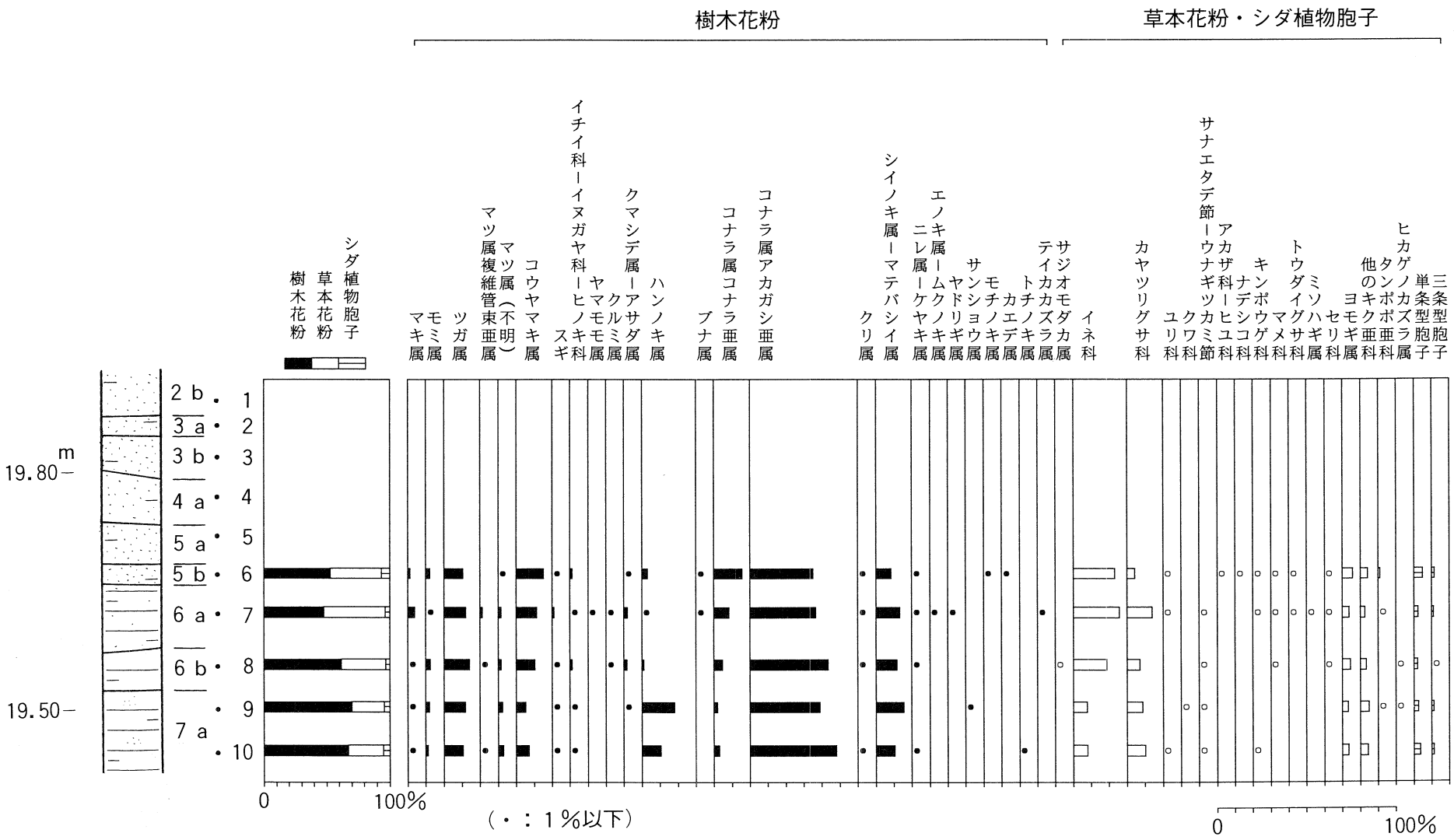
Ａ地点：分布図に示した試料13，16についてみると，コナラ属アカガシ亜属とシイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）の優占で特徴づけられる。コナラ属コナラ亜属が次いで多く検出されており，その他，ツガ属・コウヤマキ属・スギ・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）などが産出している。草本類ではイネ科が多産しており，次いでカヤツリグサ科・ヨモギ属が目立って検出されている。その他では，水生植物のサジオモダカ属やオモダカ属が若干得られている。

Ｂ地点：分布図として示した下位層についてみると，試料６～８と９，10で違いが認められる。すなわち，ハンノキ属は下部の試料９，10では10～20％の出現率を示すが，その上位では急減している。また，アカガシ亜属も上部に向かい若干ではあるが出現率を下げる傾向がみられ，シイ類も同様である。反対に，コナラ亜属は試料６～８において，上部に向かい増加しており，コウヤマキ属にも同様の傾向がみられる。草本類では，イネ科が試料６～８において20～30％とやや多く検出され，カヤツリグサ科が次いで多くみられるが，上位に向かい減少する傾向がみられる。その他では，ヨモギ属を



第211図　Ａ地点の花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）



第212図　B地点の花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

含め，キク亜科がほぼ安定して検出されており，水生植物のサジオモダカ属が試料８より１点だけ検出されている。

３．プラント・オパール分析

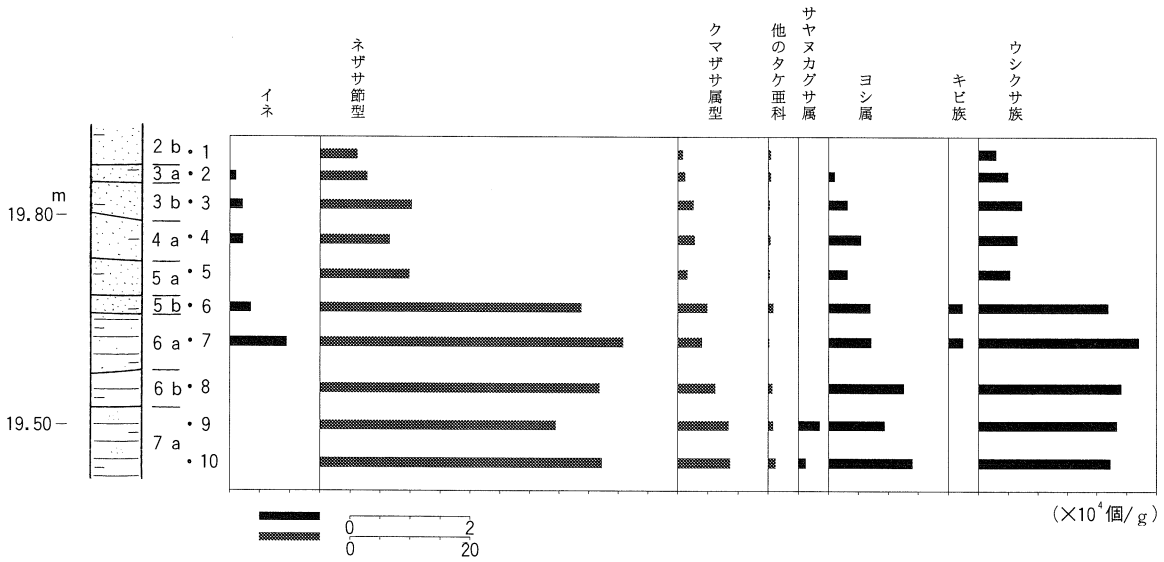
１）分析方法

先に示したＢ地点の10試料（１～10）およびＡ地点の４試料（12，14，16，17）について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり，約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え，脱有機物処理を行う。処理後，水を加え，超音波ホモジナイザーによる試料の分散後，沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し，検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが300個に達するまで行った。

試料番号	イネ（個／ｇ）	ネザサ節型（個／ｇ）	クマザサ属型（個／ｇ）	他のタケ亜科（個／ｇ）	サヤヌカグサ属（個／ｇ）	ヨシ属（個／ｇ）	キビ族（個／ｇ）	ウシクサ族（個／ｇ）	不明（個／ｇ）
1	0	61,300	7,800	3,900	0	0	0	2,900	10,700
2	1,000	77,600	11,800	3,900	0	1,000	0	4,900	18,700
3	2,100	151,900	26,000	2,100	0	3,100	0	7,300	22,900
4	2,200	115,400	28,000	3,200	0	5,400	0	6,500	12,900
5	0	148,700	15,800	2,100	0	3,200	0	5,300	20,000
6	3,500	438,000	48,500	8,100	0	6,900	2,300	22,000	41,600
7	9,400	506,300	39,800	1,200	0	7,000	2,300	27,000	41,000
8	0	469,000	61,900	6,900	0	12,600	0	24,100	47,000
9	0	392,500	83,900	8,200	3500	9,300	0	23,300	38,400
１０	0	471,100	86,500	11,700	1200	14,000	0	22,200	26,900
１２	0	459,800	71,400	7,800	0	1,100	0	23,400	58,000
１４	0	375,800	68,600	9,000	0	1,100	0	15,800	42,800
１６	2,200	152,900	40,900	2,200	0	3,200	0	17,200	19,400
１７	1,900	605,100	135,700	5,700	0	2,900	0	41,100	46,800

表２　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数



第213図　日暮・松林遺跡のプラント・オパール分布図

2）結果

同定・計数された各分類群のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め，それらの一覧を表２に，また，Ｂ地点についてはそれらの分布を第213図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

Ｂ地点：検鏡の結果，試料２～４および６，７よりイネが検出された。そのうち，試料７では9,000個を越え多産しているが，試料６は3,500個，他は2,200個以下である。イネ以外についてみると，ネザサ節型が非常に多く，下位の試料6～10ではほぼ400,000個以上である。それに比べ上位では100,000個前後に減少している。同様の傾向がウシクサ族にもみられ，下部では25,000個前後であるが上部では5,000個前後に急減している。また，ネザサ節型やウシクサ族ほどではないが，同様の傾向がクマザサ属型やヨシ属にもみられ，上部に向かい減少している。

Ａ地点：試料16，17よりイネが若干検出されている。試料16を除く他の３試料ではネザサ節型が非常に多く，特に試料17ではネザサ節型だけではなく，クマザサ属型やウシクサ族も他の試料に比べ突出して多く検出されている。

４．稲作について

上記したように，イネのプラント・オパールは試料７が最も多く9,400個で，他は3,500個以下である。ここで検出個数の目安として水田址の検証例を示すと，福岡市の板付北遺跡では，イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と，実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。こうしたことから，稲作の検証としてこの5,000個を目安に，プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。日暮・松林遺跡において，畦畔とみられる遺構が検出された５ａ層についてみると，Ａ地点の試料17より若干のイネのプラント・オパールが検出されているのみであり，上記からすると本層における稲作の可能性は低いと判断される。また，Ｂ地点の上位層においても，検出個数が少ないことから，稲作の可能性は低いと思われ，現水田耕作土（１ａ層）からの落込みや，他の地点から洗い出され堆積（二次堆積）したものと推測される。

試料7，すなわち６ａ層からは9,400個のイネのプラント・オパールが検出されており，稲作の可能性が検出個数からは推測される。時代については遺物が検出されていないことから不明であるが，浴・松ノ木遺跡（高松市教育委員会ほか　1994）などでは弥生時代前期の水田遺構が検出されており，浴・長池遺跡（高松市教育委員会ほか　1993）では縄文時代晩期～弥生時代前期初頭に比定されている土器とともに鋤状木製品が検出され，６ａ層はこうした時代にあたる可能性もあろう。しかしながら，６ａ層の稲作についてはイネのプラント・オパールの検出個数のみからの判断であり，他方面からの確認作業が望まれる。

５．遺跡周辺の古植生

花粉分析結果で示したように，上位試料からは少量の花粉化石しか得られなかった。また，プラント・オパールも上位と下位で検出量が一変しており，さらに，上位では各分類群とも試料３，４でピークを示すなどほぼ同様の産出傾向がみられる。こうしたことは，各植物が増加・減少したということではなく，単に３ｂ・４ａ層堆積期（試料３，４）に各プラント・オパールが同じように多く運ばれ堆積したためではないかと推測される。さらに堆積速度も速く，花粉化石もプラント・オパール

も多く埋積される環境ではなかったと思われる。こうしたことから，この時代における遺跡周辺の古植生について述べることは難しく，比較的多く花粉化石が得られた下位層の古植生について以下に示す。

Ｂ地点の下位層（試料６～10）においてはアカガシ亜属やシイ類の優占で特徴づけられ，遺跡周辺丘陵部ではこれらを主体とした照葉樹林が分布を広げていた。また，スギやヒノキ類を交えたツガ属・コウヤマキ属といった温帯針葉樹類も森林を形成していた。さらにコナラ亜属も上位（弥生時代後期）に向かい増加している。先にも記したが，弥生時代前期？の遺跡周辺では水田稲作が行われていた可能性があり，農具に利用されたと推測されるアカガシ亜属やシイ類などの照葉樹林はその影響をうけ，林分は縮小した。コナラ亜属の増加は，この跡地にコナラ亜属が侵入し，二次林を形成したことによると推測される。また，一部にはネザサ節型のササ類（ゴキダケ・ケネザサなど）やウシクサ族（ススキ・チガヤなど）が生育する開けた草地的なところも存在していたとみられる。なお，クマザサ属型のササ類（ミヤコザサ・チマキザサなど）は主に森林の林下に生育していたと推測される。

一方，低地部ではハンノキ属が湿地林を形成しており，ヨシ属（ヨシ・ツルヨシなど）やカヤツリグサ科も多くみられるなど，湿地的環境が広がっていたとみられる。その後，ハンノキ湿地林は急速に減少し，水田稲作が行われ始めたと推測される頃よりヨシ属も生育地を狭めていった。この水田やその周囲にはオモダカ属・サジオモダカ属・キンポウゲ科・セリ科・ヨモギ属などの雑草類が生育していたであろう。なお，花粉化石の保存状態は悪く，細かな植物遺体も多く含まれていることなどから，常時水がついている様な環境ではなく，乾陸化していた時期もあり，土壌化作用をうけていたとみられる。

６．まとめ

プラント・オパール分析から，畦畔状遺構がみられる５ａ層（弥生時代後期）における稲作の可能性は低いと判断される。

プラント・オパール分析から，６ａ層において稲作の可能性が示され，時期としては弥生時代前期あるいは縄文時代晩期～弥生時代前期初頭にあたる可能性がある。

Ｂ地点下部層の時期（弥生時代後期以前から後期にかけての頃）の遺跡周辺丘陵部の古植生は，照葉樹林が優勢であり，温帯針葉樹林も分布を広げていた。

同じ頃の低地部はハンノキ属湿地林やヨシ属の群落が多くみられたが，水田稲作が行われるようになってこれらは縮小した。

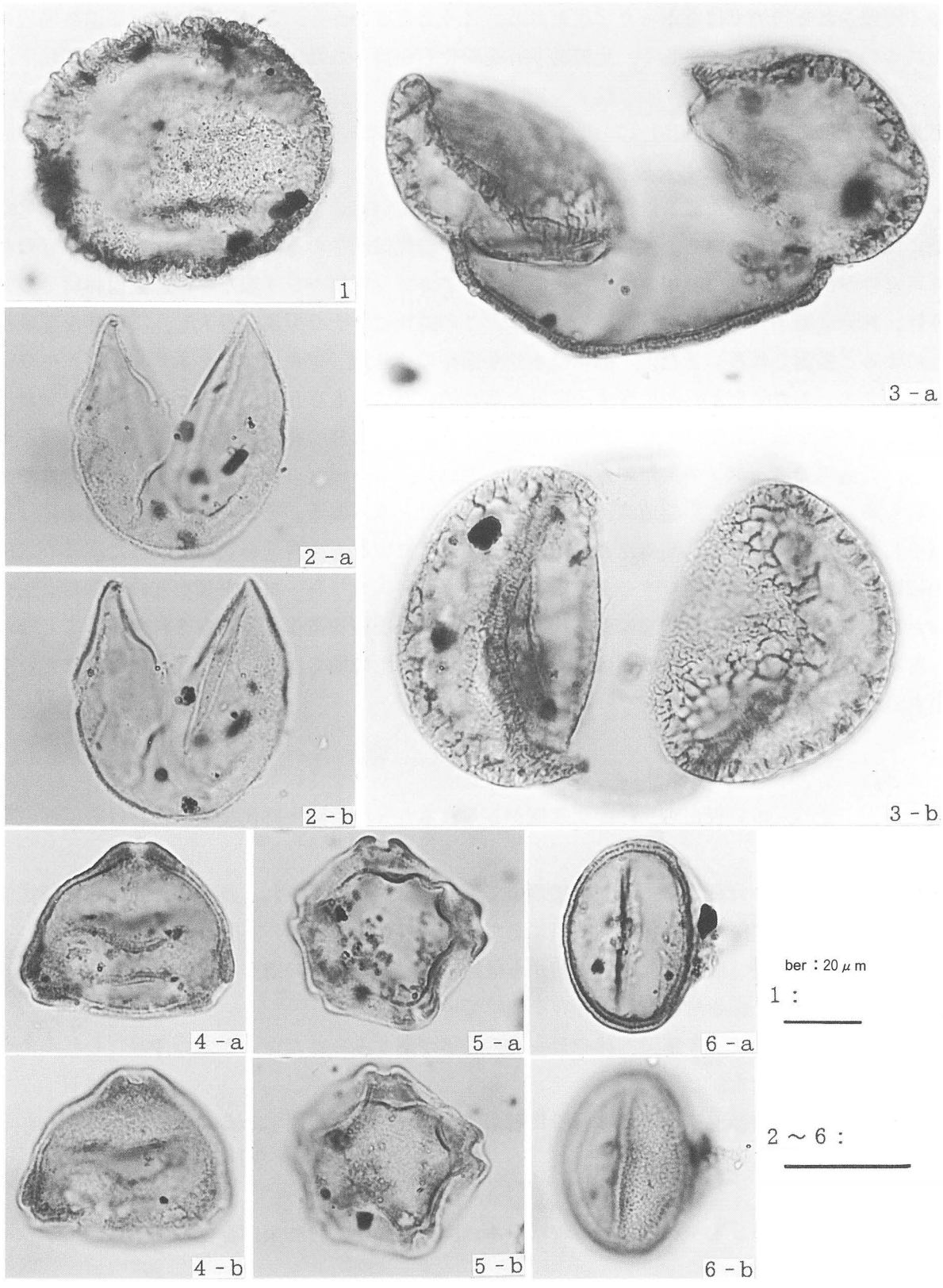
弥生時代後期以降の植生については花粉化石が殆ど得られず，不明である。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用―先史時代の水田址探査―．　考古学ジャーナル，227，ｐ．２－７．

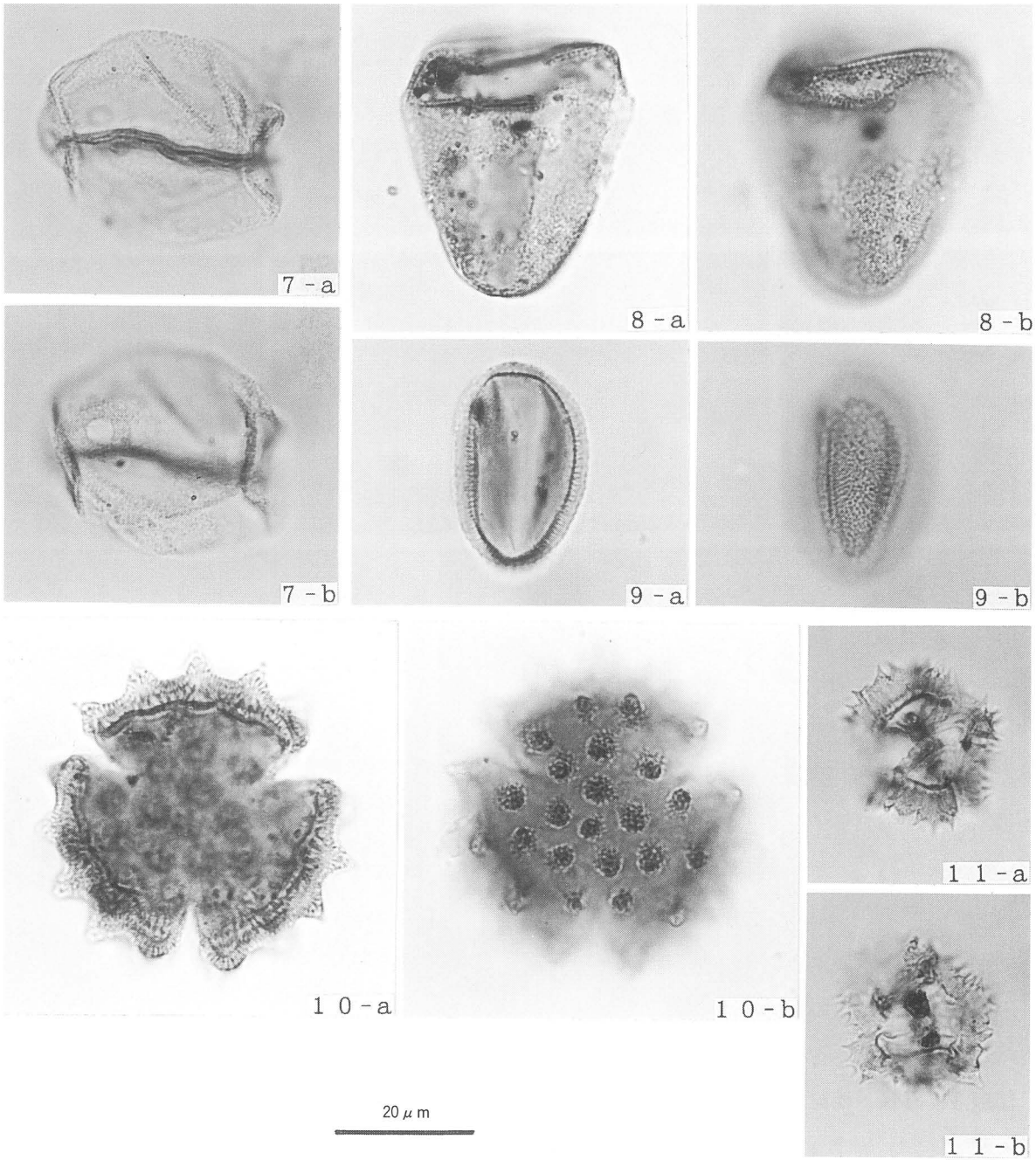
高松市教育委員会・建設省四国地方建設局（1993）一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊 浴・長池遺跡．　高松市埋蔵文化財調査報告　第21集，251ｐ．

高松市教育委員会・建設省四国地方建設局（1994）一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 浴・松ノ木遺跡．　高松市埋蔵文化財調査報告　第23集，146ｐ．



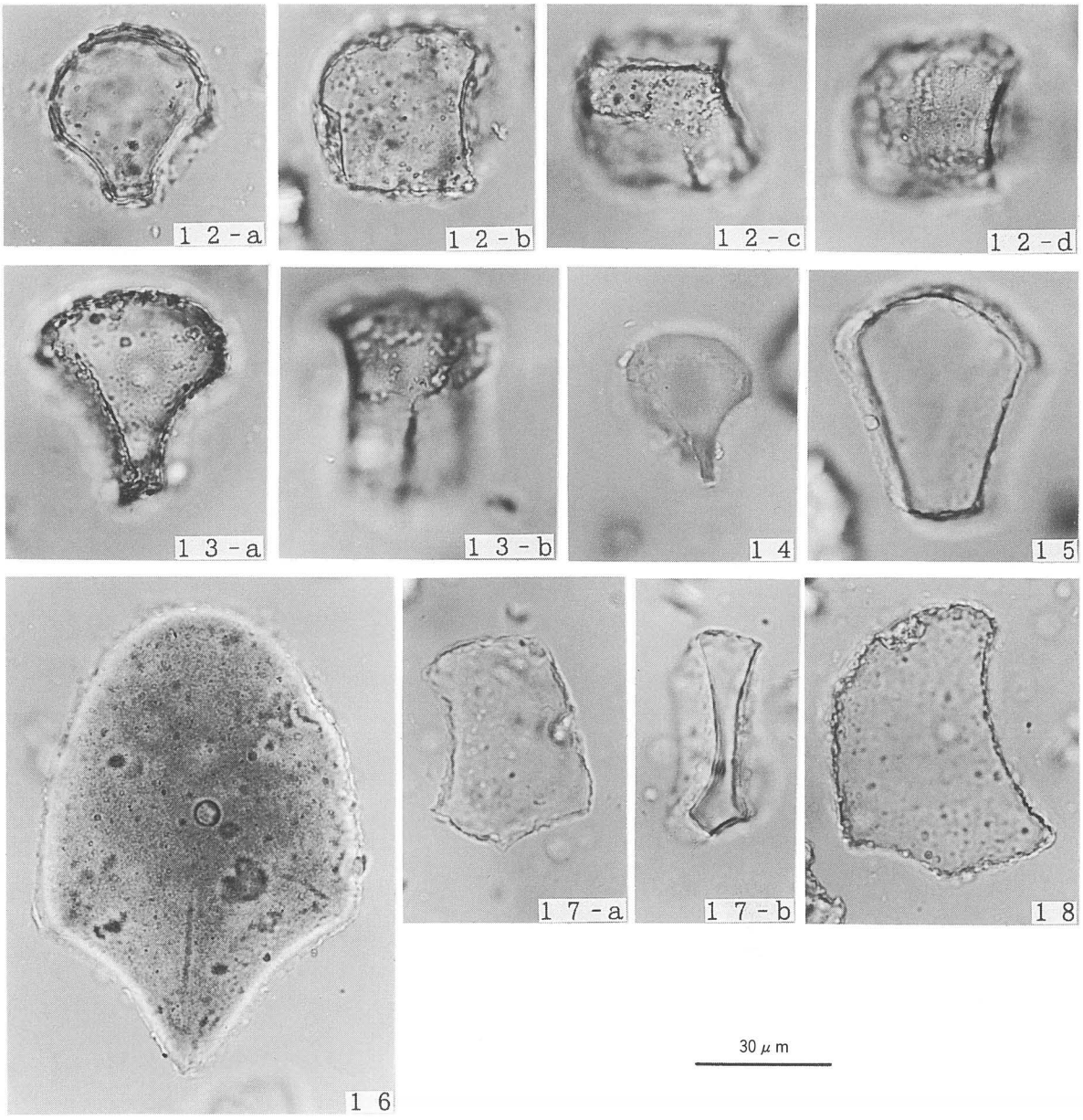
図版１　日暮・松林遺跡の花粉化石

1：ツガ属　PLC. SS　1939　試料６
2：スギ　PLC. SS　1947　試料10
3：マツ属　PLC. SS　1945　試料７
4：ヤマモモ属　PLC. SS　1943　試料８
5：ハンノキ属　PLC. SS　1944　試料８
6：コナラ属アカガシ亜属　PLC. SS　1942　試料７



図版 2　日暮・松林遺跡の花粉化石

7：イネ科　PLC. SS　1946　試料 7
8：カヤツリグサ科　PLC. SS　1941　試料 7
9：ヨモギ属　PLC. SS　1949　試料10
10：ヨモギ属を除くキク亜科　PLC. SS　1940　試料 7
11：タンポポ亜科　PLC. SS　1950　試料 6



図版３　日暮・松林遺跡のプラント・オパール

12～14：イネ（12－ａ、13－ａ、14：断面、12－ｂ、13－ｂ：側面、
12－ｃ：表面、12－ｄ：裏面）
12：試料７、13：試料６、14：試料３
15：ネザサ節型（断面）　試料10
16：ヨシ属（断面）　試料９
17、18：クマザサ属型（17－ａ、18：断面、17－ｂ：側面）
17：試料３、18：試料７

第2節　日暮・松林遺跡出土木製品の樹種

汐見　　真（㈱吉田生物研究所）
岡田　文男（京都造形芸術大学）

日暮・松林遺跡出土の木製品の樹種の調査結果を報告する。

調査方法は，木製品の表面から安全カミソリで木口，柾目，板目の各切片を採取し，検鏡したものである。

マツ科マツ属「二葉松類」（Pinus sp.）

試料　木樋・枕

木口では仮導管を満ち，早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮導管の内は内腔向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のものと，水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。

以上の検鏡結果から，上記試料はマツ科マツ属「二葉松類」と考えられる。

スギ科スギ（Cryptomeria japonica D. D on）

試料　木樋・本体

木口では仮導管を持ち，早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。

以上の検鏡結果から，上記試料はスギ科スギと考えられる。

参考文献

島地　謙・伊藤隆夫　「日本の遺跡出土木製品総覧」　有山閣出版　(1988)
島地　謙・伊藤隆夫　「図説木材組織」　地球社　(1982)
北村四郎・村田　源　「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」　保育社　(1979)

使用顕微鏡

Nikon
MICROFLEEX UFX Type 115

第 5 章

調査の成果と問題点

第１節　　日暮・松林遺跡の歴史的変遷

１．日暮・松林遺跡の地形変遷

日暮・松林遺跡は南北長約580ｍを測る細長い調査区であり，変化のある地形上に立地する。ここでは，発掘調査で明らかになったより細かい地形と地形環境分析を合わせて，日暮・松林遺跡における地形の変遷を探ってみたい。

１．周辺の地形環境分析

地形環境分析は，地形環境考古学の一つであり，いくつかの分析法があるが，微地形環境分析と極微地形環境分析について述べる。微地形環境分析は10^2オーダーの地形発達史を研究するもので，その方法としては10cm等高線図・空中写真の判読・現地踏査・ボーリングステッキによる試錐が挙げられる。さらに，発掘調査の進展と共により細やかな分析をするのが，極微地形環境分析である。高松平野の地形環境分析は，高橋　学氏が精力的に研究されており，ここでは高橋氏のデータをもとに論を進める[1)]。

遺跡を中心とした周辺部の空中写真を見ると，遺跡の北端と南端に帯状の不規則な水田が蛇行しながら北東方向に延びているのがわかる。旧河道であることは明白である。北端の旧河道は，本遺跡の西側ではほぼ直線的に南に延び，北東側では６回の大きな湾曲を経て現在の長池に達している。南端の旧河道は，本遺跡の東側にある微高地によって流れが二手に分かれ，北東側で再び合流してから若干蛇行しながら現在の下池に達している。ここで高橋氏の作成した微地形分類図を観ると，この２条の旧河道が明瞭に表されており，その間の地形は埋没自然堤防と埋没後背湿地に分類されている。すなわち，本遺跡は旧河道・埋没自然堤防・埋没後背湿地という三つの異なる地形上に立地していることが考えられる。

２．遺跡内の地形復原

発掘調査の結果からみた細かな地形は第３章に概述しているが，その概要を簡略に言うと次のとおりである。調査区の北端と南端には異なる時代の２条の旧河道が南西－北東方向に流れ，北端の旧河道の北側と２条の旧河道に挟まれた部分は微高地となっている。しかし，その微高地は一様でなく，Ｄ地区のほぼ中央より北側の微高地は黄白色シルト・灰色シルトから形成されているが，南側では黄灰色シルトの下に暗褐色シルト質極細砂が堆積しており，遺構の底面検出がやや難しかった。南端の旧河道の東側は，砂礫層による微高地である。また，Ｂ－２地区の微高地では微低地帯の開析がみられ，洪水砂層やシルト質極細砂の堆積がある。

３．遺跡内の地形変遷

検出された遺構・遺物を基に極微地形環境分析と地形の変遷を考えてみよう。

弥生時代中期～後期

調査区北端に当たるＡ地区東側とＢ地区北側には，旧河道（ＳＲ01）が流れている。その河床近くから弥生時代中期～後期の土器が多量に出土し，この頃からＳＲ01の埋没が始まった。南側の微高地にはＣ地区の16棟の掘立柱建物群が建っている。

弥生時代後期

ＳＲ01はほぼ半分くらいまで埋没するが，依然として河川の機能を有している。南岸の微高地のＢ－２地区は微低地帯の開析があり，そこに３面の遺構面が確認された。Ｄ地区には数棟の掘立柱建物が点在する。プラント・オパール分析では微低地帯に１枚の水田面が確認されているが，発掘調査では時間的制約等によって検出できなかった。

古墳時代後期

調査区南端のＤ地区において，南西から北東に流れる旧河道（ＳＲ02）の最深部は埋没が始まる。

古代

ＳＲ01は完全に埋没し河川機能を失うが，南側の微高地に比べると依然として低く，微低地としてその痕跡を残している。ＳＲ02の埋没は緩やかな速度で進行している。微高地上には用水路である溝が掘られる。

中世～近世

ＳＲ02の埋没は完全に終え，ほぼ平坦になる。洪水等による土砂の堆積が繰り返され，大規模な条里型水田が営まれる。

４．地形環境分析と発掘調査結果との対比

１の分析結果と３の発掘調査成果を対比して，地形環境分析の有効性の有無を検討してみよう。結論を言うと，地形環境分析の結果と発掘調査による地形復原は同一の結果となった。すなわち，地形環境分析の有効性が立証されたのである。

分析による２条の旧河道は，発掘調査によって北側がＳＲ01，南側がＳＲ02として旧河道であることが確認された。遺跡の北端部は砂礫層が盛り上がっており，埋没中州である。旧河道に挟まれた部分に関しては，分析結果と同じく北側―埋没自然堤防・南側―埋没後背湿地であることが確認され，竪穴住居・掘立柱建物・土坑・井戸・墓・溝等の多数の遺構が検出された。

微地形環境分析は，試掘調査の地点選定や発掘調査の範囲・方法を決定する際に有力な情報を提供するのである。その方法も10㎝等高線図作成と空中写真の判読という簡単な作業であり，誰にでも行うことができる。これによってある程度までの地形の分析は可能であり，今後とも大いに活用すべきである。

２．日暮・松林遺跡における遺構の変遷

遺構の変遷は，本節１の地形の変遷と大いに関連するものであり，重複する部分も多い。ここでは，弥生時代中期から近代までの遺構を時期別にⅠ～ＸⅠ期に分類し，その変遷を見ることとする。

Ⅰ期（弥生時代中期）

本遺跡において人間の営みである遺構が最初に確認された時期である。遺跡の北側には厳密な意味で遺構ではなく自然地形である旧河道のＳＲ01が検出され，その河床から中期中葉前半から後期前半に比定される壺・甕等の土器が出土した。南側の微高地のＣ地区では１軒の竪穴住居と16棟の掘立柱建物群が検出される。

Ⅱ期（弥生時代後期）　―第３面

ＳＲ01は徐々に埋没しながらも河川としての機能を持っている。微高地の北端に当たるＢ－２地区にある微低地帯にＳＤ22～26とＳＫ09が検出される。溝からの遺物の出土はないが，ＳＫ09からは後期の土器が出土した。これらの遺構はⅣ期の溝とⅤ期のＳＫ01とほぼ同一位置である。

Ⅲ期（弥生時代後期）

Ⅱ期を覆う土層のプラント・オパール分析によって，１枚の水田面が確認された。第４章第１節の花粉・プラント・オパール分析の報告の中で，この水田の時期を弥生時代前期，あるいは縄文時代晩期～弥生時代前期初頭の可能性があると書いているが，ここにおいて弥生時代後期であると訂正する。これに関して報告者に責任はなく，全て調査担当者側の認識の甘さと不注意から生じたものである。分析を依頼した時点では，この面より上層から弥生時代前期後半～中期にかけての遺物が出土したた

め，この面をそれ以前のものと考えていた。しかし，その後の調査により，これらの遺物は河川の氾濫によって運ばれてきたものであり，さらに，弥生時代後期のⅡ期が確認された。本遺跡の東側および南東側には弥生時代前期の遺跡の存在が推測される。

Ⅳ期（弥生時代後期）　—第２面

Ⅱ期とほぼ同じ範囲にある微低地帯において，ＳＨ06～09の竪穴住居・ＳＥ01・ＳＤ15～21・ＳＰ04を含むピット等の多数の遺構が検出された。弥生時代の集落である。ＳＨ06とＳＨ07が非常に接近していることと溝に切り合いがあることより，さらに細分される可能性が考えられる。

Ⅴ期（弥生時代後期）　—第１面

ＳＲ01より南側全域にわたって多数の遺構が検出された。特に，Ｂ－２地区ではＳＨ01～05・ＳＴ01・ＳＤ05～09・土坑等が検出され，Ⅳ期同様に集落域である。これらの遺構は一部に切り合いがあり，細分される可能性が考えられる。

Ⅵ期（古墳時代後期）

調査区南端に検出されたＳＲ02の最深部の埋没が始まる。河床の砂礫層から完形および完形に近い須恵器の高杯・杯身・杯蓋が一ヶ所より出土した。

Ⅶ期（古代）

弥生時代後期までに半分以上埋まっていたＳＲ01の上部が埋没し，河川としての機能を失う。遺跡ほぼ中央部のＣ地区において，ＳＤ34～36が検出される。

Ⅷ期（12～13世紀）

遺構の中心が調査区南部のＤ地区に移動する。ＳＤ43が数条に分流しながら北東方向に延び，その上面より多量の瓦器椀が出土した。さらに数条の溝も検出される。ＳＲ02の埋没がこの頃に終了し，ほぼ平坦になる。

Ⅸ期（14世紀～）

Ｃ地区の北端と南端，Ｄ地区中央やや南寄りの位置で条里地割に基づく大規模な溝が東西方向に検出される。この３本の溝の芯芯間の距離は，109m前後を測る。ＳＤ37は，幅3.90mで深さ0.50mを測る。出土した土器は14世紀前後のものが最も多いが，図示していないが染付碗や陶磁器片も若干含まれており，近世まで溝として機能していたと考えられる。

Ⅹ期（中世後半～近世）

遺跡のほぼ全域にわたって溝・土坑が点在し，数面の条里型水田がある。ＳＤ59は，木樋を有する。

ＸⅠ期（近代）

Ｄ地区において規則的に並んだ粘土採掘跡があり，瓦の原料として粘土が掘られていた。また，現有のコンクリート水路になる以前の水路であるＳＤ60の西岸の石積みの一部が検出された。

第２節　　弥生時代の集落構造

日暮・松林遺跡において最も多くの遺構が検出されたのは，弥生時代中期～後期である。本節では，竪穴住居と掘立柱建物を中心として弥生時代の集落の様相について簡単に述べたい。

１．竪穴住居について

竪穴住居は合計10軒検出され，全てが微高地上に立地する。その分布は，Ｂ－２地区の９軒とＣ地区の１軒の２グループに分けられる。Ｃ地区の１軒は時間的・空間的にも他の住居と異なり，掘立柱建物群と密接な関係を持つと考えられるため，改めて述べることとする。

Ｂ－２地区の竪穴住居は，第１面で検出されたＳＨ01～05と第２面で検出されたＳＨ06～09の２グループに検出面によって分けられるが，大きな時期差はほとんどなく弥生時代後期の範疇に収まる。さらに，各グループにおいて切り合い関係や位置関係から細分されると考えられる。

各住居に関しては第３章に詳しく記述しており，ここではその特徴を挙げてみよう。しかし，ＳＨ09は壁溝の一部のみの検出であり不明な部分が多いため除外する。

平面形は，方形と円形のものがある。円形の住居の大部分は正円であるが，ＳＨ04はやや不整な小判形を呈している。

方形 ――― ＳＨ01・05
円形 ――― ＳＨ02・03・04・06・07・08

規模は，床面積を算出してその大小を決めることとする。床面積が最も大きいのはＳＨ02であり，76.94㎡を測る。反対に最も小規模の住居は11.9㎡を測るＳＨ01である。その他の住居はＳＨ03－32.15㎡，ＳＨ04－22.05㎡，ＳＨ05－22.75㎡，ＳＨ06－32.15㎡，ＳＨ07－22.89㎡，ＳＨ08－38.46㎡を測り，20～40㎡の範囲内である。このようにＳＨ02は他の住居の２倍ないし３倍の面積であり，非常に大きく，規模において他の追随を許さない。

柱穴を有しないＳＨ01と柱穴を持つＳＨ02～08に大きく分けることができ，その柱穴の位置によって，３タイプに分類される。まず，柱穴を住居の平面形と同じく円形に配置するＳＨ02・06・07がある。柱穴の本数は，ＳＨ02が９本，ＳＨ06・07が６本を数える。９本の場合は柱穴間を40°の角度によって分割しており，６本の場合は60°である。次に直線的に配置しているのが，ＳＨ03・05である。ＳＨ03は円形の平面形に対して，柱穴は南北方向に３本づつ直線的に並んでいる。ＳＨ05は方形の平面形の四隅に柱穴がある。最後は，ピットは検出されるが不規則な配置をしているＳＨ04・08がある。壁溝に関しては，全く検出されなかったＳＨ01・04・08と検出されたＳＨ02・03・05・06･07に分けられる。ただし，ＳＨ08は検出面積が非常に狭く，未検出部分に壁溝がある可能性もある。壁溝の位置で最も多いのは，壁直下であり平面形に規制される。ＳＨ02・06・07は円形の壁溝が全周する。ＳＨ03は円形の住居であるにもかかわらず壁より内側の位置に方形の壁溝が検出された。ＳＨ05は住居の北側にのみ壁溝が見られる。

住居の中央，ないしやや北側には円形・不整円形の炉址が検出された。確認された炉址には，ほとんど掘り込みを持たず平面的な形態のものと焼土ピットと呼称する明確に深い凹みを持つ形態のものがある。前者はＳＨ02・03・04であり，後者はＳＨ06・07である。本遺跡では，深さに関係なく全ての炉址の内部には若干の焼土や炭化材が含まれていた。

出土遺物に関して注目すべき点は，出土状況と特色ある遺物の２点である。出土状況は住居によって異なっている。すなわち，ＳＨ01は少量の遺物が埋土中より出土し，ＳＨ02では多量の土器片がほ

とんど床面に密着する状態であった。また，ピットの中にも数点の土器が出土した。ＳＨ03では多量の土器片が床面から浮いた状態で検出され，床面直上のものはほとんど無かった。ＳＨ04はＳＨ01と同様に埋土中の出土であり，ＳＨ05～09は遺物の量は少ないが床面直上から出土した。このように遺物の出土状況は，床面直上の住居とＳＨ03のようにある程度浮いた状態の住居，さらに埋土中出土の住居の３形態に分けることができる。

出土遺物の中の土器以外で特徴的な点は，１．鉄器・石器が非常に少ない　２．土錘・石錘の出土する住居がある　３．珪化木を砥石とする住居があるの３点である。

まず，鉄器に関しては住居だけでなく全ての遺構を含む遺跡全体としても非常に少なく，出土したのはＳＨ02の鎌とＳＤ05の刀子の２点のみである。ＳＲ02からは鉄器ではなくフイゴの羽口の破片が出土しているが，時代的には全く住居と隔たっている。石器の出土は，ＳＨ02に柱状片刃石斧・石槍・石鏃・砥石・敲石各１点，ＳＨ03に砥石１点，ＳＨ06に石槍２点，ＳＨ07に削器１点である。このように住居からの出土は少ないが，包含層からはほぼ完形の太型蛤刃石斧・石鏃・磨製石庖丁・敲石・石錐が出土している。

２の土錘・石錘に関しては，ＳＨ02から長さ7.4cm，直径4.1cm，重さ137.8ｇを測る大型の土錘１点が出土し，ＳＨ03から完形の石錘２点が出土する。２点ともに直径7.0cm以上で重さ312ｇと255ｇを測り，側面に溝が巡る。また，住居をはじめとする弥生時代の遺構の中から製塩土器が出土し，特にＳＰ04からは完形の製塩土器が出土している。弥生時代の海岸線は栗林公園から松縄町，久米池を結ぶ線より北側にあったと考えられており，本遺跡は海岸線よりかなり南側に離れた位置にある。塩は人間が生きるために必要不可欠な物であり，海岸線から遠く離れた本遺跡においても製塩土器が出土するのは理解できることである。しかし，漁具については，遺物の量から半農半漁的な性格を有する集落であると断定することはできない。一部の住居ではあるが，生活道具の中に漁具が含まれており，農業のみ行う農耕集落でなく漁業も部分的に行われていたと考えられる。

最後の珪化木は，ＳＨ03・08から珪化木を利用した砥石が出土し，ＳＤ05からは２点の細片が出土した。地中に埋没した樹幹に地下水に溶けた珪酸塩がしみこんで珪質化した珪化木は，産出する地域が限定されており，本遺跡周辺では産出しない。これらの珪化木は他地域との交流，あるいは交易によってもたらされた物と考えられる。

２．竪穴住居を中心とする集落の構造

第１面では，竪穴住居と同時にＳＴ01，ＳＢ01･02，ＳＫ01・02，ＳＰ01～03，ＳＤ05～09の遺構が検出された。竪穴住居同士の切り合い，住居と切り合い関係のある遺構は以下の４例である。後者が前者を切っていることを示す。

①ＳＨ02・ＳＤ05　→　ＳＨ03　　②ＳＨ05・ＳＤ07　→　ＳＨ04

③ＳＨ01　→　ＳＴ01　　④ＳＢ01　→　ＳＨ02

①に関して，直接的にはＳＨ02とＳＨ03は切り合っていないが，ＳＨ02の排水溝であると考えられるＳＤ05がＳＨ03に切られている。ＳＤ05とＳＨ02の出土土器の中に接合する土器があった。間接的であるが，ＳＨ02はＳＨ03に切られることを示している。同様に②の場合も，ＳＤ07はＳＨ05の排水溝であると考えられるため，ＳＤ07とＳＨ05を並べている。ＳＤ07は西側でＳＤ05と合流しており，二つの溝は同時期のものである。したがってＳＨ02とＳＨ05も同時期である。さらに，ＳＤ05のうち東方向に延びる溝はＳＨ04を迂回するように曲がっており，ＳＤ05を掘削する時点で何らかの形でＳＨ04の存在が意識されていたと考えられる。以上の要素を基に，これらの遺構を古い順に並べると

次のようになる。ただし，これらの遺構間の時間的差はほとんどないと思われる。

ＳＤ06 → ＳＨ01.02.05・ＳＤ05.07 → ＳＨ04 → ＳＨ03・ＳＴ01

第１面で特徴的なことは，ＳＨ02とＳＴ01である。ＳＨ02は他の竪穴住居と比較すると倍以上の床面積を持つ大型住居であり，完形の土器はないが多量の土器片が床面直上から出土し，さらに他の住居では見られない石斧・鉄鎌を持っていた。土器の中には第17図1.4のように複合口縁を持つ壺や線刻のある２が含まれる。このようにＳＨ02は，規模だけでなく出土遺物においても集落の中心的存在であると考えられる。

高松平野での周溝墓の検出例はわずかであり，浴・長池遺跡の弥生時代中期前半の２基[2)]と旧空港跡地遺跡において弥生時代後期～古墳時代前期の７基の周溝墓[3)]が確認されている。本遺跡のＳＴ01は墳丘を削平されており，主体部は検出できなかった。その規模は東西6.40m，南北5.10mを測る隅丸長方形を呈する。周溝内には底面より若干浮いた状態で土器が出土しており，供献用土器の性格を有する。ＳＴ01は竪穴住居群に近接する位置にあり，この集落と密接な関係があると考えられる。

第２面では，ＳＨ06～09とＳＥ01，ＳＤ15～21，ＳＰ04・05などが検出された。住居と切り合う遺構はＳＨ06に切られるＳＤ17のみであるが，壁溝の一部のみ検出され住居としての平面形や規模が不明であるＳＨ09はＳＨ06・09に切られている。また，ＳＨ06とＳＨ08は非常に接近しすぎており，同時併存とは考えにくい。ＳＤ18はＳＨ06の中央から掘り込みが始まっており，ＳＨ06の排水溝である。

第２面で注目すべき点は，井戸の存在である。ＳＥ01は5.40×7.00mの楕円形を呈し，深さ0.80mを測り，埋土は中～細砂が大部分を占める。その立地する所は開析による若干の凹地の最端部に当たり，最も湧水の出る位置である。遺物は中央上面より弥生時代前期末の壺１点のみであるが，これは河川の氾濫によって運ばれてきたものであり，ＳＥ01と直接関係する遺物でないと考える。ＳＥ01は同じ検出面である竪穴住居と同時期であり，集落を形成する一要素である。

３．掘立柱建物について

Ｃ地区においては，弥生時代中期前葉～後葉に比定される掘立柱建物16棟と竪穴住居１棟が検出され，集落を形成している。これらの遺構の中で切り合っている遺構は，ＳＨ10とＳＢ14，ＳＢ07とＳＢ18，ＳＢ06とＳＢ13の３例である。柱穴内からの遺物の出土がほとんど見られない掘立柱建物も多く，新旧関係は不明である。これらの分布状況を見ると，ＳＨ10を境にして南側と北側に二分されていることが分かる。南側のグループはＳＢ03～07・ＳＢ13・ＳＢ18であり，北側のグループはＳＨ10・ＳＢ08～12・ＳＢ15～17である。二つのグループの間には約17mの空間が開いている。

Ｃ地区で唯一の竪穴住居であるＳＨ10は直径6,30mを測る円形の竪穴住居で，床面積は31,15m²である。８本の柱穴がほぼ等間隔に住居の平面形と同じ円形に配置され，中央にはやや深い凹みがあるが焼土や炭化物を含まない中央ピットがある。１×１間のＳＢ14と切り合い，北側にはＳＢ08が近接する。時期的には，ＳＨ10と掘立柱建物は同時期である。

次に，掘立柱建物について考えてみよう。16棟の掘立柱建物を主軸方位でグルーピングする。

① Ｎ－80°－Ｅ 04，11，14
② Ｎ－85°－Ｅ 12
③ Ｎ－90°－Ｅ 03，05，06，07，08，10，16，18
④ Ｎ－98°－Ｅ 15，17
⑤ Ｎ－113°－Ｅ 09
⑥ Ｎ－35°－Ｗ 13

東西方向に主軸を持つ掘立柱建物は，ＳＢ13を除く15棟であり，その内の半分の８棟はＮ－90°－Ｅを示す建物であり，その他の建物もそれから10°前後の範囲内である。

①グループは，南側に１棟，北側に２棟ある。柱穴の位置関係を見ると，ＳＢ04のＰ－２とＰ－５（以下，掘立柱建物の北西隅の柱穴をＰ－１とし，時計回りに順次番号を付けることとする）を結ぶ線を南に延ばすと，ＳＢ03のＰ－７とＰ－８の線上と重なる。ＳＢ11のＰ－３とＰ－４を北に延ばすとＳＢ16のＰ－１・Ｐ－４の線上になり，南に延ばすとＳＢ10のＰ－３・Ｐ－６の線上，ＳＢ08のＰ－２・Ｐ－６の線上になる。

②グループはＳＢ12のみであり，Ｐ－１・Ｐ－10の線を北に延ばすとＳＢ15のＰ－６とＳＢ17のＰ－２の線上になり，ＳＢ12のＰ－３・Ｐ－８の線を北に延ばすとＳＢ15のＰ－２とＳＢ17のＰ－３と重なる。

③グループは，北側にＳＢ08．10．16，南側にＳＢ03．05．06．07．18がある。ＳＢ05の北辺を東に延ばすとＳＢ06の南辺と重なり，ＳＢ10の南辺を東に延ばすとＳＢ09のＰ－１に至る。ＳＢ03のＰ－１・Ｐ－13を北に延ばすとＳＢ05のＰ－３・Ｐ－６の線上となり，同様にＳＢ03のＰ－３・Ｐ－11はＳＢ05のＰ－４・Ｐ－５の線上となる。ＳＢ03のＰ－７・Ｐ－８を北に延ばすとＳＢ16のＰ－２・Ｐ－３の線上となる。ＳＢ07のＰ－１・Ｐ－４を北に延ばすとＳＢ08の東辺とＳＢ17のＰ－１を結ぶ線となり，同様にＳＢ07のＰ－２・Ｐ－３はＳＢ09のＰ－１・ＳＢ15の西辺・ＳＢ17のＰ－１を結ぶ線になる。ＳＢ08のＰ－１・Ｐ－７を北に延ばすとＳＢ10のＰ－３・Ｐ－６を結ぶ線となり，同様にＳＢ08のＰ－２・Ｐ－６はＳＢ10の東辺と重なる。

④グループは北側のみにあり，ＳＢ17のＰ－１・Ｐ－８を南に延ばすとＳＢ10のＰ－２に至り，ＳＢ17の東辺を南に延ばすとＳＢ15の西辺に重なり，さらに南のＳＢ04のＰ－１・ＳＢ03のＰ－３・Ｐ－12を結ぶ線となる。

⑤グループのＳＢ09の北辺を西に延ばすとＳＢ10のＰ－１に，南辺を西に延ばすとＳＢ10のＰ－８に至る。東辺を南に延ばすとＳＢ18のＰ－１・ＳＢ06のＰ－１・ＳＢ04のＰ－３・ＳＢ03のＰ－７を結ぶ線となる。西辺を北に延ばすとＳＢ12のＰ－７・Ｐ－５の線上となり，南に延ばすとＳＢ03のＰ－２・Ｐ－13を結ぶ線となる。

このように主軸方位のみで掘立柱建物を見ると，南北・東西の方位，特に南北に基づく一定の企画性があると考えられる。棟数の最も多い③グループでは南北方向の基準が明瞭であり，調査区の範囲内では８棟の建物が南北の直線上に建っている。ＳＢ03の西側１間とＳＢ05の東側１間が重なっており，ＳＢ08の西側１間とＳＢ10の東側１間が重なる。さらに，ＳＢ10の西側１間とＳＢ16の東側１間が重なっている。ＳＢ15の西辺とＳＢ17の東辺は一直線である。建物の位置関係は，ＳＢ03とＳＢ05，ＳＢ06とＳＢ07・18，ＳＢ08とＳＢ10の２棟単位で並んでいる。

掘立柱建物の規模は，最小がＳＢ14の5.6㎡，最大がＳＢ03の16.7㎡である。10㎡以下は，ＳＢ07・14・15の３棟，10～20㎡のものはＳＢ03～06・08～13・17・18の12棟である。ＳＢ07とＳＢ14は１×１間の建物である。その他の建物は，桁行が２～６間であるが，梁行はすべて１間である。柱穴の掘り方はＳＢ17を除き円形であり，ＳＢ04とＳＢ07の掘り方は大形である。ＳＢ17の掘り方上面は一辺0.5～0.6cmを測る方形を呈し，規模も14.0㎡であり建物の中では大型の部類である。

遺物の出土はＳＢ04・07・17に見られ，その出土状態は検出面の上面であり，柱が抜かれた後に土器が廃棄されたと考えられる。土器の時期は，ＳＢ04が中期前葉後半の高杯を含みやや古い要素を持ち，反対にＳＢ07はやや新しい中期後葉前半である。その他の建物は中期中葉前半～中期後葉前半である。これによりＳＢ06はＳＢ18と並んでいて，ＳＢ07は単独であったと思われる。

第３節　　出土土器について

前節で述べたように，本遺跡の主要な遺構は弥生時代に比定されるものであり，遺構内より多量の遺物が出土している。本来ならば弥生土器に関して考察をしなければならないが，それは別の機会に譲ることとし，ここでは中世土師質土器と瓦器椀に関して整理作業の段階で気がついた点を述べてみたい。

１．中世土師質土器

まず，中世的土器様式を構成する主要な器種のひとつである小皿について考えてみたい。小皿の出土個数は，ＳＲ02で47，ＳＰ07で１，ＳＰ08で１，ＳＤ43で７，ＳＤ51で２であり，その総計は61個である。その形態を見ると，底部と体部の境が明確なタイプと不明確なタイプと底部中央が大きく盛り上がるタイプの３種類がある。その占める割合は20：36：２であり，不明瞭なタイプが60％を占める。また，前二者には，体部や底部の形態に若干異なる土器があり，いくつかに細分される。

法量的に概観すると，ＳＲ02出土の小皿は口径60～100㎜台でばらつきがあるが，70～80㎜台が90％を占める。器高は８～15㎜のものが主流である。ＳＰ07出土の小皿は口径76㎜，器高12㎜，ＳＰ08の小皿は口径68㎜，器高13㎜を測る。ＳＤ51の小皿は口径56㎜と76㎜，器高14㎜と13㎜である。これらは口径・器高とも小振りのものである。これに対して，ＳＤ43とＳＤ48の小皿は口径80㎜台後半～90㎜台後半，器高12～17㎜を測り，やや大型である。小皿の形態変化の過程は，11世紀から14世紀にかけて次第に径の縮小化・軽量化するという変化を見せることが一般的である。これに基づくと，ＳＤ43・ＳＤ48出土の小皿は前者のＳＲ02，ＳＰ07，ＳＰ08，ＳＤ51の小皿よりやや古い様相を呈する。

底部切り離し手法に関して，片桐孝治氏は地域性が存在すると指摘している[4)]。すなわち，中讃地域はヘラ切り，西讃・東讃地域は糸切り・ヘラ切りが共存する。本遺跡出土の小皿の切り離しを見ると東讃地域特有の糸切りとヘラ切りが共にある。しかし，その手法の割合はヘラ切りが大部分であり主流を占めている。

以上のことを簡略にまとめると，本遺跡の小皿は小形・軽量化が急激に進み，底部切り離し手法は東讃地域の地域性として糸切りとヘラ切りを共存する。さらに，底部の調整を見ると，切り離し後にナデやヘラケズリを施しているものと切り離し痕を放置しているものがあり，工程の簡略化が見られる。このようなことから，これらの小皿は12世紀末～13世紀初頭のものと考えられる。

次に中世的土器様式のひとつである杯について考えてみたい。杯は，ＳＤ37で１，ＳＤ43で３，ＳＤ48で１，ＳＲ02で14の総計17点出土した。その法量は，口径84～174㎜，器高24～41㎜を測る。法量を詳しく見ると３種類ある。小位はＳＤ37の４のみで口径84㎜，器高24㎜である。中位は口径104～120㎜，器高24～34㎜のもので，ＳＲ02の46.50～52.55～57である。大位は口径134～174㎜，器高24～35㎜のもので，ＳＤ37の３，ＳＤ43の28～30，ＳＤ48の４，ＳＲ02の45.47～49.313である。器形的には，体部が底部から緩やかに立ち上がるタイプと急傾斜のタイプがあり，前者には体部が若干内湾気味のものと直線的なものがある。底部の切り離し手法にはヘラ切りと糸切りが見られ，ヘラ切りは切り離した後にナデ・ヘラケズリ調整が施され，糸切りの方はそのままであり，工程の簡略化が見られる。

2．瓦器椀

瓦器椀は，主としてＳＤ43とＳＲ02より出土した。特に，ＳＤ43では口縁の半周以上が残存する個体が数点出土している。片桐氏によると，片桐編年のⅡ－６期頃（12世紀後半）より和泉型瓦器椀が香川県の一般集落に多量に搬入されるようになった[5]。本遺跡出土の瓦器椀の法量は，口径140～170㎜，器高49～58㎜を測る。口径にはばらつきが見られるが，底径・器高はほぼ均一である。高台の断面は，逆台形のものと三角形のものが共存しているが，共に高台の高さは低く扁平気味である。体部外面は指押さえの後にナデが施されるが，指押さえが明瞭に強く残っている。ただし，ＳＤ43の３は指押さえの後にヘラミガキが簡略に施されており，若干古い要素を残している。内面には，間隔の開いた圏線ヘラミガキと不規則なヘラミガキが施されている。見込みには暗文風のヘラミガキが粗い平行線状に施されたものと不規則に施されたもの，さらに明瞭な暗文が平行線状に施されたものの三者が見られる。

このように，本遺跡出土の大部分の瓦器椀は，口縁部の形態や調整方法等から和泉型の搬入品であり，法量の縮小化・工程の簡略化が顕著である。森島編年[6]の和泉型Ⅱ－３期～Ⅲ－１期にあたると考えられる。ＳＤ43の21は赤っぽい胎土であり，形態的にも体部下半に段をもち高台の断面もちがう。このため，この土器は在地産の可能性も考えられる。これらの瓦器椀の実年代は12世紀後半～13世紀初頭であり，香川に和泉型瓦器椀が搬入され始められた頃のものである。

註

1）高橋　学　「高松平野の地形環境」　『讃岐国弘福寺領の調査』　高松市教育委員会　1992年
2）高松市教育委員会　『浴・長池遺跡』　1993年
3）㈶香川県埋蔵文化財調査センター　『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成４年度』　1993年
　㈶香川県埋蔵文化財調査センター　『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成５年度』　1994年
4）片桐孝治　「古代から中世にかけての土器様相」　『川津元結木遺跡』　㈶香川県埋蔵文化財調査センター　1994年
5）片桐孝治　「四国」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　1995年
6）森島康雄　「瓦器椀」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　1995年

参考文献

・片桐孝治　「古代から中世にかけての土器様相　―香川県における予察―」　『中近世土器の基礎研究Ⅵ』　日本中世土器研究会　1990年
・日本中世土器研究会　『中近世土器の基礎研究Ｘ』　1994年
・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　『鹿田遺跡３　―第５次調査』　1993年
・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　『鹿田遺跡６　―第６・７次調査』　1995年
・㈶香川県埋蔵文化財調査センター　『東山崎・水田遺跡』　1992年
・㈶香川県埋蔵文化財調査センター　『川津中塚遺跡』　1994年

第4節　おわりに

日暮・松林遺跡では，弥生時代中期から近代に至る長期間の人々の生活の跡が多数検出された。得に，弥生時代の遺構は多く，集落の様相を部分的ではあるが明らかにすることができたことは特筆すべきである。

弥生時代の遺構は，大きく二つの時期に分けられる。中期前葉～後葉に比定される遺構はC地区において検出された竪穴住居と16棟の掘立柱建物群である。これらの建物は一定の基準に基づいて建てられており，注目すべき点である。また，掘立柱建物の数棟は大型の柱穴であり，高層建築物である可能性も考えられる。後期になると，遺構の中心はB地区に移動する。9棟の竪穴住居を中心として，方形周溝墓1基，井戸1基，多数の土坑・ピット・溝が3面の遺構面に検出された。遺構の広がりは西隣する多肥松林遺跡にまで続いており，本遺跡と同一の集落域である。また，旧河道を挟んだ北側には弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落である凹原遺跡があり，本遺跡を含めて当地域にはいくつかの大規模集落が営まれていたと考えられる。

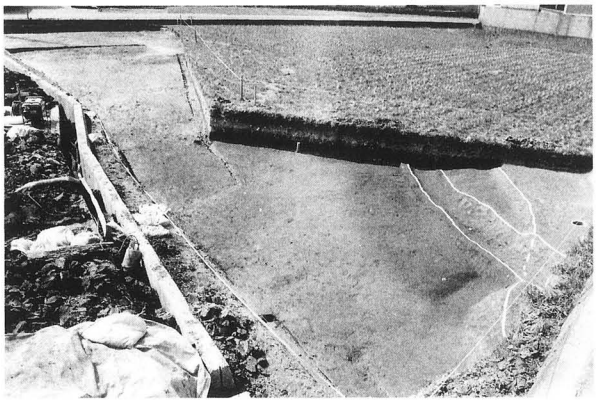
古墳時代後期の遺構は少ないが，D地区のSR02の河床から完形および完形に近い須恵器が集中して出土した。器種としては，杯身・杯蓋・高杯・甕があり，特に高杯の割合が大きいことは注目に値する。これらの土器は殆どローリングを受けておらず，本遺跡の近くにこの時代の集落が存在すると推測される。

中世前半の遺構はD地区を中心に数条の溝と旧河道である。SD43は少なくとも4期に分けることができ，完形に近い和泉型瓦器椀が10個位出土した。SR02においては，上面および埋土中から多量の土器が出土した。今後，集落の確認が求められる。

中世後半～近世にかけては，多数の溝が検出された。特に，東西方向に延びるSD38・39・51は中心間距離が条里地割りに基づいた約109mを測り，高松平野の条里制の研究に新たな資料のひとつとして加えることができた。調査区南端で検出されたSD59は，木樋を有する。木樋は長さ3,80～4,00mの板材を「ロ」字状に組み合わせた暗渠であり，側板を等間隔に置いた小石で支えていた。現在この木樋は保存処理を終え収納している。

以上のように，日暮・松林遺跡の調査では，南北に細長い調査区のため弥生時代の集落をはじめとして遺構の全貌を明らかにすることはできなかったが，当地域についていくつかの新知見を含む貴重な資料が得られ，大きな成果を挙げることができた。

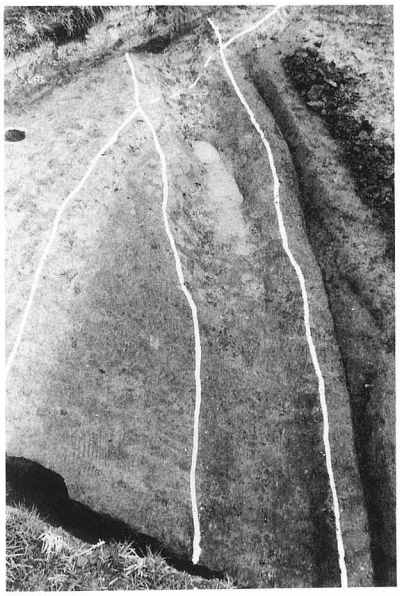
図　　版



1．Ａ－１地区（南西から）

2．Ａ－２地区（南から）

3．Ｂ－１地区（北から）



4．SD01

5．SH01